博文館臨時增刊

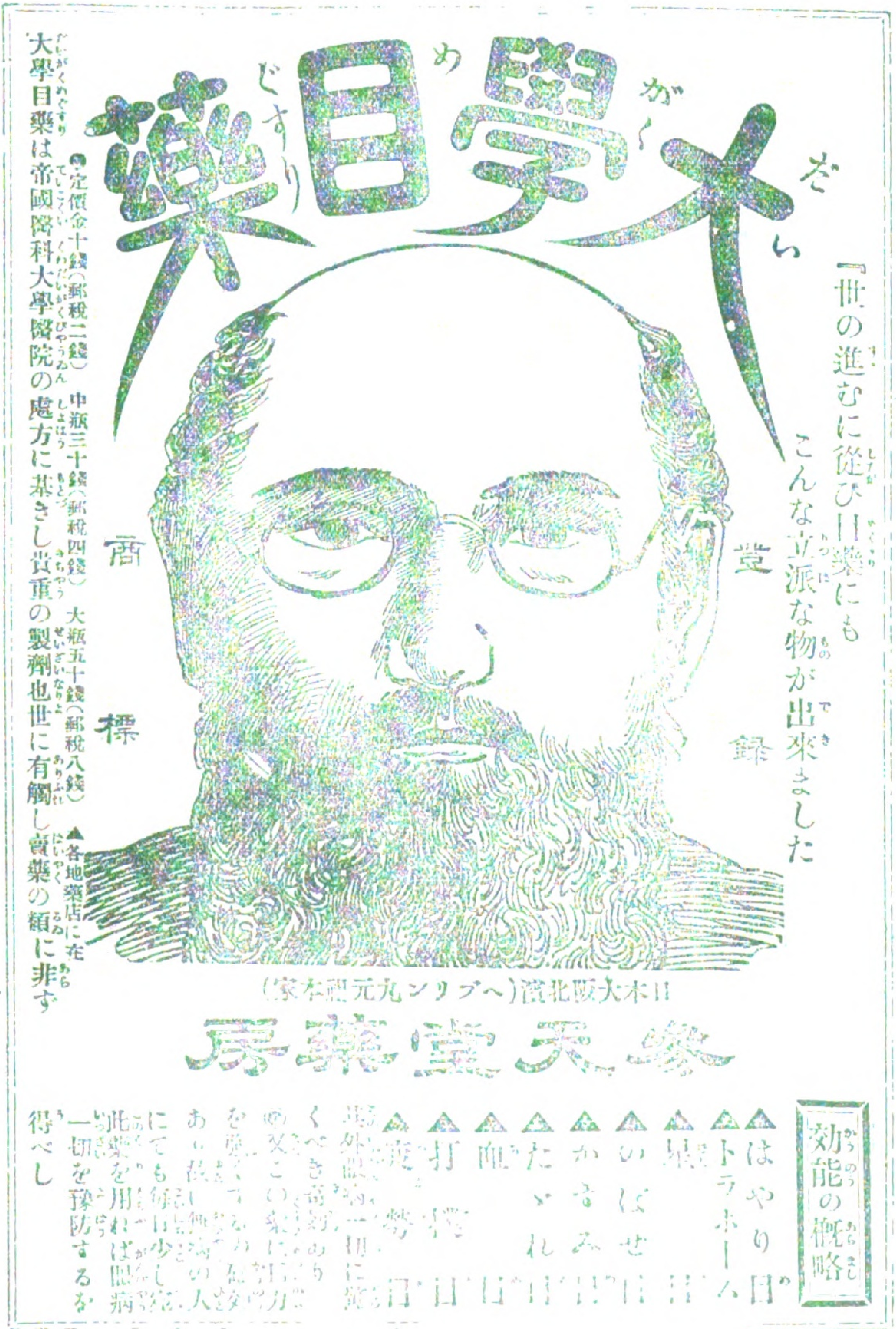
16

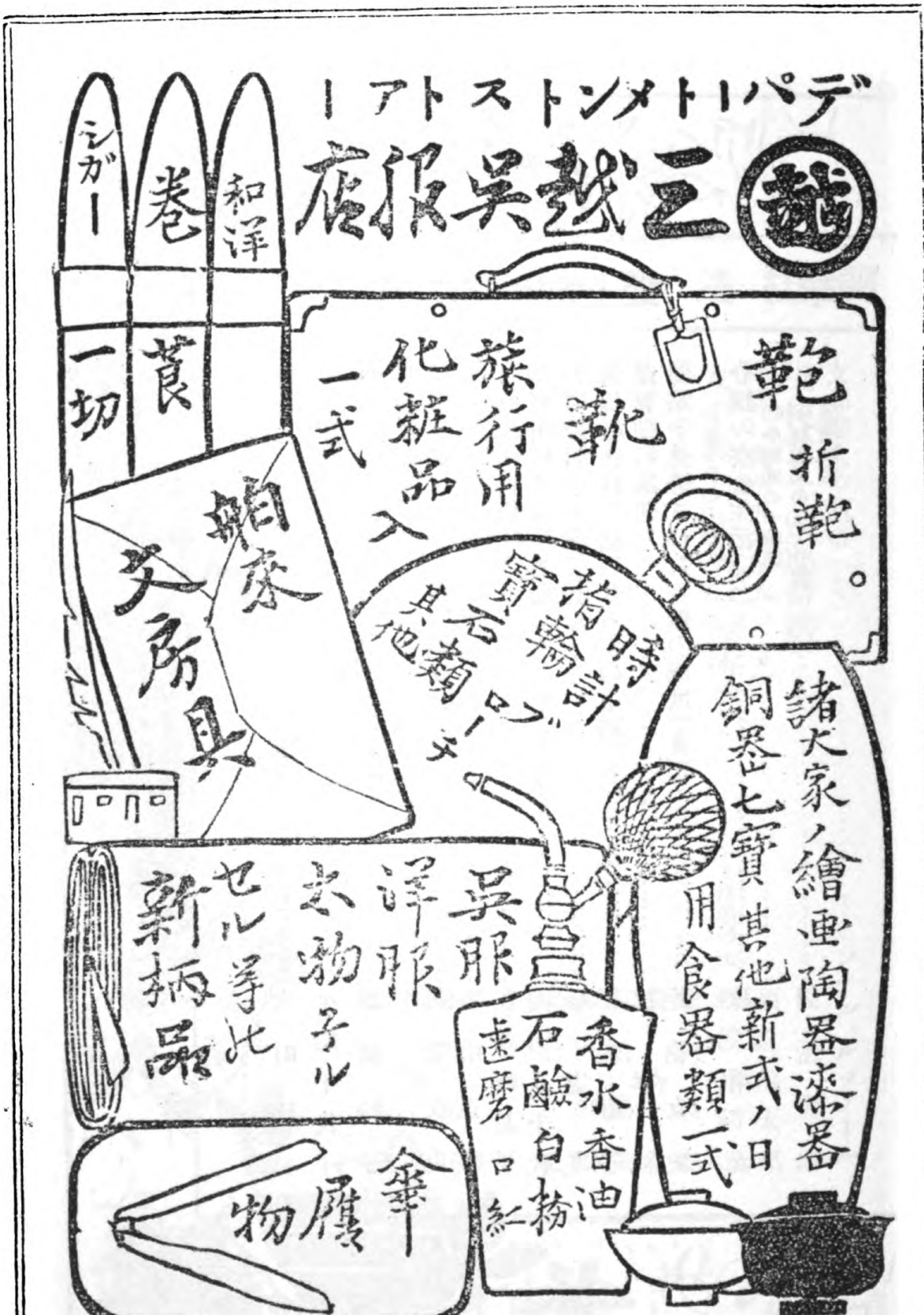
運命開拓法

明治四十一年五月十五日發行



女学世界第七巻第八號


大學目藥
「世の進むに從ひ目藥にも
こんな立派な物が出來ました
商標
登錄
大學目藥は帝國醫科大學醫院の處方に基きし貴重の製劑也世に有觸し賣藥の類に非ず
●定價金十錢（郵税二錢）　中瓶三十錢（郵税四錢）　大瓶五十錢（郵税八錢）
▲各地藥店に在
日本大阪北濱（ヘブリン丸元祖本家）
參天堂藥房
效能の概略
▲はやり目
▲トラホーム
▲星目
▲いんせ目
▲かすみ目
▲たゞれ目
▲血目
▲打撲目
▲疲勞目
にても毎日少し
此藥を用れば眼病
一切を豫防するを
得べし



デパートメントストアー
三越呉服店
和洋
巻
シガー
莨
一切
鞄
折鞄
靴
旅行用
化粧品入
一式
時計
指輪ブローチ
寶石類
其他
帽子
文房具
諸大家ノ繪畫陶器漆器
銅器七寶其他新式ノ日
用食器類一式
呉服
洋服
太物子ル
セル等比
新柄品
香水香油
石鹸白粉
歯磨口紅
傘
履物



女學世界定期增刊　運命

開拓法　第八巻第七號　目次



茲に美人となる唯一の試驗法あり

美容喝望者の福音

文明の力は遂に人の手足や顔の造作にまで干渉して來ました醜婦も化學の力で必ず美人となる事が出來ます此の意義に於て弊店はポンピアンマッサージクリームの「御使用を御すゝめ致します



「ポンピアンマッサージクリーム」の効用はニキビソバカスは勿論の事第一の特色は色を根本から白くするのでありまして白粉のやうに上面ばかりを白くするのでなく心から白くしますので白粉のやうに直ぐ塗つて直ぐ白くなりはせぬが使用中には自然に豊頬白色の美人となつてしまひます左に記す試驗法て御實驗になれば僅か五分間と經たない中に其の効驗の著しいのがお判りになります

（試驗法）極めて純良なる石鹸にて手を洗ひ後片方の手の甲へ圖に示す如くクリームを塗り暫時摩擦する時は皮膚中の不順物のクリームと共に垢の如くなりて出て來る可し夫れを終りし後他方の手と比較する時は見違ふ程美るはしくなり居るを知り得可し（クリームには少量の水を加へて使用するを適度とす）

ポンピアンスマッサージクリームは單に色を白くするのみならず其の効用は「ニキビ」「ソバカス」を始めとし皮膚に生ずる一切の疾病を根本より治し艶美ならしむるの特色あり

定價　大 金參圓　中 金貳圓廿五錢　小 金壹圓五十錢　郵税十二錢

ポンピアン會社

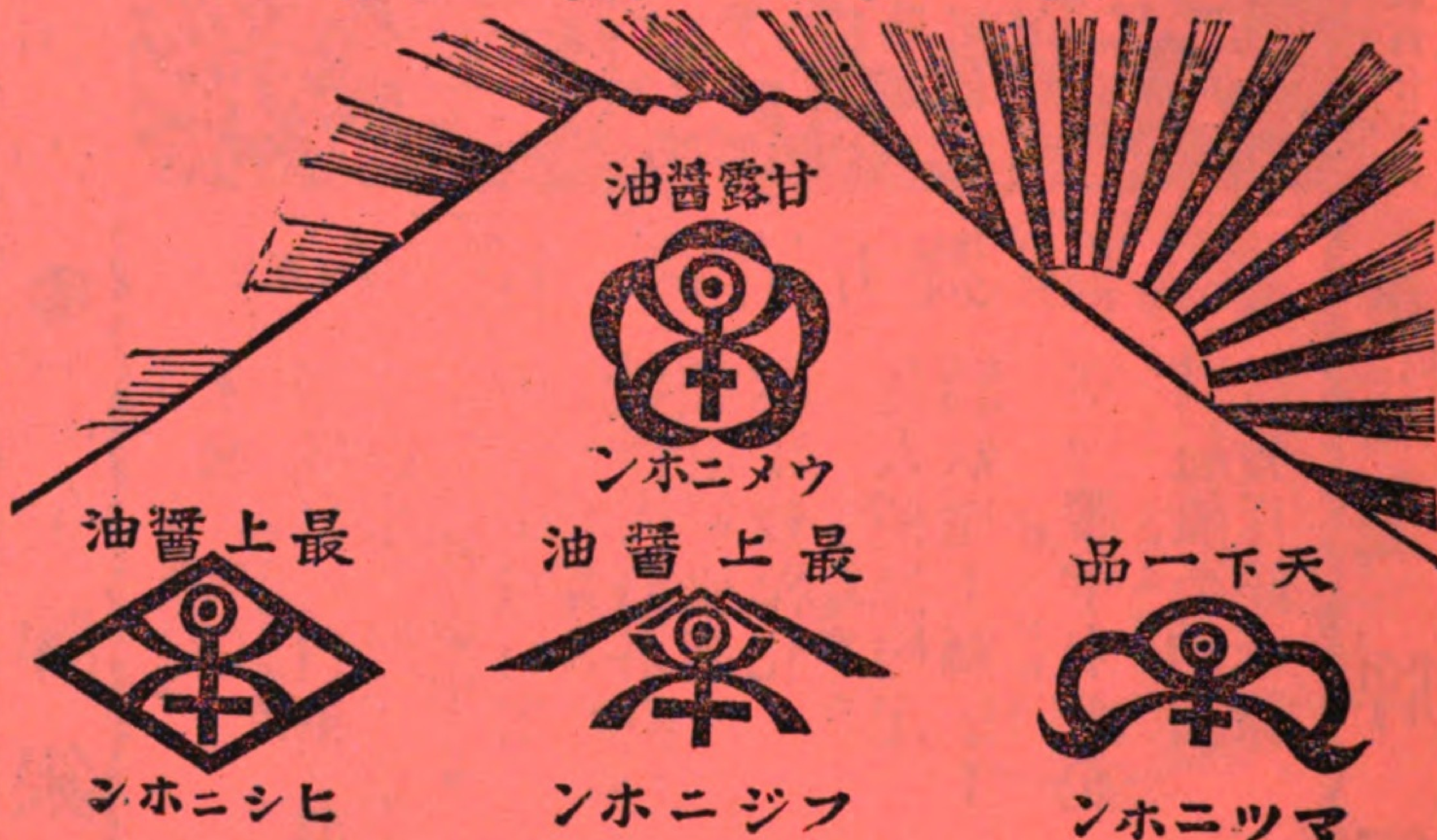
日本代理店　東京銀座一丁目一

佐々木商店

電新四七二番　振貯三三二〇番

醬油釀造界の一大革新

最良醬油



●資本金＝壹千萬圓

釀造元
日本醬油釀造株式會社

東京深川區小名木川通　電話浪花「長」三七七三番 一五九五番

特色

製造清潔
品質佳良
黴を生ぜす
價格低廉

特色

弊社は前人未發の新發明にかゝる嶄新にして完全なる鈴木式釀造方法及機械的裝置により精良無比の醬油を釀造販賣す

特約販賣所

東京日本橋區北新堀町　電話浪花「長」一四六番

合資會社 日本醬油東京販賣所

其他東京酒類問屋組合酒類仲買店及各地小賣店にて販賣致候間御用命願上候

女(甲の一)

勇者は來れ！懦夫は逃げよ！

冒險世界

毎月一回五日發行

大判（四六二倍大）紙數百廿八頁

五月五日發行 第一卷第五號 一冊十五錢 郵税一錢五厘

第三回目 金牌銀牌懸賞當選發表

第五回目 金牌銀牌懸賞問題

（甲の二）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 振替貯金口座第二百四十番 博文館


THE GEM
ゼム
ゆかりの色の藤花一枝「ゼム」の一袋に添へて御前にまゐらす。藤は藤原の藤、濃紫の情厚く、蔓のしだれの末長かれとこそ「ゼム」は良薬の王、種々の効著く、君が御氣色の常に美しかれとこそ、
ゼム定價
七十五粒入十錢
百六十粒入廿錢
四百粒入五十錢
九百粒入一圓
容器ゼム二十錢
衛生家必携
懐中良薬
日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎
支舗 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

女(甲の四)

若菜姫



榊原蕉園筆

太陽　第拾四卷第七號　定期増刊

新法令　附 第廿四回帝國議會史

五月十五日發行

洋裝四六倍判　紙數二百六十頁

定價金三十錢郵税（本號に限り）八錢

内外の指目を受けたる第二十四議會は、曲りなりにも其責を果して無事に閉院の儀式を擧ぐるを得。而して其成果たる法律諸案は、幾と皆裁可を得て公布せられたり。吾人は、之を機として、例に依り「太陽」の臨時増刊として「新法令」を發刊せんとす　昨年「新法令」を發刊して後に公布せられたる重要の法令は、收めて皆此中にあり。増税諸法律を始めとして、刑法施行法、監獄法、陸海軍刑法、公證人法、肥料取締法、水利組合法、感化法中改正法、北海道國有未開地處分法、地方税制限に關する法律、滿洲に於ける領事裁判に關する法律、東洋拓殖株式會社法等、次序整然、校正嚴密、既往一年間に於ける重もなる法令は、卷を開いて直ちに之れを知るを得るなり。殊に卷末附する處の「第廿四帝國議會史」は、主筆、春汀鳥谷部氏の手に成りて文に彩あり筆に力あり。豫算案及増税案の大問題を特に重要なる意義を以て討議せられし當議會の形勢を叙すると密、讀む者をして、身、議場に在りて。親しく其光景を見るの想あらしむ。財政に注意し、法の庇護に賴らんとするの士は坐右一本を缺くべからざるなり。

伊藤銀月君著

旅行者寶鑑

三六判總クロース美本●紙數三百七拾頁

正價四十八錢　郵税六錢

旅行の神髄を得たる點に於て現代稀に見るの著者に依り、未だ何人も試みざる旅行者の寶鑑を供せられたるものは本書也著者の人物と其文章とを知れる人には唯だ目次の大要を瞥見したるのみにて其の讀まずして巳むと能はざる古今の珍書要書たるを信じ得らるべし「旅行の種類に就ての心得」「旅人の種類に就ての心得」「同伴の種類に就ての心得」「旅行の方法に就ての心得」「旅行の土地に就ての心得」「旅行の季節に就ての心得」「旅行の場合に就ての心得」「旅行の食物に就ての心得」「旅中の宿泊に就ての心得」「旅中人と交渉する心得」「旅中の病氣に就ての心得」「旅中の變事に就ての心得」此中總計百七十九題を含み、一々緊要にして類別整然たり

販賣用電話二六二〇番　東京本町　博文館　振替口座二四〇番

世界唯一

痳滅（りんめつ）

痳病消渇の根治新藥

痳滅は最も進歩したる最新の痳病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して痳病消渇の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち滅殺する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より根治するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵劵代用貳割增しの事

梅毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年苦辛經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一のばい毒根治特効新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。蒼毒。ろいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても誓って根治することを確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ　藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢着金次第送藥す郵便切手代用貳割增しの事

有効無害　奏効確實

やせる藥

壹劑分藥價料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

本劑は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ひて害なく身體美容となり程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき奇効を知られよ

世界無比　最新發明藥

あざ

入墨は廿日　ほくろ　そばかす、なまず　いぼは拾日　目に必らず美麗に除去すること

保險附新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完ふせよ來館者へは山の如き全治者の感謝状及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なます、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適當する藥を送付すべし價は各壹劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵劵代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用す）着金即刻小包郵送す

以上四藥　專賣元　東京神田區五軒町拾九番地　日新館藥房

白色特効

ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず唯だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん　皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質を治するは此石鹸特有の神効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する內國製の粗惡品と玉瓦混同視すること勿れ（昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む）

輸入一手　專賣元　東京神田區五軒町拾九番地　日新館藥房

（乙の三）

和洋樂器大販賣所

電話新橋一二五九　振替口座七一五八

十字屋樂器店

東京博覧會一等賞牌 日本製造元祖 西川洋琴

和洋バイオリン

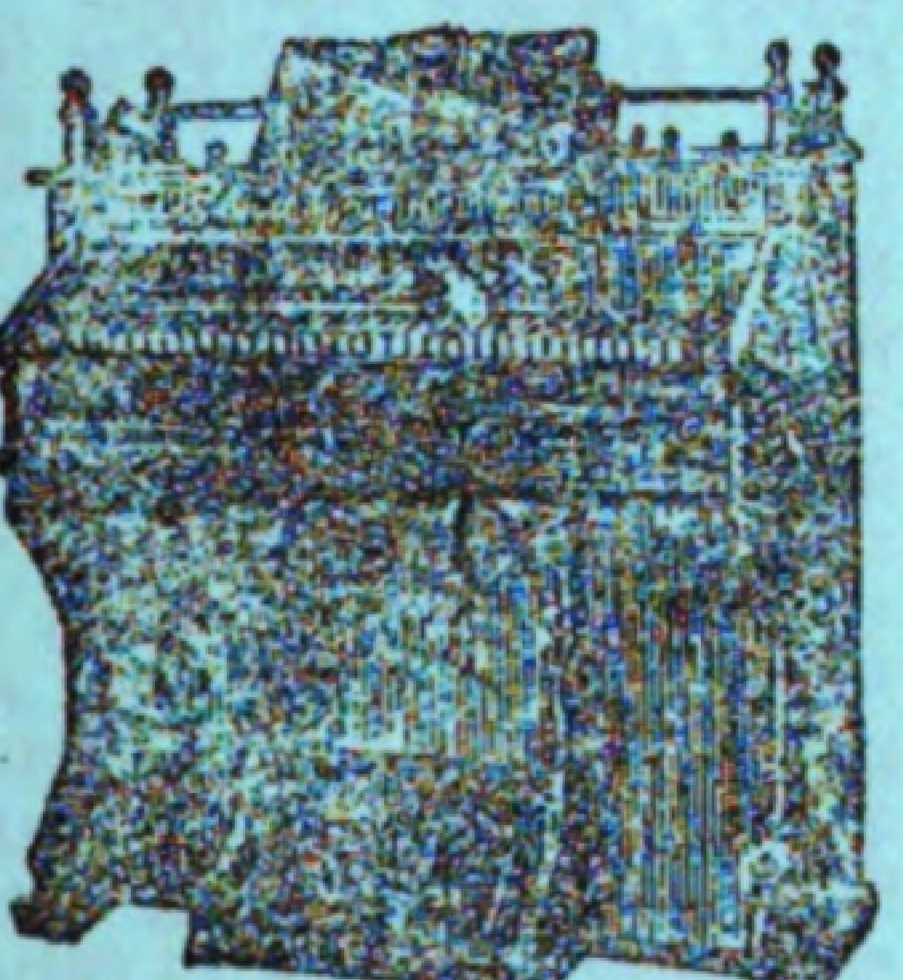
東京博覧會一等賞牌 日本製造元祖 西川風琴

◎舶來洋琴各種



◎舶來バイオリン新荷着





第一號 金三百五十圓　第二號 金四百圓　第三號 金四百五十圓　第四號 金五百圓　第五號 金五百五十圓

附屬品各種

第一號 金拾八圓 以上 第廿號 金四百圓迄

書名	冊數	正價	郵税
文部省檢定濟 教科適用 幼年唱歌	全十册	壹圓	十錢
教科統合 少年唱歌	全八册	八十錢	八錢
文部省檢定濟 國民教育 新選唱歌	全一册	卅五錢	四錢
日本遊戯唱歌	全七册	一圓五錢	十錢
乘算 九々唱歌	全一册	五錢	二錢
除算 九々唱歌	全一册	四錢	二錢
新編 中學唱歌集	全三册	九十錢	十八錢
文部省檢定濟 山田唱歌集	全一册	三十錢	四錢
學校唱歌	全二册	三十錢	四錢
新教育唱歌	全一册	廿五錢	四錢
瓜生氏編 進行曲	全一册	四十錢	六錢
ケンダル氏著 英語唱歌	全三册	四十五錢	六錢

箏曲 バイオリン樂譜

曲名	正價	郵税
松風	廿五錢	二錢
椿盡し	三十錢	二錢
江の島の曲	三十錢	二錢
うすの聲	三十錢	二錢
根曳の松	四十錢	二錢
六段の調（替手）	十錢	二錢

東京銀座三丁目

女(乙の四)

さみだれの絶間



宮崎與平筆


パール
美顔料
毛髪料
コールドクリーム本舗 東京濱町 平尾分店


懐中要薬
登録商標
高木
清心丹
清心丹特有の効能は常に食後食後に服用すれば消化を速にし胃腸を健全ならしむるにあり
東京市日本橋區元大阪町八番地
本舗 髙木與兵衛

女(丙の一)

数年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖も皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的舊式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發見せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は一劑重症は二劑慢性症は三劑にて根治確證す

（藥價）一劑四十二錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入美容料

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製二劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に**變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の白色藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は　並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

以上二藥**專賣元**　東京市神田五軒町十九番地　**日新館藥房**

血塊流下

通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「専賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證新發見藥

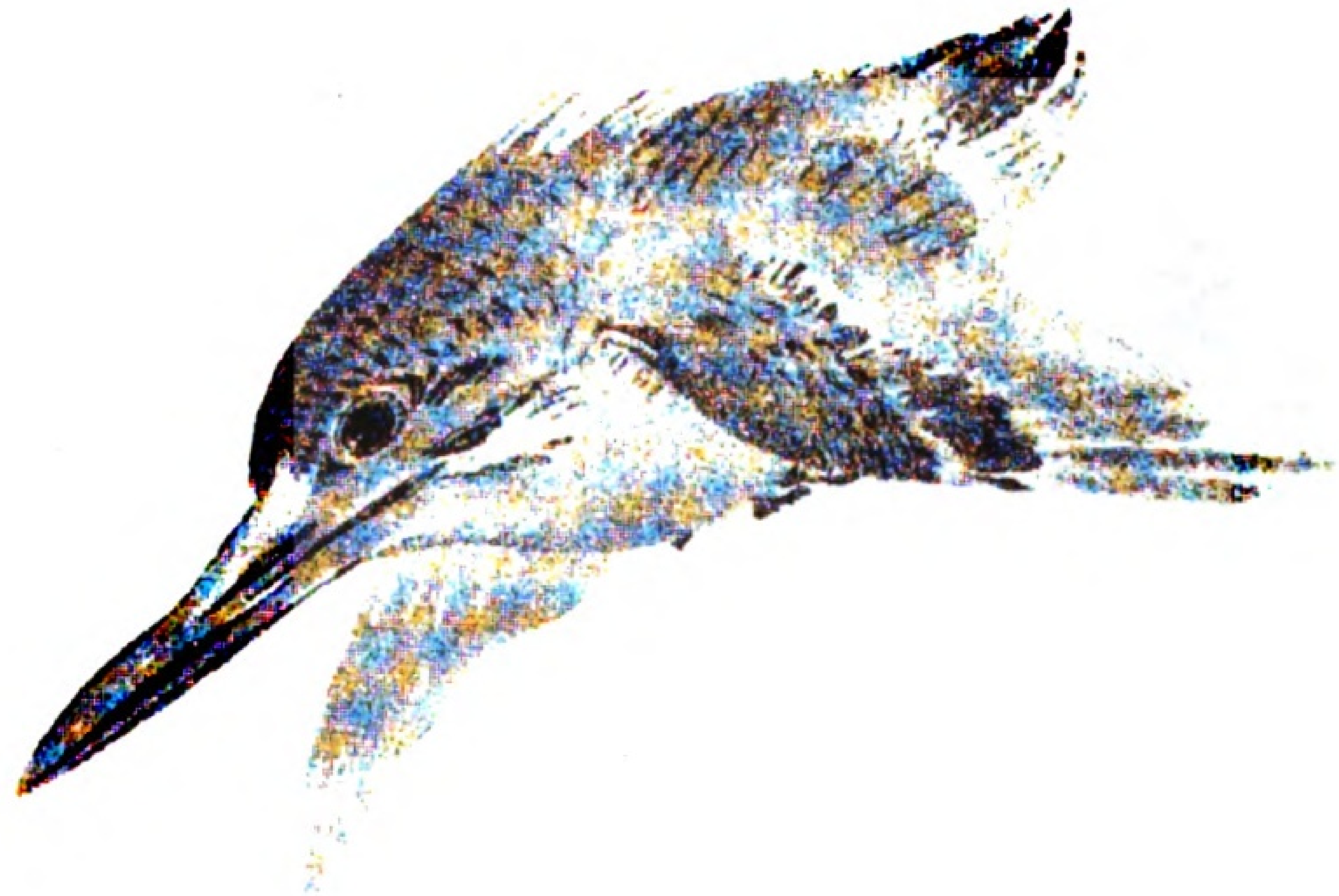
醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢　頑固劇烈の慢性症根治分貳圓廿錢　着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增のこと

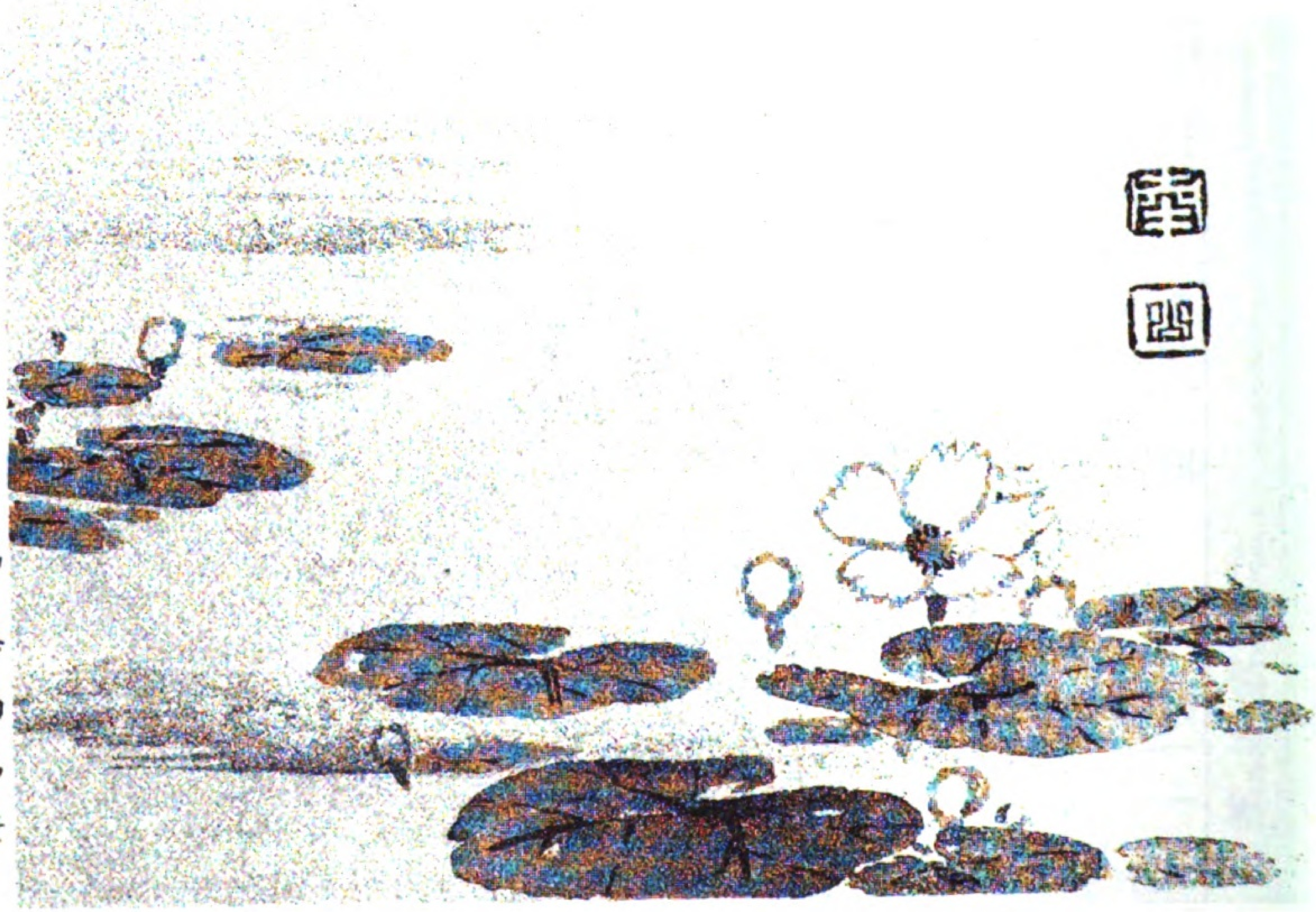
以上貳藥**專賣元**　東京市神田五軒町十九番地　**日新館藥房**（電話下谷五四六番）

（丙の三）

女（丙の四）

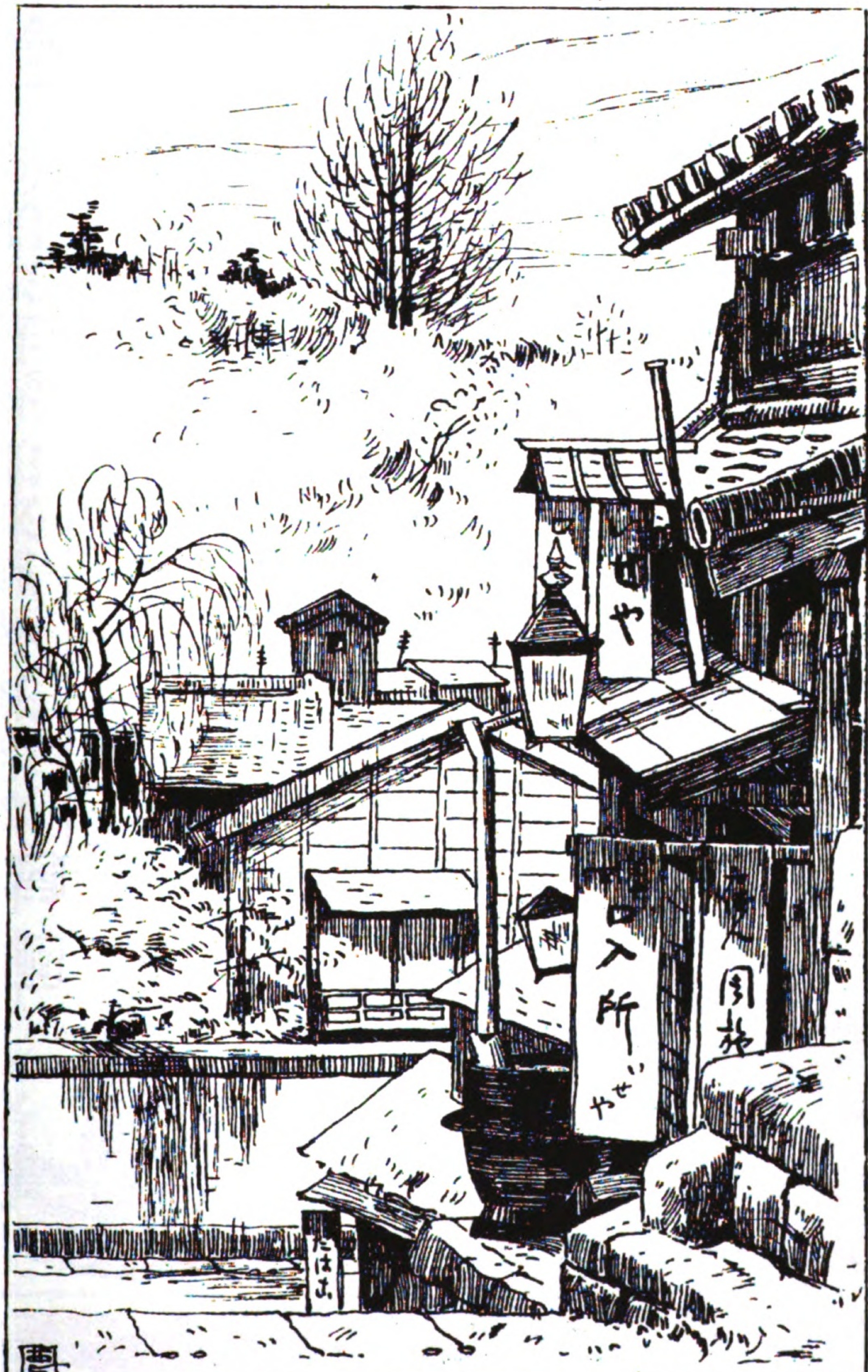
翡翠





加藤南山筆

目白の銀杏樹



竹久夢二筆

(その一)

藤村 島崎春樹君序
理學博士 齋田功太郎君閲
農學博士 稲垣乙丙君閲
田中貢一君著



正價……金壹圓五拾錢

小包料十二錢

洋裝菊判總クロース美本紙數約五百頁
着色石版繪十數葉挿圖九十四個

著者は、植物學者にして、當時農科大學に其が專攻の學を修めつゝありと雖も、祇れて文學に對する趣味深く、其造詣の深き、往々世人の意表に出づるものあり。著者は、世の所謂科學者の思想の餘りに乾燥にして、一に組織的事實の歴史家に過ぎざるを慨せられ、花界百般の事項を、一般家庭はいふに及ばず、其道にあらざる諸學生、或は文學者、神學者、哲學者等と雖も、無量の趣味と、絶大の興味とを以て、讀えず卷を解かしめ、自然の美妙、壯嚴を味ひ得しむる樣、特に小說として發表せられたり、本書は、五月に於ける金鳳華孃の譚話に始まり、翌四月の春蘭伯の物語を以て終る、其中、愛らしき花子、蜂の兄弟と、美はしき此等由花との間に纏々として演出さるゝ光景の、如何に優しく、將た興味深きかをみよ！ 而して之が副たる幾千の由花の如何に書中に活躍たるかを見よ！ 書中の花は、悉くこれ活ける少女活ける紳士なり。花の聲は、悉くこれ活ける天の聲なり、其内容の豐富、該博にして記事の痛快、切實なる、此種の書類中未だ曾て見ざるところにして、優に、現時の自然科學界に於ける、

●・●・●・●破天荒の作物として推重するに憚らず世の所謂文學と科學との調和を云々するの士は、先づ一度本書を繙かざるべからず。

津田梅子女史
新渡戸夫人まり子
序文

河井道子女史
辻村靖子女史
合譯



家庭小說 ひとりぼっち

本書は千八百九十七年發行エミ、ラフィーバル女史の著にかゝる「水銀のやうに清く獨樂のやうに敏捷な」英國の一少女を主人公として其天眞を枉げず敬虔の念篤き性質を田園生活に於ける短時日の出來事に描寫して紙上に躍如たらしめしもの由來日本の家庭小說中稀に有る所と云ふを躊躇せざるなり頃日女子英學塾教授河井辻村二氏譯述して世に公にす其内容の如きはこゝに喋々するを須ひず江湖の人士乞ふ閲覽して批評の榮を賜へ

洋裝四六判
總クロース上製美本
紙數三百六十頁
正價金六十五錢
郵稅八錢

販賣用電話本局二六二〇　東京日本橋本町三丁目　發兌元　博文館　振替貯金口第二百四十番

(丁の二)

●圖書目録 御入用の方は往復葉書にて御申越次第直に送呈す
東京日本橋區本町 博文館

印刷は 東京小石川 精美堂

●小児五かん驚風●蟲おさへ

登録商標 (八) 小児一切妙薬 本方 奇應丸
定價 金五錢 金拾錢 金廿錢 (遠國送料金貳錢)
東京市京橋區銀座三丁目
発賣本舗 (八) 松澤商店 (電新五三四)
賣捌は全國諸々藥舗賣藥店に特約あり

どもり
聲惡き人返信郵券送附あれば余が全治せしハエル博士の吃音必治療法を教へ升
東京礫川指ヶ谷町 櫻井

肺病
私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ
東京府下大森入新井 川名助次郎

簡易複寫インキ 器械不要
蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器械いらず此インキ一品にて簡便迅速座上立どころに文書圖版數十百枚を印刷し得べし本品ではす諸官衙及び郡區町村役場等の採用品たり
●定價 二オンス堅裝 錐入送料共 金參拾錢 郵券代用壹割増
神田松富町十二番地 中村屋商店

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤巖著
肺病患者の福音
著者肺病全快の經驗と最近の學説に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本
●東京市下谷區上根岸町 衛生書院

秘訣 リウマチス全治
妾儀多年リウマチス病に罹り百方手を盡すも更に効なく困難の處不思議の神藥の奇効に依り忽ち根治全快し喜悦に堪へず依つて人助のため同病者に事實を告げ救濟せんとす御希望の方は郵券二錢封入申込次第詳細に御通知申上可く候間御遠慮なく申込あれ
東京府下大森停車場東大畑 河奈とめ女

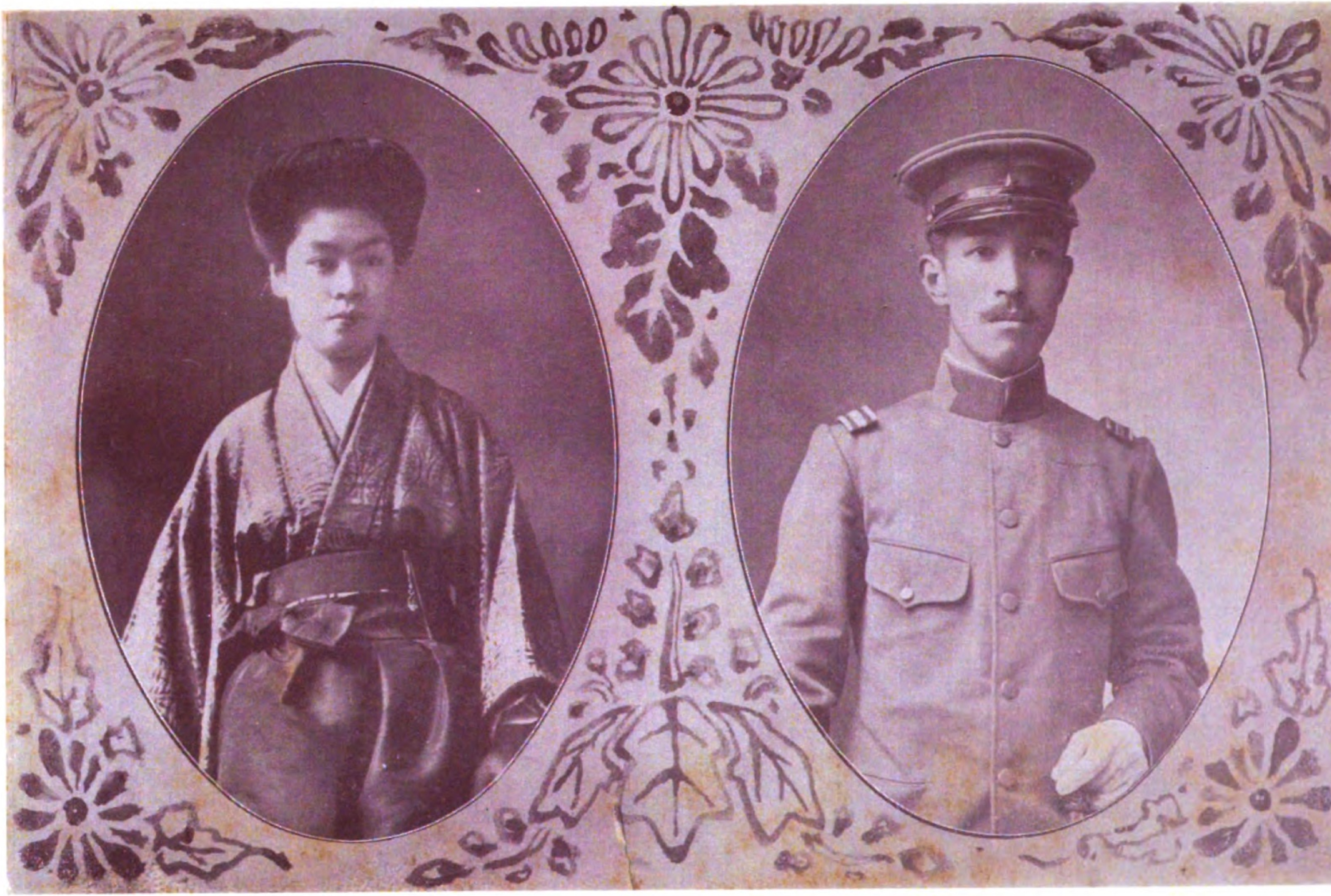
女(丁の三)



御料
畏き邊りの
御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
東京芝
胡蝶園
製造本舖
東京日本橋區橘町四丁目
丸見屋商店
發賣元
ねり製 御園白粉
水製 御園白粉
こな製 御園白粉
洋風化粧クレーム 御園の蕾
高等化粧水 御園とき水
御園なでしこ
濃厚化粧水 御園四季の花
御園香油
御園香水
高等はみがき 御園齒磨

(丁の四)

榮えゆく御代



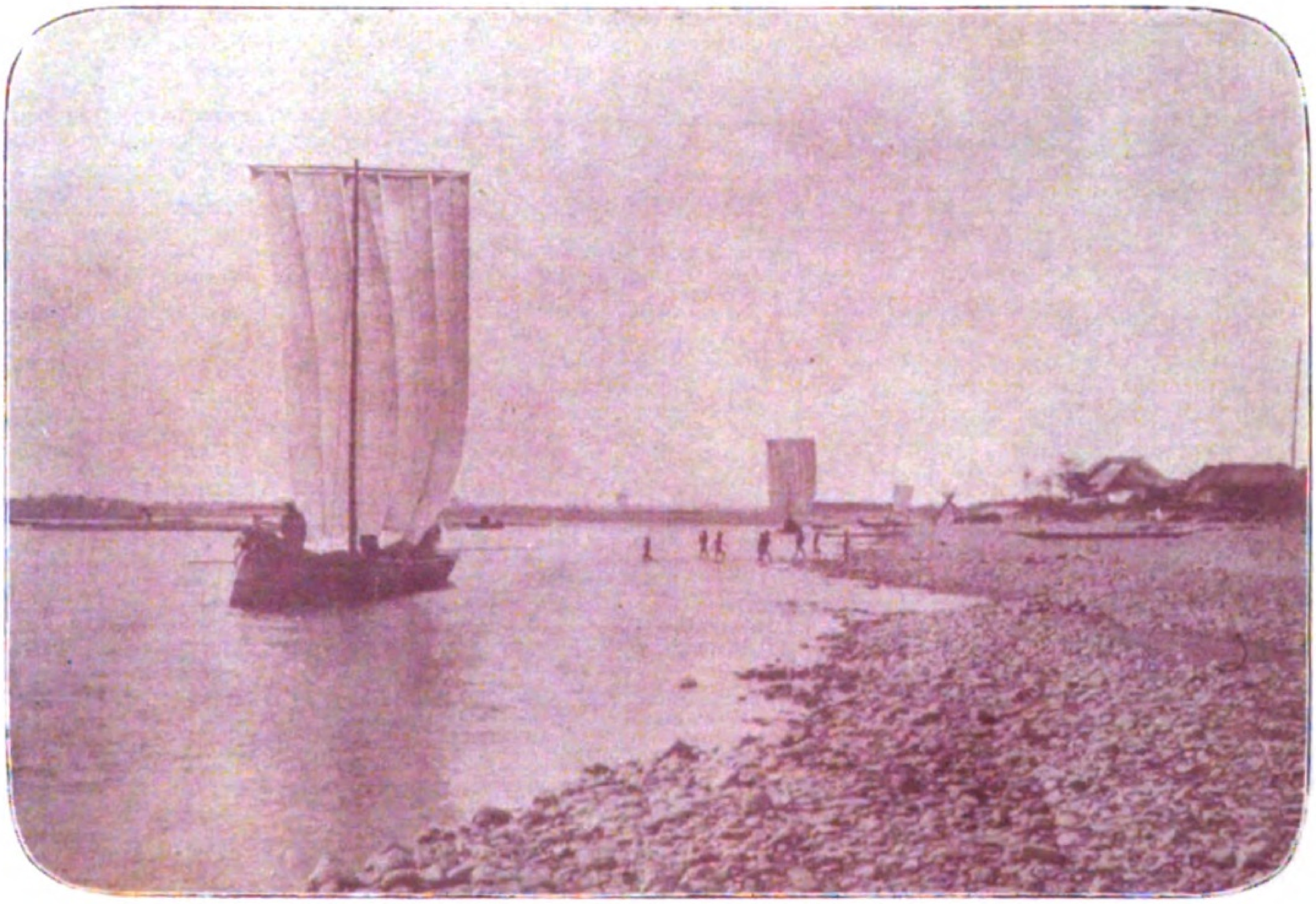
竹田宮殿下と妃殿下

音樂の練習



（世界同胞會學校の催し）

鬼怒川（下野）の中流





咸興府（韓國）咸宮の內殿

新案子供の夏服



（中野屋洋服店案　記事参照）

◉若菜の希望＝家庭の模範◉

只今は野外散策の好時節で堀切の菖蒲。日比谷大久保の躑躅（つゝじ）ばかりか近郊の若草は皆盛裝して佳人、乙女の來りて摘み給はん事をのみ待ち焦れて居るではありませんか此際文明的娯樂を解するの紳士、家庭の美を喜ぶ婦人は必らず無下にこの自然のいぢらしき願ひを却け給はで家族を擧げて團欒の實―家庭の模範を彼の女の前に示さるるでありましようが如何なる服裝が一番此種に適合するでしようか勿論和服は不向ですから御主人向きとしては荒格子の「ハンテング」奥樣用としては淡白な「ウオーキングドレッス」にポンジーの「タスト、コート」令息令嬢にも夫れ〴〵配合のよき洋裝が必要でありますが是れは弊店内に澤山特別製出來合ひ洋服が陳列してありますから就て御撰擇に任せるとゝ致しましよう、京濱以外の御方にて「雛形（カタログ）」御入用の節は郵劵五錢送付相成れば直ぐと送呈致します



紳士 貴婦人 令息令嬢 洋裝

ベビー印ベビースボックス
（五圓以上九圓五十錢迄）

は嬰兒洋裝に必要なる一切の附屬品より上衣に至る迄一の美麗なる箱に納め以て出産祝物に使用するものにして目下非常の好評と賞賛とを博し多大の注文に接しつゝあるものなり、郵劵五錢御送付相成れば小兒科の泰斗瀨川博士の證明ある雛形（カタログ）御送り申上げます



横濱辨天通り四丁目（電話三四四番）

中野屋洋服店

東京麹町内幸町一ノ五旭館内

東京出張所（電話新橋三一七六番）

小兒服販賣方見習ひ或は裁縫研究御希望の御婦人には御相談に應ず可く候に付御申出であれ

（戊の一）

竹貫登代多君著

再版

算術獨習書

全二冊

菊判洋裝並製

上卷……紙數三百八十八頁
正價四拾五錢　郵稅八錢

下卷……紙數二百四十二頁
正價三拾五錢　郵稅六錢

出でたり！言文一致にて算術の初步より誰にでも解し得る如く認めたる算術獨習書は出でたり!!! 著者は誰？數學世界主筆竹貫登代多君也。機敏なる學生諸君にして、先生の名を知らざるものありや。方今、算術を分り易く記述すること竹貫君に及ぶものありや！敢て薦む大方の學生諸君に、此書一度自己の所有に歸す以上は、僻邑に獨學せるものと中央都會に良師に就て勉學せるものとの差異は取拂はるべし、何となれば算術獨修書は、良師に超越すること數等なればなり、敢て勸む。書中の順序は決して奇拔なるものにあらず、世間一般學校に就て敎授するものと毫も異なるなし、之れ等しく文部省令に準據しあればなり、只だ此獨習書の特色は說明の親切にして且つ分り易き點のみ、されば獨學者に頗る便利なるは勿論他の一般學生には良好なる復習書なり各學校入學受驗者の福音なり、敢て天下の學生に薦む。

翠堂松村政親君著

實用

作文獨修書

（全一冊）

洋裝四六判並製
紙數約三百頁
正價金二十八錢
郵稅六錢

此の書は專ら實用を旨とし外作文の階梯として平常口に云ふ語を普通の文語と書翰の文語とに更める事を各品詞に分ちて數千言を擧げ次に書翰文は十五類に別ちて其の作法より認め方等まで說明し尙百數十通の作例を口語と文章と對照せしめ公用文は其語づかひの事より延いて願屆書式の必要なる十數通を擧げ示し次に普通文は記事敍事日記紀行傳記逸話歷史祝辭祭文弔詞ならびに解釋議論辯駁文等逐一其作法作例文範を示し又文體の種類より形容法修飾法等の法を說き例を擧げて示し總て詳密丁寧に口語にて說明したるものなるを以て苟も假名文字を知る以上の者は之を讀みて手紙のやり取り受取書注文書等を始め如何なる家にも必要なる願屆書等をも認むるを得べく又進んでは總て高尙なる書翰は云ふに及ばず公用文記事敍事文議論文等何等の文章も此書に依りて意の如く應用記述せらるべし實に學生といはず實業者といはず丁稚小僧手代番頭三太夫檀那に至るまで上下に通じて適當なる獨習書なり

女（戌の二）

販賣用電話 二六二〇番　東京本町 博文館　振替口座番號 二百四十番

醸造元　千葉縣野田町　茂木佐平治

天下一品
最上醤油

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

▶ハンカチーフ用◀　▶フランス製◀

本品は全世界を通じて流用品

定價　小瓶廿五錢　大瓶壹圓



輸入元　日本橋橘町　竹間商店
電話浪花一六一四番

本品は現今貴婦人方の賞用品

●フランス上流社會は「ケーバー香水」の高尚なる匂を愛せらる●

女(戊の四)

成女學校卒業生



第五回内國勸業博覧會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

壽美禮おしろい

◎壽美禮白粉は歐米諸國に専ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顏肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生せざるは本白粉の特色なり「菫れしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す亦東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

五二會品評會
功勞賞牌



THE BEST MAᗡE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入



壽美禮れしろい

ヴワイオレツト水製

ねり製 定價 大壜二十錢 小壜十二錢

水製 定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢

錫栓附乳白硝子壜入

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美しくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗ひに御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生せず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜るし水又は温湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

綠、藍、紅彩蝶番ひ鑵詰 八錢

別製鑵詰 五拾錢

大袋 二錢 小袋 一錢

登錄商標
四洋色白くなるあらひ劑
SUMIRE
WASHLNG IOWDER
壽美禮あらい粉



製造本舗 東京東両國元町(両國橋際) 壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

(己の一)

大和田建樹先生著（毎月一回發行）

謠曲評釋

●第七輯……既刊 次輯續出

大和田先生の謠曲通解出でゝより茲に十有五年、四方購讀諸君の增加する事、年一年よりも多きは、弊館の特に榮とする處、更に今般先生に請ひて大訂正を加へ、總說を增し、曲數を增し註釋を增し評語を加へ、總假名を附し、其他大に體裁面目を一新して、謠曲評釋と名づく、全部を通じて曲名を伊呂波順に並列し、終に語釋の索引を付して讀者諸君に至便ならしむる如きは、其最たるものなるべし、

第一輯（第一卷 第二卷）
（總說）○能の起原○流儀の分れ○謠の作者○謠本○内外二百番○明和の改正○謠の文章（上）○謠の文章（下）○裝詞○謠本の符號○題目の異同○岩船の大寺○淀濬○一角仙人○生田敦盛○生贄○籠太鼓○龍祗王○鉢木○花車○花筺○班女○放下僧○放生川○白樂天○羽衣○橋辨慶○半蔀○橋供養○芭蕉○雞龍田

第二輯（第三卷）
○錦戸○錦木○伽原○辨内侍○融○鳥追○東方朔○東北○東岩居士○藤榮○木賊○朝長○知章○巴○竹生島○張良○長兵衛尉○千引○龍虎○呂后○輪藏○鵜○大蛇○姨捨○女郎花○小鹽○和田酒盛○往生院○和國○蛙○苅萱○通小町○合浦○葛城○葛城天狗○兼平○鐘引○鐵輪

第三輯（第四卷）
○鳥羽○邯鄲○咸陽宮○景清○高野物狂○笠卒都婆○杜若○柏崎○加茂○鴨長明○加茂物狂○春日龍神○弱法師○賴政○夜討曾我○芳野○吉野天人○吉野靜○第六天○大瓶猩々○當麻○大佛供養○泰山府君○大會○谷行○高安小町○高砂○忠度○忠信○龍田○立田物狂○湛海○田村○丹後物狂○檀風

第四輯（第五卷）
丹後物狂○唐船○道明寺○道成寺○玉葛○玉井○竹雪○卒都婆小町○園田○土車○土蜘蛛○鶴岡○鶴龜○誰瀧○經政○疑覺○難波○雷電○羅生門○室君○六浦○鱗形○善知鳥○鵜飼○歌占○空蟬○采女○浦島○雲林院○鵜羽○鵜祭○雨月○右近○浮船○梅○梅枝○井筒○野宮○野守

第五輯（第六卷）
○老松○大原御幸○大社○大江山○落葉○翁○隱岐院○黑塚○車僧○皇帝○花月○吳服○鞍馬天狗○熊坂○草薙○九世戸○國栖○養老○揚貴妃○山姥○八島○鵺○松風○松浦鏡○松蟲○松尾○松山鏡○松山天狗○滿仲○枕慈童○卷絹○舞車○源太夫○元服曾我

第六輯（第七卷）
現在七面○源氏供養○絃上○藤○藤戸○二人靜○船橋○船辨慶○富士太鼓○富士山○伏木曾我○伏見○碁○木幡○護法○粉川寺○小鍛冶○小督○小袖曾我○項羽○胡蝶○戀重荷○江島○江口○盤○定家○天王寺物狂○天鼓○調伏曾我○淡路○蟻通○安宅○愛宕空也○熱海○敦盛

第七輯（第八卷）
嵐山○鸚鵡小町○藍染川○惡源太○綾鼓○湘士○葵上○阿漕○朝顔○蘆刈○飛鳥川○西行櫻○佐保山○逆鉾○實盛○三笑○草子洗小町○櫻川○佐々木○鷺○切兼曾我○碇○祇王○清經○木曾願書○金札○熊野○夕顔○雪○遊行柳○弓八幡○和布刈○通盛○三輪○三山

全部九册

和裝美本紙數約二千頁
每卷貳百五拾頁
正價一册金參拾五錢
郵税一册金六錢
全部九册金貳圓八拾錢
外要郵税

販賣用電話 本局二千六百廿番

東京 本町 博文館

振替貯金口座 第二百四十番

女（己の二）

香國 土居通豫君編述

作文活法

全一册

菊半截判洋布特製約六百卌頁
正價 金六拾錢 郵税 金六錢

古來我國文に於ける諸體の作法を示したる書は、極めて稀なり、本書は、君が時勢に感ずる所あり、獨特の技倆を揮ひ、和漢洋の文法を斟酌湊合し、一斷案を下して、我國の現時に最も適應する所の國文の作法を一定せり、卷中章を分つこと十六、中に就て、篇法、章法、句法、修辭法、の如きは一々古人の文を引き或は圖を揭げて、詳密に其作法を示し、詞法に於ては、國語組織の根元を明にし、而して各體の作例は極豐富なり、其他國文の作法は網羅して一も漏す所なし、之を一種の文典と稱するも實に誣ひざるなり、地方師に乏しき人は素より中學生諸君及、それ以上の學生諸君に於ても、坐右片時も離すべからざる近世稀有の必用書なり、

東京 博文館 本町

伯爵 松平直亮君序
足立栗園君編

立志處世 先哲教訓集

洋裝並製菊半截
紙數三百二十餘頁

本書は我國古來の賢哲が世俗一般を教化せんため修身處世上、極めて通俗にして趣味多き文字を用ひ機に臨み事に應じて筆を染められたる數百ケ條の教訓を集め一書として公にしたるもの也、特に多年德教研究に心を寄せらる、足立氏が其採集の珍書中より一々出所を示して其粹を拔かれたるものなれば學校家庭の參考本として將又學生及實業家諸氏の好指針として最も適當有益の著書たるや疑を容れざるなり立志處生に志あるの士幸に之を坐右に備へよ

正價金三十錢 郵税四錢

東京日本橋本町 博文館發行

(己の三)

販賣品目

蚊帳
座蒲團
蚊帳生地
夜具及各種蒲團
新式寢臺
室內裝飾品
和洋敷物
毛布膝掛馬車掛
麻布
疊表及附屬品
柳行李

富士印



◎伴傳商店に於て御購入の品は東京市內に限り總て無賃にて速かに送達す
◎伴傳商店は御進物に適當なる商品共通切手を發賣す
◎伴傳商店發行の御注文の栞は御請求次第直ちに送呈すべし

蚊帳

東京市日本橋區通一丁目(木原店北角)
近江屋 伴傳商店
電話本局四二六番、長四三六番
振替貯金口座 六一六一番

東京市日本橋區通二丁目
大文字屋 伴傳商店
電話本局長一〇三一番

御注意
◎粗製類似品あり御購求の節は富士印の商標に御注目を乞ふ

女(己の四)

新案子供の夏服



女子共立會新案

女(庚の一)

頼襄子成著　久保天隨君訂

重訂 日本外史

頼氏の外史、一たび世に出づるや、殆んど家ごとに一篇を藏し、刊本亦た數種の多きを算す。然れども、迭に多少の得失あり、終に完本と爲すべきものを見ず、本書は、あらゆる異本を蒐集して、この長處を合せ字體の詭異卑俗に渉るものは盡く其正に從ひ字句の異同は皆之を註し。なほ篇中人物の官位通稱小字を欄外に載せ、校訂嚴密、一字の誤訛なきを期す、庶幾はくは以て外史の定本たるを得む、加ふるに携帶の便又他書の比に非ず。

再版出來

全一冊

四六判總クロース上製
紙數八百餘頁
定價金七十五錢
郵稅八錢

第二高等學校教授
岡澤鉦次郎君著

教科參考 日本文典要義

此書は、日本語の特性と東西百家の語學書言語學書との研究によりて、最實用的にして、わが國語の本性に適合し、最科學的にして何人も爭ふべからざる、語の分類と文の分解法とを開示して、日本文典の要旨を明にし、古來日本語の研究に於いて動かすべからざるものと認められたる一切の障碍を、其根本より拔き、人をして晴天白日を睹るが如くならしめたるものにして一般の教師、やゝ進歩したる學生、及び、國語學に志ありて適當なる案內書なきに苦みたる一般人士の參考書として無上の價値を有する羅針盤たるべく、之を階梯として進まば挺身して深遠なる國語界に入るも望洋の歎きなかるべく、內外國語の比較研究に從ふも順風に帆懸くる思ひあるべし。時世に後れざらむと欲する者は、速にこの書を讀んで語學界前途の進運をトせらるべし。

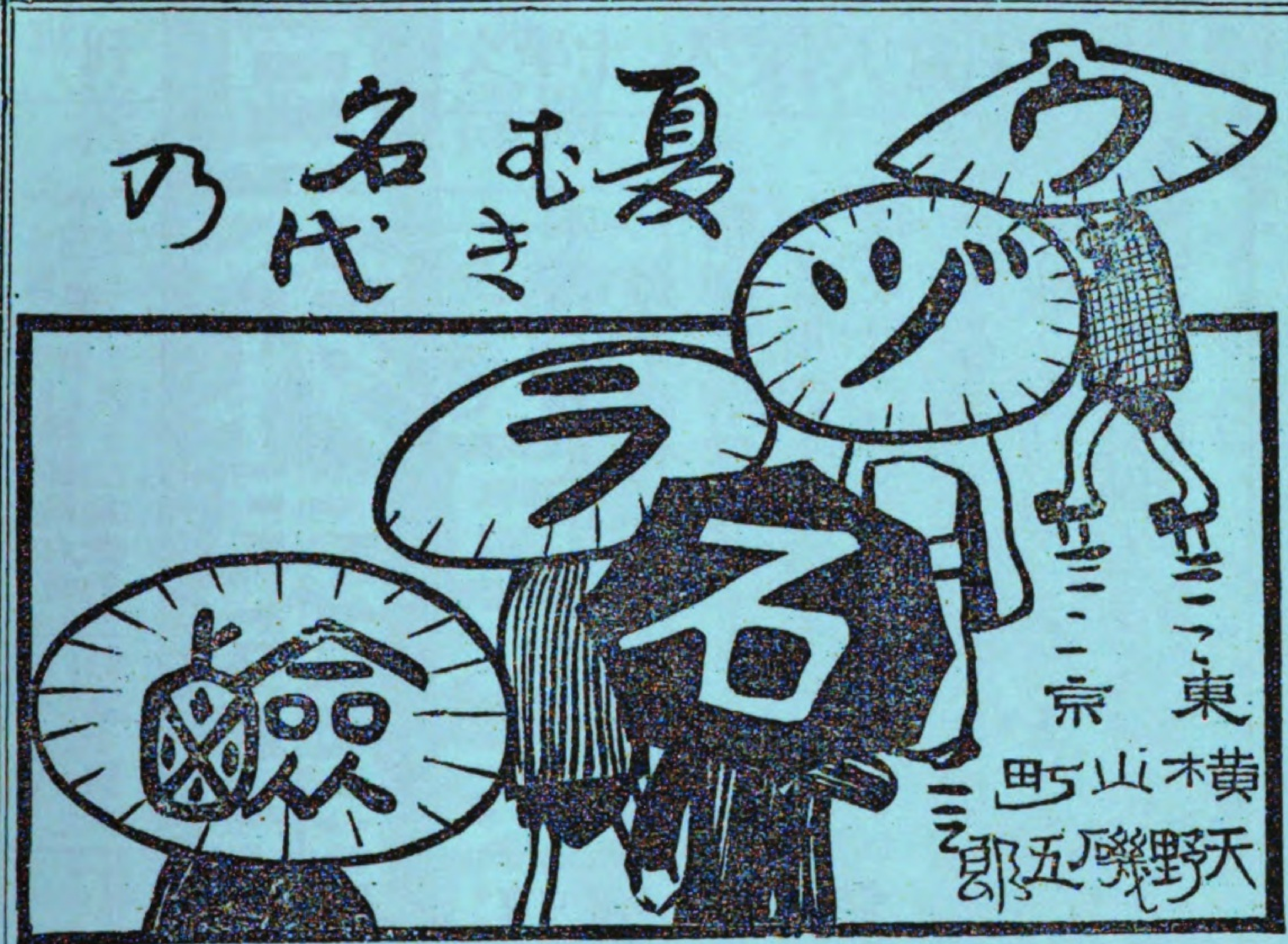
全一冊

洋製菊判上製
紙數約四百五十頁

近刊

東京 博文館 本町

女(庚の二)



女(庚の四)

假裝會



失題



戸張孤雁筆

女(辛の一)

時はスケッチの好期

三版 ◎日本葉書會編輯局選
スケッチ畫集 ▲全一冊▼
◎定價金四十五錢 ▲郵稅六錢

高評 ◎吉田博氏著
寫生旅行（あめりか よろつは あふりか） ▲全一冊▼
◎定價 特製金一圓五十錢 並製金一圓廿錢 ▲郵稅各十二錢

高評 ◎三宅克己氏著
旅行とスケッチ ▲全一冊▼
◎定價金五十五錢 ▲郵稅六錢

再版 ◎三宅克己氏著
水彩畫指南 ▲全一冊▼
◎定價金六十五錢 ▲郵稅八錢

十一版 ◎三宅克己氏著
水彩畫手引 ▲全一冊▼
◎定價 特製金九十錢 並製金七十五錢 ▲郵稅各十錢

新刊 ◎三宅克己氏著
水彩畫譜 ▲全一冊▼
◎定價金九十五錢 ▲郵稅八錢

三版 ◎中村不折氏著
畫道一斑 ▲全一冊▼
◎定價金八十五錢 ▲郵稅八錢

（「エハガキカタログ」御申込次第無代進呈）

發行元 東京小石川 日本葉書會 ◎發賣元 東京本町 博文館

女（辛の二）

健康と經濟を望む婦人は必ず一讀せよ

婦人一代の寶

婦人世界臨時増刊
食物かゞみ

家庭日常の友

五月 十日發行 毎月一回 三巻 六號 一册 拾五錢 郵税一錢五厘 六册分郵税共九十錢 十二册一圓七十五錢

△口繪 有馬伯爵家へ御降嫁ありし北白川宮女王殿下〜さつきの庭（寒光）△名家令嬢 學習院卒業生△料理實習其他

⊙食事の時に愼しむべき禁條十一ヶ條…生間正起〜⊙奢の八癖……

◎姙婦と産婦の飲食物 醫學士 伊庭秀榮〜⊙長崎特有の卓子料理

⊙肥えた人の食物……木村博士⊙瘦せた人の食物……鈴木ドクトル

◎兩陛下の御膳部 齋藤鹿山〜◎東京の酢 與兵衛鮓主人

◎九十六歳の長壽を保つ我母の食物… 山脇女學校講師 星常子

◎美味な料理を作る心得…… 村井弦齋

◎注意すべき小兒の飲食物…… 醫學博士 加藤照磨

◎病中の食物と病後の食物 醫學博士 木村德衛

◎各地料理の特色

△東京料理の特色……八百善

△京都料理の特色……平野屋

△大阪料理の特色……丸萬

△名古屋料理の特色……大又

◎料理の秘訣… 弦齋夫人

⊙齒のためになる食物……志村

◎家庭と儉約 料理 龜井まき

⊙魚類の新古を見分ける方法…

△懸賞當選 諸國名物料理 百三十種 悉く珍奇

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 （郵便振替貯金口座參貳六番）（電話新橋八七四番） 賣捌 全國書店

女（辛の三）

大日本淑女學會編

家庭要鑑

家庭要鑑目

- ●家政の巻
- ●育兒の巻
- ●裁縫の巻
- ●手藝の巻
- ●衛生の巻
- ●禮法の巻
- ●料理の巻
- ●文藝の巻
- ●化粧の巻
- ●附録 家庭諸届式

口繪

明治時代女子風俗……岡田三郎助君畫

江戸時代女子風俗……一條成美君畫

閑院宮妃殿下最新の御肖像を始め其他口繪數面

一部でどんな事でも分る婦人の一生を通じて最も親切な相談相手。あらゆる婦人の日夕座右に備へて心の影をうつす可き鏡。定價最も至廉、縮緬の半襟一掛買ふ金にて此寶典が求められる。極めて平易な談話體て總振假名づきだから讀み難い憂は無い。

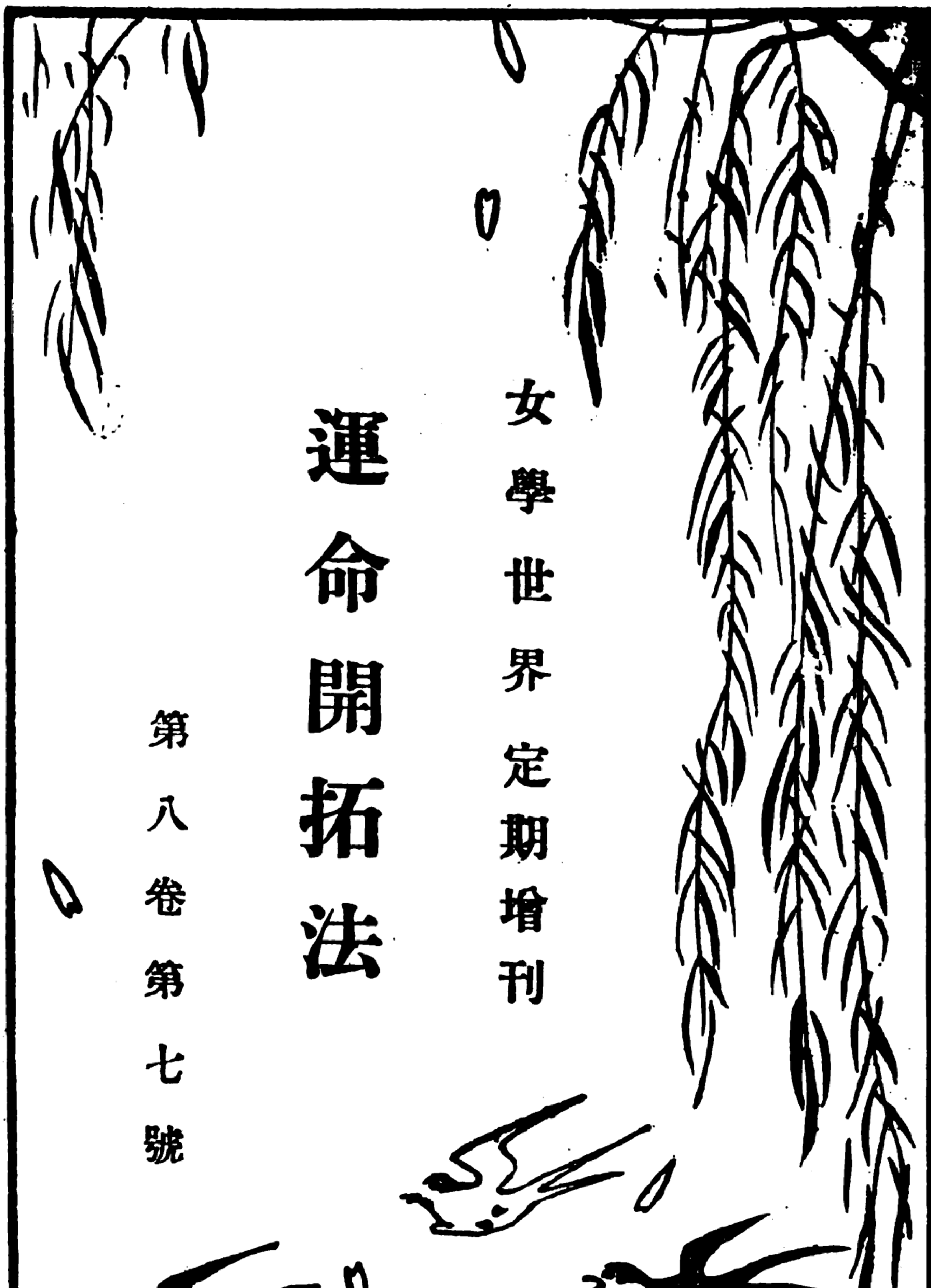
定價

全一冊洋装紙數大判壹千頁 體裁優麗

定價金貳圓五拾錢 五萬部限り特價金貳圓

小包料金拾五錢郵券代用一割增のこと

發行所 東京神田駿河臺 東京國民書院



女學世界定期增刊

運命開拓法

第八卷第七號

修養

運命の開拓處世の要義

◎自信の一念

人若し吾人に向ひ、人世とは如何なるものなるぞと問はゞ、答へて言はん、糸の縺れたるがごとしと。蓋し人世とは複雜てふ事の代名詞なり、世相には表裏あり、人心には反覆あり、世態の推移定まり難く、人情の變化測るべからず、人の感情は昨非、今是にして世の取沙汰は朝暮に變ず、人の言語は信ずべくして信ずべからず、人の行爲は頼むべくして遂に頼むべからず、究竟は唯迷へるのみ、而して是れ人世の常態なり、又如何ともすること能はざるなり。

然らば如何にして是れに處せんとするか、千辛萬苦して而して遂にこれに處するの要諦を得る能はざるなり、されど究竟すれば唯一あるのみ、曰く己れを信ぜよと。

己れを信じ、己れを欺かざるは即ち萬人に接し、萬事に處するの要諦なり、人情世態、如何に表裏反覆多しといへども苟しくも己れを信じ己れを欺かざるに於ては難境に際して怨むことなく窮厄に處して歎くことなし、既に己れを信じ己れに頼むの力大なり、奚んぞ又紛々たる人事の變態に心を亂すごとき事あらんや。

◎生活の獨立

然れども俗事は決して其の煩はしきを厭ふべからず、腹の底には人情の反覆を覺悟しつゝも、猶平常はよく誠實に、よく熱心に、人の爲めに謀り、世の爲めに盡し、而して我が左右に横はれる日常の萬般の義務を遂げ行はざるべからず、是れ最も尋常なる處世の要訣にして又最も高尙なる理想の存する處なり。

然らば其順序は如何、曰く自己の獨立なり、人事百端、務め多しといへども最も尋常にして又最も緊要なる題目は我々の獨自一己をして他人に賴らしめざるにあり、而してこの獨立の第一義は、高遠なる志操よりも、深遠なる學問よりも、まづ最も鄙近にして且つ最も平凡なる生活にあり。蓋し人生計の獨立を得ざる間は動もすれば社會の侮りを免かれざる能はず、人にして社會の侮蔑を免かれざる間は決して其の志操、學問の獨立を完ふし得ざればなり。是れ即ち生活が獨立の第一義たる所以也。

◎人と草木

人は草木の榮枯を見て處世の大法を悟るべし、楊柳の一時に春に逢ふて綠をなせる、櫻花の一時に春に逢ふて爛熳たる、いづれか嚴冬三月雨雪、風霜の殘虐を受けつゝ其の根を培ひしの結果ならずとせんや。

最も開くに速かなる櫻花は最も一時に爛熳の盛りを傲りて又最も速かに散るものなり、最も開くに遲き椿は盛りを傲らずといへども又散るに遲し、彼の室に生ひ立ちし草木を見るに其幹大ならずして

其花又美しからず、一たびこれを戸外に曝らして風雨に當てしめんか忽ちにして凋落し、枯槁するに至るべし、これに反して最初より風霜の間にもまれ太陽の光線を十二分に受けつゝ成長したる樹木はたとへ、雷雨の虐に遇ひ、又烈日の嚴に逢ふといへども猶よくこれに耐へつゝ十二分の成育を遂げ遂には亭々たる大木となり天與爛熳の盛を競ふに至るべし。

されば人も亦若き時より生存競爭の巷に出で、よく艱難に堪へ、よく辛苦を忍び、かくして身心を鍊磨し、人間處世の道を工風せざるべからず。風當りの烈しき處ろに立てる樹木は根深く土中に喰ひ入りて如何なる大風雪に遭遇するも容易に吹き倒さるゝことなきがごとし、人はまさに樹木に學ばざるべからず。

◎順逆の兩境

春日の溫和と冬日の嚴酷といづれかよき、人情何人も春を懷はざるなし、されど人の健康を害するものは嚴霜肌を刺すの窮冬にあらずして多くは春光悠々たるの時にあるがごとし、順逆の二境が人世に於けるも又然り、苟しくも生々の人情皆順境を愛して逆境を忌まざるはなし、されど其の愛するところの順境は動もすれば、人の心を浮かし、人の身を蕩かし、滿逸倦怠して往々失敗の因を作るにあらずや、これに反して忌むべき逆境もこれに處するに平常の心を以てせば、爲めに其人の志氣を鼓舞し、信念を固くし、身體を健かにし以て順境の基を開くに至るものなり。

されば人の世にあるや順境も未だ以て得意とするに足らず、逆境も又必らずしも失意とするに足らざるのみならず、寧ろ却つてこれを我が品性陶冶の火爐として、我が精神修養の豫科として、一旦は

失意不遇の境に立たんこと人間一生の大局より見て大なる福利ならずとせんや、蓋し逆境を以て我れを鍛錬するの槌となし、我れを磨勵するの砥となすこそ人間の人間たる眞面目を養ひ、又その眞價値を發揮する所以にあらずや。

◎榮枯窮達の機

草木に榮枯あり、歳に春秋あり、人事も又盛衰の運を免かれず物の盛んなるは極めて喜ぶべしといへども盛事止り難く、滿月虧を急ぎ、衰退の相忽ち催ふして人事意の如くならざるもの是れ天の大法なり、又定まれる世の約束なり。

彼の櫻花の爛熳として咲き亂れたる其一刹那は誠に美の極致なりといへどもそれが即ち又凋落の始めなり、屋を潤ほし、身を飾れる富貴も、其の頂上には必らず貧賤零落の機の宿りつゝあるを知らば人の盛事に處するの道又難しといふべし。

蓋し人情盛んなるものは傲り易く又怠り易し、是れ盛衰の分るゝところと知らずや。

されば吾人が此際に處するの法如何、他なし只謙退、抑讓、身は得意滿幅の境に居るも心は常に失意逆境の時を忘れず、其言行を謹み、其志をして益々遠大ならしむるにあり。

されど盛時に處して謙退の德を守るもの果して幾人かある、世に逢へるもの、時に榮ゆるもの、身に不足なきもの、動もすれば即ち得意となりて、情を縱まにし傲慢となりて人に呪はれ、奢侈となりて財に見放さるゝもの十中八九に居るこれ順境に處するの難き所以にして、心あるものゝ深く戒めざるべからざるところなり。

◎日常のたしのみ

人若し美なる家庭を作らんと欲せば第一に正直を以て柱となし、愛情を以て屋根となし、雅致を以て家具となし、親切の火爐を以てこれを暖め、快活の日光を以てこれを照らし、勤勉の空氣をして隅隅に行渡らしむるの工風なかるべからず、就中一家の主人たり主婦たる人は其の日常をつゝしみ、言語を和らげ、擧動を正しくし、以て其の子女眷族に對する無言の教師たらざるべからず、若し然らずして一家の主人主婦にして其言行修まらざらんか、千言萬語の訓戒も遂に無益の勞たるに畢らんのみ。

言語は須らく優婉ならざるべからず、如何なる場合も疾言急呼は不可なり。言語は嚴霜の肌を刺すが如くならずして薫風の衣を吹くがごとくなるべし。

柔和なる言語は柔和なる精神を代表し、暴慢なる言語は暴慢なる精神を代表す、されど言語は末なり、行を以て本とす。

自から行はずして只口にのみ語る千言萬語も恰も秋の野原の木の葉と一般、落つる片端よりして片片四方に飛び去るべし、これに反して默然として自ら行ひ、而かも其行ひの誠あるに至つては恰も芳香ある花木のよく行人の衣袖を薫じ、久ふして猶去らざるがごとく他人を感動せしむること最も深かるべし。況んや我が一家に臨み、我が子弟に對するに於てをや。

◎過ぎたるは悔むべからず

人は過去の過失に鑑みて將來善き事を爲さんとの希望を保つべし、さりとて徒らに昨日の過失その

みおもひ、失錯にのみ屈するなかれ、徒らに罪を悲しみ、くよ〳〵するは罪を償ふ道にあらず、如何ほど嘆息したればとて既に爲したる事は善き行の益にはならず、唯勵みて其日〳〵を善くする習慣を取るべし。

◎困難は天惠の一つ

困難は人をして鍛錬せしめ人をして忍耐せしめんと欲する天の深き惠みなりと思ふべし、園丁の鋏刀は木を愛するが爲めに用ふるものにして、怒りの爲めに用ふるにあらず、これを蕣花の培養に鑑みよ、蔓を摘まざる葉は、遂に美はしき花とならざるがごとし、父母の折檻せざる子供は善良に育つものにあらず、寒氣強き時は春になりて木の茂りを見るものぞ、正しき人は逆境に耐へていよ〳〵清きぞかし。

◎日々の享樂

處世の最大極意はその日〳〵を樂しむにあり、人若し其日の樂みを以て不足におもひ、大なる幸福を未來に望まば、其人は遂に失望に了ることあるべし、事を將來に期して勤むるは可なれど、それにも度合を考ふべし徒らに後の榮耀をのみ願ひてその日〳〵を犧牲にせば何時か其身は老朽つるに至るべし、蜉蝣の樂みは、蜉蝣をして享けしめよ、靑春の快樂は靑春をして享けしめよ、一日の中には一日の黃金時代あり、空しくこれを過すは天意を亡するものなり。

常宮殿下の御平生

◎御生立　殿下は明治二十一年九月三十日の御生れにて、佐々木高行伯夫妻御養育掛として御妹周宮殿下と共に高輪の御用邸に在り、伯夫妻は頗ぶる嚴格の人なれば、大御心に依り御養育係を仰付られし事とて、其御養育振は下情にまで通ぜさせ給ふやう、微細の點にも心を止めて侍き奉り、日常の課目は勿論御身邊の調度の御取扱ひに至るまで、克く御注意を拂ひ給ひ、御傍の人々も其御篤行を感嘆すると屢々なりきと承る。

◎御平常　されば殿下の御生活は頗る規則正しく亘らせ、冬は午前六時御起床、夜は九時半乃至十時頃に御寢遊ばされ、夏は一時間早く五時の御起床なり、而して規定の御寢時刻は九時なれ共、御學問に御熱心の餘り、晝の日課の御復習等にて十時に相成る次第なるが、最近の御消息を洩れ承はるに、朝六時御起床あれば侍女の差し置く御召物を御手づから召し給ひ、直に御手水を遊ばさる、侍女は二人附き添へども大方は夫等の手を籍りさせ給はぬよし、かくて、御手水を濟まさせ給へば、御學問所の御廊下に並べられたる鉢植の和洋草花又は種々の植木に水を與へ給ひ、美しき花の日々に太り行くを樂しませられ、尚殿下は植木に次でカナリヤを愛育し給ひ、餌や水を御手づから與へらるゝ由。

◎御食堂　午前十時に食堂に入らせらる、食堂は日本室にして中央に卓あり、御卓上には都下の諸新聞及び諸種の女學雜誌等を置き、常宮、周宮御二方にて御閱讀遊ばさる其記事は海外電報を始め種々の雜報小說に至る迄一つも殘さず御目を通さるゝ由なり、而して御食事は朝夕二回は日本食晝餐のみ洋食を召し上らるゝとのこと。

◎御勉學　朝飯を濟し給へば日課に移らせ給ふ、課目は英佛語、及び國語漢文、音樂、歌學等にして下田歌子、納所辨次郎、阪正臣、幸田延子、伊東まり子、堀江芳子の諸教師八名にて交る〳〵御教授申上ぐ更に午後よりは御運動に移り侍女の御相手にてテニス、ピンポン、ブランコ等總ての遊戲を遊ばさる、尚寫眞撮影を好ませられ常に近侍の人々を始め鎌倉御用邸附近の景を御撮影相成るが却々御熟練遊ばされ居ると云ふ。

◎御定めの時間　殿下が日々の御日課の際には、御手づから御机を備へ御勤學に就かせられ、畢りて再び御手づから御跡仕舞ひを遊ばさるゝを常とす、御勤學の間の御熱心は非常なる者にて、御定めの時間に達せざる中、御課

衆を止めさせ給ひしが如きは曾て一度もなかりしと。

◎御謙德　御髮の如きも平素束髮に結せられ、御調髮は御妹君周宮殿下と交る〴〵に結び合ひ給ふとか承るだに畏し、總て御身邊の事は親から遊ばされ、服裝も可成御質素を旨とし、常には洋裝を召給はず、從つて髮飾りの如きも華美を避け、桊、紺等のリボンを用ひられ、御衣服は高島屋、三越等佐々木家出入りの商店より御取り寄せ相成るよし、又御附の者の疎忽より御用の器物など毀せし樣のことある時は殿下には聊かも御氣色を損じ給ふ樣のとなく、卻て上勤めの者の叱言もあらんかと其疎忽を御身にお引取り遊ばさるゝには、皆感淚を催しお前を下りて互に顏見合せ只管に殿下の御庇護御仁慈を稱へ奉ると云ふ。

◎音樂　近年新御殿として西洋館を建てられ御學問所を此所に移させられ、舞踏、ピアノ、ヴアイオリン等を御練習遊され何れも御堪能に渡せ給ふと云ふ。

◎御居室　御部屋は二階と階下とにして階下は殿下日本齋を好ませ給ふ所より、額は總て日本畫を掲げ、階上には神壇あり歷代の御靈を此所に祀られ、其御前に兩陛下の御親影を安置し月の一、十五、二十八の三ヶ日は供物を供して御拜あり、又皇太子同祀殿下及び竹田宮の方々を屢々御訪問ありて御歡談遊ばさるゝこともあり。

◎御用品　折々の御用品を仰出さるゝ折、一度御附の者に夫とお言付ありし後は繰返しての御催促抔更になく、之を進め參らする迄御待ち遊ばさるゝより、御用を仰付られし者共は殿下の有難き思召を畏みて自然御仰せの期日迄に進め參らする樣なせり。

◎御料理　御殿に在せらるゝ折にはさる事遊ばさるゝ事少けれど、鎌倉へ御旅行の際など、彼地にて朝夕御手づから御料理を遊ばされ、日本料理、西洋料理何くれと遊ばさるゝが、殿下の御得意なるはお鹽加減の御巧妙なるとにて、是には近侍の人々の何時も感佩し奉る所なりと。

◎御學文　皇室にては元智字は正親町伯爵承まはりたれば常宮殿下にも伯に就て學ばせ給ひしが去廿九年中伯爵は老體にて到底其職に堪へずとありて御辭退申せしかば宮中にて御人選の末阪氏に仰付けられ阪氏は一週二度宛御伺候御指導申上げし由にて字は宸翰樣のものを主とし楷行草共に學ばせられ御進步も著るしく暫の間に色紙短册など美しく認め給ひ又其後は唐紙中折の大文字額面の題字など取交ぜて御修業なりたり又國文は普通學御修業の際に御勉學ありしが、四五年前より更に國文の侍講をなすべき旨阪氏へ御仰せありたれば淸少納言の作物抄本を講じ又は書取など遊ばし時によりては殿下自ら御講義ありて阪氏に其誤を訂させ給ひ抔し之亦御進步も著しかりしと承りぬ。



女子の運命

大町桂月

◎五十歳に餘れる一老婦、夫に死にわかれ、一女をつれて陋巷に窮居せしが、世の中はせまいやうにて、さて廣きもの也、財産は何十萬もある老夫、妻を喪ひて閨房寂しく、所謂茶飲友達を求む。わが親戚の女、月下の氷人となりて、かの窮せる老寡婦この富める老夫に嫁することゝなりぬ、先妻の遺せる美服は、幾棹の箪笥に有りあまれり。昨日までも水仕事に荒れし手、忽ち幾個の金の指環に光りかゞやく。女、氏なくして玉の輿に乘るとは、これにや。さるにても、人の運命ばかり測りがたきものはあらざる也。

人相家は、よく人の運を三通りに分つ、即ち、初運中運、晩運、これ也。之を顔にて分てば、上停の發達せるものは、初運よく、中停の發達せるものは、中運よく、下停の發達せるものは、晩運よしといへり。上停とは眉より上也。下停とは鼻孔より下也。中停とは其中間也。女子で申さば、金ある家に生れ、兩親に愛せられ、着たきものを着、見たきものを見、思ふまゝに生長するが、初運よしといふもの也。良き夫に嫁して愛せられ、金にもこまらぬが、中運よしといふもの也。夫婦とも長命し、子女みな賢良にして、一家繁昌するが、晩運よしといふもの也。之に反して、貧家に生れて十分なる教育もうけられず、もしくは、繼母に虐遇せられ、もしくは親を喪うて流浪するが、初運惡しといふもの也。貧家に嫁して苦勞し、もしくは、貧家ならずとも、夫と趣味氣象相合せずして、絶えず不和なるは、中運が惡しといふもの也。老いて、夫なく子なく、子あるも役にたゝず、金もなきは、晩運が惡

しといふもの也。初、中、晩の三運のよきに越したることは無けれど、世の中は、さう思ひ通りには行かずどれか、一つ運が得られるといふ場合には、知らず、初運を取らむか、中運を取らむか、抑も晩運を取むか。

◎

世に成功の秘訣とて、鈍、根、運といふことあり。鈍とは、神經が過敏ならざる也。小慧ならざる也。こせこせせざる也。從つて、所謂女賢しうして、牛賣りそこなふの失策を演せざる也。根とは、氣が移らざる也、倦まざる也。不屈不撓なる也、以上の二者そなはらば、七八分の成功なれども、境遇が人をつくる。豐臣秀吉も德川の世に生れたらば、天下は取れざりしなるべく、東郷大將も日露戰役なくば、軍神とは仰がれざりしなるべし。これ即ち運と云ふもの也。牡丹餅は棚に在り。運は天に在り。人力の在らむ限りを盡くして、その上にて如何ともすべからざる所が、即ち運也。努力せずして、あゝ運が惡いと歎息するは、眞の運にあらざる也。氣隨氣儘にあばれて、あゝ運が惡いと歎息するは、眞の運にあらざる也。粗忽にして慮淺く、もしくは猪口才を恃みて、所謂牛賣りそこなひあゝ運が惡いと歎息するも、眞の運にあらざる也。運の來るまで辛抱する能はずして、早く凹み、あゝ運が惡いと歎息するも、眞の運にあらざる也。記せよ世人が普通に運と稱するものゝ中に、眞の運もあれど、大部分は、心掛の如何、努力の如何に由りて決する也。

◎

「人生婦人の身となる勿れ、百年の苦樂他人に由る」と、白樂天は、女子に同情を寄せたり。成程幼にしては親に從ひ、長じては夫に從ひ、老いては子に從ふことを、女子の三從と云ひて、婦人の運命はすべて、他人に由りて決するやうなれども「家貧にしては良妻を想ふ」といふ。語あり、妻に良智あらば、不幸なる家を轉じて、幸福なる家となすことも出來る也。又「賢人の母は、みな賢婦なり」といふ語もあり。婦人が賢ならば、その子も賢にして、若き時、よしや貧乏世帶をつくりまはすとも、子の出世につれて、晩年は、幸福

なるべし。才能の如何、境遇の如何、趣味の如何によりて、百中二三の例外なきにあらざれども、普通、女は妻となり、母となるもの也。妻となり、母となりたればとて、必ずしも、百年の苦樂、他人に由るとのみも云ふべからず。

◎

まづ、「佳人多くは薄命なり」といふ語あり。佳人なればとて、必ずしも薄命とは限らず。されど、才子は才を恃み、佳人は器量を鼻にかく。器量を鼻にかけては、つんと、すます。愛嬌なし。自から高ぶる。同情も無し。駿馬、豈に痴漢を載すべけんや。この絶世の美容を茅屋にとざすは、あたら、夜の錦也。むやみに頭さげてたまるものか、何處へゆきても、榮耀榮華をきはめ得べき筈の身なりとて、夫を夫とも思はず、甚しきは、我夫ならぬつまをかさね、役者までも買ひてそれで、幸運ならむには、晦日にも月が出るべし。人はなべて自惚はあるもの也。八十點の美人ならば、自からは百點以上にも思ふべく、不別嬪といふよりは、むしろ化物と云ふべき顔にても、及第點よりはさまで下れりとは思はざるべく、美の標準には、はづるゝとも、愛嬌があるとか、品があるとか、悧巧げに見ゆるとかを、わが顔を買ひかぶるもの多かるべし。「目につきし女房やがて鼻につき」と云へり。美人にても、自から恃めば、非運に陷る。まして、醜婦に於てをや。

顔色の美を愛するは、なべての人情也。美人と生れたる女は、この點に於て、幸運といふもの也。美人ならずとも、及第點、即ち人並以上の顔ならば、運のよき方也。されど、顔を恃みて、學問を怠り、藝能の修業を怠り、婦人としての心掛を怠らば、折角の好運も轉じて惡運となるべし。及第點以下の顔の女は、お氣の毒ながら、一つの非運も肩にして生れたる也。醜なる女敎師にては、生徒の成績惡しとて、學校にても、醜婦には、閉口する由也。さは云へ、棄つる神あれば拾ふ神あり、會社や役所や、にては女の事務員は、醜婦の方が長續きするとて、醜婦を歡迎する由也。よしや目口は、そろはずとも、心美ならば、其美、必ず顔に

あらはる。容色といふも、若いうちの事也。老いては美人も醜婦も同じく枯木也。美にして賢なるに越した事なけれど、日月は並びてらさず、美にして賢なる女よりも、醜にして賢なる女が多きやう也。余輩は、顔の美よりも、心の美を取らむ哉。

◎

心美にして賢ならば、運命の神は、必ず、玉の輿を以て、迎ひに來る也。中年に來ることもあれば、晩年に來ることもあり、早ければとて、慢心すべからず。おそければとて、落膽すべからず、妄りに運だ〳〵とて、天を恨むべからず。女子の運命とても、他よりのみは來らず、心掛と努力とによりて運命の開拓は出來るもの也。

◎

初運があまり惡すぎて、心ひがみ、世をすねるやうになるべし。初運の好きといふことは、必ずしも望ましきことに非ず。甘やかされたる女は、『我』つよく、氣隨氣儘にして、運命の神に憎まるべし。中年にいたりて、必ず、非運也、晩年にいたりては、なほ更、非運也。よしや初年に掌中の玉と愛でられ、華やかな衣服を着かざりたりとて、中年にして顧れば、これ一場の夢にあらずや。晩年にして、中年の榮華を顧るも、同じくこれ一場の夢にあらずや。死際に臨みて、晩年の榮華を顧れば、亦これ同じく一場の夢にあらずや。斯く悟らば富にありても、貧にありても、達しても、窮しても、好運の神は、いつも其頭に宿る也。眞の運命の神の寵を得むと欲せば、人生を達觀せよ。されどこれ道に志し、藝に志すものに云ふべきことにて、男とても娑婆氣のある者には云ふべからず。まして一家を經營する婦人にありては、なほ更の事也。すべて、娑婆氣のあるが、普通の人間也。普通の人間には、心掛けと努力とのある處に、運命の神、喜んで來る。驕慢、放心、懶惰、不衛生、虚榮心、柔懦、放肆、不謹愼、嫉妬、怨恨、貪慾、淫奔などの跋扈する處には、さすがの運命の神も、鼻摘みて、にげ出し給ふべし。

◎

女子百年の苦樂が必ずしも他人に由らず、女子の運命は、女子自から開拓し得べき實例として、今の世の何人も知り居るべき筈の事實を申さむに、苟くも、新聞を讀みたるものは、法學博士、代議士、辯護士、一黨の頭株、鳩山和夫といふ一代の名士あるを知らむ。又其夫人に、春子女史あるを知らむ、鳩山博士は士魂ある人とも思はれねど、今の世、他の紳士に比して、不廉潔とは思はれず。近く進歩黨より政友會に移りたることとも、主義にして去就を決したるものと解すれば余は其男らしき心中を諒とす。されど、その爲めに、衆望は落ちたり。これ改選に際して、大に損也。されど、余は必ず其當選せむことを信ず。それには、春子女史與つて力あるべきことを信ず。世に、春子女史が賢夫人なりとの噂は高し、噂は、必ずしも當てにはならざれども、春子女史は、社交術に長じ、選擧運動に巧みなることは事實也。其子の出來のよきことも事實也、世には、金にて投票を買ふもの多けれども、之に代ふるに、美人の嬌舌を以てする方が、遙に純潔にして、且つ詩的也。かく春子女史は夫の爲めにつくして夫榮え、夫榮えて我身も榮ゆ、春子女史の運命は、春子女史、自からが開拓したるものなりと云ひて可也。而してこれ鳩山氏夫妻の身の上のみならず、凡人みな然り、夫の職業に同情し、夫の趣味を解し、我心、夫の心と合して、夫を助けむと力むれば、貧も富とならむ、窮も達とならむ、富達とならずとも、好運の神は、貧窮の中にも來るべし、一家豈に非運ならむや。心掛と努力とある處に、好運の神が宿るとは、即ち是也、之に反して、夫を侮り、夫の職業と趣味とを解せず、たゞ美服の着られぬを歎き、芝居の見られぬを悲むやうにては、夫の方にても、よい氣持はせず、運命の神も、そろ〳〵逃げ仕度し給ふべし。

◎

今の世、下田歌子、三輪田眞佐子、棚橋絢子等は、女子教育家として有名也。年若き女子、その名聲を慕ひて理想と云へば、これら諸名媛の名を指すもの少なからぬやうなれど、一考せよ。絢子女史は、花の盛り

の身を、自から捧げて、盲目の學者に事へたり、下田三輪田二女史は、早く寡婦となりたる身也。世の所謂物質的好運は失ひたれど、心掛と努力とが良かりしを以て、學問もあり、才幹もある教育家となり、茲に精神的好運を得たるべき也。謹んで警告す。物質的好運に執着する女子にして、學者となり、教育家となるはこれ河童の陸に上る也。

◎

妻となり、母となるが、一般の女子の運命、否、任務なれども、例外はあるべし。尾藤二洲は、怪我してびッことなりて、大學者となれり。安積艮齋は、美しき妻にふられて、大學者となれり。學者や、文藝の士や、必ず、身體上なり、精神上なりに、不具なる人也その代りに秀出したるものある人也。凹凸なければ、即ち平地也。常人也。凹あれば必ず凸あり。凸あれば必ず凹あり。もしこのやうな女あらば、妻母の常規を逸するもよかるべし。そのやうな女の運命開拓は、男と同じ。こゝには論せず、熱心と決心と自信とのつよく[illegible]なるを要す。さもなくて、一寸ばかりの才學より男を侮り、身體の不健康より男を嫌ひて、愛といふことを解せず、輕々しく妻母の埒外に出でむとするは、あゝ、危い哉。むかし褒姒は、世に比類なき美人にして、幽王に愛せられたり。されど、この美人の眼中、帝王なし、八百の諸侯なし。顔は花の如くなれども、心は石の如し、一度も笑ひたることなし、幽王之を笑はせむとて、烽火を擧ぐ。八百の諸侯來り集る。褒姒こゝにはじめて笑へり。幽王は、世界一の大洒落者也褒姒は婦人界の變り物也。如何に美なるも、必ず非運に陷るべし。褒姒ほどの色もなく、誇るべき程の才藝もなき癖に、高等教育を鼻にかけて、男を侮り、女子の生命なる愛をも失ふの氣風、女子教育の進歩につれて、世にはびこらば、これ女子自から女子の運命を狙ふもの也、仁や、慈悲や、博愛や、これ一般の男子にも望み難し、男は力、女は愛、女子にして、愛をも沒して、『我』のみを張らば、これ人にあらずして、幽靈也。化け物也。運命どころの沙汰に非ず。近く新聞に

嘩高き鹽原駈落事件も、この類にあらずやと。想像せらるゝ也。

◎

金が仇の世の中、金を得むとて努力するは、人間普通の事也。されど、過ぎたるは、及ばざるが如し。黄金のある處、必ず好運あり、好運のある處、必ず黄金あり、福の神は、即ちお金大明神、棚に祭る稲荷の狐も金に見え、大黒も金に見ゆるに至りては、運命の神は、恐らくは、駕をとゞめざるべし、東京にては、錢のことをおあしといふ。おあしはお足也、足あれば、動き出す、足のなき達磨様は動かず、轉んでも倒れざる也、人に嫁せずして金に嫁し、金あるうちは、極樂の榮華、金は、例のお足にて動き出す、金なくなりては、地獄の呵責、金の一去一來、忽ち極樂地獄を現出す、金の力も、あゝ、偉大なる哉。されど見よ、賎の伏屋も、月がさす、夕顔棚の下涼み、金で買はれぬ樂みあり、美服をまとひても、夏痩とかこちては、何の樂みぞ、金屋にすまひても、針の山に上る心地しては何の樂みぞ、膳に大牢は無くとも、鍋は豆腐のつゝつき喰ひ、心だに滿足すれば、茅屋の中にも、運命の神は來り舞ふべし。

◎

さるにても、初年の好運に慣るゝは、世にも不幸なる哉、苦勞してこそ、人間の玉は、みがゝるれ。氣位のみ高くなり、みそこし提げて豆腐買ひにゆくことが出來ぬやうにては、とても、中等以下の世帯は、ふりまはされず。女子のつとむべきは、たしなみ、女子必須の藝能の勉强、家計の整頓、愛と敬、身體の健全、思ひやり、苦勞して、わけのわかること、質素、恭儉、細心、家庭の趣味、育兒の手腕、夫との同化、姑小姑への同情、勞をいとはぬこと、即ち心掛と努力、もし初運に狎るれば、中運をとりそこなふべし。中運に狎るれば、晩運をとりそこなふべし、すべて人は現在に生活せずして、未來に生活するが俐巧也。もし現在に生活せば、愚痴となり、いやみとなり、また始まつたと、敬して遠ざけらるゝ。「今日の辛苦も逢うたら話し、

かはいさうだと言はれたい」、夫もし聞かば、泣くべし。これ所謂未來に生活するものにて、無限の快樂は、自から其中にあるべし。請ふ、初年には、中運を思ひて努力せよ、心掛をよくせよ、中年には、晩運を思ひて努力せよ、心掛をよくせよ。我が愛する夫の母と思ひて姑を愛し、我が愛する夫の嫁と思ひて嫁を愛すれば、家庭は、必ず幸福也。夫婦の間とても、長き間の事なれば、いやなことも起るべし。初めは仲がよきも中頃は、貧や、氣隨やより、犬も喰はぬ喧嘩も起るべし。されど、晩年には、必ず仲よくなるもの也。もし晩運がよからば、昔はかうだなどゝて嫁をいじめずに、愛におぼれて、孫を甘やかすことばかりせずに、そろ〳〵お寺參りして、後世を祈るべき也。

◎

獨立なら獨立、嫁するなら嫁するで、夫の職業、氣質、趣味の如何によりて、それ〳〵努力の仕方あり、心掛けの仕方あり、その努力、心掛の如何は、女子一生の運命のわかるゝ處なるが、餘りに長くなれば、そは、後日に讓りて、ひと先づ、玆に筆を擱くもの也。

煩悶の人に與ふ

勉めて心を快活にせよ、無益に悲しみ、無益に憂ひ、無益に悶ゆるなかれ、憂苦窮悶は身を斬る及ぞかし、汝の心に若し悲哀をおもひ、憂苦をおもひ窮迫をおもはゞ、天地快廓の自然美を見て汝の頑硬なる心を治すべし、平和と幸福とを以て汝の家室を滿たさしめよ、これ汝が天より稟けたる汝の權利にして猥りにこの權利を棄つるものは天の好意を無にするものと知るべし。



運命の綱は自身の手にあり

小崎千代子

▲年頃と煩悶

失戀と申す樣な煩悶は、別問題と致し、普通の煩悶は三十歳前後から四十歳前後までに最も多く、又此時代の煩悶が一番込み入つて居るやうです。それと申すは此年頃になると大概一生の運命が定まつたやうに感じ、理想通りに行かぬ方は世の中を果敢なむからで御座いませう。私は不肖ながら宗教上から自然皆樣の御相談に預る塲合が多う御座いますので、皆樣から種々樣々の煩悶を伺ひますが、一々御同情申し上げたい事ばかりで御座います。目下賢妻良母を標準とした教育法は女學校や雜誌で遺憾なく普及され、一通りの教育を受けた婦人方は其心得のない者は無い位で御座いますし、殊に忍耐貞淑の德に富んだ我國の婦人が左樣左樣家庭を紊亂する理由も御座いませんでせうが、兎角家庭に不幸な事情が蟠つて、奥樣方が煩悶の淵に沈まれるのは、何樣も御良人の我儘から起るのでは無いかと存じます。それは男子方に御注意を願ふので御座いますが、私が婦人方に對する注文を列擧して見ませう。

▲薄運を喞つ婦人

自由快濶な境遇に在る米國の婦人達さへも、隨分身の逆運を喞つ方が御座います。殊に米國では結婚が我國のやうに手輕に出來ませず、男子は勿論、婦人でも資産がなければ、一家を持つことの出來ない風習で自然婦人の獨身者が多く、それ等婦人には、薄運を喞つ者があると云ふ具合で御座います。それですから我國の婦人方が悲觀的に陷り易いのは御尤もですが、併

し徒らに薄運を喞つて居りましたとて、自他に少しも益ないのみか、結局自暴自棄に陷つて、大切な身體も靈魂も滅茶々々にして了ふばかりで御座いますから、此處は何卒婦人方が一工夫して、切拔け難い運命の血路を開いて慰安の道を求め、薄運を征伏して幸運の壘に上り、凱歌を揚げなければなりません。私は前申上る通り、薄運な婦人に充分御同情は致して居りますが、自分の薄運をクヨ〳〵歎かれる婦人よりも、モット悲慘な境遇に在る婦人が少しも薄運を喞たず、健氣な行ひをして居られるのを見ますと、濫りに喞つ婦人には、まだ何處にか反省の餘地がありはせぬかと考へます。

私は親愛な諸姉の煩悶に就て、御忠告致した一二の例や健氣な薄命婦人の實話を一寸申上げませう。

▲厭制を喞つ人

新教育を充分受けて家事經濟の思想にも富んだ奧樣が頑迷な姑に壓制されて自分の意見を少しも行はれず、家事の不規律や臺所其他の不衞生を改良しやうとしても自由ならず、良人の趣味に一致せん爲の外出も故障を入れられ、外出の暇がある位ならば家に居つて綴褸補綴でもするが可いと叱られ、詮方泣く〳〵姑の命に默從して居れば、家庭の改良も出來ず、良人の氣にも合はず、實に煩悶に堪へませんが、何樣したら宜いでせうかと毎々歎たれました、其處で私は斯う申しました『貴女も敎育を受けて居られるだけに煩悶が多いでせうが、頑迷な姑に默從されたとて内心怨恨に充ちて少しも早く姑の世を去ることを祈るやうでは容易ならぬ罪人たるばかりで無く、其思ひが顏色に表はれて益々姑の惡感を招くでせう。貴女が御良人の爲め一家の爲め改良したいと云ふ忠實な精神が御在りなら縱し姑の罵詈を受け呵責を受けても斷然意を決して改良の途に進まれた方が宜しいと考へます。如何ほど頑迷な姑でも我家を愛さぬと云ふ事は無いでせうから追追貴女の決行された好結果を見て感じられるだらうと思ひます。度量を寬くして、頑迷な姑は御氣の毒な方も憐みいたはると同時に、目的を貫徹する方に奮進

されたら宜いでせう」と。

▲不滿足を喞つ人

これも姑の頑固に苦んで居られた新教育のある某奧樣ですが、自由に活動する事が出來ない、家庭を改良する事が出來ないと始終溢して居られ、姑が無かつたら規則正しく家を治め、仕事も捗取つて、社會の爲めに働く時間を得られるのにと憤慨して居られました。所が其後姑は親戚へ暫く別居される事に爲りましたから、奧樣は嘸かし大得意で切り廻される事と存じましたが、實に豫想外で、頑固ながらも家事の手助けをした姑が居なくなつて見ると、細々しい用事に追はれて毎日まご〳〵しなければならず、偶の閑暇があつても唯だ愚圖〳〵と骨休めする位で一向平生の抱負を實行される勇氣がありませんでした。一體斯樣な事は誰にも有り勝ちなもので、良人が最少し働いて吳れゝば自分は幾何でも働くとか、良人の何々さえ止めば、自分は直に儉約するとか、彼の家のやうに下女を置けば、他の仕事が出來るとか、總て不如意の境遇を他の所爲に歸するのは、普通婦人の情でありますが、偖思ひ通りになつた曉に果して豫想の如き成績が上るかと云ふに、存外其樣で無いもので御座います。豪い婦人は如何なる境遇にも滿足して愚痴を言はず、天與の本分を善く勵んで居ると思ひます。斯樣な婦人は、常に心が活々として逆境を壓倒して居ますから、遂に好運に向ふものですし、又縱し物質的好運は來らずとも、精神的好運の婦人となるに相違ないので御座います。

▲良人の意氣地なきを歎つ婦人

良人より少し立ち優つた才藝のある某奧樣が、何時までも平凡な仕事ばかりして居て目醒しい出世の出來ない良人を齒痒く思ふのみならず、矢張り姑がある爲め思ふやうに活動の出來ないので、彼れ是れ煩悶に耐え兼ね、子のないのが何より幸ひなり寧そ離婚して獨立して見たい抔と言はれました。私は此婦人に對し『貴女は十年も同棲された御良人と別れて快く獨住居が御

出來ですか、又獨身で今より幸福に暮せると思召すのですか」と申しました處「それは離婚を幸福とは決して思ひませんが、獨立した方が今の境涯より少しは増しだと思ひます」と答へられました。其處で私は更に「獨身生活の婦人が世間で尊重されるのは實に稀な例で多くは馬鹿にされ易い、縱令意氣地なき良人でも之にかしづいて居れば、世間の信用を得られます。而して婦人の獨身生活は勢ひ交際の範圍を狹くしなければならず、又交際を求むる人も少くなりませう。良人の在る家は、良人の知己が出入せらるゝだけでも交際が多いので、交際が多ければ自然精神的發展の餘裕が得られると云ふ次第で御座います。獨身となつて今より面白い境遇になられる事は決してありませんから、呉呉も御考へなさいませと斯樣に御忠告致しました。

▲子女の我儘を歎つ婦人

我儘な良人の仕向けも、子供が成人した曉を樂んで辛抱したのに、追々子供に馬鹿にされ邪魔にされ、此鹽梅では老後の憂も思ひ遣られる、などゝ熟々運の拙なさを喞つ婦人も少くない樣です。柔順忍耐は大切な事ですが、言ふべき事も言はず、忍耐すると云ふ風な婦人は却つて良人との間柄が冷淡と爲り、子供の我儘を矯正する事も出來ず、クヨ〲と無益に心を痛める間に、自から拙き子運を作るのであらうと存じます。併し子供も年頃になりますと、却々取扱ひの六ケしいもので、特に男兒の躾の骨の折れる事は私も實驗上承知致して居ります。何でも中學へ通ふ時代になれば兎角親の命令に反抗したがるものですから、母親は成るべく或る程度まで寛大にして置き、一度にみつしりと利害を說き聞かすのが宜しう御座います。而して不精の癖があつたなら、母親が先へ立つて働いて見せれば大抵細々した手助位致すもので、宅の伜なぞ私と一緖に風呂の水を汲み込む位は致します。母親は世間の事物に注意し、智識の度が子供に後れを取らぬ樣にして居れば、子供が馬鹿にしないのみならず、幾何か敬意を拂ふので御座います。

▲健氣なる行商婦人

私の知己に健氣な細君が御座います。其良人は地方へ商賣に出掛けて藝娼妓に溺れ、落籍などした事も一二度ではありません。それが爲め細君への手當も不足勝なので、細君は小間物の行商なぞ致して活計を立てて居るのですが、良人を大切に思ふこと一通りで無く良人在宅の際は飲食其他の細事に心を配つて良人を喜ばせる樣に致し、碁の好きな良人の相手をする爲めに態々碁の稽古までした位で御座います。他から見ると如何にも馬鹿げて居るやうですが、此細君は決して卑屈に盲從して居るのではありません。幼い時に女大學から敎へられた貞操を堅く持して居る上に、基督敎の信仰を得たので御座います。尤も一時は非常に苦痛を忘れたいと稲荷樣や金毘羅樣に祈願した事もあるのですが、最後に基督敎を聞いて眞正の安心を得、益々堅固の決心を以て良人に仕へたので御座います「私は人から勸められて基督敎に入つたのでは無い、自分で探し當てたのです」と何時も人に話して居まして、敎會にも非常に働いて居るので御座います。

▲婦人の運命觀と依賴心

境遇の爲めでもありませうが、男子よりも婦人の方が運命と云ふ觀念の强いもので御座います。文明國の婦人でも、氏なくして玉の輿に乘りたい、棚から落ちる牡丹餅を食べたいと云ふ樣な僥倖心に充されて居る人が少くないので、逆境に際し歎息の度の甚しいのも免れない事と存じます。勿論良人を信じなければなりませんが、百年の苦樂他人に依ると云ふ考へで、一から十まで何も彼も良人に依賴して居るのでは仕方がありません。良人に先立たれても路頭に迷はないだけの敎養は如何しても今日の婦人に必要ですから、私は娘の敎育に就て始終此點に心配致し、結婚前に何か職業を仕込みたいと考へて居りますが、偖其樣なると、年數もかゝり勢ひ家政向に疎くなりはせぬかとも考へまして、一般の親御達が女子敎育の方針に迷はれるのも御尤の次第と感じて居ります。併し一の信念を堅め難に當つて屈せぬ勇氣と常識とを養成して置けば、縱し職業は持たずとも臨機應變の方法を立て、悲しい運命に陷らぬ工夫は出來る事と信じて居ります。

運命の定まる三時期



棚橋絢子

△第一期は親の責任

女子の運命の定まるのは、普通に十七八即ち結婚の時としてありますが、實は運命の大部分は既うそれ以前に定まると思ひます。即ち十二三歳までに人の品性の基礎が定まると共に、幸運の種子も非運の種子も茲に芽を吹いて了ふのです。もう十二三歳までの教育といふものが其人の一生を大部分定めて了ふ。然しこの第一期の運命は寧ろ當人の責任ではなく、父兄の責任です。健實な親を持つて、それに養はれたものは實に幸福な人。然なきものは生來不運の人と申すべきでございませう。此の意味から言ふと、人の出入多く、從つて誘惑多く惡影響多い富家の女よりも、良い家庭の貧家の女の方が幸福な運命とも申されませう。運不運は必ずしも財産の多寡では定まらぬ、まづ順當に平和な愉快な家庭を作り得ればそれが運命の善いのと致さねばなりません。さういふ運命を捉り得るのは、却つて多く貧家――富裕ならぬ家の子女に見受ける、怜悧くて氣質の良い、意志の確かりした女子だと思ひます。然るに富家の子女といふものは、幼少から華美な生活に慣れてそれを好む餘りに、却つて波瀾多く動搖多く從つて苦惱多き家庭に入つて了ふ事が多いのです。

私の知合の許に塾生として居つた孃さんは、地方の財産家の子でしたが、どうも勉强が嫌ひで、不したらで、言ふ事が當てにならず、『貴方の言ふ事は一つも當てにならない！』と申しては、折々忠告しますと、本

來從順な好い孃さんですから『最う以後は必と直します』と本氣に言ふのですが、さて自分の室へ戻ると最うだめなのです。衣服から調度から總べて室内の亂雜なこと、檢束のないこと、お話しになりません。一年程塾主がさん〳〵苦勞してもどうしても治らず、遂々一晩塾を明けたので、止むを得ず親元へ返して了ひました。入塾以前から男との關係があつたのでした。

本來は順良な性質ですから、叱られゝば本當に直さうと思ふのですが、唯甘くばかり育てられた結果、身體も心も言ふ事を利かないのですね。氣の毒なもので親達も心配してゐますが、幼少からの躾を誤つたので仕方がありません。あの孃さんの未來の運命は既う知れてゐると思ひます。

△第二期の危險

女子の運命に關する第二の危險は寄宿舍生活だと思ひます。十二三歳までに根を下した善い種子――良い習慣良い傾向――も、女學校或はそれ以上の學校に居る間に、いろ〳〵思想上の動搖の來ると共に變つて來ますが、就中影響の大きいのは寄宿舍生活です。多くの寄宿舍が兩極端なもので、即ち新らしい事は少しも分らぬ老婦人でなければ唯ハイカラな若い婦人が舍監になつてをる、世故にも長け新趣味もあるといふ婦人が却々舍監には得られません。ですから自から兩極端になつて了ひます。さういふ空氣の中に始終浸つて、さういふものにばかり、始終觸れてゐるのですから、それに感染されて了ふのも無理はありませんが……………。

私がつく〳〵惜しいものだ！と思つてる婦人がございます。實は私の學校の卒業生で、その頃は成績もよし氣風もよし、實に善い生徒だと喜んでをりましたが、女子大學へ入つて寄宿舍に入つてから、ひどく變つて了ひました『何卒まあ貴孃だけは輕佻な、齒の浮くやうなハイカラ風に染まらぬやうに』と呉々も申し

當人も「決して御心配下さいますな」と確く申したゞけあつて、一年程は少しも染まらず、「あの方だけは立派に貫くかしら」と皆申し合つてをりましたが、二年目頃から全然染まつて了ひました。實に惜しいものです。もう私共の申す事は『其麽古い事は今は流行らない！』と耳にも入れぬやうな風。何かの會合の席で出逢つても、他の人々は元の校長だと思ふかして態々來て挨拶しますが、其女學生だけは遙か彼方に坐つたまま些と首を下げるばかり。萬事が這麽風になりましたこれが爲に切角の好運をも取り外してゐる事實があるのです。

一度結婚問題が起つて、兩親達は大喜び、頻りに勸めますが何うしても聽き入れません。學校を卒業しない内はいけないと申すのです。私共が見ては『まあ先方は學士でもあり總てが至極適當な結構な處で、這麽好運を取逃したら又とあるものぢやないのに！』と思はれます。で、兩親や親類が幾程說得しても何うしても聽きません。遂々斷つて了ひました。そりや學問も結構ですが最う女學校を卒つた後二年もやつては居ますし、先方もそれで澤山だと申す以上は良緣があつたら嫁くのが自然で、それが善い運命を取るのではありませんか。意思の堅固と申すよりは剛情、生意氣の方で、全く彼の寄宿舍の弊と思ひます。何でも舍監は寄宿舍に居つてそして卒業した若い婦人ださうですから舍監から舍生から皆その風なのでせう。意志の强固も學問の進步も宜うございますが、女の女たる所を忘れて了つたら何うといふものでせうか。然うなると寄宿舍生活が婦人の運命を傷つける事は恐るべきものと思ひます。

此女學生の家には兄がありますが、それが病身になつて了つたので、今度は此の娘さんに養子をしたいと親達は心配してゐます。家も相當に盛んにやつて居るので、良緣も少なくありませんが、『到底も又承知しなからう』と申して苦に病んで居ります。彼麽風に拗れた感情を張つて居つて、終ひに何うなるものでせうか以前はほんに美い娘でしたのに、惜しいものだ！と

思つてをります。

つまり結婚期が運命開拓の第二期ですが、その時代を寄宿舍で生活する婦人が漸々多くなるのですから、さういふ婦人は、些としつとりした心持で身を處して行きたいものと思ひます。

△波瀾多き第三期

所謂『運定め』の結婚に成功して、和樂な家庭を保つて行かれゝば申分はありませんが、不幸にして逆運に泣く身となると、何うしても波瀾多き生涯になります。私は之に處する秘訣が二つあると思ひます。一つは感情ばかりで事をせずに、道理も考へて行かねばならぬ事。今の若い婦人には少しもこれがありません。又不思議なもので道理を愆うと掘んでをりませんと、感情も漸々薄くなつてゆきます。妻の道、親の道は愆うと確く思込んでゐないから、妻としての情も母としての情も不思議に薄くなります。それですから種々と動搖つき出して、彼是する内にはつひ開ける筈の運命をも暗く塞いで了ふのです。も一つは目前の苦を厭はぬこと。人は何うしても一歩先の事を考へて置かねばなりません。それには目前に苦しまねばならぬ場合もありますのに、若い婦人方はそれが大嫌ひで、何でも目前の樂なやうに〳〵と計り望みますから、好い運命を捉へる事は出來ません。

論より證據。或る婦人が職業學校を卒業して造花に堪能な方ださうですが、縁あつて嫁かれたところ、姑が非常に嚴ましくて贅澤で私が幾ら働いても〳〵足りません。實に詰らないから最う歸りたい』と言つて離縁して了ひました。夫は藝能は二の次でしたが温良しい人ではあり、愛らしい男の子まであつたのにとうとう離縁。媒妁をした方が『貴方茲が技倆の見せ處――貴方を玉にする場合ぢやありませんか。目前の苦勞を忍びさへすれば……』と呉々も申したけれど聽き入れません。然し子供は欲しいといふのです。處が又彼方では一人の男の子だと申して遣しません。『それは當然です。それなら貴方借りたらいゝでせう。借りてお育てなさい。必と貴方の爲になります』と云ふと、『だつて詰らないぢやありませんか。自活するだけでも樂ではないのに、苦しんで育てゝおいて、プイと奪られて了つては』其處が貴方の考へ處です。苦勞して育て上げれば情愛といふものが自然子供に移ります。さ

すれば彼方へ渡して了つても、戸籍上では母子でなくても、精神的には子供が忘れはしません！」と媒妁人が幾程說いても、苦勞だといふ感情に囚へてゐてそれも聽かず。とう〳〵切角の一人の良い子供を失つて了ひました。それでまあ自分の藝能で困りはしませんが傍から見れば孤獨な未來の運命の心細い生活。

さう斯うしてゐる內にいろ〳〵の事が起るもので、再婚の問題が生じました。前の媒妁の人は第一番に反對したさうですが、又も聽かずに遂に參つて非常に虐待されて、それも忽ち破鏡といふ事になつて、又もとの孤獨の生活に歸つてをりました。

前の家に殘して來た子供は成長して、愈々良い子になりましたし、又行末を思へば實に惜しい事をしたものですが、今の若い婦人の事とて然までにも思はず、結句獨り身で氣樂でいゝと思つてをるやうです。造花の藝能には堪能ですし、却々當時は優い勢でをりますが、私共の眼から見れば眞正の好い運命は取逃してゐはしないかと思ふのです。のみならず猶惜むべき一つの事が起つて參りました。

それは初婚の家の方でも後妻を迎へたところ、矢張思はしくなくて不緣になり、「歸つてくれないか」と前の婦人の方へ申して參つたのです。「どうしませう？」と迷つてゐるので媒妁人が、「そりや貴方お歸りなさい！早速お歸りなさい」と勸めたのに遂々「飛んで火に入る夏の蟲だから」と申す樣な事で參らず終ひ。處が半年經つか經たぬに姑は歿して了つたのです。「あゝ貴方損をしましたね」「だつて其麼事は分らないんですもの」といふやうな譯。悔んでも旣う追付きません。假令苦しくても一旦嫁いだ以上はといふ精神——即ち道理で身を處する考を以て、いくら苦があつてもそれを堪忍して、突拔けてゆくといふ精神が此婦人にありましたら、優しい夫と最愛の子供と共に、平和な愉快な家庭を今頃は樂んでをられましたらうに！

要するに家庭に於ける幸福な運命も、社會に立つての幸福な運命も、唯目の前の小さな、辛いとか苦しいとかいふ弱い感情にばかり左右されて居らずに、道理で……正しい道を踏んでをれば何う廻つても困る事はないといふ信念で身を處置し、そしてナニ若い間の事だ、一つ進んで苦しんで見よう！といふ位な勢があればこそ運命も打開いてゆかれるものです。これが全體ではないかも知れませんが、少なくとも運命開拓法の肝要なものに違ひないと存じます。（文責在記者）



運命摸索の金針

△悪運はすべて忍耐によりて之に勝つ。

△世には災害の相あるものにして却つて幸運の源なること多し、これ其人の注意と警戒によるが故なり。

△運命と爭ふ人は必竟これに勝つか、疲るゝかにあり。

△禍の起るは起るの日に起るにあらずして必らず由つて來る處ろあり。

△不幸なる人にして始めて慈悲心の價値を知るものなり。

△何人といへども我が運命に甘んずる人はなし、蓋し境遇に滿足せざるは人の通性なればなり。

△狐は仔羊を盜まんと欲する時には啼かず。

△思慮なき婦人は恰も豚の鼻に飾れる寶玉のごとし。

△美人若し貧しくばこれに二樣の注意を與へざるべからず。美麗は人を誘惑すべく、貧は己れを誘惑すべし。

△婦人を傲慢ならしむるものは其美麗なり。

△婦人は益々其面を注意するに從つて益々眞富を忘る。

△屢々移轉せしめらるゝ樹木は決して繁茂せず、屢々目的を轉ずる人は決して成功せず。

△智識は心の食物なり、世に施すにあらんよりは自らを養ふこと多かるべし。

△一生不磨の寶玉は只智識あるのみ。

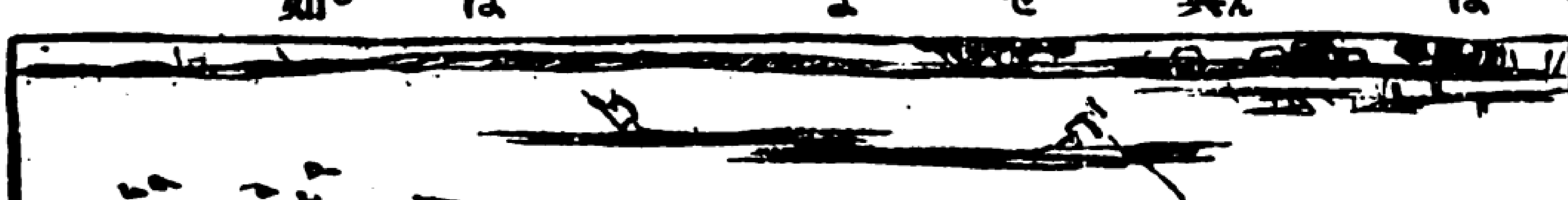
△學問の道は他なし其放心を求むるのみ。

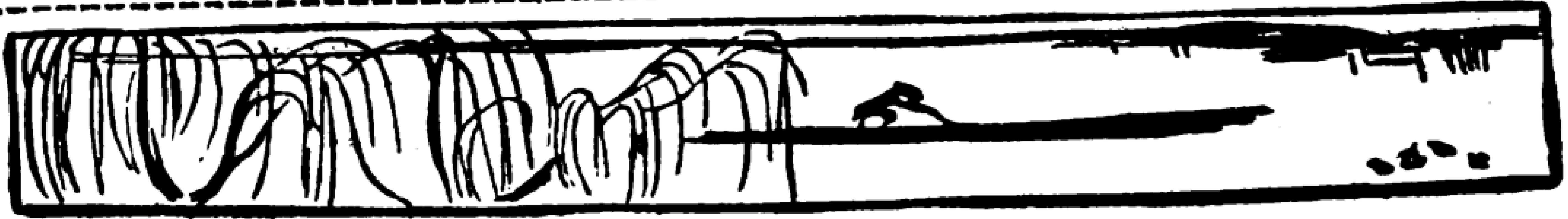
△實れる稻は頭を垂る、智識に富めるものは傲らず。

△空言を以て敎ゆるは實行を以て敎ゆるに如かじ。

△財を以て交はる人は財盡くれば交り絶ゆ。

△人の模範は人の學校なり。





△沈默は聰明を養ふべき睡眠なり、讀書は心の肥料なり。

△思慮なき人は常に發言す。

△沈默したる爲めに悔ゆる者は少し。

△談話は銀にして沈默は金なり。

△己れに勝つ人を以て第一の勝利者となす。

△復讐は卑劣なる人の卑劣なる快樂なり。

△不運に逢ふて而して後始めて好運の尊きを知るべし。

△避くべからざる不幸は笑つて迎へざるべからず。

△中庸といふ事はあらゆる德の眞珠を貫きたる絹の糸なり。

△金錢は恰も底知れぬ海のごとし、名譽も、良心も、眞理も皆金錢の爲めに溺らさる。

△まづ金を求め、而して後道德を修むべし、然らざれば德も遂に完からざる事あり。

△結婚は萬人の幸福の花たり、同時に其の害毒たることをも知らざるべからず。

△急遽に結婚する者は、徐かに悔ゆることあるべし。

△敏捷なる妻は痴鈍なる良人をつくる。

△哲學者たるはよし、併し汝の哲學の中に猶人生あることを忘るべからず。

△妻子を有する人は運命に人質を與へたるなり、何となれば妻子は其良否に論なく大事を爲すの妨害物なればなり。

△時間は惜むべき眞友なり。

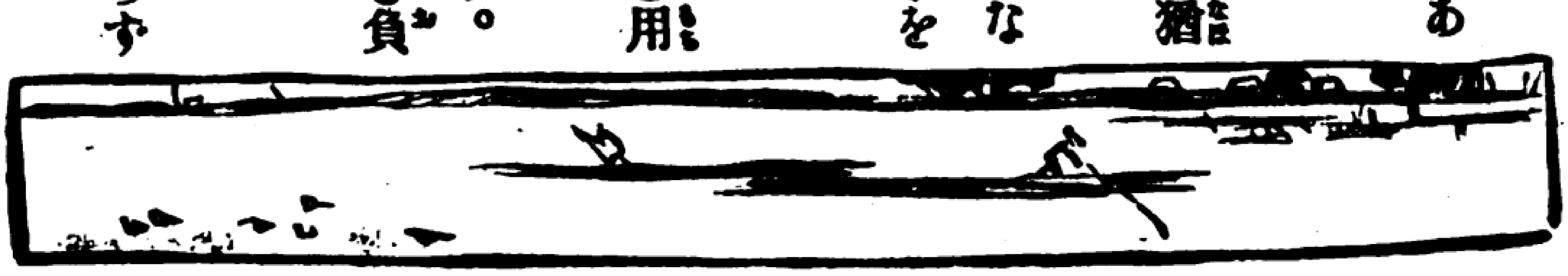
△光陰は造化の元金なり、故によく光陰を用ふるものは必らず富を致す。

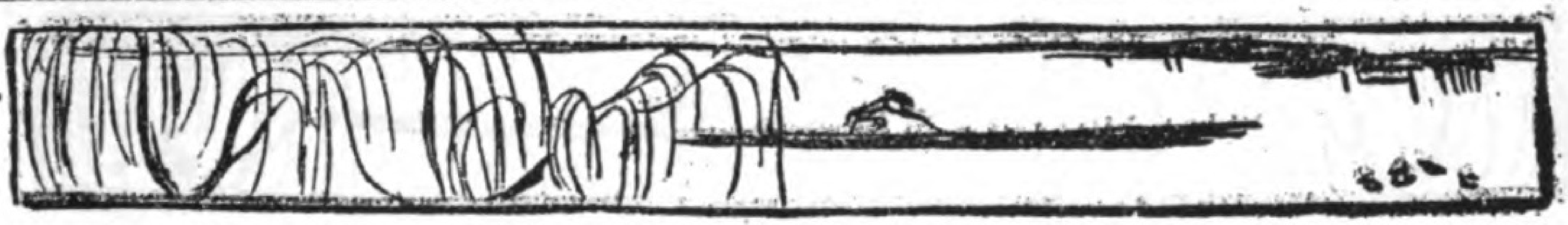
△燈まさに滅せんとするときは其光大なり。

△徒らに光陰を消過するものは重利の債を負ふがごとし。

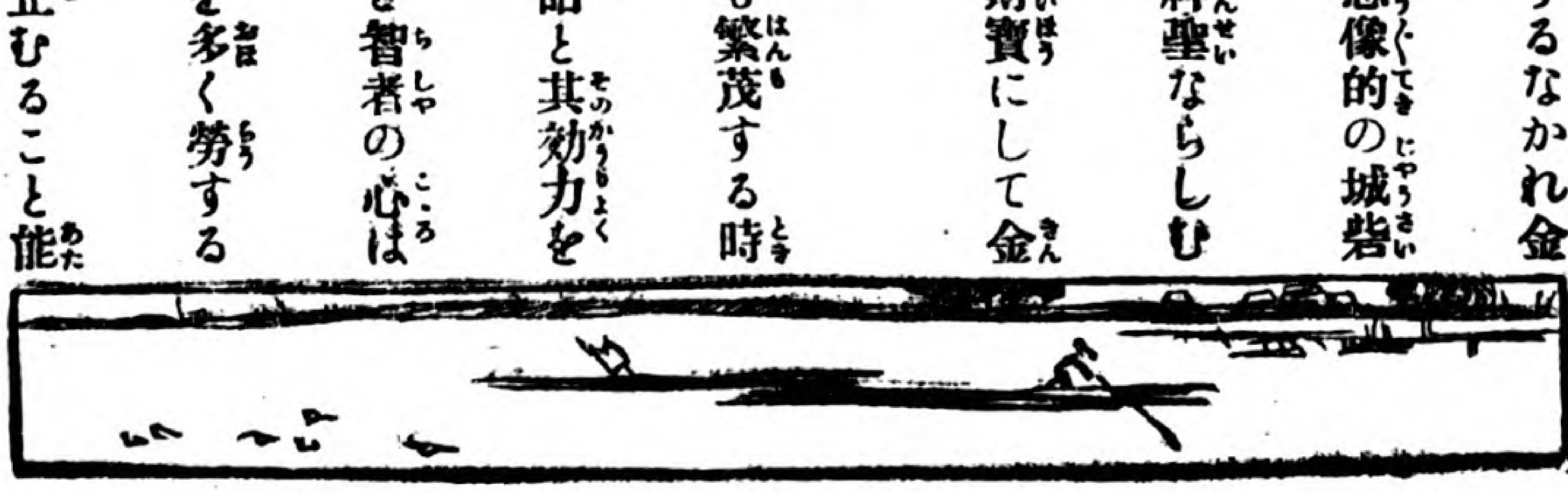
△潮流に隨つて航海を遂げよ。

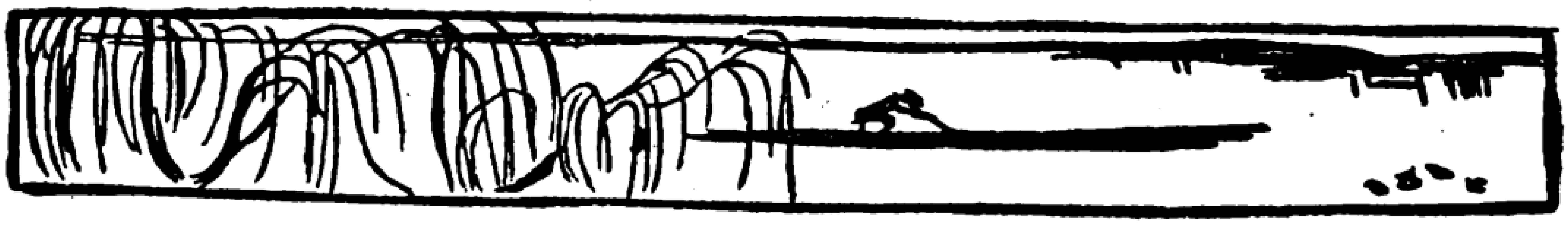
△人が成功を誤るは其方便の乏しきにあらず勉强の乏しきなり。





△汝の秘密は汝の財產なり。
△飲食物を節せよ、然らば汝は健康なるべし。
△人を殺して罰を蒙らざるものは獨り醫師あるのみ。
△最良の書籍は永久不滅なり。
△人は讀書によりて、年代を遡り、古人と時を同じうするを得るなり。
△一書を讀み了らざれば決して他書を讀み起すべからず、一書を讀み了るとも書中の意義を悉く了解せざる中は決して他書を思ふべからず、且つ何事をも學ぶにも全幅の力を用ふべし。
△讀書は該博なる人をつくり、對話は敏捷なる人を作り、筆記は精確なる人をつくる。
△良書は良友のごとし、精撰にして且つ甚だ稀なり、而していよ〳〵精撰すればいよ〳〵快樂を與ふ。
△書籍を濫用すれば、學問を殺す。
△金錢の事を決して輕忽に處辨するなかれ金錢は品行なり。
△財寶は金持に依て築かれたる想像的の城砦なり。
△成功は最も惡むべき罪惡をも神聖ならしむるものなり。
△品行の端正信實なるは一種の財寶にして金錢よりも尊し。
△秘密を守るは大なる德行なり。
△言葉は木の葉のごとし、其最も繁茂する時は菓實少し。
△熱心に發せる時の一語は、談話と其効力を等ふす。
△愚者の心は其口に在り、されど智者の心は心に在り。
△多辯は中虛の招牌なり、言語を多く勞するものは事業に吝嗇なればなり。
△一旦口外せる言語は飛去りて止むること能





はじ。

△空虚の桶は大なる音を發す。

△人間萬事に就て最も緊要に最も珍奇に且つ最も貴重なるものは書籍なり。

△音樂は精神を調和するものなり。

△音樂は蠻夷の心を和らげ、及び巖石を柔らかにし、且つ樫の樹を撓むべき力を有す。

△音樂は凡ての心藝中に於て情慾を感化すること最も大なるものなり。

△音樂は、靈魂の動搖を安んじ得べき唯一の技術なり、天が人間に賜はりたる物品中の最も宏壯快樂なるものなり。

△音樂と戀愛とは精神の兩翼なり。

△表紙を見て直ちに書籍の中容を判ずるは輕卒なり。

△其母によりて其の娘を判斷せよ。

△靜かなる夫は噪がしき妻をつくる。

△思慮ある勇氣にあらざれば價値なし。

△小兒と泥醉者とは本心を語るものなり。

△獨身の時は孔雀のごとく美はしく、婚約の時は獅子のごとく氣強く、而して結婚後は驢馬のごとく愚かなるものは婦人なり。

△流行の變化は產業が富者の虛榮の心に課する一種の租稅なり。

△今日の卵は明日の牝鷄よりもよし。

△吠ゆる犬は滅多に嚙みつかぬものなり。

△戀は眼を以て見るものにあらずして心を以て見るものなり。

△おしやべりは盜賊よりも猶惡じ。

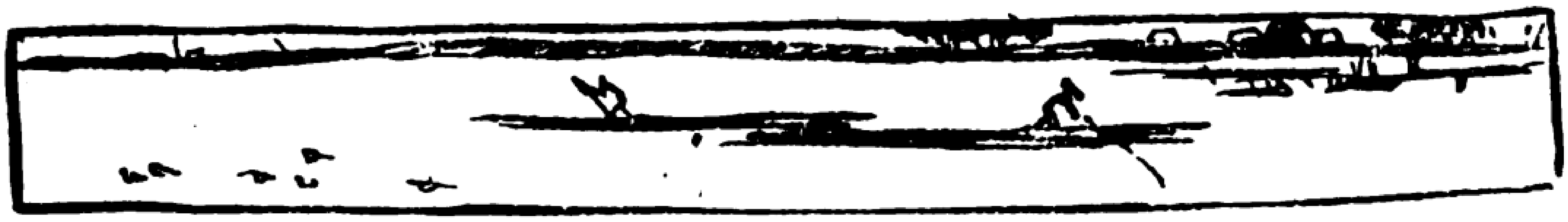
△苦痛は眞の試金石なり。

△銀の鍵は鐵の扉をも開くものなり。

△黃金に富める人は亦心配にも富める人なり。

△才智と貧困と痴鈍と富とは常に相伴ふものなり。

△惡しき負債者は返金を口にしつゝ遂に返す事なし。





物質的に有力なる一婦人を擒にせし私の實驗

翡翠女史

良人が或る會社に聘へられた時に、私はその社長の奥様に挨拶にゆかなければならぬ事になつた。社長の令夫人といふのは噂に聞けば、何でも新橋邊の藝妓であつたが、落籍されてお圍ひとなり、お妾となり遂に某會社の社長の令夫人となつたといふ經歴づきの方である。

同じ初對面でも同等の位置の人とか、或は目下の人とかならば、それ程苦にはならないが、目上の人に初對面にゆく程厭なものはない、況して昔は藝妓といふ奥様、私なんかとは全で趣味や境遇を異にした人なのだから甚麼な話をしてよいかと考へても殆ど目的がつかない、まあ奈何にかなるだろうと思つて私は九段坂上の御邸へと俥を走らせた。

花崗石の門の柱には陶器の表札がかゝつて居る、門を這入ると兩側には松や檜の植込みの緑が滴るやう、玄關口に續いて花崗石が敷きつめて、石は恰ら砥の如く洗足にでもゆかれさうに塵ひとつ落て居ない、內玄關の方から行かうかと思つたが初めてなのだから、本玄關の方で『御免下さい』と云ふと、袴を穿いた書生が出て來る、『奥様は御在宅ですか』と聞くと、丁寧に、『何誰樣ですか』といふから名刺を出すと、それを持つて廊下傳ひに奥の方へ行く、間もなく再び出て來て『何卒こちらへ』といふから私は玄關の傘置に洋傘を置いて、隨いてゆく、片側は庭に面した方で硝子戸の塡まつた廊下をぐる／＼廻はつて、とある一室に通された、室は英國式の西洋間である、硝子戸越しに春の麗らかな庭園の景色が見られる、大きな池もあり、築

山もあり、芝生が青々として、池には丹頂鶴が首長々として居る、片方には温室があり、花壇もある、金網を張つて中には雌雄の孔雀が居る、花壇には牡丹や、薔薇や、西洋の花か千紫萬紅を呈して居る、藁屋根の亭があつてその邊には栗の花が眞盛り、千金の價もあらんといふ、庭石の結構なのが苔の衣を着けて居る、石燈籠の下あたりには菫や蒲公英がちら〳〵として、誠に類ない庭園であります。

室には大理石で圍んだストーブがあつた、其の上には金線の姿鏡、前には一對の花瓶が置いてある、錦張りの揃ひの高椅子、リボン織の窓掛、モザイク式のテーブルや、刺繍の衝立、六枚折の金屏風など善美を盡した應接間であります、私は怩とその結構な椅子に腰掛けて居りますと、書生がお茶を持てくる。それから大分待つて居るが奥樣は出て來られない、來客を待たせて置くのは、主人の權式に係るのだから、苟も某令夫人がそう輕忽な事をしては不可と思つて、奥樣は用もありもしないのに、こんなに人を待たせるのだらうと思ふと、何となく癪に障るが仕方がない、何と云ても自分の夫はこゝの御主人の御家來のやうなものだと思つて諦らめる、もう大概お庭の景色なども見て終つて諦らめて見たが矢張り待ち遠しく、何をして居るのだらう、と癇癪を起したくなる頃、さら〳〵と衣摺れの音がする、パタ〳〵と上靴を引きずる音がする。夫人だなと思つたから居ずまひを直して居ると扉があく。

『お待せ致しました』と云て、私の右手の椅子に寄られる、私はつと椅子から立つて輕く頭を下げて、『初めまして……此度は色々御世話になりまして……』と慇懃な挨拶をすると夫人は首肯くやうに輕く會釋をなさる。

見ると二十七八の美人、流石は百花千芳の數ある中にひとり秀でゝ嬌名類なかりし、解語の花の艶なる容姿、お召縮緬の着物にゴリ〳〵とした黒縮緬の無雙羽織、手には千金を投じたダイヤモンドの燦然と輝く指環を二個までも嵌めて、外には眞珠のやら彫刻のやら

重くて用などは出來ませんよ、と云はないばかり、白魚のやうな指が、黄色く染まるやう、ピカ〳〵と光つて居る。今日、初對面として是でも一張羅を着て來た私の服裝も、この燦たる人の前に出ては、見窄らしくて見られない、私等が身代限りをしたつて、この夫人の指の物だけも買へないのである。

一體恁う云ふ夫人は、自分の弱點を被ふ爲に非常に權式振るもので、この奥方も却々頭が高い、恐らく其美を以て旦那樣さへもお尻に敷かれるのであらう、下眼遣ひに私の髮から裾の方までじろ〳〵と見られる、見絞られるやうな氣がして、身が竦むやうである、私は何か言はうとして、この勢に呑まれて恟々して居たが、急に一轉化させて、何！いくらダイヤモンドが光らうとも素はと言へば九尺二間の長屋に生まれ、左褄とつて、操を金に代へたる匹婦、何もをづ〳〵する事はない、どんな話でも持ちかけてやらうと思つて、

『もつと、早くお伺ひしなければなりませんのに、つひ御無沙汰致しまして……』と口を切ると、

『否、奈何致しまして、御宅は何處ですか』

と鷹揚な物言ひ、そゝ青山ですか、御遠方ですね……電車で……とそのいひ方が如何にも横柄である。

『今日は俥で參りました』といふと、

宿車？辻車？と聞きたいやうな夫人の顔、と思つたのは私の僻目か、私の小紋の着物はガタ〳〵と貧乏震ひに振へさうである。

『でも、此頃は大變に電車が便利だと云ふぢやありませんか、馬車なんかよりは氣輕でいゝから、少し乘て見ろと主人にいはれますが、何だか氣まりが惡くて私などはまだ乘つた事は御座いませんが……』

私はもう口を利くのも厭になつて終つて、餘程歸ろうかしらんと思つたが、何も喧嘩に來たのではなし、こういふ御奉公するのも處世の一つだらう、長いものには捲かれろの例へ、何と云ても孑子が天上して龍になるやうな世の中、鉛でも銅でも鍍金がしてあれば矢張り黄金色には見える、兎も角も持て生れた天性の麗質で幾多の紳士紳商を手玉にとつて其上實業界の覇

王ともいはれる此家の主人の魂を捕虜にして居られる技倆は私等の及ぶところではない、して見れば矢張り崇拜する價値はあるのだ、と思ひ直して、私も一生懸命に御機嫌を取るやうにする。

『本當に結構な御住居で御座いますことかういふ處にお出遊ばしては何日も晴々遊ばすでせうね、本當にお羨ましう御座いますこと』

と充分煽て參らすと、夫人は柳眉晴やかに、

『ホヽヽ、もう古くなつていけないので御座います、



來年あたりはまた建て直すので御座いますよ』

と美しい顔が誇りの光に輝いてそれで話が途切れる、夫人は見ぬふりして私の服裝を見て居られる、實に厭なものである。

あゝ着物の話や流行の話などをしようかと思つたが、情けない事にはそうゆふ事には私の方が不案内であるから仕方がない、丁度私が腰掛てる傍にウイナスの女神像がある。名匠が刻んだ鑿の匂ひのあと、入神の想

がして何ともいへぬ名作である。この主人は大變美術品を愛玩するのだから、見聞學問と云て或はこの夫人も多少は感化を受けて居る事であらう、一つ美術の話でもと思つて、『大變に立派なお作ですこと、こちらでお求めになつたのですか』と云ふと、夫人はその女神像を顧みて、

『是ですか、あなたちつともよかあ御座いませんわ、こんな手の無い、そして眼玉がないのですよ、氣味が惡う御座いますこと、こんな人間が昔は居たのでせうかしら……』

と言はれる、これには聊か呆れざるを得なかつた。私は何となく勝利を得た心地もしたが、また座の白けるので苦しみ始めると、其時奇麗な猫が硝子窓の向ふで、ニヤー――と云ふ夫人はちと一瞥してチユチユと舌打をなさる、これはいゝ招ぎ猫と云て藝者屋とか妾なんかの家では大概猫を飼ふものであるから、この夫人なども猫とは親しい間柄に違ひない、猫の事ならば乾度澤山お話しなさらうと妙案たちまち成る。

『まあ、可愛い猫ですこと、御邸のですか』

と聞くと『ハー御好きですか』と問ひ返へされる、私は少しも好きでない、寧ろ嫌なんだけれども、こゝで嫌ひと云て終ては、折角の話に花が咲かない、嘘も方便とか、『否、大好きで御座いますよ、まあなんて可愛いのでせう……』恁う云ふ時の僞は罪惡にならないさうである。

すると夫人は直ぐ立つて、窓を開けてその猫を連れて來て、御自分の膝の上に抱き上げられる、『まあ、可愛いこと』と私が云ふと、

『ホヽヽそんなにお氣に入りましたか、みいちやん(猫の名)奥樣がお前は別嬪さんだつて、褒めて下さつてよ』と夫人は抱いてる猫をさも可愛ゆくて堪らないと云ふ風に、頬摺りをされる、猫はをとなしく自由にされて居る。

『貴女ね、これでも嫌ひな方が、被來いますとこんな事は出來ないので御座いますよ』と夫人は嬉し相である。

『是でも西洋の種ですつて、何でも米國から買て來たのですよ、これの姉さんが某宮様に貰まれて、これの弟が某の侯爵に行つてますし、皆出世をして居るのですよ』と夫人は却々喋られる、そんな事は疾くの昔に噂で聞いてるが何處までも知らん顔して、さも新らしい事でも耳にするやうに『まあそれは結構で御座いますことね、道理でこの毛色なんかゝ異て居ると思ひました』と感心したやうに云ふものだから、夫人は益々乗氣になつて、『それは、本當に悧巧なんですよ、もうちやんと私の足音なんかもよく覺えて、今も私がこゝに居りますのを見つけて來て、あんなに窓の外で鳴くのですよ、あんまり悧巧で困つて終ふのですよ、鰹魚節を削る音


茶の湯

がしますと、どんな遠くに居ても飛んで來てニャオ〳〵と甘まへるのですよ」

當然の事魚の匂ひや鰹節かく音位は、何處の猫だつて知てると思つたが、

「左様で御座いますか、怜悧な猫ですことね……本當に……」と私が合槌を打つ、

「そして貴女、先逹赤ん坊を產んだのですよ、それは難產でうん〳〵呻吟て苦しがつて居りましたから、私は奈何しようかと氣が氣でなかつたけれど、鹽竈様のお札を飮ませましたらそれで漸く助かりましてね」

畜生に神樣のお札を飮ませるとは古今未曾有である

「それから、赤の御飯を焚いて祝て遣りましたの」

夫人は却々猫に趣味を持て居られる、膝の上の猫は撫でられながらゴロ〳〵云てる。

「あなた、ゴロ〳〵云て居ります時は乾度嬉しい時なのですよ、怒る時は耳を立てますの」

「そうですかね、本當に良い猫ですこと」

「そんなにお好きなら、赤ちやんの方を御目に懸けませうか」と夫人は云て呼鈴を壓されると、小間使が、何か御用と云て來た。

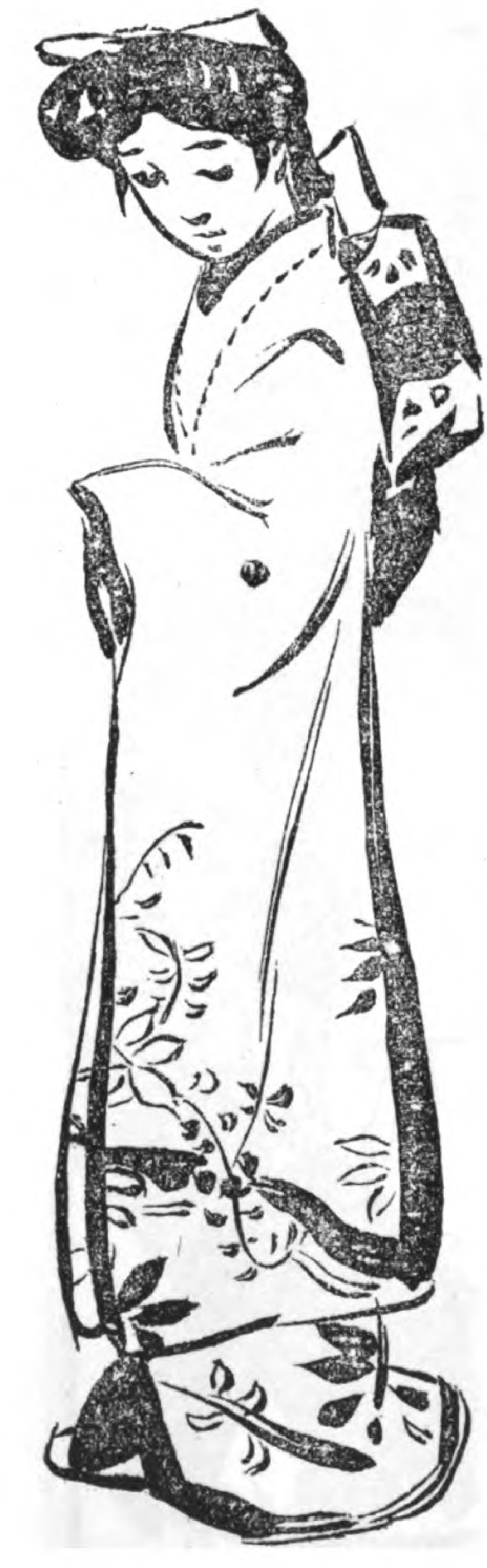
「あの、赤坊さんを三人持てお出で」

と被仰ると間もなく、小間使が母親と同じ毛色の三疋の少さい猫を抱いて來た、下へ下ろすとニアヤ〳〵と可愛い聲を出して、三疋の小猫が縺れ合ひながら、椅子の脚や窓掛の房へ戯れつく、成程可愛いが私はどうしても抱く氣になれぬ。

「まあ、あなた一つ抱いて御覽なさい、それは可愛いのですよ」と云て夫人は、その一疋を御自分で抱き上げて私の膝の上に置かれる、何だか厭に暖かい、肉の柔かな芋蟲でも觸るやうに、不氣味である、內心恐る恐るで、脊中を撫でながら、「まあ、をとなしくて可愛ゆ御座いますこと」と厭なのを無理にお追從を云ふと、

「御宅にも居りますの」といはれるから否と答へると、

「それでは、其れを一つ上げませう、そんなにお好きなら持て被入いな、滅多な處へは差上ないのですが、……」と勿體つけて被仰る、是は却て有難迷惑と思つ

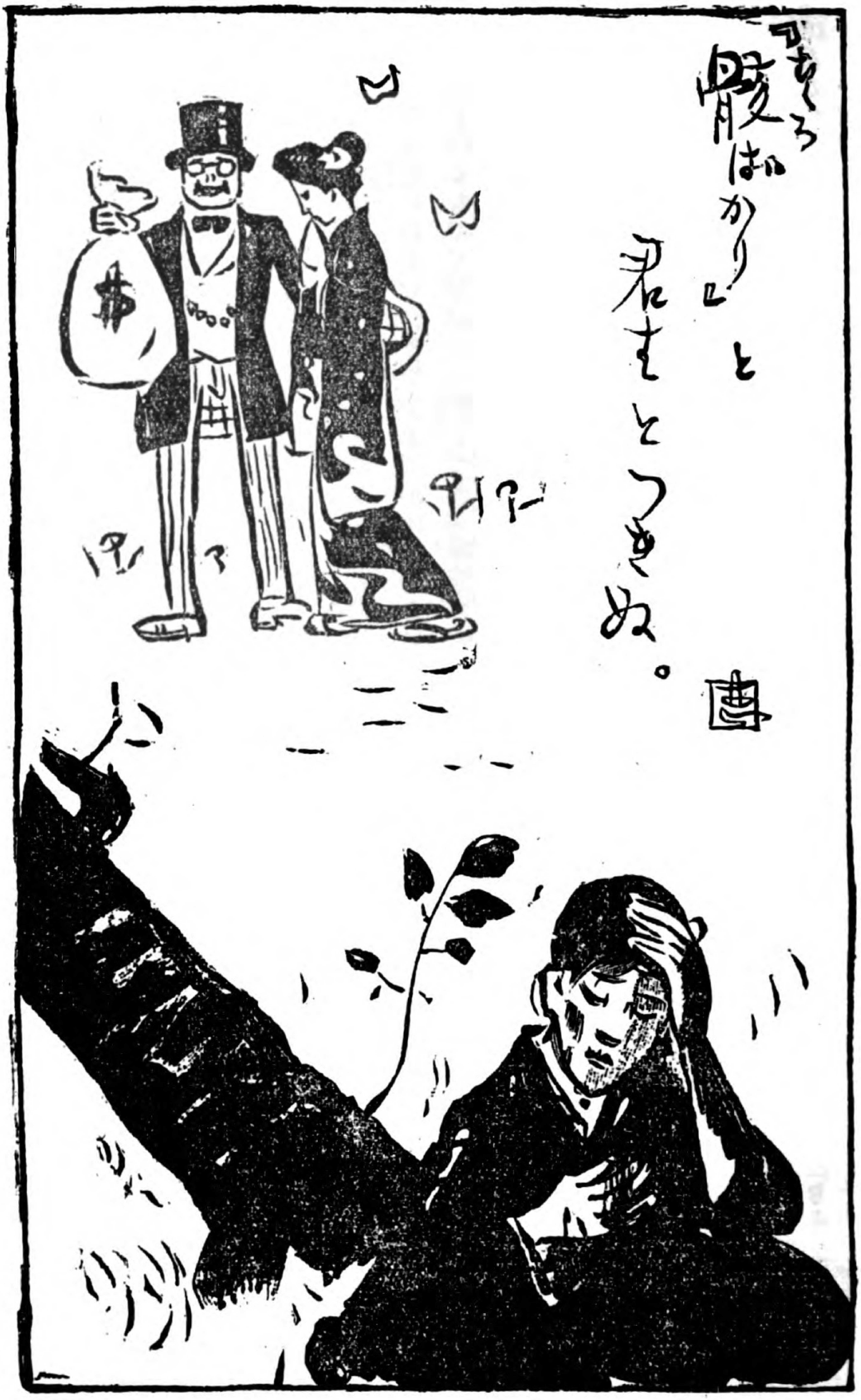


たが、斯うなつては要りませんともいへず、
『でもお氣の毒で御座いますわ、こんな結構な猫を頂いては……』と我ながら憤き出しさうになる。
『否、お好きなのですからあげませう、外にも居りますし……是でも私なんか猫を人様に上げるのは恰で里にでも出すやうに心配するのですが、お宅なんか御小兒さんもなし、其れに皆さんがお好きなのですから幸福ですわ、構ひませんからお俥の上へのせて持て被入つて下さい』と夫人は餘程私を待遇する意でいはれるお氣の毒ですの一點張も出來ず遂に猫を貰ふ事にしましたが、恁うなると話の糸口が明いて色々な談話に時間を移しました。

はしなくもこの猫が情交を結ぶ伴侶となつて、下役の家などへは來る事もない權式の高い夫人が、猫は如何しましたかと云て度々私の家を訪問て下さる、小人は使へ難くして歡ばせ安しとか、猫を褒めて上げたのが御意に叶ふて其後は大變私を贔負にされて、友達のやうに親しくなりました。

で私は思ひました、これはつまり先きの人の趣味に投じたのが交際を結ぶ誼となつたのであると。


幸運に
囚はれた
る令嬢の
夕方
散歩


『骸ばかり』と君をとつぎぬ。

如何にせば生活の疲勞が癒さるゝか

文學士　須田正雄

▲恐ろしい生活の迫害

文明社會の生活は强盜に追かけられるよりも恐ろしいものだとは私の發明した言葉であるが何故かといふのに文明といふものゝ裏面には驚くべき『疲勞』が潜んで居る、これは米國のある哲學者も言つた事であるが、近來我邦にも此生活『疲勞』が侵入して來て、貧しい者は體力の方に於て、富める人は腦力の方に於てとも〴〵に精根を枯して、一種の文明病とも云ふべき神經衰弱に取つかれる人が年々に增加するのは爭はれぬ事實である、唯神經衰弱といつては何でもないやうであるがこの衰弱の出どころをよく〳〵考へて見るとつまり生存競爭、即ち生活上の戰爭から來るのである、十四五年前なら一ヶ月三十圓もあれば、夫婦に子供二人位で樂々と暮せたのが今日では其倍額の收入があつても却々樂どころではない、而も一般の人が段段虛榮になるばかりで、自分獨り質素にしやうと思つても周圍が許さないから、ツイ身分以上の費を要する事にある、すると勢ひ收入が多くなくてはならんので主人の責任は、益々重くなると共に、如何にして生活すべきやといふ問題の外に何等の餘裕も無くなつて來るさて然らば、この虛榮といふのは、何であるかといふのに、これが又必竟生存競爭の必要から來た心理上の作用である恐しいものである、何故に人は虛榮に走るか今日の世の中で虛榮をつとめなくては僅か一分間でも文明社會に仲間入して行く事が出來ないからである、この生存上の仲間に入らんが爲めに人々は恰も日夜强盜に追かけられつゝあるやうな氣持をして汗だくだくさせて居るのである何と恐ろしい世の中ではないか此傾向は單り男子に限らない、段々と今日は婦人の間にも影響して、其結果嫁入を急ぐ、職にありつかうと

する、獨身論を唱へる、職業を與へよと絶叫するやうな事になつたのであるが、是等は皆な文明に呪はれたる世の態で、私は之を稱して强盗に追かけられる生活といひたいのであります。

▲精力主義の害毒

文明生活は又重箱的生活である、萬事切詰めて行らなければならぬ上に、無趣味で殺風景で、身心共に少しも餘裕がないからである。それに近來向上主義とか奮闘生活とか云つて、無暗に奮勉努力の風を鼓吹する傾きがある、尤もそれは何も好んで無暗に鼓吹するのではないが、鼓吹しなければ今日にはまつて行く事が出來ないから仕方なしに鼓吹するのである其爲に人はますく過度の精神疲勞に陷つて、勿論人と生れたからには徒食して過さるべきものではない、如何に高貴な身分でも不具でない以上は相當の職責を盡すのが必然の義務であるが、併し人間の體力や精力には自ら限りがある、此有限の身心に鞭をあて、過分の勤勞を强いやうとするのは、恰も痩馬に重荷を負はせて峻坂を走らせるやうなもので、遂には倒れざるを得ない、而も文明の迫害は幾多の青年男女を驅つて早くも生存競爭の渦中に立たしめるので、兄さんは過度の勉學の爲に腦を傷め、弟は生活の爲に精根を消耗し、何れも精力濫用の結果、早熟早老の人となつて、不健全な一生を送る事になるのである。

▲人の疲勞する譯

さて然らばその追かけられ的生活の結果として腦力を過勞するの狀態はドンな風であるかといふに、最初身體が何となく疲れ易くなると共に、精神にも何となく氣力がなくなつて、仕事をするのがいやになる讀書をしても自分は一生懸命でやる積りでも、二時間か三時間する中に段々意味が解らなくなつて了ふ、其他演說を聽いても芝居を見ても其通りで、初めは面白いと思つても仕舞になるほど感じが淡くなつて、寧ろ厭氣がさして來る、自分は大いにやる氣で居ても身體がゆ

るさぬ丁度これは夢に人殺しに追かけられつゝ足が萎れて一歩も進めぬ樣な格好である、つまり之は腦の活力が生理的に疲れた結果である、この疲勞の研究に就いては今日醫科大學の實驗によると、人が泣いたり怒つたり心配したりして、精神上に刺戟を受けると、神經の細胞が次第に萎縮する、例へば雀のやうな動物でも朝起きたばかりのゝを捕つて解剖して見ると、其細胞は丁度熟した菓物のやうに充分張詰めて居るが、終日働いた雀を夕方檢査すると、それが小さくなつて殆んど三分の一位しかない、又犬や猫の如きでも充分營養の良いのを捉へて、少しも刺戟を與へない中に殺して試驗をすると、其腦髓機關は圓滿だが、それを突ついたり嚇かしたりして、いろ／＼心配させた後に解剖して見ると、原形質は全く凋れ切つて居るといふ事が發見された。そこで人間の疲勞といふのも矢張り腦を働かすところの物質が減つて、それを補ふことが出來ないから生じて來るものと云ふ事がわかる。

▲餘裕ある勤勞

彼の厭世とか煩悶とかいふやうな悲觀的の傾向に陷るのも畢竟この人殺しや强盜に追かけられつゝある人人の過勞に基因するので、精神を使つて全く其氣力が回復しない中に、後から／＼と心勞を重ねる上に、營養が惡かつたり運動が不足だつたりするから、それが嵩じて神經衰弱者となるのである、殊に婦人は氣が鋭いから一層其影響人殺しに追かけられ的、强盜に追られ的の社會生活の現象を感する程度が速かで、少しの刺戟にも抵抗力が失くなると同時に、矢鱈に物悲しくなつたり、怒りツぽくなつたり氣六ヶ敷くなつたりして、詰らぬ事から家庭の不和を釀すやうな人も少くないが、是等は大抵病的の作用だから先づ第一に氣をかへる工風をせねばならぬ。

其第一歩は繁劇な事務や、あらゆる心配事を放拋つて心身に餘裕を與へねばならんのであるが、併しいくら休養が可いからと云つても、全然何もせずに居ては

却て身體や精神の知覺が鈍つて宜しくないから、矢張り相當の勤勞が必要で、唯だ精力を濫費せぬ程度に於て切上げねばならぬ、ツマリ日常の食物と同じく、少しも食はなければ饑じくなるし食過ぎては食傷するといふ工合だから、何事も中庸を保つのが肝腎である。

▲腦力の經濟法

愉快な生活を送るには先づ腦の經濟法をやらねばならぬ、しかるに一般の人は其方法を誤つて居るやうに思はれる、分けて年若い婦人などは空想やら取越苦勞やらに大半精力を吸取られて、實際役に立つ考慮は少い、自分の力に及ばぬ事を幾度も〳〵繰返して居て結局得る所は無い、明日やれば濟む仕事を無理に夜更して行つて頭を痛めたり、小説に夢中になつて酷く神經を刺戟したり、其他くだらぬ事に腦を浪費して、肝腎の己が職務には一向成績の擧らぬ人達がある、殊に甚だしいのは學生の試驗前で、平常勉强を怠つてゐる故か、試驗前になると俄かにノートや字引と首ッ引で、三日も四日も徹夜して半病人のやうになつた揚句、やつと及第したかと思へば、神經衰弱に罹るといふ有様で、如何に生存競爭の結果とは云へ、之は又餘りに情ない行方である。そこで簡便な腦の經濟法は、第一にクヨ〳〵取越苦勞をせぬ事、空想に走らぬ事、物事に凝りすぎぬこと、勤務を規則正しくすると、疲れたら休む事、睡眠を充分にすること等である。

▲氣を散らすが一番

それから勉强や勤勞に就て今一つ誤つて居る事がある、例へば終日讀書をして疲れたから運動をしやうなど云つて、盛んに身體を動かす人があるが之は大變な間違で、精神的に疲れたものが身體を動かして治る道理がない、いくら運動をしても精神を司さどる所は腦にあるのだから、氣の衰へた時は靜かに休ませねばならぬ、それを取違へて無暗に身體を動かすのは、疲れた心を一層疲らすことになるのである。殊に下宿屋などで餘り營養の良くない物を食べてゐる人達は猶更無

理な運動を避けねばならぬ。

或數學家の話を聞くに、非常に六ケ敷い問題に出會はして、どうしても解決のつかぬ時は一旦それを斷念して、眠るか又は別な方へ氣を轉ずる、然うしないと腦が疲れて考へれば考へるほど解らなくなるから、一先づ問題を忘却れて、心を恢復した後で考へると案外に容易く出來る事があると云ふ、成程これは心機を轉ずるの秘訣で、我々が心配を重ねて氣がクサ〳〵した時は、いつ迄も一ツ事を思詰めて居るよりも、寧ろ靜に散歩でもして他の方面に心を紛らす方が得策です。

▲眞面目で而も暢氣なれ

人の生活は飽まで嚴格で規律正しくなければならぬが、併しあまり眞面目過やうとする爲に却て不眞面目に陷ることがある、學者や坊さんに往々僞善家の出るのは、ツマリ極端に自己を束縛した反動に外ならぬ、元來物に伸縮のあるのは世間の常道で、如何なる人でも、さう年が年中張りづめてばかり居られるものではない、生きた人間を何處までも杓子定規で縛らうとしたり、血のある身體を箱詰にして器械的に働かせやうとするのは、恰度沸立つてる蒸氣汽鑵の安全孔を塞ぐ樣なもので、自ら生命を枯らさなければ則ち破裂するの外はない、ゆゑに人は大に眞面目であると共に、又一方には滑稽の趣味を解さねばならぬ、言換るとモ少し暢氣に構へて樂天的の思想を養成する必要があるのです。ところが現今の人は餘りに切詰主義で、年中忙がしい忙がしいと云ひ續けて、身體にも精神にも少しも餘裕の無いものが多い。

▲悠々として活動せよ

貴賤に論なく勤勞は當然の義務だから、閑なのよりは忙がしい方が結構だけれど、さりとて始終血眼になつて、火事場に立つてゐるやうな心持では人生は餘りに殺風景である、彼の戰陣中に在つて詩歌を詠ずるほどの餘裕はなくとも、古人の所謂忙中閑ありで、少しは悠々として落着いた所がなければならぬ。要するに

正月は正月らしく、花見時には花見らしい氣になつて英氣を養ふ必要があるので、兎角物事にコセ〱するのが一番身の毒である。斯う云つたら、此セチ辛い世の中にさう暢氣に構へてゐられるものかと思ふ者もあるか知らぬが、そんな人は既に生存競爭の迫害に打負けて所謂精神過勞に陷つたので、結局心身の休養が足らぬからである。ツマリ人生の幸福は愉快に働いて愉快に暮すにあるので『月おぼろ藁屋にこもる笑ひ聲』かういふ心持で居れば、富貴も羨むに足らず、貧賤も亦た憂ふるに及ばずで、決して煩悶や悲觀に囚はれることはない。尤もいつでも樂しくて心配や苦勞の少しも無い人は殆んどない、寧ろあるのが當然だが、唯だそれに打克つだけの勇氣がなければならぬ、其勇氣の根源は即ち身體の健康と心の活力に外ならぬ。

▲運命と心機一轉

從來婦人は纖弱いもので、押されたら押されたなり倒されたら倒れたなりで運命に服從して居るのが、一の美德のやうに思はれて居たが、將來の世に處するにはそんな意氣地の無いことでは仕方がない、寧ろ自ら進んで運命を開拓すべきである、さうするには如何なる困難に遭遇しても驚かぬだけの餘裕、即ち心機一轉の法を心得なければならぬ。

一體人の精神を最も疲勞せしむるものは單調無味の生活で、どんな根氣の強い人でも年中同じ仕事や同じことのみ見聞して居ては、さつぱり興味がないばかりでなく、仕舞には倦氣がさして來る、倦氣のさすといふのは既に腦の疲れた證據である、それへ變化を好むのは普通一般の人情で、タトエば一年の中にも春夏秋冬とそれ〱季候の移りゆくのは、天が我々の心目を飽かしめない爲の用意に外ならぬ、若し三百六十五日同じやうな氣候が續いたならば、人は恐らく其單調に倦殺されて了ふに相違ない、又食物でもさうである鯛が旨いからといつて始終そればかり喰べてゐては、遂には香の物よりも不味くなる、心の糧もそれと同じ譯で、入代り差代りいろ〱な變化を與へて新陳代謝を

圖らぬと、腦は段々疲れて感覺が鈍つて仕舞ふ。殊に天は快樂の永續を許さない、いかに面白い事でも三日とつゞけばモウ厭になる、そこで人が偶々逆境に處するのも、精神を沈滯せしめぬ新陳代謝の一法と見做せば、左程憂ふべきものではない。

▲活路を開く鍵

新奇なものを求めるのは人情の常とは申せ、唯だ徒に變化を欲するのは危險である、一定の主義と方針とがあつて、自分の見聞を博めると共に生活の單調を補ふ爲に、變た事物に接するのは結構であるが、然し飄飄として所定めぬ浮萍のやうな行動は斷じて宜しくない、此種の人に限つて、移氣で節操がなくて飽ッぽい所謂ぐうたら者に相違ない。昔噺に釣綸を垂るゝ甲乙の二人があつて、甲は一所に凝と構へながら、急がず騒がず悠々として居るに反し、乙は一寸綸を投げては彼方へ行き此方へ移り、終日あせり廻つたが一尾も釣らぬので、あゝ此河には魚が居ないと云つて立去つたとの事であるが、餘り變化を好む人には得て斯ういふ失敗が有りがちなものである。私の申す變化とは、心機一轉の手段として心を賑かにせよといふので、衰へた氣力を恢復するには先づ執着心を去らねばならぬ。一つ事をいつまでもクヨ／＼案じて落着かぬ人は、今の急性な釣人のやうに結局得るところがない。

そこで煩悶の結果腦に疲勞を來したり、心配の爲に頭が痛くなつたりする人は、旅行か轉地をして心を紛らすに如くはないが、婦人は容易に家を空けられぬから、成べく快濶な人と交際するか繪畫や音樂によつて娯みを得るか、然もなければ寄席芝居小說なども效があるけれど、過度に神經を刺戟するのは却て宜しくない、又若い婦人なら結婚によつて心機を轉ずるのも一法であるが、一番良いのは人格の高い坊さんや先生に接して、其談話を聞くことである、ツマリ心機一轉の要義は、悲運に處して四通八達の活路を開くべき鍵を得るにあるので、文明生活に呪はれた人達は、是非ともこの心身使用の經濟法を研究して、過勞に陷らぬやうにせねばならぬ。

御婚儀の御服装

今度御成婚の御儀式につき御新調相成りたる常宮殿下の御服は、賢所大前に於て御擧行あらせらるゝ内親王の御着用として定まれる御正装にして、其色彩地質等の華麗なる、誠に目も眩するばかりなりといふ、左に漏れ承はる儘を拜記せんに、

△御髪＝は御童に御長髢を用ゐさせられ、御髪上（寶冠の如きもの）を附けさせ給ふ。

△御内衣＝御召物の内、先づ御内衣より申さんに、御下衣は白羽二重の御振袖、濃縦綾の御打衣、其上に濃色精巧の御長袴（精巧は博多地の稍や硬きもの、濃色は海老茶の濃きもの）を用ひ、又其上に唐織の濃色堅紋の幸菱（幸菱とは花菱を八ッ合せたもの）の御單衣を召させらる、御單衣は袿と同仕立の物にて、綾織濃色其上に雪の下襲（表白の唐織裏紅絹の羽二重）の五ッ衣を召させ給ふ。

△御表衣＝は紅梅襲、（紅梅襲とは紅梅地に密に同じ紅梅の浮織ある美しき地の上に白梅の折枝、枝の形二三寸位のものあり）其上に着けさせらるゝ御唐衣は、萠黄地に緻密なる龜甲の黄の浮紋ある上に俗に木瓜と云ふを緋の浮紋にて織出せるもの。

△御裳＝は白唐織地に白の三重菱の織模樣ありて、御裾三四尺を引き、桐竹鳳凰の摺模樣あるもの、唐織は經練絲、緯撚生絲にて織りしものなり。

△御帶＝は緋若くは白羽二重（幅三寸位）の御品。

△御履＝は白地唐織に花霰の細かく密なる模樣あり、御履下は白羽二重なり、御手には檜扇を持たせ給ふ斯て御結婚の御式典滯りなく終らせらるゝや、直ちに更衣の御間に入らせられ、御父母兩陛下に謁見御禮を申上げられ其際の御服は小袿單衣、緋精巧の御切袴なれば、御大禮装の濃艶華麗を極め、威儀殿かなるに比して、稍や瀟洒清楚とも申すべき御装ひなりとぞ。

△夜會＝の御服装は御洋装の大禮服なるは勿論、金剛石眞珠等をちりばめたる頸環、腕環の光まばゆき御飾りなりとぞ。



女詩人の神輿

與謝野晶子

◎一時間に三十首

父が非常な書物好きで、歌文の書は大概藏してあつた故、小さい時から好んで讀み耽りました。兄も弟もあつてそれ〴〵學問に費用も嵩みますし、私一人が犧牲になればと思つて、學校は疾くやめましたから、亂讀に、それでも枕草紙、伊勢物語などを初め、歌文の書は一通り讀んで、源氏物語も皆讀み終りました。それが十三四歳の時です。まあ考へて見ればよく讀んだもの。ですが日本の語を日本の文字で書いてあるものを、然う難解しがる譯もありません。それを今は女子大學邊りで大層難解しいものにして習ふさうで、それも語の説明だけで趣味の上から教へて貰ふのでないといふのは、まあ何をしてゐるのかと思はれる位ですね。さて其間に「後選集」か「拾遺集」かを讀んだ中に何中納言とかいふ女房の歌――何でも雪の降る日に、松の枝に鳥を付けてやるに就いての歌でしたが、それが如何にも拙いのです。まあ這麼歌でも女だといふ廉で取られてゐるのか知らん。最う少し善い歌が出來さうなもの、と思つて、その晩――十三歳か十四歳の折です――寢しなに、源氏五十四帖の、その一帖毎の心を一首にして見た處、一時間ばかりにそれでも三十首ほど作りました。これが初めて歌を詠んだので、これなら自分も歌が作れるだらうかなどと思ひました。

けれども何も歌を詠まうとは思つてをりません。唯第一流の讀者になるが望みでした。その頃鷗外さんの「即興詩人」が雜誌に出てをつたのを、お友達は皆分らない中に、私一人分つて面白く讀みました。で、第一流の讀者になるが其頃の唯一の望でした。

◎歌會を脱した理由

讀書といつても店が忙がしいので、私の讀書は毎時帳場格子の中に限つてゐました。その他は床の中、十時頃から十二時まで——十二時になると燈火が消えますから、其二時間が私のための生命です。

その中に堺（私の鄕里和泉の）誰彼で催ふしてゐた歌の會に勸められて入りましたが、面白くないので脫けました。「何故」かとお尋ねなさつた方に、「彼麽會へ入つてゐて、將來私が名を成した時に恥かしいから」と心にも無い大言を吐きました。其頃とても何の詩人で名を揚げようなどとは少しも思つては居りません。

その內に又新詩社の仲間にならないかといふお勸めを受けて、何となしに入つて了ひ、漸々深く指を染めて、つひ東京へ出て來る事になり、今日に至つてをります。出京したのは二十二の折でした。

◎男の心持になつて詠む

けれども詠む以上は、古い歌集の女流の歌が、ひどく男子のより見劣りのするに付けても、女子は一般に非常に努力せねばならぬと思ひ、又女子は女子獨得の所、男子の言ひ得ぬ所を詠みたいものと、これだけの覺悟は致してをりました。「毒草」までの私の歌は、一圖に女子の特色をと、それはかりで作つてをりました。

その後は又、兎も角も是れだけ努力して來た上は、既う女子といふ立場のみでなくとも宜からうと思ひ、男になつたり女になつたりして詠んでをります。「元朝や長安に似る大道に遣羽子したる袖とらへけり」。これなどを女が這麽事をといふ非難も受けましたが、私の心では其の時は男の心持になつて詠んでをるのです。

◎家事の煩ひと神興

子供が四人で纏はりますので、ほと〳〵此頃は興に入る事がありません。殊に昨年孖が生れて、二人でお乳を飮みますので、夜も十分眠られず、それ故頭腦が惡いからでもありませう。一旦興に入ると、最う何か用事を言はれても上の空で返事してゐるやうな有樣。そして何も彼も嬉しくて〳〵、そして何麽用事でも少しも苦にならずに致します。心には恁う羽でも生えて、ふわ〳〵と舞うてゐるやうです。恁ういふ心境が五六

日續くと、やがて又醒めて了ひます。けれども醒める頃までにはまあ歌の百位は出來てをり、其中に三十位は自分ても善いと思ふものがあります。

然しこれも不意に天來するのではありません。苦しんで〲考へて、それを二三日してゐる内に興に入つて參るのです。入つて了へば既う子供も何も少しも邪魔にはなりませんが、孖の生れてからは、その苦心の二三日をするのみで、興の來ない内にいろ〲の累ひに中絕させられて了ひます。昨年の五月頃以後這麼狀態です。子供が最う少し大きくなつたらば、又試みる心算で居ります。

◎苦しきを樂しき追懷

何事も見た時感じた時即座に歌になるものではなく又强ひてすれば却つていけません。後に追懷となつた時歌になるのです。それに苦しかつた事が却つて深き追懷になるものです。先年赤城山に遊び雨の中を坊やを背負して登つたので、隨分苦しうございました。けれど其れが大變追懷の感が深くて、又しても赤城山の歌を作るのでございます。夏の事で、杜鵑が啼いて百合が澤山咲き滿ちて……。箱根へ參つた時は何うした事か、少しも面白くなく、一向追懷がございません。

私の嗜好は裁縫です。坐つて衣服を縫ふ事が何より〲好きなのです。裁縫が忙がしいと仰有る奥樣方は、ほんとに美しいのでございます。これも子供の纏るので爲て居られません。兎角現實に累はされる事は免れませんね。苦痛と申せば苦吟あつて興の來ないのも無論さうですが、又作るにでも隨分一首の歌に一枚の紙を眞黑にする事もあります。苦心といへば和歌などは徹頭徹尾苦心です。



我が開拓せる一方面

岡田八千代



△觀劇は通學中より

觀劇は幼い時から致しました。麹町の富士見小學校に通學中も、よく其の歸途に女演劇——三崎座などへ參りました。尤も母が先に參つて居るのです。分らない方はよく「小山内（實家の姓）さんは度々演劇へゆく！」などと言つて居られたやうでした。兄（小山内薫氏）にも伴れられて參りました。兄の中學時代……も參りましたが、高等學校時代に兄が中絶したので私も遠ざかり、その後は又參りました。

觀て歸つてはよく出任せの惡口を書いて居りましたが、事そ書いて見たら可からうなどと兄が申しましたが、別に其麼事もしませんでした。

△始めて劇評を書く

小石川の家に居つた頃、根津の劇場へ參つて歸つてから獨りで評を書いて見た。恰ど半紙一枚。今日まで誰にも見せずにあります。其後、中洲の眞砂座で、八百藏の浮世清玄を見て、其の批評を書いて、それが始めて雜誌「歌舞伎」へ載りました。確かまだ學校——今市ヶ谷にある成女學校、元は番町でした——に居つた時です。六七年前、私の二十位の時でした。

芹影女史を私とは初めは誰も知りません。家の人にさへ知らせません。兄が三木竹二さんの方へ廻したばかりでした。ですから煩さい蔭口や非難は少しも受けず、私と知れた頃には餘程世間の方が面白いなどと仰有つてからでしたので、もう煩さい口も聞えませんでした。

小説は十九歳の時に初めて短篇を試みました。此方では惡口を言はれました。と言つて迫害的の煩さい事ではないので、唯「女の作として餘り殘酷に過ぎる。

惨酷だ！」といふやうな事です。劇評の方は其麽事もなく、至つて無事平坦で、つまりは幼少の頃から觀劇を屢々して居つた爲に書くやうになつたのです。

△私の觀劇の態度

初めは唯夢中になつて觀て居つて、感じた儘を言つてゐました。一度伊井と河合の女夫波を觀て、伊井を非常に讃めましたら、同じ「歌舞伎」で三木さんが、「之を讃めるものは、唯自分の感じのみで觀てゐる人で、畢竟好嫌をいふだけで、眞正の批評ではない」と書かれました。成程と思つて、それからは感ずることは感じながらも、一面にそれが劇術として何うかと考へながら觀てをります。

かういふ態度で觀てゐると、批評的の興味も加はつて、よほど興味が複雜にはなりますが、その代り唯自分の感情に任せて、醉つて夢中になつて觀てゐる方ほどに、其蠱に魅されて了ふ事は却々出來なくなります。善し不善ですね。娯樂のための觀劇ならば、何でも自分の興味次第に醉つて居らつしやる方が面白いでせう。

△袖の中で書く苦心

不思議な事が一つございます。觀てゐて非常に面白かつた處は、歸つてから考へて見、書かうと思つて見ると、其處が一番惡い處に必となります。まさか俳優が塲當りをやつたのに瞞されて、それを後から氣付くのとは自分ながら思ひません。それならば何故でせうか自分にも分らないのです。

以前は觀ながら一寸々々心覺えを書留めて見ました。けれども男の方と違つて袂の中で書かねばならず、書くに氣が奪られて却つて印象を淺くしますから、其後は觀て處々を記憶するだけにしました。相應拙なのが交つてゐても、大體は觀てゐるのは矢張面白うございます。一番面倒は書く事で、一番愉快は思ふやうに書けた時です。

△踊と女の姿勢

踊の素地のある俳優と無い俳優——新俳優連には無いのが澤山あります——とは、言ふまでもなく身體の

動止が違ひます。陰で合方の三味線を弾いて居つても、踊の出來ない者はそれに齟齬つて了つて、觀てゐて不快な様に、何でも逆に〳〵と行くやうになつて了ひます。多少踊とか舞とかを稽古なさつた女學生は、逆にならぬやう手順よく身體を取廻しますが、さうない人は、一見して身體の姿様動止が不束に見えます。恰ど茶の湯のお稽古のある方と無い方とで、茶席の擧措の優劣が目に立つと同じ事です。



俳優に一度出會ひ二度出會ひして、段々知合になると、自然其の人の其役に對する考を聞くこともあります。聴いて見れば、又成程さういふ考で如彼したのかと首肯く事もあつて、前に思つた程の非難をしない事にもなります。けれど其れを聴いても未自分は然うぢやないと思へば矢張思ひ切つて其通り批評致します。格別あの俳優は知つてゐるから、非難を控へるといふやうな依怙贔負な事は致しません。

御婚儀の御調度

御成婚の御調度として宮內省調度局より高輪御殿に運び入れられたる御調度の內貴重なる御物として洩れ承はれるは、

●御簞笥御長棹＝御簞笥も御長棹も其數の多き素より數へ盡し難けれど、中に就て金高蒔繪のもの各々二對あり、一は黑塗地に陰陽の十六瓣菊花の御紋ちらし、一は小葵唐烏菊の折枝の金高蒔繪あるものにて、こは御裝束簞笥と申上るよし、此御品は抽斗の錠前金具に十六花瓣の透し彫あり、抽斗の底は源氏格子に透しありて、下より香を焚きしめたる古風の拵へ、目覺むるばかり、美術の技工を盡したる御品なりとぞ。

●御化粧道具＝御化粧道具は鬢臺、鏡臺、鼻紙臺、湯桶等御所風のもの一式、是れは蒔繪御紋散しにて、總て古式に據りて御調製相成りたるなり、別に洋風御化粧道具の備へあるは申す迄もなし大いなる御姿見、御洗面器などは總て木地製の物を用ゐらる三曲、香、點茶、挿花それ〴〵の御器物は申すも更なり碁盤、將棋、雙六の類に至る迄御用意あり、御食器の如きも和洋兩樣の式を備へて總て御紋散しなり。

●夜の御物＝合巹の御式に用ひさせられし御品は純白と純緋の緞子なるが御平常用は白縮緬に竹田宮殿下のは淺黄竪枠の模樣、常宮殿下のは緋の竪枠模樣ある御品なりと。

●御洋服＝御洋服は種類極めて多く御調製あらせられたり御洋裝の際用ひ給ふべき御裝飾の寶玉は金剛石、眞珠、ルビーなど其重なるものなるよし。

●御屏風＝御屏風、御掛軸、御額の類は和洋とも當代の名家に揮毫の御用仰付けられしやにて圖案は芽出度き花鳥の類の外に春秋稼穡の事に關せるもの亦た少からずとぞ、御思召のほど畏し、緻密なるもの雄豪なるもの取り〳〵の畫の美は發揮せられて御兩柱の御行末永う倶に樂ませ給ふ所なるべし。



奥様訪問の失敗

金盞花

此頃は一體にまあ、何家の夫人でもお如才無く。私共が上りましても誠に居心地が佳い、とまあ申上げるのでございますが、夫れでもまだ却々は、上つて居りましても何だか始終モジ〳〵して居て、落付かれないやうな方も多うございますね。先づお伺ひを致しますお女中にお取次ぎを頼んでから約十分間程は待されますね、其間にお廣いお宅ならば靜かでお話聲も聞えませんが、少しお手狹まな所では、お女中とコソ〳〵何かお相談？ 豈夫に然うでも御座いますまいが、何か仰在つて被居るお聲等が聞えて居りますね、之が又まことに氣持の好くないもので、さて彌々お座敷へとご内命が下るとお女中が恭々しくお上り遊ばせ、と手を突く。又中には那麼に丁寧で無いのも有りますが、大抵このごろの女中は丁寧なやうに思はれますね。此方も謹しんで、穿物なぞも笑はれないやうに整然と揃えて脱いで、靜々とお座敷へ通ります。お座敷には何の飾もない、床の間の掛物、之は規則丈にまあ何か懸けて有る、で花も大抵のお宅では時節々々に合して活けてございます。床の間に置物等には種々ございますが、鎧なんかをお飾して有るお宅も御座いますね、詮方が無いから其掛物なり、お花なりを見て居る内に、お女中が冬ならば火鉢を持つて來る、夫れも佐倉を眞の中分に一ツ、深く埋めて、土釜の赤いのを三つ許り、堅炭でも側に置いて有るので、フウ〳〵吹かなければ却却におこりさうも無い、極く冷たさうな、火鉢が來る、でも丁寧にお低頭をして置くと、次にお座布團、綿の堅さうなのが側に押やられる。ソレカラお茶、之も奈

何やら出がらしらしい色のを持つて、お女中が引込むと後は寂然、人が住んで居さうにも無い靜かさ、待たされる事十分餘りにして、彌々夫人のお對面となる。有繫は御夫人、一枝も亂さぬ御髮の樣お化粧も奇麗に出來、御召物さへも御身分よりはちと贅澤過ぎる。其處でご挨拶申上げるのだが、其挨拶が却々難しいので私達には一寸出來難い、時候の事から皆樣のご機嫌も伺はねばならず、御無沙汰のお詫びからイヤハヤ大變でお挨拶もすみますと又一寸物を云ふ機かけが無くなつて妙に照れて了ひます。豈夫にお客に行つて然う此方からベラ〳〵喋舌る事もならず謹しんで控へて居りますと、彼方樣でも御同樣な態度にお出遊ばす、で然うかと思つて迂ッかり油斷でもして居やうものなら、奈何して〳〵低向いて被居る其の御目が却々しつかりもので、キヲ〳〵と私の着物から羽織、帯、帯止め、とちやんと見きわめて羽織の紐は何襦袢の襟は何、髮飾には何をさして居る、で總體何の位の直段でと、ちやんともう直踏迄出來て居るから堪りませんね。私などは着物が無いから人樣の御召を見ても、左程に深く感じもしませんが、澤山あればある方程、慾には際限がなく、後からもう一枚〳〵と欲しくなるのでせう、ですから人の着物なども直段をよく御存じだから堪りません。夫れでこちらも照れ隱しにお茶を飲む、矢張り見掛け通りに、出がらしですから不味いですね、加之に冷たいのだから半分程にして置いて、仕方がないので此方から話題を持ち出す。而うするとやつとの事で二言三言受答へを遊ばす、恰で何だか此方が御機嫌をとりに上つたやうなものでございますよ、ですから奈何しても長くは居られず、あまり無しつけではあるとおもひ乍らもお暇致しませうと云ふ事になつて了ひます、然うするとああお宜敷いぢやアございませんか、と眞の申譯にお引止め下さるのですが何とかそこはよい加減に申して歸りますでお門の外へ出るとホッと息がしたくなりますね、何だか今日一日は御臺所樣へお勤めを致して居たやうでございますよ。さうかとおもへば又少し如才の無い方になりますと却々以てお離

しにはならず、お母様は何をして被居るの、お父様は誰は？〳〵とのべたらにお聞き下さる、貴女このごろお事はなさいますかとか、ソレカラ種々と立ち入つてもう何と御返辞を致して佳いか困つて了うやうな方もございます。そうかうして居る内に其方の御友達でもお見えなさると。一寸御待ち下さい、今私の友達が参りましたから、といふ樣なわけで何だか此方とは別なやうな待遇で、オヤ私はお友達ぢやア無かつたのかし



らゞと今更らしく首を振らなければならなくなつて了ひます。で其お友達がお座敷へいらつしやると、何だか向ふでは悪氣でもありますまいが、其方と計りさも親しさうに話して被居つて、私どもは時折二言三言、何か不滿らない事を伺ふばかし、何時お暇しやう〳〵と思ふ心ばかりで、ねつから居ても面白くはない、處ぢやア無く却て嫌やな氣持がして來ます。向ふの方がもう少し氣を付けて下さるならば、其お親しいお友達とならば何時でもお話はなされるのだから、私の方へこそ話して下されば、此方も照れて了はないでいゝものをと恨めしく思ふのは、仂無いかも知れませんが然う思ひます。中には其旦那樣の御友達の中では、大變に交際家だとか云ふ評判の方が、私共がお目に懸りますと如何云ふものか居心の悪い方がございます、何故ですか、其方は餘り男の方と許りお交際ひ遊ばすせいか、言葉が餘り露骨で、貴女には到底出來ますまいよ、とか何とか仰在るので然うとは知つて居ながらもつい嫌やな顔がしたくなる、一體誰でも女の人は男の方に話す方が話しも面白く氣兼ねも無くつて、佳いので、男の方と親しく交際つて被居るお方は、餘り女の人には友達が少ないやうにお見受けいたします。奈何しても何とか多少名の出て居るお方は、矢張り夫れ丈どこかお上手なところがございますね、上りましても大抵はお優しいか、でなくば極く打解けた御樣子をなさいます、矢張り然う云ふお方は違ふんでございますね、生半可が一番嫌やになりますよ、上りましても時としては玄關迄お迎へ下さいます、見ると直ぐ、まあ好く來た、さあ、と手を取らない許りにして下さいます。でなくばお座敷に通つても、もうちやんと布團も何も出て居て誠に氣持がようございます。却て種々のお茶やお菓子とご大層に並べて下さいましても、肝腎の御主人樣が默つて被居つたり、又は佛頂面をして被居るのよりは、些の番茶一碗でその方が却て結構でございますから心から客を悦ぶと云つた風に、愛想よく、始終莞爾〳〵して居て下さつて、お話も相當になすつて下さるやうな方が寧そ嬉しくつて、終浮々と私見た

いな馬鹿は二時間三時間と時の經つのを忘れて了ふやうになりまして、又歸りましても今日は面白かつたと、後々までも思ひます、客に行つた者が歸つてから氣持の好いのも、惡いのも一ッに先方の御心掛けの奈何にあるだらうと存じます。

小說に依つて學ぶべき事

◎家庭と自然主義　家庭内の小兒の娛樂は昔と今では大層異つて參りました、昔の物で私共の記憶えて居るのは歌留多、お手玉、つむ投などで至つて單純でしたが、近頃では庭球、ピンポンを始め子女の遊戲ばかりでも餘程多くなり複雜になり且つ昔よりはズッと文明的になつて、所謂日本固有の趣味に於て怠っでせうかと思ふ程になりました、然し私共は大の平民主義で、從つて子供の好む遊戲などは差支ない限り自由に遊らせる考へですから、女の子にも自轉車を習はせやうかと思つた位ですが、其代り讀み物の選擇は充分嚴重にします、小說なども幼少の折には絕對に見せません、尤もそれは年齡の程度で多少自分に反省する事が能る時代になれば餘り酷くない物はポツ〳〵讀ませますが、今日の自然主義などいふ小說位實際精神の固まらぬ者に恐ろしい結果を及ぼす物はありません斯かる小說に親しむで墮落した若い婦人の實例も澤山知つて居ります。

◎新婦君と小說　然し大體から申せば妙齡以上に達したなら餘り八釜敷く言はずに却て少し宛は見せて置く方が宜しいかと思ふ實例もムいます、ソレは私自身媒妁して工學士と軍人とへ嫁入らした姉妹の娘がありました、所が姉の方は美人でもあり殊に家内に姑も小姑もない極暢氣な家庭なのに怎言ふものか始終夫婦の間合が惡い、それに反し妹は縹緻も劣り家庭も複雜だが却々良人の機嫌を取る事が旨くて圓滿に暮してゐる、然るに此妹の方は一本調子の姉とは違つて幼少から小說や和歌などを非常に好んで居りましたのです、私の考へますにそれは固より二人の天分にも因らうがお孃樣々々で實際生活に觸れる機會もなく育つ間にも妹の方は小說といふ寫眞によつて人心を察し社會を知る事を學んだのではないかと思ひます、して見ると小說といものは場合に依つて隨分効力がないとも限らぬ抔と種々に考へた事でした。(某夫人談片)



情に絡まれて結婚せし女の末路

紀内靜子

○

微風まだうすら寒き朧ろの春の夜、親しき友と二人校の前庭をそゞろあるきの折、私はもう切なくて〳〵誰に訴へて御力を頼まうかと思つて居ました、あなたの御情に甘へて、今夜はすつかり打明けませうとまだ幾分迷つた様におつしやるから、私の力が及びさへすりや、有丈の智慧も絞ります、おつしやつて頂戴よと言へば、

顔が見えてちや話がし難いものですのに、今夜は恰ふどいゝ晩、と、ちらと私を見て、言ひ出し難さうに、幾度も〳〵同じ様な事を繰り返して、漸う語り出でられたのは、

○

實はね、私、結婚をし様かしまいかと迷つて居ますの、私が神戸の女學校に教へて居た頃、聖公會の信者とかで、毎日曜教會に來てた人が有ますの、私と一緒に下宿してた裁縫の先生の知合なので、時々宿にも遊びに來る中、私とも心易くなつて、後には、重に私に逢ひに來る様になりました、一體身體が弱いのに、學校も家の事情の爲に中學の三年かで止したと言ふんで學問は極ひくいんですけど、大變に文學がすきで、一寸話せる人でしたがね、ひどく心の小さい何となく同情をひく人だもんですから、この情ばかりの私が目には可愛想に思はれて、優しくしてやりましたの、年？、年はね私に四ツか兄様ですから今廿八ですわ、でもね東京へ來てから遂、疎々しくなつて、ろくに手紙もかきませんけれども、向ふでは度々よこして、此節はせ

ひ結婚をして呉れと毎日の樣に迫つて來ますの、いゝかげんに、あしらつて居ましたら、昨日なんぞ端書で以て憚もなく、戀だとか何だとか書いてあるぢやありませんか、餘りだと思つて、私直ぐ此處は嚴しい寄宿舍だから男子との手紙の往復は御斷り申す殊に教師の身として責任も重いからつて言つてやりました、そしたら又今日は手紙が來るんですもの、今に校長の目にでもはいつたら免職になりやしないかとも思ますし、彼程迄に思つて呉れるんですから、一層結婚しちまはうかとも思ひますけれども、何だか餘り自分の身を捨て果つる樣にも思はれてね……其の人はね御耻かしいけれ共郵便局に出てますの、薄給官吏ですわ、そりやもう私だつてあなた方の樣に立派な學問があるんぢやなし、僅ばかしの技藝を知つてると云ふ丈ですもの、破鍋に何とやらつてちようど可いんでせうけれど、何だか餘りあはれですもの、其かといつて斷つちまへばあんな人ですから什麽事をされ樣かと怖ろしくもあるし、ほんとに困つた者に見込まれたんです、一層暫く身を隱して見樣かとも思ひますわ、

吐息つきて私の答を促さるゝに、

ぢや、あなた神戸に居らつしやる時御約束でもして居らつしたの？

いゝえ、私一寸も那麽事なんぞ言つた覺はないんですのに、先きでは那麽樣な意味にとつてるんですもの、困りますわ、

其ぢや怖れる事はないぢやありませんか、あなたが其程嫌なのなら斷つておしまひなさいよ……、でも、私何とも言へないわ、その方の性質だつて全つきり知らないんだし、嫁らしやるのが幸福か、でない方が幸福か、こんな事には經驗も何もないですもの、でもあなたは、只先方の位置が低いから嫌だとおつしやるんでせう、私ね生意氣の樣だけどその考が第一いけないと思ひますわ、那麽にいゝ工合に自分の望み通りの良人が得らるゝものぢやなし、本人の性格が立派で身體が丈夫ならば、位置や何かは、あなた、其つきりだと云ふものぢやなし、まだ廿八なら御心次第ぢや出世も

出來樣ぢやありませんか、位置よりか性質何かを一位に置いて考へて御覽なさいよそれとも性質までもいけないの？

別に性質は惡くもありませんわ、只餘り狂熱的ですけれども、私を思つてる事は非常に思つて居ますから、こゝて私が思ひ切つて嫁つてやつたら、發奮して進む事も出來樣か、とも思ひますわ、其れに私は跡取りで、そんなに豐かでもない一家を支えて行かなけりやならない身ですから、他家に嫁くにすりや良人となる人がそれ丈の責任を持つて呉れなけりやならないので、容易に貰つて呉れる人もないでせうし、その人だと、其處いらの點も承知して呉れるだろうと思ひましてね……、で、あの信者ですもの勿論御酒も飲まないし、品行も正しいんですよ、

それぢや私も熟うく考へて見ますが、あなたも大事な事ですから、御熟考なさいよ、とにかく、虛榮等のつまらない思ひを全然捨てゝ考て御らんなさいね、で、あなたは御自分であの人には過ぎてると思ひなさるかしらないけれども、其でこの先甘く位置も財產もある立派な人に嫁らつしやる樣な事でもありや、格別ですけど……、女はどうしても、つまらなくても男に附いて居なけりや、つてよく母等申ますわ、其れに金なんかは浮きものです、どんな御金持の奥樣でも涙の乾く際がなくつて、破屋住居の睦まじき夫婦を羨やましがると云ふ事はよくきく事ぢやありませんか、

そりやもう、然うに違ひませんわ、兎に角此度の手紙の模樣で、又御相談しますわ、親の方の事情や何か悉しく書いてやつて見ますから、毎晚〳〵こんな事の爲に眠れもしません、あなたに訴へて、いくらか胸が輕くなつた樣です、今から思へば何故神戸なんぞに行つたかと殘念ですわ、

其の夜は之で別れて、五日目の晝間の時間寄宿舍の方の廊下に立つて、新刊女學世界の口繪を見てると、二階の欄干に凭れて私を呼んで居らつしやるから、顏を上げてなあに、と言へば、今御ひま？ね一寸私の室に來らして頂戴な、と言はるゝに、御返事が來て？と

言ひながら、雜誌を閉ぢて階段を上り行けば、心急ぎのせらるゝ樣にずん〳〵と御室に入つて障子を開けて待つて居らつしやる、見て御らんなさい、と渡された手紙を讀めば、女の薄情を怒つて、那麽積りぢやなかつたとか、何とか、成程狂熱家らしい人の言ぐさ、そして一切承知した、何も彼も責任を負ふから結婚をして呉れ、と細々書てありました。

之で見りや先方ばかしの誤解とは言へませんわ、屹度あなたもいゝかげんに結婚の約束をなすつたんぢやありませんか、其でなけりや、こんなに言つて來る筈がないぢやありませんか、

そりや優しい事の一ッ位言つたでせうが、結婚なんて、そんな事、約束しやしませんわ、這麽にしつこくされると倘嫌になつ了ふ、男らしく忘れちまへばいいのに、

今そんな事被仰る位なら初めつから、その人の位置が低いつて事はわかつてるぢやありませんか、何故はつきり、此方の意志を見せて御置きなさらなかつたの何しろあなたも惡いのよ、情の儘只いゝかげんに被仰つたんですわ、そうじといて今更嫌だなんて被仰るから怒るんぢや有ませんか、之程思つて被居るんですもの、嫌だつて被仰れば、什麽に失望なさるでせう、只位置が低いと云ふ事が理由ならば、あなたも那麽つまらない考は捨てゝ嫁らしては如何？

だから私、もう決心しましたわ、嫁く事に、私が一生懸命奮勵して、今の儘ぢやおかさない、嫁つたら當分あなたとも絶交よ、も少し立派にならなけりや一切誰とも交際しません、耻かしいから、

くだらない、私、那麽位置なんぞで交際しやしませんわ、今迄通りなすつていゝぢやありませんか、では愈々嫁らつして？、其の方がいゝかもしれませんわ、と私も喜んで、友の前途を祝しました。

○

其から、三日目に滿足と、希望と歡喜とに充ちた返書が來て、式の日取りや式場迄も定めて來ました、友も急に喜び出して、國許の兩親に手紙を出すやら結婚

衣裳の事やらで、そは〳〵して居らつしやる、何だか子供の樣にも思はるゝ、時々冷かして上げると嬉しさうに、

眞相にあなたの御蔭で心が定りましたのよ、先方も什奈にか感謝してるでせう、

もう之ならば安心と思つて居ますと、一週間とは經ぬ或夕方散步しませうかと誘へば、

失禮だけども室まで來らつして頂戴な、

との事に、從いて行けば、

私ねもう斷然よしたいの、あの事を、什麽してもいやですもの、だからね只もう四五年待つて下さいとよらず障らず言つてやりましたの、之から四五年も經つ中には、忘れるともなく忘れて了ふかも知れないと思ひますから、あなたに一應相談して見樣かとも思ひましたけれども、一分でも早い方がいゝと思ひましたから、

餘りの事に私は呆れ返つて暫時は言葉も出なかつたが、漸う

まあ〳〵、あなた、つては何て人でせう、私もう那麽人とは知らなかつたわ、那麽心の基礎が定まらない樣な人は之から、一切話相手になれやしません、先方だつて什奈に怒るでせう、餘り馬鹿にしてるぢやありませんか、でも一體如何してさう急に心が變つたんですの、

だつてね、今やつと五十圓とかの貯つきや、ないつて言ふんですもの、

それが理由？、そんな事を問ふて御やんなすつたの、まさか、御金に嫁入なさるんぢやあるまいし、那麽下劣な事が有ものですか、私もうあなたを友と言ふのさへ耻かしいわ、そんな氣で嫁らしつては所詮平和な家庭は作れやしませんわ、もう嫁らつしやらない方が先方の御幸福又あなたも御幸福かもしれないわ、もう〳〵この話は之つきり御よしなさい、私も之以上言ひませんよ、

と言ひ切つて了へば、ほんとに御めんなさいね、何うして私這麽でせうね自分にも自分が分りません、

私に向つて御めんなさいなんて被仰る事はありませんと後は笑ひ話になつて、

まあ〳〵その中には又いゝ縁があるでせうと戯談にまぎらして別れました。

○

すると今度は、放課後に教室の一隅である譯し物をして居ますと、例の友は這入つて來て、

今あの返事が來ましてよ大變怒つてゐますのと邊りを見廻はして被仰るともう聞くのは止さうと思ひましたが、流石に氣に懸つてならぬから、

何と言つてお怒りですと本を下に置いてきけば、

私もう何うしたらいゝかわからないの、と言ひ乍ら渡された手紙を讀めば、成程其の筈と思はるゝ程、怒つて怒て〳〵、憤怒とは正に之であろうとおもはるゝほど嚴ひ文章で、自分も決心したから、今迄貰つた手紙をすつかり、東京の新聞社に送つて新聞に載て貰ふと書てあつた、

私ね那麼事をされちや學校の名まで出るし、此校の校長にだつて、すまないから、嫁きます、怖ろしいんですもの、

又嫁く氣におなんなすつたの、何もあなたに疚しい事さへなけりや、新聞に出されたつて、かまはないぢやありませんか、御よしなさいよ、嫁らつしたつて、不平ばかしだと思ひますわ、何かつてば、ア、來るんぢやなかつたつけ、つまらない〳〵と思つたあげ句は腹も立つし、氣もふさぐし、向ふだつてきう〳〵堪忍えて居らつしやらないから、互に面白くない事はわかつてるぢやありませんか、もう嫁く事は御よしなさいと止めても見ましたけれども、可愛想だから然うも出來ないとて、此度こそ愈々と詫びて嫁く事に定まりました、式の服や何か一切私と二人で見立てゝ、御國へも行かず其儘神戸に行らつした、どうか〳〵御良人樣に優しくして一旦嫁らつしやる上は平和な幸福な家庭を御こさへなさいよ、

と繰り返し〳〵互に手を取つて泣いて別れました、其の後一月ばかしの後一度手紙を頂いたけれども、御自

分の方の様子は何も記してなく、只二人で散歩した夕が戀しいとあつて、あなたも餘り沈むな、泣くなと誡めてあつた、其から今はもう一年ばかしになりますけれども、何の便りもありません、當方から出さうにも處がわからず、出世する迄は絶交との御言葉を實行なさるのかと案じながら打過ぎて居ましたが、二三日前神戸から歸つた人の話によれば、結婚の二月後に離縁となつて、今ぢや朝鮮とかに居らつしやるとの事、之を聞いた時何とも言へない悲しい、傷ましい思ひが胸をかき亂す様でした。

衣服の色合

▲凡そ着物の色には二つの意味がある。即ち一は己れを表はすもの、一は他に從ふもので、己れを表はすといふは自分の皮膚の色や性格や趣味境遇等を中心として其色を定むる事で、他に從ふといふは例へば自分は派手な色が好きでも年齢の具合で地味な色を用ふるとか、或は男女により、階級により、時代によつて自己の意に反する色合を用ふるが如きを云ふのである。

▲忠臣藏の七段目に由良之助が態と遊惰を裝ふ時の着物の色は紫であるが、後になつて本心を示す場には茶褐色に着替へる、之は大に研究したもので、寫實の方から云へば浪人は黒い着物を着るべき譯だが、それでは餘り眞面目過ぎて浮いた樣が見えない。又藍はどうかといふに之も沈鬱な色で遊蕩者には不適當である。然るに紫は元來婦人に似合ふもので、之を男子が用ふると如何にもぬらぬらとして遊蕩兒らしく見える。

▲日本人の着物には派手な快濶な色が無い。孰れも不純粹な燻んだ暗らい色で、僅かに帯や襟や其他の一小部分に鮮やかな色が認めらるゝ、是れ日本人は西洋人のやうに夜會服を着て光りの強い所に餘り出ず、いつも小じんまりとした室内に居ることが多いから、ピカピカと強く輝くものは相應しくないので、從つて光線に反射しない地味なものを用ふるのである。

▲日本服は、近寄つて見ると色合や縞柄も判然するが、少し離れて見ると不明瞭である。これも日本では各自に庭園があつて公園が進歩しないと同樣に、凡てが個人的で、室内の裝飾品でも手に取つて熟視して味を求めるといふ風であるから、着物の色も之に伴ひ近寄つて見てゐる色を用ふる。だから盛裝した若かい婦人でも之を遠くから見ると、只鼠色の暗らいふけた色にしか見えない。併し又之れが日本服の特色で、日本婦人の一種の性格を示すものであるから、將來改良するにしても此範圍に於てせねばなるまいと思ふ。

(菅原文學士談片)



青春期の回想

拔 衣 紋

（一）

少女心の十六七は、恥しや我れも女なりけり。門の戸するりと塗り下駄の音低う、お始めましてと、淺黄縮緬は二枚袷の格好のよさ。太輪の銀杏返しに横鬢ふわりと出して、黄楊櫛の投けざし、珊瑚の根掛けもさのみは野暮ならじ、小腰屈めの何處迄可憐らしう。手前事は何々と申しまする不束者でと、外らさぬ客が愛想善き片頰笑みにも、あの……何卒とばかり耳の根まで眞つ赤にして、何が何やらトンチンカンの挨拶、母様ちやつと呼び出しまして、自分では一生懸命歯が痛むの頭痛がするのと。

其の癖一人居の小一時間、終には我れから徒然にも堪え兼ねて、下婢に密つと客室を見せにやれば、未だ未だお歸りにはならぬと云ふ。去りとて、例の箒に手拭の惡戯暴も、彼の優しらしい如何にも從順し相なお客樣に對して、妙に何とやら氣がすまぬ樣にもあり。自分では隨分思ひ切つた意りの、母樣に呼ばれしまゝを、毎時ならば槓桿でも如何な事動き相にも無き自分の、御用はと無論次ぎの間に小さうかしこまつて、客には決して聞こえぬ筈に秘密伺へば、あらま、此の女が彼のお孃樣で居らつしやるんで御座いますか、つい御見外れ申しまして、失禮を致しましたと、必定更めて客に挨拶されて、又しても總身の血汐の、不覺や一時に沸き立つ思ひ。其れでも照れ隱しの薄笑ひして俯けば、御覽下さいまし、眞にねえ貴女、獨活の大木とやらで、なりばかりは人並に大きいんで御座いますけれども、此度は私の方へ向き直つて、さあ此方へ來て

ちやんとお客樣に御挨拶をなさい、此の女はね、此度つからお前のお姉樣になつて頂く女なんですよと、てもまあ母樣のお人の惡い。

（二）

父樣のお顏は私の七歳の春が見納め。什麼せ母樣一人の思ひ存分甘やかされて、其の頃未だメリンス友禪の半巾帶を、男の樣にチヨコンと貝の口に結びながら其れで下婢に連れられてお使ひにも行けば錢湯へも行く。彼の頃大學校通學の口惡の叔父さんが、暑中休みになるとは歸省つて來て、怎うしても雪さんは馬鹿なんだよ、だつて姉さん、もう十七にもなれあ、何とか些つと位伊達氣があつたつて宜かり相なもんだと、時時は母樣に私の蔭言を利くと云ふ。其れが又寧つそ口惜しくつて憎らしくつて、なあに男の癖して、髮を分けたり油をつけたりなんかするのが、何處にいゝつてんだらう等と、母樣楯に取つて、お轉婆さは、負けぬ氣に精出して蔭辨慶も極め込めど、何と云ふ〳〵人前は恥しさ、男は况して初對面は、泣き出し度い程の恥しさ、怎う云ふもんだらうねえ、お前の樣に唯然う無暗と恥しがつてばかり居ちやあと母樣の笑ひ給へば、氣が多いんだらうよと叔父さん。けれど花さと濟まし切つて、雪さん、約婚つたんですつてね、御目出度う。

（三）

何だか知らぬが夢の間に約婚させられて、北國の春は未だ寒ければ、陽春四月を紅梅咲く頃、明くれば十八の振袖恥し。其の年の暮れに許婚の良人に死に別れながら、御愁傷樣と人に云はれて眞つ赤にもならず、いゝの、却つて氣樂なんだわと、見ん事平氣に言つて退けて、然う〳〵もう雪さんも然うなつていゝ時分だと、叔父さんには賞められて母樣には眉顰められて、不圖した動機に翌年の三月、我れも帝都に物學ぶ身とはなりし。

何が扨て、元來はお轉婆の我れなり、跳ねつ返りの私なり。人並に海老茶袴の格好も似合ひて、英語の一つも覺えては足まつたものに非ず。大道濶步のすり違ひ樣、茶中折れの後姿を振り返り見して、いゝ容子

ねと、友に小聲で囁かれて面喰ひしも、眞の暫時、出京た當座の程なり。雨夜の徒然には我れから進んで男方の品評もすめり。例の大廂の更に遠慮と云ふもの無ければ、阿彌陀の貧乏くじに二十と八錢、大風呂敷抱へ込んでお芋買ひに行しは、未だしも罪無しと思ひ出可笑しけれど、罪とは知りつゝ、わざと思はせ風の嬌態を作つて、男一人眞つ赤にさせながら、初心ねと蔭では舌を出して痛快がりし事もありしぞかし。



（四）

流石は女子なれや。二十越しては然う〳〵浮いた氣にばかりなつても居れず、云はれぬ寂寞に夜もすがら枕嚙みし事もあれば、月美き頃は端居の小縁に、獨りつくねんと夜を更かす事もあり。されば此れを青春病とやら時代病とやら、若しくは人生の危機等と、察しのいゝ事を出しやばつて云つて與るゝ人もあれど、肝腎の本人は其麼氣の利いた考へより、物思ふとて眞面目に涙を翻すにては非ず。然りとて人戀しさに幻の影追ひて、見えにも同じ名繰り返す程の粹事は無論自分如き柄には無い事なり。と云つて自體感情の動物、滿更覺えの無い事とも云へねば、所詮泣き度くつて泣いて、物思ひ度くつて物思つてると云つたら、其處等のお差し障りが無くつて却つて宜かり相なもの

を。虚偽多き我れ〳〵人間、此れでは却々承知の出來ずか、此の頃自分より年下の親しい友が見えられての談しに、ねえ雪子さん、私怎うかすると無暗に死にたくなるのと云ふ、何故と問ひ返せば、だつて私の性格其れ自身が既に矛盾してるんでせうけれどと、感心に不得要領な事を冒頭に云つて、斯うなんですの、私が死ぬとね、自分にも慥に此れと云ふ事は出來ませぬけれど、何かの面當てにでもなる樣でね、何とも云はれない程無茶に氣味が能くつて、愉快で〳〵足まりませんのよと云ふ。

什麼せ私にも分らぬ。同じ煩悶は十人十色の品こそ變れ、宵々の寢亂れ髮にも、人羞らひし若き憬れは、胸底深く誰れにも潜まん、此れをも戀と云はゞ、我れも決して人の妻とはなれぬ身なるをと、又の良人の後影拜んで、許容し給へと心中で泣きぬ。

（五）

妙な機會に終知り合ひとなつて、我れから婦人の身の殊更此方より訪問れんとはせねど、雨の日のつれづれ、月面白くば夕暮れ掛けて、やあ、失敬、又お話しに參上りましたと、突如どかりと無造作な大胡座、可愛や可惜三十男、酒も飲まねば煙草も喫まず、太眉男らしく一文字に引きて、チキタイ何時も横つちよ曲りの何としは無けれど形容慘憺のぢやむさゝ。貴方令夫人がおあり遊ばすんですのと問へば、勿論あるさと、あるさに滅法大きく力を入れて、而かも甚だ賢婦だよと云ふ。

三千世界、彼樣男に心中立てする賢婦のお顔が見たいと、友と兩人江戸川縁の櫻見兼ねて訪へば、能く來られましたなと六疊の御書齋、茶よ座蒲團よと一人うろ〳〵周旋たるゝ無器用さに、單刀直入奥さんはと先づ切り出だせば、けろりとした顏で居ませんよと澄ます。ぢやあ彼の何方へか御出懸け遊ばしましてと重ねて問へば、否と肩聳かして、彼女ですか、終十日ばかり前に自分から離縁て行きました、何女房と疊は新しいのに限りますつさ、けれど併し意外でしたなと流石に悄氣て、必竟何だ、我が靈意氣地が無くつて貧乏の



爲めに、三越白木の賣出し廣告が頗る妻をして煩悶させたと云ふ理由なんださうだと。聞いて見れば氣の毒にもあれど、女若うして斯う迄圖太う悟らるればもう占めたものよと、我れは獨り高らかに笑みぬ。友は少し、まあとばかり立つ足も定まらで、門飛び出だせば夕月淸し。大路の落花風に亂るゝ。

弱點を見透されたる嫁の態度

菱花女史

◎一廉の怜悧者と心得た妾

姑と嫁の仲、お互に心の持ち樣ではありますが一度妙になりますと、さてむづかしい者でございますね、私も初め、姑が一人ありはありましたが、其れは〳〵佛樣の樣なお方、ほんに貴女は御幸福といふ話、其れを聞きまして私の思ひますには、たとへ甚麽むづかしい姑でも、此方が眞心を以て仕へましたならば何時かはきつと、眞實の親娘の樣に成れませう、又是非左樣しなければならぬと思ひました、其れに常々兩親が、家の貧富に係らず、女の爲す可き事は、何でも覺えて居らなければならぬと申まして、拭き掃除は云ふに及ばず、臺所もお庭の水汲、一切下婢と一所に働かされましたから、自分では、一ぱし出來る積りて、やがて家を持ちましたらば、學校で習つた家政を實地に應用し、天晴れ賢婦人に爲り澄ます心でした處、實際に當つて見ますと、矢張りお孃樣藝の疊水練、理屈計りは知つて居りましても却々以て永年經驗を積んだ姑には及びません、日々の總菜にさへ、出來不出來が有りましたり、漬物の手入れが惡くて、味を變らせたりしましたが、其れでもまあどうにかお茶を濁して居りました處、或日女連れの來客、店屋物も氣が利か無いと云ふので、一番手料理に腕を振つて、序に姑の御感に預らうと、大勢でかゝつて見ますと、如何した事思ふ樣にゆかず此樣な筈では無かつたがと、氣をあせればあせる程、顔計り眞赤に爲つて、終には、耳がぐわん〳〵鳴り出すし、目は眩み出すし、情無いやら悲しいやら、待ち兼ねて見に出られた姑に、今日許りは何卒と、お手傳ひを願つて、漸と其場は濟んだものゝ濟まぬは姑、度々の失策に嫁の價値段々下つて、是れでは安心が成らぬと思はれましたのでせうか、今までとは打つて變つた御機嫌の惡るさ、其上姑は裁縫の名人、先づ一枚仕上げますと、ちやんと疊んで、出來ま

したからどうぞ御覧下さいましと、持つて參るのでございますよ、すると、褄から袖口、衽先まで、漸と御檢査が濟んだと、思つて居ましたら大間違ひ、其後主人が他出すると云ふので、仕立おろしの二枚重、ちやんと揃へて置きまして一寸外の用事に立つた間に、姑が又、ゆき丈褄下衿丈と、上下競べてお小言の數々、御氣に召さぬ處が有るならば、何故御目に掛けた時に仰有つては下さらぬか、餘りと云へば他人行儀のなされ方と、つひ御恨みにも思ふ樣に爲りまして、其れから後と云ふものは一寸した言葉の端々もア、かカウかと妙に邪推し浮かぬ顏ばかりして居ましたから、尚更以て姑の氣に入らず、一から十まで目に角立てらるゝ術なさ、初めの意氣込みは何處へやら明け暮れ姑の顏色計り氣にし、咳ばらひ一つにも胸をどきつかせて、暮します内に、とう〳〵神經衰弱になりまして、實家で養生する事に成つて仕舞ました。

◎知つた風はせぬもの

私が未だ繭ごもりで親の許に居ました頃、賢明の譽れ高き或老夫人が、今時の若い奥樣は、手紙書く事だけは大變御上手なれど、肝腎の臺所向きは眞暗で、漬物の鹽加減さへ滿足には御存じ無いと、話された事がございましたが、其時はまさかと思つて、氣にも留めず上の空で聞き流しましたが、ほんに其通り、矢張り私が惡かつたのでございます、縱し多少の事は習ひましたにせよ、其れはほんの下稽古、まだ舞臺は踏んだ事も無いのでございますから、初めから其積りで知つた風などはしませずに、何から何まで聞いて仕ましたならば、此樣な事には成りは仕ませんでしたらうに家内中の信用を得ましてからならば、たとへ何か改良するにしましても、誰れからも不平の聲を聞かずに濟みますし、若し又其れが失敗に終りました處が、一場の笑話の種になる位の事であらうと、斯ふ思ひ付きますと、俄に胸の雲霧晴れ〳〵としまして、素より氣から出た病、五六日も立たぬ間に、全然癒つて仕舞ひました。

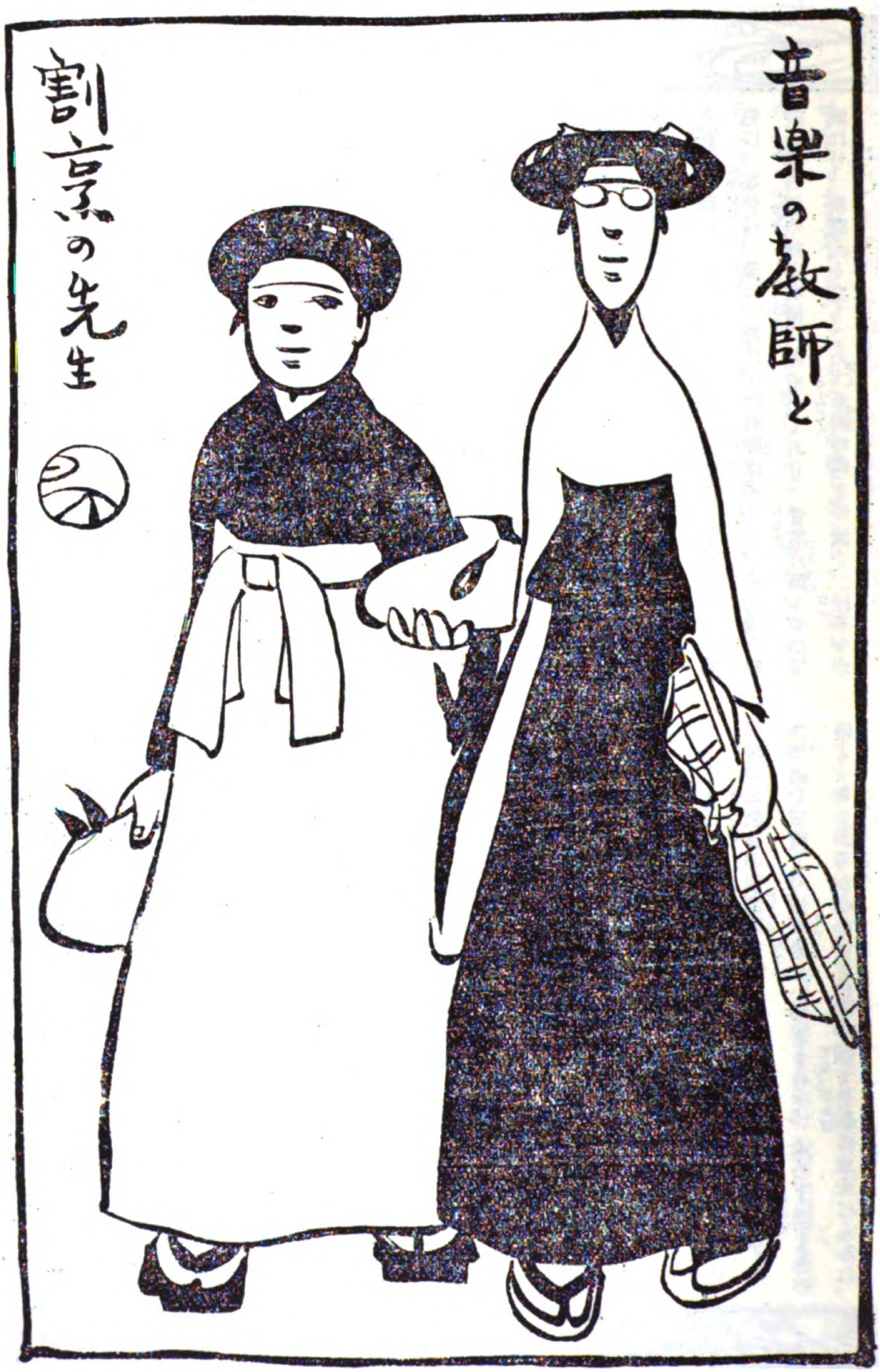
◎天晴れて氣が清々

病氣が癒つて歸宅しましてからは、全然心を持ち替へまして、一にも姑樣、二にも姑樣、心から打ち解けまして、甘へもしますし、冗談も申ます、時には、あれまア何とした他愛も無い事、何時までも那麼娘氣質では困ると叱られる事もございますが、其れから後と云ふものゝ御機嫌の好さ、今日の日まで三年の間、ついぞ嫌やなお顏見た事も無く、此頃の小春日和の長閑な日には、姑樣は孫を膝に縁側で日向ぼつこ、チンチコヨーオコロリヨー、うつとりした子守り歌に、庭の鶯調らべを添ゆる長閑さ、ア、三年前まではと思へば只々嬉しさに我れにも有らぬホヽ、笑みの溢ふれて。

◎紛紜は心の持方一ツ

親子は必らず別居せねば、如何しても家庭の平和は保てぬと、仰有る方もございますが、私は自分の實驗に依つて、心の持ち方一つで有る事を悟りました、此頃に御嫁きになりました御方、目下其準備中の方々、何卒私の樣な下手な事はなさりませずに、初めから仲睦じく遊ばします樣、生意氣ながら虎の卷は、只無邪氣の三字で有ると存じます、どんなに小言を言はれても又どんなに澁い顏をされても此方で無邪氣に出ればそれでうまくねまつて行きます、只無邪氣、胸中一點のわだかまりなく、氣取らず、氣兼せず、おめず、臆せず、胸中廓然として長上に處するのが嫁の務でございます。




音楽の教師と
割烹の先生

夏のたのしみ

いさ子

春やたのしと袷はなれず歌ひくらしゝ鶯の行へを惜みつるほどに、はやくも、若葉の風心地よく垣根の卯の花さへ盛になりぬ。ことしの夏はいみじき暑さと覺ゆるも、おれのみにあらざりけり。殊に晝間は暑さいときびしくて汗に衣をしぼるばかりなれば、滝に打たるゝ人も大概ならずときこゆるもげにさることぞかし。また涼みがてらに螢がり、あるは野山の景色をながむるなど、とりどりたのしきこと多かんめれ、そのなかしきふしぶしをとりいでゝかきしるさんには一入なるらん。

◎曉

けさとく目覺めければ、家居もうたて物憂しとて、うらの柴の戸おしひらきて、野邊へとたどりぬ。象の眠れる如き東山の巓に、低く輕く綿の如き浮雲は、青く、赤く、紫色に、茶色に、黒に、紺に、段駄羅織の如く、恰も遠き郭の火事の煙の如き有様に棚引つゝあり。青葉は露を帯びて眠れり。朝霧深く立ちこめて水神の森かげ淡く、流るゝ水はさながら銀河の如し。人はいまだ眠りより覺めず。鶯よくきらめきたりし星影も二ッ三ッ消え行くめり。そこはかとなき歩み音に入ればがさと音しぬ。見れば、小さき蛇のわが足音に驚きて俄に逃ぐるなりけり。根芹生ふる小川のせゝらぎを亂して飛び込む蛙の音。靜かなりやこの仙境。塒を出づる朝禽の友呼ぶ聲かしましく、高く或は低く晴の空いさましげに一日の門出せんとす。木の間を縫ひて行く十ばかりの少女、眠むたげの面地にて包小脇に青葉の縄手ひたぶるに急ぎつ。哀れ紡績の工女ならんかし。堤の上に參々伍々人數まさりぬ。一番の氣笛は鳴りぬ。可憐なる少女が玉の汗は、これより絞り出されんとす。あはれ。蓮の浮葉の露こぼれんとして落ちず風のまにまにうちゆらぎて玉の如く、哀れなる工女等の身の上を默むるに似たり。濃き霧次第に霽れ行きて野は生れぬ。繁りに茂る夏草の露、玲瓏として水晶の玉のごとし、之ぞ死したる夜の天地を、喪服の如き黒きぬば玉の闇の幕引き破りて、救ひ出し蘇生せしめ給ふ太陽。

◎夕立

頃は水無月の中にて日中のあつさたとへんにものなく、ひる過ぐる頃よりは、暑さいやまさりて、木の下陰も水の邊も、そよふくかぜの音もなく、照す日影に草木はしなれ、土さけ洪爐紅爐の中にある思ひにて、書を讀まむもゝのう

く、まして訪ひ來る友だになし。あはれこの暑さをいかにせんと、うちかこちつゝ、夕つ方を待ち居たるに、四時の頃にやなりぬらん、あやしき雲たちいでゝ、鳴神さへおどろ〳〵しうなりはためき、あるは遠く或は近く、たゞならぬ景色となりぬ。さては夕立よ、とく雨戸閉さんと、思ふ程もなく文机の草紙ども飛び散るに、心ならず、婢ども呼び集へあわて惑ひつゝ拾ふもいとをかし。母屋のかたにては妹等の母上よ、とく蚊帳出し給ひてよと、たちさわぐ聲、雨戸閉づる音等さわがしてかゝる中も、雨は篠つく如くふりしきり、すさまじきいなづまの光さへ、戸のひまより閃きいるに、おそろしさいわんかたなく、耳ふさぎてある中に、さしもの雨もやう〳〵小やみとなり、光も音も遠ざかりぬ。さてはといそぎ雨戸くり開け打ち見れば、庭の池水あふれ出で、軒の下草色ばえてほこりがほなり。程なく雨もやみて今迄の暑さはいづちに去りけん、涼しき風軒にあまりて、葉末の露は玉にまがふに、まして差出る、月影のいと華やかに、軒深くうつる葉影の、やう〳〵に枝分れゆく、若竹の姿、又陰ふかき木の下風のふききたりて、浴衣をひるがへすに、夏を忘れていとゞすゞし。

かゝるよを空しくすぐさんも、いとをしければ、友の許行かんとて、大路へ立ち出でゝ見れば、隣の庵も向ひの庵君も出で來て、おのがじゝ生ける心地なかりし由をいふ。さても夜の最後に轟きし音の例ならざりし事よ、いづちへか落ちけむなどいふ折しも、道行く人のなにがしの家それがしの軒、さては叢祠の松の木末にもなどいひのゝしるに今更思ひ合せられてかたみにかほうち守られぬ。いそぎ友を打ちつれて小川の流れにものしぬ。

◎夜のさま〳〵

夕ともなりぬれば洋燈つけ、其の下に少しく文など繰りひろげ、團扇片手に仰ぎつゝ一二枚ひもとけど、夜の暑さむすがごとく煮らるゝが如く、身の措くところをしらず、况して憎くき蚊は吾が膚をねらひては頰など螫し、わが文よむをさまたげ、手もて追へば逃げ又も羽音してむらがり來り、手足のきらひなく螫しければ、そのくるしさに堪へかねて、文よみ終られどせんかたなくてとぢたれど、寢ぬるも早しと庭前に出で、柴の折戸を開けば、天つみそらもいとゞ清らかに晴れ渡り、家々の軒端より蚊遣火くすぶるにやあらん、煙しげく立ちのぼるもいとおかしく、青葉しげれる木の間より、そよ〳〵と立初むる涼風も、恰も浮世の塵の拂はれたらんが如き此の夕露滴る松の木の間をもれ出づる月にあくがれて、いづこともなく立ちいでゝ行く。折しも、風のまに〳〵琴の音かすかにきこゆ。如何なる人

のすさびにかと、嵯峨野の奥ならねど、小督の局に似たる人もやと、流石にゆかしければ、音する方にたどり行きて見れば、柴垣したる奥にみすかきをろして、しらべおもしろうひきいでたるなりけり。その強く急なるは、深山にたぎつ瀧の瀬の、岩ばしるが如く、弱く緩かなるは、春の湖の小波しづかなるが如し。或は落花の風にひるがへるが如く、或は千五百の玉をころばすに似たり。

そも、このものよ。たゞに人の憂さを慰め、心をよろこばしむるのみならず。喜怒哀樂の情をのべては、なさけある人の心を動かし、是非正邪の想をあらはしては、事實の黑白を明きらむる具とさへぞなりぬる。そも／＼神代の昔、八雲立大神ののたまへりけむ沼琴のためしは、申すもかしこし。嵯峨野の奥の松風にかよひては、仲國がこまをとどめしめ、九重深き御簾のひまよりもれては、左中將の君が心を動かさしめ、敵の庭にひゞきては、心なき士卒が心をも感ぜしめたるためしもあり。あはれ、いみじくも妙なる力をもてるものなるかな。かなづる絲は細しとも、心の節の一すぢに、千々のおもひやこもるらんかし。しばしたゞずみて聞くに高く低くあやに妙なれば、つひにわが身も忘れてなんありしが、涼風身にしみて肌の薄きを覺えければなごりをしくも家路につきぬ。

◎磯邊

晴れ渡りたる空のあなたより月影さやかにさし登り、流のうれ／＼黃金をわかすかとあやしまるゝ。磯邊に波を追ひつゝ遊ぶ人の多かる中を、出で入る船を送り迎ふる海人のたちさわぐも世を渡る業なればなるべし。海のあなたより法螺を吹きたてゝ寄せ來る船、目じるしにとて濱邊に焚く松明、船なる漁人の高らかに笑ひさわぎ又勇ましくうたう船歌、陸なる海人や海人の子の叫び聲いとかしましきが中に、船は波に乘りつゝ渚に走り寄るを、二本の大綱にとり付きて、かけ聲いさましく之を引くもの、獲物をなげ出すもの、投げだしたるを四人三人して棒もたわゝに擔ひはこび行く者、一として目を樂しまさずといふものなし。既に涼みの人々も一人かへり二人かへり海邊もやう／＼靜になりぬ。波の音いよ／＼高くして、水の色益々白く、月影いよ／＼さえわたりて山の色益々青し。遠くに黑きは加太の崎なるべく、近くに青きは淡路の山々なりけり。顧れば、先にさわぎの中心たりし船も今は靜に砂の上に眠り、里のあたりの火影も其の數少くなり、あたりのけはひもひそまりゆけば、夜やふけぬらむとて、あかぬながめを、あとに見て、家路にかへればよもぎが宿も、くまなくてらす月影は、げに、さばかりみがきなしたる高樓も、およびが

たきむちしつゝ興そへがほろ、池の蛙の聲さへも、ものゝ音にはまさりつべうおぼえけり。

◎郭公を聞く

恨みつる風の音なひも、そゞろになつかしう覺えそめし今日此頃より、いつしかと待たるゝものは郭公ぞかし、垣根の卯の花さきいで、築地の橘香りそむるなど、日毎に待つらむ心のよすがも整ひて、いとたのしうなむ。去年は人ずてにのみ、聞きわたりたることの口惜しさよ。いかで今年は、まだしき程の初音を聞きてむ。五月こば鳴きもふりなむ、と思ふものから、宵毎にいもやすく寢れず、端近う打ち出でゝ、曉まで待ち侘ぶれど、いかにしけむ。まつ身につらき子規、まだ一こゑの忍び音だに洩さず。去年宿りせし花橘は、昔のまゝに匂ひ出でたるものを。などかこつも、わりなや。かゝる折には、惜しからむ初音も、いかで忍びあへむ。今や〳〵と耳打ちかたむけつゝ、待ち戀ふれども、あはれ郭公は知らでやあらむ。更に忍び音をだに洩さぬぞ、いとねたましや。

とかくするほどに、ねよとの鐘の音さへ鳴るに、さても、はしたなのことや。打ちかこちつゝ寢なむとするを、若しも其の後にてもやなど、いとあやぶくてなか〳〵なりや。今はとて、ねやに入らんと思ふ折しもあれ、ゆくりなく耳元に、さしあてたらんやうに、いと高う打ち鳴きたる、嬉しとも〳〵、たとへんやうなし。本意なけれど、たちさわざなば、くやしきこともやあらむ。あわれわれのみ聞かむも。やよ時鳥、聲の限りは我宿になけと思ふまに、猶なく里の數多あればにや、一聲高く月になのりて、いつ地へ去りにけむ、跡かたもなし。今一聲もがなと思へど、只青葉を渡る風に、露の散る音のみ、いとたかしや。

◎樂しき夏

四時の中たのしき折のとり〳〵なるに、わきて、うれしきは夏なり。ぬぎかふる袂のかろき、まづ心地よし。五月雨のはれたり庭の草葉の露の下かげを黃金の玉とまがひてとぶほたる、花橘のかほる夕、ぬれつゝ名のるほとゝぎす、何れもうれしく樂しきものなりけり。又淸き月影に端居しては短夜をかこち、たゝく水雞におどろかされては、まどろまむことををしみ、日陰にたえぬをいたみては、朝顔の露に心をつくし、賤が垣根の夕顔を見ては、紫の上の昔をしのぶなど、いと〳〵樂し。或はたらちねのみともして、彼處の溫泉、こゝの海水に暑を洗ひ、あるひははらからうちつれて、淸き山涼しき水に夏を忘るゝなど、樂しさいはん方なし。さはいへ筆にも詞にもつきせず樂しくうれしきは、この學舍の休に故鄕に歸る人、變らぬ山水のけしきを見て、老せぬ父母の御かげを拜むわれら。かいつくれば其の樂春にもをさ〳〵劣るましとぞ覺ゆ。さはいへ春若し心あらば例のうつろひやすき心と、如何に笑ふらんかし。



令孃の寮舍生活

秋雨女

窓の朝夕

と申さばとて、別に、ゆかしい圓窓の花も實もあるお方の朝夕を寫したのでも何でも御座いませぬ。只私の見ました女子の大學の生活即ち日本に於て唯一なる女子大學の寮舍生活に就ての感想を、同じ興味を持つ方におはなし致して見たいと思ふばかりで御座います。しかし、「起床五時半」「消燈九時半」「炊事は寮生自身がする」、これ等の文字は二三回本誌の上に側面觀が出て居た樣に記憶いたしますから此處に更ためて申すにも及ぶまいと存じますから、私はこゝに朝夕を過されて居る各方面の令孃の擧止、思想の傾向に就て申しませう。

もとより最高の學府にでも來やうと思ふ人等であるから、其家庭も學ぶを許すだけの頭腦を認め、學資を豫備し將來日本の婦人として耻かしからぬ人格を養成せしめ樣とて一生懸命である、中には今之丈を貢いでも末にはやつぱり戻つて來るのだとか何とか思ふて居られるお祖父さんもないではないと聞くが、それさへ孫女が卒業する頃には充分なる同情を以て學校へわざわざ禮狀をよせられるとか聞いた。從つて集まつて來る當人も、女學校を出たとの、天をつくばかりの元氣を以て、しかも表面は淑なしく行李と共に寮舍に入られる。櫻花爛熳たる校庭は之れに由てひとしほの輝きを添へるのである。

入寮して二三日は夢中に過すが五日目頃には最早そろ〳〵胸の奥に批評的の感覺が起る。

「あゝ國を出る時には、みんなから「あんなハイカラな學校！あなたの様な意氣地なしは突き飛ばされるかも知れませんよ」など、嫉し半分に嚇されたが、今此の現在は何といふ幸福だらう、どの人も小さい人も、皆一様東西しらぬ自分を親切にして下さるではないか、兩親も大變氣をもんで下さつたが、これを報らして上げたらどんなによろこばれることであらう」



少なくとも日に一度、新入の生徒が寄合ふたらこの話しで持ち切りである。そして何處がハイカラの眞の意味かとても判つたものでない。衣服と云へども皆

じみな、と云つて如何にも其人柄にしつくり適ふた即はち絹物だからとて華美に見えず、木綿の手織だからとて見劣りがせず、却て其場合の自分がはづかしい樣な氣がする位であるとは誰れもが等しく感ずる所である相な。

やがて一週間、二週間、三週間一と月と經つて行くうちに、學校の趣き、寮の樣子、友達と崇めるべき人、これ等のことが解せられて來るに從つて、こゝに天眞の自分が出て來る、部屋に於て食堂に於て散歩に於て、求めて知り度く思はなくても自然、識らずに居られなくなる、其の擧動から言葉、大にしては性質、これ等の機微が無言のうちに過去の履歴を語るのである、此時に相互が知られ、自らも知る惡い所は矯められ同時に長所をも認めて與れる友達のありがたさがわかるのではないか。

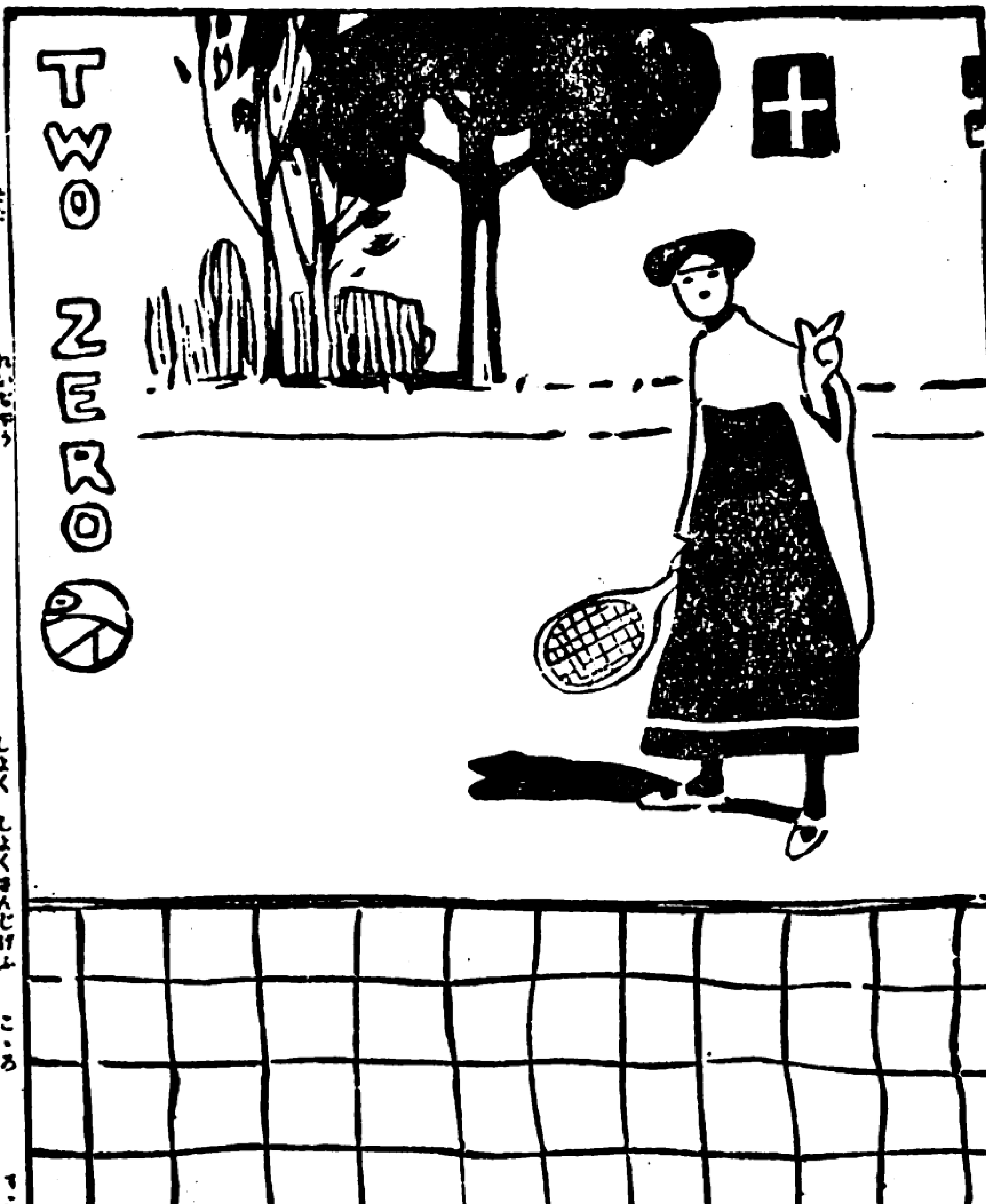
寮生平均三十人、これに母たる寮監、留守をあづかる下女、組織は凡て家庭的であることは無論であるが此のうちに育てられる寮生がいかに自由に、いかに樂しき朝夕を送り得らるゝかは到底入つたものでなければわからぬといふ。しかし樂しきばかりは續いて來ぬ、下らぬ我が儘を發表して姉たる人からやさしく諭され、餘計なお世話をやいては下級の人の氣を兼たり、今少しはと自信して居た學力の淺いのに失望したり、作文の宿題がまだ書き切れぬにもはや消燈の鈴がなる入學早々先生から怠け者と見られるが殘念なと妙な處にまで氣をまはして張り切れる樣な哀しみを、母が情けの衣の袖に包むことも一度や二度ではないのである、少し弱い氣もちの人は「オヤ〳〵ホームシツクがとう〳〵起りましたのね」と寮監から背を撫でられるまでにハンケチをしとど濡らして其の夜の日記が一頁では足らぬといふ仕末、それを亦舊い人がなぐさめる、此間の友情が終世續けば理想はこゝにとゞまつたかもしれぬと言た樣な譯である。

かくて幾度か石に躓づき、雨に打たれ、三年の間養成せられて漸々人らしき人となるのである、初は異なつても春の花の、どれが梅やら櫻やら判らなかつたも

のが、この時にはすでに根本の性を見出して芝蘭もあれば、松柏もある、水仙もあれば、萩もある、宛然四季を備へた花園を現出するのである、昔日雜草と同一視せられた面影もなく、而して此の時に始めて十有幾年を父母の膝下に養なはれた境遇が反映する。

實業家方面のホームに育ちたる令孃

何處かに裕然とした處がある、靴の踵、振りの袂、



きりゝと締つた中にもこせつかない、花ならば彌生はじめの彼岸櫻といふ處である、家におはさば苦勞しらず、倉の二階をお化粧部屋と遊ばすばかりのお孃さまが鐵路幾百里を呑まれて吐き出されて紅塵の都門に殊勝なる螢雪、故に三年の後には天晴れ我儘も咽喉にて殺す勇氣を以て、將來の天職を殖産事業に志ざし少しにても御國のためになるならばとの覺悟を以てふたゝび故山に歸られるのであ

る。趣味は音樂、手工にはしり易い。

軍人の家に育ちたる令孃

中流以上なれば、母樣は必ず何々將校婦人會の會員におはす、從つてお子樣もいくらか頭の高くなり易き處あれど、擧止上品な圓滿な人が多い、殊に父君が額面に位牌に代つて居らるゝ家のお子は一層肩の落ちたやさしい人が多いゝ樣である、而して抱負は第二國民の母たらんと期して居る健氣さ梨の花とも云ふ可き所の、趣味は矢張り音樂らしい。

豪農家より出たる令孃

もとより水呑みでは追附かぬ、から下手な商家のお孃さんより遙かに氣慨が見えるのである。

「わし等の鍬が光つてなきや米食虫は皆死ぬだ」と此の言句祖父の代よりきかされて耳を去らぬからでもあらうか、勞働らくことは何とも思はず、賴まば畑をも耕やさんの勢である、かゝる家のお孃さんは決して傲りたかぶりたがらす庭の隅のペン々草にも愛嬌を蒔く、どこまでも無邪氣だ、誰れにでも可愛がられる人間を云はゞ親切を以て代表する、しかしこれは善い方面ばかりをいふたので、中には厭になる樣な強情張りも滿更ないとは言はれぬ、之はひとりこの項に限られてはゐない、瓶で打つ樣な肉でもある位であるから。お蠶をかふのより少々むつかしい、野ぎくのはなで心が可愛いゝ。

官吏の家庭に育ちたる令孃

よければ非常によくゆくし、わるいと氣の毒な程あはれな境遇におかれるのは此の間の子女である。故に種々なる人間が出來る、褒められ者、持て餘し者、天才、凡才、我で生きる人、振れた兵兒帶の如き人、一寸比較が困難である、殊に敎育家、儒學家の家庭に育てられた人々はともすると、思想が單純で老い込み易い、反して政治家の令孃は其割合に頭がにぶい、秋の七草少しよりわけにくい處がある。

宗教的の家に育ちたる令孃

聯想するほどたかぶらぬ處が却々に其家庭からの修養であらうと頼母しく思はれる、現今の思想界の混亂を慨いて女ながらも間接にでも、統一したいとの意氣込みを持てる人も偶にはあるのである、無論口にいふ人はないけれどさすがに心の態度は何處かに結跏趺座の餘力が見える、菊の花のゆかしさであらう。趣味も可なり廣い樣である。

以上何れも一部の氣風の傾向が狹い一分の瞳に朦朧と寫つたのにすぎませぬが、幾分記者と御同感の方も廣い世間にはおありなさるであらうと存じます。そこで私も、ふかく心に銘して居ります、それは何であるか、をこがましうは御座いますが現今の女子の高等教育に就ての考へであります。

諸大家の方が大體に於て御贊成の樣でありますが一部に於てなほ反對の向きも伺がはぬではありませぬ。勿論女子は先天的の重き使命を與へられて居ります。それを忘れて居る人は狂人にあらずんば一人も御座いますまい。から其れを果す爲めの高等教育ならば何も言ふこともありますまい、それを種々なる方面から、また種々なる事情を女子の爲めに心配して下さつての御衷心からとは、存じますが、それならば猶の事女子の高等教育の必要を感じます、歐米に於ても女子の大學教育に就て色々の説がありますが、日本の女子の大學教育はまた少し異なりて居る樣に思はれます否恐らくあゝいふ風な組織のは一寸世界に聞きませぬ、決して學理を丸呑みにして專門の教師たらんとするのでもなければ、どうせ内に居ても暇な身分、體裁が惡いからゆきませう、なんどゝいふ呑氣な考へで學ぶ女も御座いますまい、如何かして人間としての女子の位置を進めてゆき度い、それに就てはまづ己れの人格を修養せねばならぬと誰れもが思ふて感じて學ばれるのにちがひあるまいと存じます、故に出來ない事情を無理に破つて大學教育を受けなければならぬといふ事もある可き筈はありませぬし、また學生自らにしても能ふかぎ

りの困難を切り拔けての後のことゝ存じます。しかも大學を卒業したからとて男子に比べては學力に於ても智識に於ても勿論遜色はありますが、腦力に於て格別の相違を見出し得ないとは實際この校の敎授某博士の御持論でした、否、男子にはからだめなところも女子に備へて居る美德も少なくはないそれを見出してのばしてゆく所に大なる價値がひそんでゐるのではありますまいか。學力に就ての非難でも、それは高が三年の學窓です、專門大家の望まれる樣な學者にはなれますまい。しかし生涯の大學に入る可き鍵を授かるのは此時で御座いませう生涯の研究法を見出し得るのも此時を措てはありますまいかと思はれます。女學校を卒業した計りでは、わるくすると生物識りになりたがる恐がないでもありませぬ。

終りに寄宿生活の可否――これとても一樣には申されませぬが大學の敎育を受ける以上はこの寮舍敎育の必要をも認めなければならないかと存じます、共同生活の觀念はまた日本の女子にはかけて居るから女は氣がせまいの社交的でないのと、けなされるのではありますまいか。寮にお入れ遊ばしてはと云ふと「人間がすれてこまります」としかしすれても見なければ角がとれませぬ。またすれて變になる位なお方ならば、家庭にお出なされても、どんな處にお置きなされても失禮ながら、ろくな人にはなれますまい一人々々の性格は學校に於てのそれよりもむしろ寮舍敎育に由て形作られるといふもので御座います、要は女子が今少し高き理想を行途に望まねばなるまいと同時に最つと女子が己れといふものに興味を持たねばならぬと存じます、ローマの古哲エピクチータスが「汝自らを知れ」の金言は每々私共を叱りました、のみならず何時までも永久に叱るで御座いませうしかし此叱られた時、この時これ女子の天地は自由になされて行くものと信じてやまないので御座います。

證書を藏めて歸鄕遊ばす御方に

燕子花

今宵七時の急行にて御歸鄕の由、どうせもう一日とおとめ申したりとて、御心はすでにふるさと人におはす可くと拜し申候まゝに、そんなら御機嫌ようとお送り致すより外詮もなきことゝ存じ候。

しかし、一言御祝ひ申上度候と、同時に分り切つたる事十文字ばかり進じ參らせ度くと存じ候、重くて輕く、輕くて重きものなれば別に鞄をあけてお置き遊ばす必要もなけれど。

扨ともかくもおめで度く候、笈を負ふて鄕關を出でたまひしより螢雪三年、美事なる結果を以て御卒業なされしこと何として大慶至極と申上ずに居られ申可き幷に今より眞の學問をあそばすを思へば多大なる望みを將來に囑するものに候、しかし一ト度顧みれば失望の外これなく候否失望といふは語弊なり心配に堪えず位の處にと御了解下さる可し。

實に世はあなたの一擧一動に眼を注ぎ居り候、しかも何か落度があればよいと、五重塔上の鷲鷹のごとくねらひ居り候、消極なことばかり奬勵してこれで役目が濟んだりといはむばかりの人も中には少なからず候此時に際しあなたは如何なる態度をおとり遊ばすお積りにや女學校を出でたまふ花の朝、心にちかひたまひしは如何なる金鈴の響よりにてや候ひけむ、しかし私はそれを問ひたくも何ともなく候、御說明などは、猶更のこと賴みも願ひもいたさず候、只御もと樣が充分のお覺悟だにおはすならば、もうおわかれと云ふ今の期に及びてにくまれ口をたゝくことは無用に候、おとなしく筆を擱く可く候。

結ぶに當りて筆一呵

今や學校は卒業したりと思召したまふ可し、併し卒業は死する時ならではいたされぬものにて候、此の自然に對するつとめ、此の現實につくす可き責任、如上の課程を經ざることには、とても卒業などゝいはれたも

のにはあらずと存じ候大聖孔夫子すら七十にして漸く其欲する所法を越えずなりしときゝ及び候。

ともすれば、校門を辭したる日より全く別人の態度となるが今迄のおほかたにて候ひしなれどもはや今よりの女子にはさることあるまじくと辯護すべき佛氣なさにあらず候、机幾十一とつ教室になかるべし幾春秋の後ははなれて、其一人々々が學校に候、修養も鍛錬も研究もすべてこゝに根據を置きてなすべきことゝ存じ候、よし味噌漉しを下ぐる朝も思ひはきのふのひとつ生命、たとひ小川に鍬洗ふ夕も心はひとつ生命に生きとお進みあそばす可きことゝ切に〱念じ候

一度握りたまひし研究の鍵、こは永遠に理想の扉をひらくものに候

一度結びたまひし團體の生命、そは永遠に御身を活かす泉に候

一度執りたまふ消息の筆、そは永遠に切れぬ大繩に候

更に奮つて大學にも入りたまふ可かりし御もと樣の今にして御かへりあそばすことの何ばうつらきことにて候ぞ、されどお互に遠き人生の行路なり、何處如何なる所にも、たゆまぬ人には自由が天地を與ふ可く候幸に御健かにおはすおもと樣、私は其れが安心に候、

されば別離の涙なきにあらねど、只今の場合こぼすまじく候、何時の年にか御くるしみのぬれしおめもと拭ひ參らす時もある可くと存じ候へば、

長々と烏丸めきたる筆のあとしかも似もつかぬ見ぐるしさは幾重にも

しきりに落る椿の窓にて

ちる花の朧夜　佳子

つなえ樣



卒業式の一時間

翠　子

門の傍で俥を下りて小砂利の敷いた路をゆくと、門内には馬車、人力車の幾輛かゞずらりと並んで居る、玄關口には大國旗が交叉されて、受附にはフロックコートに赤の徽章を胸につけた人が二三人居る、刺を通じると、もう式は始まつて居るので、直樣式場へと案内される、式場は棟を別にした洋館で、即ち講堂である。

扉を開けると廣い／＼西洋室で、正面は一段と座が高くされて平常には閉ぢてある、四枚の杉戸が今日は左右に開かれて居る、杉戸は松竹梅の見事な極彩色で霞が金泥がきになつて居る、遠くから見てもピカ／＼と金粉が輝く、壇上には錦の布に被はれたテーブルに一脚の椅子が据えられて居る。

今はもう君が代も濟んで、校長の學事報告のところである、壇上には生花はなかつたが、松と竹との大盆栽が左右に置いてある、場内の一番前の右側には文部大臣を始め次官やら視學官やら歴々たる人の席で、左側の方は本校の職員で西洋婦人も居る、井口あぐり女史の洋裝が目に立つ、大概前の列が本校生徒で、後の方は生徒の父兄や保證人卒業生等である。

室は立派な西洋間でペンキ塗りの高い天井からは、二百にあまる電燈が下がつて居る、何百脚ともいふ椅子の數で、五百以上殆ど千にも近い人に埋もれながらもまだ餘裕のある程、廣い講堂である、入口の扉の上には五尺と六尺位大きい日本畫の額が掛けてある、圖は寛畝先生の花鳥の密畫であつた、來賓は女は皆白襟紋付で男子は羽織袴かフロックコートといふ正裝で、縞の着物など着て居る人は殆ど稀である、流石は文部省の直轄學校だけに何も彼も完全に準備されて居る事は、とても他の私立學校などの及ぶところではない。

學事報告によると、今年の卒業生は高等師範と高等女學校を合せて百三十二名である、其中六十七名が高師生である、今年高師の入學試驗の受驗者は全國で七百二十名であつたが、其中七十九名だけ選拔したのである、殆ど應募者の十分の一で、選びに選らんだ生徒なのだから嘸、成績良好な秀才ばかりだらうと思はれる。

學事報告が濟むと、校長が壇上に立つて、卒業證書授與がある、高師の文科卒業生から順番を追ふて姓名を呼び擧げる、呼ばれつゝ生徒は席を離れて、校長の前に進む、六

十名ばかりの高師の卒業生がずらりと並んだのを見ると、何れも白襟紋付で袴である。皆束髪でリボンや簪の飾なく、一點の色をさゝぬ、黒髪の緑氣高く、是ぞ千花に魁けて清香を放つ白梅の積たる俤にもなぞらへて、高き徳操の床しくも見えたのである。

校長は總代某を呼ぶ。呼ばれる總代は數歩前に進み、一禮をして、また二三歩進みて丁寧なる禮をして、校長より證書を頂く。額に高く捧げたまゝ三歩退いて亦恭々しく敬禮をする、證書は依然捧げたまゝで自分の席へ下ると、其總代に從いて後の生徒が一列になつてぞろ〳〵と席へつく。

紫や黒や鼠や色こそ種々だが同じ紋付姿が一歩〳〵、機械でも動くやうに、楚々として板間を踏んでゆく、廣い講堂に咳拂一つ聞こえぬ静かさを、さら〳〵と衣擦の音がする。

斬新な態度で高師の方も濟んだが、高女の方は矢飛白もあり、友禪もあり、小紋もあつて種々なる色分け衣リボンや簪の花美しく、大和撫子さま〲に咲き出でたる學びの庭の花ざかり、二十歳に足らぬ優しき姫ばかりであつた。

ピアノが鳴り出づると生徒一同が立つて、

思へばはてなき學びの道、たゆまずすゝみて

の唱歌を唱ふ。次には校長高嶺氏の告辭がある。——文部大臣並に朝野の貴賓の來臨を忝ふしたるは、深く本校の光榮にして——諸子は本校にありて教育したる學問と德操とを益々琢磨して教育の大任に當らんと——といふ風の告辭を讀む。式日ごとに讀む教育勅語でも讀むやうな口調であつた。次に文部大臣の祝辭がある、校長の辭、大臣の辭と聞馴れた耳に恐ろしく晴れやかに聞こえたのは、其次に讀んだ生徒の謝辭であつた。高師の卒業生で紫の紋付を着た丈の低い人である。

——我女子教育の任に當らんと志してこゝに四年を過しぬ——

いと朗らかなる聲が水を打つたやうな、滿堂に響き渡る此時同級の生徒は一同直立して聴に入つたやうに俯向いて居る。

女子の高等教育者としての任に當る光榮を擔ふて、この華やかなる當日の式場に、月桂冠を授けられし卒業生の幾多は、そも如何許なる誇を自任したであらうと察せらる る、滿場の人は何れもこの名譽を羨ふのであつた。乍然、何と云ふても流石は女性である、この幾多の紳士淑女を以て滿されたる容儀堂々の場に於て、朗讀するのに稍々物怖

ぢの氣しき、冴えたる聲が折々震ひに曇つて、胸の動悸がよく數へられたのである。さりながら早くもなく遲くない讀方で、非常に判然と聞えたのである。外にも二人の生徒の謝辭があつて後、はてしなき――の唱歌で式を終る。

終ると文部大臣先づ席を跳れて後、來賓生徒順次に式場を出る、と今まで講堂に集まつた千にも近い艶なる人が蜘蛛の子を散らしたやうに校内に流れ出でる、校内の教室には生徒の製作品が陳列されて居るので、其を見るために錦の帶や裾模樣が校内の至るところにはら〳〵と落花の吹雪を見るやうであつた。

紀念式の三十分間

あきさめ

女子大學紀念式並に香雪化學館、晩香寮、の開館式を午後二時よりとの案内狀を手にして例の如く正門から這入る、とすぐゆく春の寂しさを感じた、櫻は三分も枝には殘つて居らぬ。

こちらへと豐明館の大講堂に導かれた。正面には已に大隈伯、澁澤男、久保田男、岡部子、廣岡夫人、等着席されて滿場淸澄の氣が充ち、しかも靜また肅たるものであつた。君が代終つて學監麻生氏の報告、次で幼稚園小學の生徒が「今日ぞうれしき誕生日」と唱ふて退場する。扨それから成瀨校長の訓辭に移つた。

明治三十四年四月二十日、雨中に天幕を張つて開校式を擧げてから滿七ヶ年、こゝに比較的富豐なる收穫を諸君の御盡力に由て得た歡こび何處に向つて謝すべき樣もない。何故とならばこゝに御列席の諸君が互に、一人のためにしたのではない、また爲るのではない、各自が生涯なさんとする目的に一致共同し、其の主義を貫徹して能ふかぎりをなしたるにすぎぬ」といはれるのである。こゝに余は感謝の念あふるゝものを一同に更つて根本の精神に向つて述ぶるのである。とそれから收穫の內容とは何を指す？と云ふ問題に就ての概略を、

一本校創立最初の理想

ザムチジユム、アカデミー、ライシアム、ストー、各學派の目的に照し見るも、官民の區別を排して自由なる根本的敎育を成就せしめんとの意に出でたる事。

二、本校の獨立主義

一貫し來りたる此の主義はすでに本校內部各方面に見ら

る丶處ならむ。從來の寄附金又は裝飾物皆一として其人の厚意に出たる外一の依賴をなしたることなし。

三、理想的人和を得たること

過去一萬年の世界の人文に徴して誤まり居らざるものとの信仰を有す、從つて一千年の間、暗夜の夢を貪つて居つた婦人を覺醒してこゝに宗教的關係を得たりと告白するを得るものなり。

と結論せられた。此時生徒一同紀念式の歌を讃した。

それから長井博士の丁寧な訓旨「結果は用ふる人の如何より湧く」と、圓轉輕妙なる大隈伯の十分演說、

「現今の思想界は混亂せり」といふに始まり、
「婦人自ら責任を負ふて起て」といふに結ぶ。

と引つゞいて澁澤男の愛嬌ある三分祝辭。濟んで一同は音樂館前に紀念木植えの式に臨んだ。中に白髮白髯の温顔、たしか森村市左衛門氏と記憶する。最後に土をかけてしづかに一禮せられたのを見た時にはいかにも宗教的に見うけられて感慨の迫るを覺えた。

やがて館内の實驗室、標本室等順次親切な說明を謝して新設晩香寮の花下一刻の客となれば、こゝも梢の花はおほかた散つて昔某詩人の庵であつた建物は今は晩香寮の病室になつて居る。其他茶菓の饗應、七年間の寮の歴史を模型にあらはした手際、拙ないけれど充分の滿足を與へられて、見かへり勝ちに夕べの校門を辭した。

◎色の白いのは美の要素である時に女は男よりも色が白いこれ女には脂肪が多いからで、其妙齢になつて益ゝ肥つて來、腰や肩の邊に丸味を帶ぶるのも矢張脂肪の賜である。

◎脂肪は肉と肉との間を充たすもので本來黄色なものであるが、それが皮膚の下にあると、透明つて白く見ゆるのである。併し脂肪が餘り多いと、其上を掩ふ皮膚が緊張し過ぎるから、表情に必要な顔面筋の働を妨げ顔の輪郭までも害なうて了ふ。

◎故に男でも女でも、餘り肥つた人は顔が茫然として表情に乏しい一方から云へば度量が大きく何事にも無頓着の樣である。其實脂肪の爲めに表情が妨げられて居るのである。

◎脂肪は人體經濟の貯蓄財量で身體の營養が足らない時は、此脂肪を費して補ふのである、だから平常に營養が適當に行はれて居れば脂肪も適當に貯蓄されて行譯である。

◎併し色が白いばかりでは物足らぬ。是非とも紅の色が添はなければならぬ。此色は血液の色で、血液の循環の良いものに於て始めて見らるゝのである。故に第一健康狀態を高め、一方に脂肪を適當に貯へると同時に、一方には血液の循環を良くしなければならぬ。(醫學士渡邊房吉氏談片)

壁訴訟

皐月女

母親が餘程見聞をひろくして居て呉れませんと、其子供の身わけて女等になりますと隨分困るにや、不釜らぬ處で人知れず苦勞をいたします、況して日々の家事經濟に其日其日を追はれて居て、新聞位を讀んでる人なんかでは全く子供は不幸です。

夫れも只だ見聞がひろいと云ふばかりでなく、其娘の性質から何から何迄すつかり知つて居て、而して其人々によつて敎育をして呉れなければ、何處のお孃さんも皆女學校に通ふから家の娘にも海老茶袴も穿してやらなければ位の調子で居られちや困ります。

私が一番あゝ母が早く氣が付いて習はして置いて呉れればよかつたのにと思ひますのは、音樂と踊で御座いますで夫れを私が申しますと皆さんはお踊りを？つてお笑ひなさいますけれども、私は女はすべての事につけて踊なんかは必用だらうと思ひます、第一體のこなしが違ひます、男の眞似でもするやうに兩方の肩を振つてギス〳〵してゐるのよりもどんなに宜しう御座いませう、一口に踊を習つた人は立居にも違ふとさへ申します、何もしなを作るのが好いと云ふ譯ぢやア有りませんけれども、踊でもして居たならばこんなに棒を呑んだやうにも成らなかつたらうと思ひます。

夫れから音樂ですが、私の母が琴が品が好くつて好いと云つて、私が嫌いなのを無理に何んでも習へと云つて稽古にやられたので皆忘れて仕舞ひました、と云ふと何んだか習はせなかつたと云つちやア苦情を云ひ、習はして呉れたつて云つちやア不平を云ふやうですが決して然う云ふ譯ぢや御座いません、只だ母が品が好いから琴は誰れでも好きなものだと思つて居たからと云ふだけで、母が惡いのぢやア無く矢張自分が我儘なのかも知れませんが、私は奈うかして長唄がしたくつて幾度も母に賴んでも三味線は下品だからつて許して呉れませんでした、が今思つても琴なんか習はして呉れる暇に三味線をさせて呉れたらどんなに好かつたらうと何んだか恨らめしいやうな氣がいたします。

夫れと云ふのも母がよく私の性質を知らなかつたから、誰れでも娘達は同じ者だと思つて居たのだらうと思ひます、で今になつてからお前は上品なものが嫌ひで下品なものばかりが好きなんだねえ等と申して居ります、夫れがもつと早く分つて呉れゝばよかつたのにと思ひます、三味線だの踊だのつてものは何んだか幾程好きだと云つても餘り

年をとつてからは一寸習ひにくゝなるもので、自分が習ひ度いと思ふ時分には既う遲れて仕舞ひます、ですからよつぽど母が氣を付けて呉れないとあとで後悔する事ばかりです、と云ふと何んだか母へばかり罪を被ぶせるやうで御座いますが、尙且自分も惡い人で御座いますれ。

何處の母樣でも然うでせうけれども、わけて私の母なぞは何んでも自分の思つた通りに、敎育しやうとするので困つて仕舞ひます、女と云ふ者は裁縫が出來なくつては駄目だと云つてはさせられますし、やれ經濟が下手だと一生困るからつて那麼事ばかり敎しへて呉れるので反つて迷惑する位です、私の考へでは裁縫だつて一通り出來れば仕立屋が有るんだからと思ひますし、經濟だつて其塲合になれば出來ない事も有るまいと高をくゝつて居りますから、何もそんな家を持つ事なんか今つから稽古しなくつてもよさゝうなものだのにと思ひますのに、母は那麼事ばかりさせます些少とも性質等を見て呉れないからなのだらうと殘念で堪りません。

夫ればかりでなく餘り大切をとりすぎて女は妙齡になつたら外へもめつたに出るものぢやア無い、惡い評判でも立つたら夫れこそ一生を臺なしにするからなんて、箱入も箱入りの鍵までかけて置くやうにされるのも隨分辛いもので御座います、辛いのを我慢して漸と社會に出られるやうになると、娘の時分にまるで世の中を見ないで置いたから何が何んだか薩張り分らないで人と話も出來ずに存じませんつて恥しい思をしなければなりません、ですから大切に可愛がつて呉れるならば夫れだけ社會の事にも、うとくならないやうに、芝居や音樂會や寄席の一通りは見せたり聞かしたりして貰らはなければ困ります、義太夫も知らず落語も聞いた事も無いなんて云ふと幾程お孃樣だつて何んだか餘り話せなくつて厭になつちまひます、夫れといふのも餘り母親が自分の娘を信用しないからでは御座いますまいか、子供を育てたり臺所するばかりが女の業では御座いませんと思ひます。

ですから家にばかり引き込ませて置いて家事を敎へたり裁縫ばかりさせたりするのが母の敎育でなく、種々な方面の事を敎へるといふやうなのが私の望む母なので御座います。



外人の見たる　支那婦人の運命

萬國社會學會長　シャル、ルツノール

支那は古を崇拜する國である、世界中に如此な保守國は又とありますまい、今日では日本並びに歐洲人が之を啓導しつゝ行くので段々目を醒して來たが、然しまだ〳〵古の遺風は急に改まるものでない。

先づ其弊を數へるならば、父母の中にも父は我子を賣拂ふ權がある、子供は父のこしらへた借金の抵當にもなる、(尤も男の兒にまれ、女の兒にまれ之を役者とか非人とかに賣ることは禁じられてある)中にも女の兒はよりよき商品と見做されて居る。

支那の哲學者道德學者は孝といふ事をこよなく稱讚するところより孝は萬德の基であると云ふ、そは洵に結構であるが、子供が親の爲に殆ど一生涯其の自由を奪はれるとすれば、そは少しく中庸に外ては居るまいか、それ故父は我子を賣物にすることを何とも思はぬのである。

支那では父の葬式には長男が柩に先だつて行き婦女は柩の後について行くのが習慣である、しかも道を歩みつゝオイ〳〵と聲高らかに泣きながら行くのである若し子にして父を罵り又は虐待するとあれば無上の大逆と見做されて其刑罰は實に慘いものである、其の財產は沒收され、その家は亡され、又其土地の役人までが飛んだ災難を蒙るのであるが、其代り親孝行といつたらば大變なものである世間はこれを廣告し道德學者の稱讚は申すまでもなく、國家が之を天下に旌表するなどあらゆる讚辭を以て孝子を褒めるのである、斯樣な廣告があるから親孝行の子の中には父の死體を棺に入れて三年も四年も之を家に守つて居るなどのことさへある。

支那の女子教育は人の妻となつた其當座は、權利を消失して了ふごとくそれだけよくその習慣に釣合つて居る、故に女子教育の概則に曰く『女の子は十歲より家を出てはならぬ、辭禮や裁縫を大いに學ばせ二十歲

になれば嫁がせねばならぬ、若し二十歳にして故障があつて嫁がすこと出來なければ二十三歳には是非嫁がせねばならぬ」とある即ち支那の女子敎育の大要は聽從の二字を敎ふるより外はない。

　倫敎育上最も重んずるのは貞操と寡默とであるから、之に反對たる多言と云ふことは或場合に於ては離緣の一條件となることがある、要するに敎育の主眼は女を男の勝手にすべき一の品物に作るにあつて、個人的意志を引き拔いて了ふのである、妻は道理に外た事でも長上の命とあれば只默つて働いて居るべきものだと敎へられる。

　婚姻は歐洲の如く法律的では無くして、道義的の要求より來つたものである。父は子供を一人も殘らず結婚させなければ耻になる、子供は又子孫を傳へるのが第一の義務で子を設けないものは之の義務に背くものとしてある、家を繼けると云ふことは何よりの大責務となつて居るから之が爲に父のない時には兄に當る者が有らゆる手段を取つて婚姻を其の親族の相談で定むるのである、其の相談の結果が則ち直に法則となる然し子供が外國の女を娶るとき、或は遠國で婚するときの二つの場合は此の限りでないが他は父母や、親族共の意志に依つて定まるのである。

　此の相談には金錢問題が大なる關係をもつ、女は嫁になるにも決して家資を持參しない、却て婿方の父母が嫁方の父母に契約した金を拂ふのである、そしてそれは契約の捺印後と合巹式の數日前との二度に拂ふのである、貧家の父母は此の費用を避ける爲、或は經濟上の都合で孤兒院に行つて氣に入つた女の子を見立てて幾分かの金を拂ひ後に我息子の嫁に貰受けるのである。

　父母から見れば婚姻の目的はたゞ二つあるのみである第一先祖の祭を繼けて行くこと、第二子孫を繁殖せしむることである、女子の絕體的服從は實に敎育上の最大要目として見られて居る、父母は娘に始終婚姻のことを話し婚姻は人生最大の幸福であるとのやうに云ふ、娘達も皆之を信ずる、處女で一生を終るのはこよ

なき恥であると思ふて居る、そして私に良人を撰擇するのは貞操を打破るのと同じことのやうに思つて居る甚しいのは婚姻前には未來の良人の顔すら見る事が出來ないとしてある。

「幸福なる結婚」と題するので有名なる小說がある、書中の主人公はある貞操なる女子で、それが自分の理想にかなつた若い男子をふと見た、それが爲父母は之を良人に定めやうとした時彼の貞女はこれを斷つた、其理由を紊すと結婚前に二人が顏を見合せたから夫婦の大禮に背くと云つて固く辭したので父母も其の貞操に感じて破談することにした、すると男の方も又之と同じ考を起して此の婦人を娶ることを斷念したのであるそれで兩人共まことに完全なる家庭敎育をうけた者として青年男女の模範になつて居るのである。

三從の敎と云ふのは支那では名高いものであるこは成程結構であるが、嫁しては夫に從ふといふとき、その夫が善かれ惡かれ、旦那樣であるから無理を云はるるとも御尤としなければならぬとはさても辛き事かな。

然し嫁としての運命は辛いけれど後に姑となり又は家をつくつた時、家の經濟一切を引受けて、切り廻す大變な權利がつくからそれで埋合がつく、嫁は舅姑に對することさながら我父母に事ふるやうにしなければならぬ、始終禮を盡して何んな命令にも從はなければならぬ「かしこまりました」と云ふ言葉は是非言ひ通しにしなければならぬ、併し良人の姉妹として家に居るときは所謂小姑として却々威張つて居られる譯である。

結婚の晩から「嫁は家に在りては恰も良人の影の如くに全く自分の意志がない者のやうにしなければならぬ」と云ふ敎を履行せねばならぬ、結婚後數年の間は全くその權利を失ふけれども、數年の後に至つてやがて夫婦の間に道義的區別が立ち、良人は外を司り妻は內を司ることになつて、そろ〳〵自分の權利を振廻すやうになるのである。

現代女子の運命觀

佐治實然

○

女の幸福は婚期を過らず嫁いで妻となり、和合し一家樂しく暮すのであるが、物質的文明の壓力はこの樂しき狀態を破壞して辛い生存競爭の中に捲込まれる、之を文明生活の危機と申すので、原因は生計上、職業上、敎育上の誤解にあらうと思はれる、先づ第一は、物價の騰貴に伴ふ家計難である、二十年前には月三十圓の收入で威張つて暮されたが、今では三十圓位は一人の學資にも足らず、これで一家を支へやうとすれば隨分みじめなものである、で生活上の經費は年々嵩まつて來て中には多少虛榮の分子もあらうが、已を得ぬ要求が其の大部分を占めて居る、例へば以前步いて濟んだ事でも、現今は世の中の仕事が劇しくて、徒步てゐるのが如何にももどかしいから近い所でもつい電車に乘ると云ふ事になる。

◎

生活の高まるに反し、收入の點は殖えない、十年前に五十圓の人が今日百圓に增しては居ない。近頃は職業を求める人が多くて、却て下落の傾きさえある。此の生活難を切拔けるには唯だ稼ぐにある。晝間は勿論夜間も働かなければならぬのである。故に力量ある者は職を得て益々榮えるけれど、才能のない者は競爭に負けていよ〳〵困難に陷り、遂に家庭の幸福迄も奪はれて了ふ。

この現象は日本ばかりではない、米國なぞは最も甚だしい、少數の富豪の外は自分の家庭で食事する味を知らぬ者が甚だ多い。そして主婦と言つても夫と同じく社會へ出て稼ぐのであるから、其の家庭と稱するものも實は下宿住居同樣で、一軒の家を構えるだけの資力ある人は至つて少ない。こんな風に多くの家族が下宿に住んで、共同の食堂や應接室を用ゐる事は、社會主義などから見たら或は喜ぶべき事であるかも知らぬ

が、家庭と云ふ點から見ると、餘りに無趣味な話である。

◎

此危機に處するにはどうするがよいか、私は簡易生活に限ると思ふ。即ち精神的にはつまらぬ虚榮や分外の慾望を去るがよい、之を實行するには宗教の力を籍りるのが最も徑捷である。又物質的には勤儉に注意することで、日常必要な物の外は一切買はぬやうにしなければならぬ。殊に我邦では收入の少しく餘分にある者は、無用の雇人を二人も三人もおいて細君は餘り働かぬ習慣があるが、これが最も好くない。西洋では、極く上流の社會は別として、大抵の家では主婦が自ら買物にも行けば臺所の仕事もする。

◎

次には求職と結婚上より來るものであるが、今日の青年は學校を卒業すると直に職業を求めなければならぬが、近頃はそれが增した爲に、立派な肩書を有つた人でも、自活さへ出來ぬ者すらあるやうである。

此樣子で進んだならば、人生四十になつてやつと一人前だけの暮しが出來る位なものであらう、隨つて男女の結婚は非常に遲れて、所謂オールドミスが殖えて來る。私は元來晩婚論者であるが、併し餘りに晩れるのも考へものである。

男子が五六十圓の月給を得て一家を作に餘裕の出來るのは大抵四十前後であるが、こいつが又女の側になると生計上の都合から親達が成べく速く嫁づけやうとする爲に、二十一二の娘が四十位の男子と結婚する事になる。すると是等の夫婦は年齡が違ふ爲めに趣味や思想が一致しないで感情が融和しなくなる。そこで年長者たる男子は、小兒の如き妻を心から愛するといふよりは、寧ろ玩弄物視するやうな傾きとなる。

◎

西洋では此例がもつと極端で、若い娘は成べく老人の金滿家を良人に望んで居ると云ふが、之は老人が死後の遺産から得た金を以て、自分の好いた男子に嫁することが出來るからである。近頃或雜誌で『理想の良

人」といふ題で投書を募つたら、其解答の多數は、人格や學識のあるのを基礎としないで、軍人とか實業家とか外交官とかいふを以て條件としてあつた、之れ明かに生活難の風潮である。此危機を防ぐには、男子は學業を終へて社會に出たら幾分づゝ貯金をして行くと共に、女子も亦た學問以外に多少金の取れる職業を習得して、夫にのみ賴らんでも自活せられるほどの餘裕を作り、然る後に結婚した方がよい、でなければ家庭の幸福は保たられぬであらう。

◎

第三には女子敎育の缺點であるが、どうも今の女學校は此生活難の世には適して居らぬやうである。良妻賢母も結構、茶の湯、活花、和歌、音樂、何れも惡くはないが、唯だこれだけでは餘りに消極的である、世の中が太平で恒產ある者にのみ嫁するのならこれでも間に合つて行かうか、中流以下の者の妻には適しない。すると、何人が貧乏人の所へなど嫁くものか、と言ふ姫君もあらうけれど、人間の一生は變化である。よし悲運に陷らぬまでも將來の靑年は、夫と共に社會的に奮鬪して新運命を開拓する妻を要求してゐるのに多くの女子はこの要素を缺いて居る。百姓の娘でも職人の子でも一度專門の女學校を卒業すると鼻息が荒くなつて、父兄の擇んで呉れた農家の靑年や、大工左官など云ふ勞働者は見向もしないで、理想とする所は、毎日抱え車に乘つて役所に通ふ人か、左もなければ學者か軍人か實業家である。けれども然う自分の注文通りに行かないから、隨て不平や煩悶も起るといふものである。

此弊を矯正するには今少しく敎育を平民的にして、如何なる困難に處しても直ちに應用の出來る活學問をさせると共に、婦人は職業に對する觀念を一變せねばならぬ、兎角從來の弊風として、手足を勞する人よりも頭腦を使つて生活する人を高しとする傾きがあるが、之が抑もの間違で、百姓でも職工でも官吏でも學者でも、凡て社會の必要によつて出來てゐるものであるから、職業に尊卑はない。如何に高尙の學問をした

婦人でも、縁あつて農夫の家に嫁したら、矢張り肥桶を擔ぐほどの覺悟がなければならぬ。

◎

人の運不運は、或程度までは天命であるが、然し人力で恢復されぬ事はない。けれども逆境に陷つた時、徒に焦つてはます／＼宜しくない寧ろ過去の失敗は潔く諦めをつけて、更に新光明を見出すに如かない。

運命とは畢竟幸と不幸の二つに外ならぬが、之は人々の觀じやうによつて何うにも解釋がつく。或時二人の罪人が監獄の中で話すに、世の中に泥棒ほど良い商賣はないけれど、唯だ一つの邪魔物は此監獄で、これさへ無かつたら我が家業は本統に氣樂なものだ、と云ふと、他の一人が、馬鹿を言へ、監獄があるからこそ泥棒は萬歳だ、若し之がなければ世間の人は皆泥棒になつて、己等の仕事は無くなつて了ふ、と謂つたそうだが、同じ監獄でも觀方に依つて異ふ、世間で、自分の妻は缺點がない代りに縹緻が惡い、と不平を云ふ人があるが、若し其女が完全な美人であつたならば恐らく自分には來なかつたのであらう。唯だ容貌が少し下る爲に、引手夥多に至らずして其男の妻となつたのである。女の方から言つても又良人はもう少し働きがあつてくれないと困る、と歎す細君もあるが、其女が滿足するやうな働きのある男なら、必ず他の立派な婦人を娶つたに相違ない。

◎

幸と不幸は主觀的のもので、餘所目には氣樂さうに見える人でも、案外苦勞が多かつたり、非常に氣毒さうに思はれる人が却て精神に餘裕が有つたりするのは珍らしくない。之を動物に就て考へても、奔走して食を求める野獸と、主人から養はれる猫や狆とを比較して見ると、一は牛肉や鰹節を宛がはれ、一は風雨と戰ふから、家畜は幸福でありさうだが、天然に堪える體力を供へた所からすると、野獸の方が遙かに幸せである。

又寒い日に、外套や頭巾にくるまつて居る車上の人は矢張寒さを感ずるが之に反して、曳く車夫は汗を流して走る、物質上から見れば車上の人が樂さうである

が、天然に對する抵抗力は車夫の方が大に幸福である。で人の幸不幸は外部から觀察したばかりでは判斷を下せない。其人の心になつて見なければ解らぬ。けれども困難に堪える力が強くて、他を羨ましがらぬ人が最も幸福である。

◎

元老と稱せらるゝ華族の子女に豪い人が少いのは、境遇が餘り樂すぎて處世の辛さを知らぬからである。其父や祖父は維新の際非常な困難に堪えた人であつたのだがその子や孫になると、雨が降る車に乘る、風が強い侍女を附けるといふ風で、家で威張つてゐる割合に社會へ出ては何事も成し得ぬ。

驕る平家は久しからず、天下の運は廻持ち、貧家と唐樣で書く三代目、家の隆盛は大抵三代位しか續かない。原因は、全く平生の幸福が其身に禍するのである。此頃或る資産家の番頭から左の如き話を聞いた。

自分の主人は巨萬の富がある、其金をいかに使つたならば世の批難を蒙らずに濟むか、といふ事にのみ心配して居る。次に平常の生活でも、我々なら寒い時二枚の夜具で充分であるに、主人は室内に暖爐が設けられてある上に、蒲團の五六枚も重ねて、それでも未だ寒がつてゐる。で大磯や熱海へ湯治に行くが、宿屋にはそれほどの設備がない爲に、却て風邪を引いて歸る。

私は此話を聞いて、幸必ずしも幸ならず、不幸必ずしも不幸ならず、と倩々考へた。

◎

人間の修養は丁度大理石に彫刻をするやうなものだと考へる。一面の大理石があれば絶世の美人でも、神佛でも、天使でも、龍でも獅子でも、刻む人の心のまゝにどんな物でも出來るが、然し之を彫るには無用の部分を取除かねばならぬ。人の道も矢張それで、心の中には雜念や妄想が澤山あるから、困難といふ槌を以て惡い所を取棄てねばならぬ、ツマリ眞の圓滿なる人物は逆境と修養とによつて得られるのである。

前途に光明ある婦人

明治女學校學監　福迫龜太郎

△美貌の女に伴ふ危險

婦人の運命を大體に於て定めるものは結婚であるが、其れには美貌が最大要件となつてゐる。男は口先でこそは容貌などは如何でも關はないと言ふけれ共、其の内心は何よりも容貌の美しいのをと望むのが事實であるから、女の運命は或る程度迄は容貌の良否に依つて左右せらるゝものと言ふ事ができる。併し乍ら顔が美しいとて必ずしも安心はできない。私が是迄見てゐる所に依ると、恁う云ふ婦人に限つて動もすると男子を與みし易しとし、之を翫弄せんとする氣味があるので、爲に多くは身を過つてゐる。千人萬人の中には勿論偉い女もあらう、又無ければならぬわけであるが、矢張り女は女であるから、如何しても男に一目置かねばならぬのに、其れを其樣とは思はないから恁んな事になるので、初めは男を翫弄する積りで居ても、それが段々進んで行くと、やがて逆に翫弄せられて、到底眞面目に身を持つ事が能きなくなり、遂に悲慘な境涯に陷ゐつてゐる者が尠くは無い。

△醜しとて氣にする勿れ

既に容貌が婦人の運命を左右するものであるから、其の醜い婦人は、自ら醜いと覺ると、甚く落膽すると共に、嫉妬心を强くして、非常にひねくれた妙な女になつて來るが、將來の運命を開く上に之れ程不利益な事は無いから、世の父兄達は之れから立身せんとする若い娘に向つては成るべく醜い事を自覺せしめない方法を採るべきと共に、本人自身も其れらの點に就ては成るべく氣を置かない方が好いと思ふ。嘗て、私が地方に居た時に、家の娘は容姿が惡いから東京へ出して學問でもさせたいが、と云ふ相談を受けたから、其れは以ての外の話だ、其んな考を娘に有たせて、よし學問をさせた處で何になるもので無い、と言つて大に注

告した事がある。

△需用の廣き婦人となれ

次に教育の點に就て言つて見ると、今日の若い婦人の間違つてゐると思ふ事は、往々自分の胸中に或る理想の良人を畫いて、其の妻としてのみ適當する學問をしてゐる事である。例へば、自分は外交官の妻になりたい或は實業家の妻になりたいと言つて、佛蘭西語とか西洋料理とか云ふ或る特殊の人の妻としてのみ必要な學問をしてゐる者がある。否、或る種の高等教育は必然的に其樣云ふ風にさせてゐるが、恁う云ふ學問の仕方は果して好いか如何か、前途を過るもので無いか如何か、大に考へものである。如何に外交官の妻になりたかつた處で、貰つて呉れなければ仕方がない。然かも外交官の妻より外何處へも向かない女になつてゐるとすれば、止むを得ず老嬢で通すの外は無い。此種の失敗者は實際非常に多いので、實に氣の毒な事だと思ふ。官吏によろし、商人によろし、學者によろし、藝術家によろしと、何方へでも向くやうになつて居てこそ引く手數多の順境も見られると云ふものである。之れは女子敎育の理想とすべきと共に、女子が自分の運命を開拓するに就ての最大要件であらうと思ふ。西洋料理の如き寧ろ特殊の方面のみに用ある事柄は、嫁して後必要に應じて習ふとしても決して遲くは無い。其れよりも育兒法とか、日本料理とか乃至は、一家の經濟法の如き何處へ嫁しても必ず要るものを習つて置く方が、餘程安全策であらうと思ふ。

△自ら不利を招く女

扨て結婚して一家の主婦となると、婦人は兎角交際をしたがる。交際すれば勿論奢靡にも流れやう。交際費も嵩まらう。然れ共其れよりも尙困るのは妻が世間の人に就て好き嫌ひが出て來る事である。女は總て感情に依つて何事をでも見るもので、婦人の爲す事には必ずこれが纏綿してゐる。交際すれば、必ず彼の人は好い人だ、此の人は好かぬ人だ、と定めて仕舞ふが、

之れは皆な感情できめるので、何も理屈は無い。理屈は其の感情の基礎の上に立つてゐる。誠に怪しげな次第である。處が妙なもので、此の怪しげな好き嫌ひは、やがて夫を動かして、遂に夫の好き嫌ひとなつて來る。此の場合に、其の嫌ひな相手が、若し夫の爲に有益な人、大事な人であるとすると、非常な不利を釀すわけである。然かも其の好き嫌ひは時々刻々に變つて行く。情けない話である。交際は勿論必要であらう。其れが親族、朋友間の祝儀、不祝儀に關するものなら誠に止むを得ぬが、其の以外の所謂交際と云ふ交際になると、必ず右の愛憎が出來るから、女の交際と云ふ事は何時になつても問題であらうと思ふ。而して此の弊害は不祥乍ら所謂高等教育を受けたと云ふ婦人に於て多く見受ける。尤も昔風の嚴格な家庭に育つた婦人——素より理想的のものでは無いが——でも、廣く交際したら、或は同じ結果を見るかも知れぬが、たまたま顏出しをしない爲に其樣云ふ人は餘り見受けない。

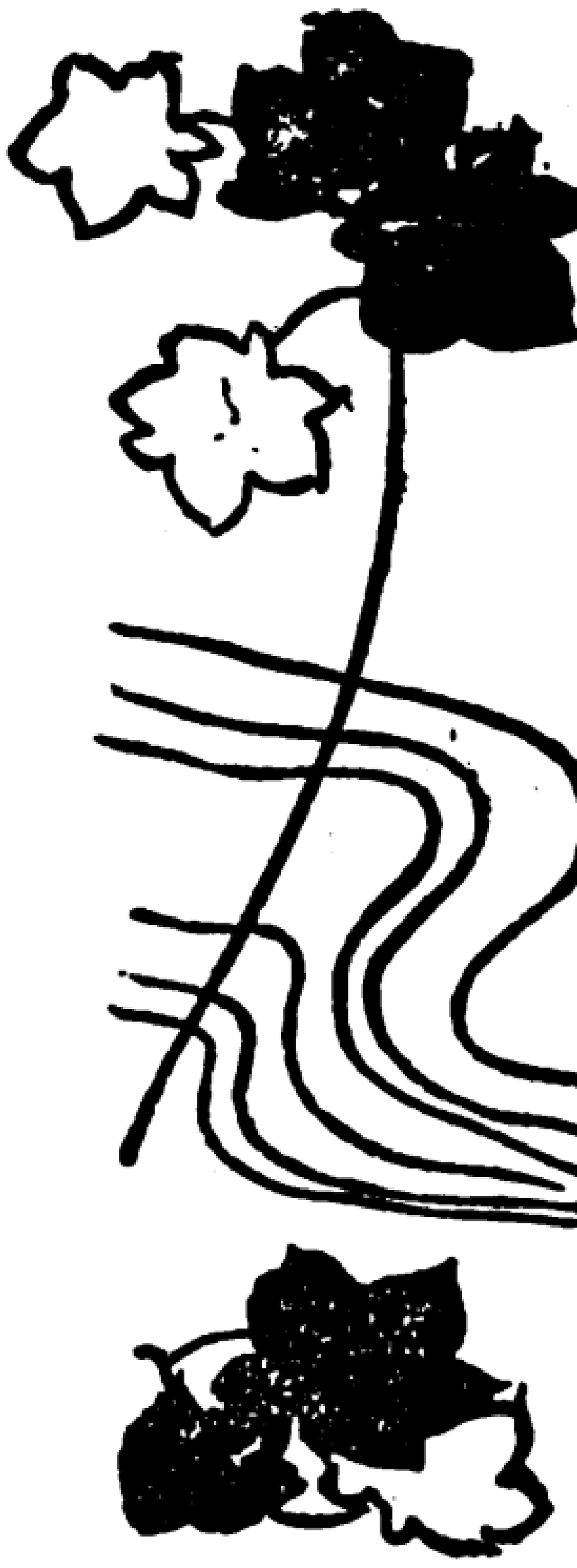
△不得要領と得要領

更に頭腦の具合に依つて婦人を觀察すると、第一頭の極めて良い女、即ちはつきりとした女、次に頭はやや不得要領でも那所かしつかりした女、それから頭は不得要領でも何となく好い女等色々あるが、此の中何種の女が主婦として又其他女の職分を果す上に於て最も好く自分の境遇を開展せしめて行くかと言へば、第一が頭はやゝ不得要領でもしつかりした女、次が何となく好い女で、頭のはつきりしたのは最も不利の地位にあるらしい。男が世に處するのを見ても矢張り其の樣である、不得要領の者は得要領の者よりも何かにつけて勝利を得てゐる。こは何故かと云ふと、餘り頭が明白では、周圍が如何しても其れに追ついて來ない、周圍が追ついて來ないとは、其の者が、小にしては一家内、大にしては其國其社會にキチンと當て篏まらないと云ふ事で、我が運命を定むるに就て、勢ひ不利益な地位に立つのであらう、特に男子は、まだしも其の

明白な頭腦を專門の仕事に向けて、其れで身を立てゝ行くと云ふ事もあるが、婦人は多くは家庭の仕事を爲すべきもので、其樣な明白な頭は殆んど要らぬから、矢張り不得要領に限るやうである。蓋し不得要領は女の成効の秘訣で、或は其れが却つて得要領であるかも知れない。(文責記者にあり)

貴婦人と裝飾品

生活の度の高まるに連れて上流社會の贅澤品もます／＼華美を競ひ風流を爭そふに至りぬ、故田中宮相夫人が在世の時小村外務大臣夫人代理として或年の天長節夜會に臨みし時の衣裳裝飾其他一切の裝飾品を込めて身に着けし物を價に積れば六萬圓以上に登りしと云ふ歐米各國に在りては常の事なれど我國の富の程度より見れば聊か人の注意を引かざるにあらず、今日にて此美術裝飾に趣味を有せらるゝは過日伏見宮より御降嫁ありし山内侯爵夫人にて、夫君たる侯爵も亦た寶玉類の嗜好は專門家も舌を捲くばかりにて、今回洋行さるゝにつき侯爵夫妻の所持品ブローチ、ピン、首飾、釧其他の裝飾品一切を收むべき函を玉寶堂に命じ造らしめられたりと、岩倉公爵夫人は流石に交際界の女王と云はるゝ丈ありて裝飾品の嗜好衣裳の意匠など頗る人の意表に出づるものあり、玉寶堂白木屋等に衣裳裝飾品等の注文も決して商人任せ抔にせず趣味と美術とに重きを置かる、鍋島侯爵夫人も同じく交際界に覇權を握り居れど嗜好は派手な方にて澁好みにあらず、桂侯爵夫人は一時四千圓のブローチにて有名なりしが近頃はあまり此方に浮身を扮されず西園寺家の御部屋は衣裳にこそ流行に趣味を持てるも寶玉の方にはさまで心を用ゐずとなん、元來貴夫人がブローチ、首飾に高價を拂ふも交際上已むを得ざる事にて單に贅澤として排斥すべき譯の者ならず、腕輪は大禮服の時こそ用あれ常に用なきものなれば、いかに裝飾品に嗜好を有せらるゝ貴夫人も、ブローチ程には趣味も持たず貯へもせずと、加藤高明氏夫人は里が里だけに裝飾品の贅澤は決して人に讓らず、穗積八束氏夫人も裝飾品には浮身を扮す方なりと、ブローチはどれだけ安直なものにても六百圓を下らず高きは五千圓を上ると云ふ。



女の長所と男の短所

法學博士　新渡戸稲造

▲百姓の元祖は女なり

農業の歴史を遡れば、百姓の元祖は男で無くして女である。之れは如何云ふ理由かと調べて見るに、昔、男は山へ行つて獵りをして食を得たが、いくら野蠻時代でも女には其んな烈しい仕事は能きない。成程希臘のアマゾンの昔話では女が兵隊で男はぶら〳〵遊んで居る。そして乳房があつては弓矢を用ゐる邪魔になると云ふので、其れを切つて、特性を一變して迄男の業を營んだ、と云ふ事もあるが、其れは例外で、女は骨格から考へても獵りなどをするのは不適當である。そこで自然肉食を得るのは男の仕事となり、女は家に居て亭主の持つて歸へる物を料理する、傍ら何か奮鬪しないで食を得る考へから、若菜を摘む、野菜を作る、と云ふ事になつて、是れから農業が起つたものである。此の一例に就て經濟的の關係を見るに、男と女とは互に分業になつてゐるが、去らばと言つて、ヘイ左樣ならと全然分れて了ふわけには行かぬ。肉類も無ければならぬし、野菜類もなければならぬ。即ち分業と同時に合業と云ふ事が必要である。此他にも色々例はあるが、只だ此の一事から考へて見ても男女は互に親しくしなければならぬと云ふ事がわかる。

▲智能の働きに長短あり

で一步進めて智能の働らきを見るに、一體男と女とは腦髓の構造が違ふと言ふ人と、或は違はないと言ふ人とある。又獨逸のエビルライ氏の著書を見ると、色

色の研究を掲げた末に、今日の醫學上では到底明かには言へないが、何處か違つて居るだらうと、云ふ樣な怪しい事を言つてゐる。併し乍ら、其の構造は兎に角女の腦髓の働きは男に比して確に敏捷であると云ふ事は言ひ得るやうである。バツクル氏も、女の頭腦は演繹的で、男のは歸納的であると言つて居る。男の腦の作用はどうも遲いやうである。恁う云ふ事は可いか否いかと云ふ問題が起ると、男ならば先づ考へて見る。殊に私などは色々參考書を持ち出して段々とやつて行く。彼方此方調べて漸く可いとか否いとかと言ふ。所が女は一足飛びである。理屈も何も無い。一寸見ると直ぐ判斷がつく。其れが中たると大變都合がいゝが、多くは八卦のやうなものだ。從て女怜悧うして犢賣り損ふと云ふやうな事も出來る。と言つて男のやうに、火急の際にゆる／＼統計表を見てかゝらねば判斷が附かないやうでも困る。智能上に此相違あるが故に、男と女とは矢張り互に長短相補ふて行かねばならぬものである。

▲日光に榮ゆる女の美質

又道德上の關係から言つても、女は男の力に依つて世を渡らなければならぬと同時に、男は又女から敎へを受けねばならぬ事がある。女から敎へを受ける事を知らぬ男は、人として圓滿な發達はできない。テニソンであつたか、眞の人間は女性と男性とを一身に合はせたものだと言つて居る。女の樣に柔らかく、男の樣に強く、此の二性質が具らないと眞の人間とは言はれない。武士だと言つて只だ肩を怒らせてゐるのは猪武士である。眞の武士は情けがある。女子供から敎訓を受くるの明なき者は眞に勇悍な者とは言へぬ。然らば如何なる點に於て男は女から學び、女は男に敎ふべきかと云ふに、私は愉快とか樂しみとか云ふ點に於て然かありたいと思ふ。男は奮闘的である。外へ出ては始終戰をしてゐる。兎角世の中は思ふやうには行かない。癪に障はる。折々は痩腕振つて擲りつけて遣りたい事がある。家に歸へる時は憤々してゐる。と、家では妻

や娘や姉などが陰氣で内氣でベソ〳〵泣いて居られた日には、男も居たまらないから、そこで女は内氣を捨てて愉快な感じを男に與へるやうにしなければならぬ。誠に分り切つたやうであるが、何も珍らしい事を言ふ必要は無い。只だ其の實行を望むのである。獨逸の詩人ウーランは、女は日光に榮え男は雨と嵐で力を養ふ、と言つてゐる。女は勿論艱難に於ても成長するが、一ッには此の日光に榮える性質を、男に移す樣に力められたいものである。

▲物事に耐ゆる勇氣

次に、女は男に較べると忍耐力が強いものである。男は勇氣はあるが、退いて我慢をすると云ふ事は迚も女には及ばない。私は是迄多くの學生に交際つて見て、十人中七八人迄は、母の苦心、母の惠みで學資を得てゐる事を知つた。思ふに女子の學生も矢張り其樣であらう。母の此の忍耐が無かつたならば、恐らくは我國今日の敎育の隆盛は見られなかつたであらう。其他總て耐ゆる力は女の方が強いのである。此の物に耐ゆると云ふ精神—勇氣も亦男に注ぎ込むべきものゝ一であらうと思ふ。キングスレーの詩に、稼せがにやならぬ男の身泣かねばならぬ女の身、とあるが、泣き乍らも失望しないで、ぢつと耐えてゆく。こゝが女の偉い所で、男には能きにくい事である。

▲女は同情の化身なり

今一ッは同情心である。之れも男よりは女の方が強いので、人の憂ひを見ては直ぐに悲しく感ずる。固より風俗流行に追はれると云ふ好くない點もあるが、其の好い方を言ふと、女は同情のものである。世の中には同情の無い爲に厭世に陥り、自暴自棄になつてゐる者が澤山にある。一言の同情あれば生き回へる者が尠なくは無い。そこで女は其の得意な同情心を以て之を

敎ふ事をしなければならぬ。學者グラモンドであつたと記憶する、人間の子供は動物の子よりも成長が長くかゝる理由を說いた中に、恁う云ふ事を言つてゐる。外の動物は生れると直ぐ步いてゐるが、人間は生れて二三年經つても乳ばかり飮んで居て口も利かぬ。十五六歲になつて漸と人間らしくなつて來る。造物者は何故恁う無駄な事をするだらうと思はれるが、併し長く乳を吸はれても間に合ふ計算が出來てゐる。それは親子の倫理的關係が一生涯つゞくといふ點に於て勘定が合ふのである、即ち動物は親子の關係が極めて少ない牛は三ケ月も經てば親子も敵同然になる。即ち親子の關係の密着な時期が非常に短い。隨て思ひ遣ると云ふ倫理的の關係が發揮しない。所が人間は自分で哺育する時間が長い丈け其れ丈け愛情が增して來る。同情の念が强くなる。里子でも同じである。十年、十五年と一緒に居て、何から何迄世話をして遣ると、何うしても離せなくなる。換言すれば、人間は愛情を起す爲に動物的の發達が遲くなるので、愛情或は同情は人間に於て初めて深きを見る事が能るものであると。余は即ち婦人は此の愛情、此の同情を以て男子に對すべしと言ふのである。

▲之を男子に授くる方法

以上、愉快、忍耐、同情の事を言つたが、之を男子に授けるには自ら方法がある。此の人に同情を注いで遣らう、忍耐を敎へて遣らう、などゝ言つてゐる樣では到底駄目である。以心傳心で無ければ可けない。其れには心から溢れる同情、愉快を以つて、愉快を與へやうと思ふならば、愉快が如何だ斯うだと言はずに、不愉快を面に現はさないやうにしなければならぬ。移す移さぬは兎も角として、自分の心に愉快、同情、忍耐の念を養ふのが專一である。決して移さうと思つて移るものでは無い。『映るとも月は思はずうつるとも水は思はぬ廣澤の池』。恁う行かなければならないのである。之を要するに、婦人と男子との交際は魂靈其のものゝ交渉であるから、是に處するの秘訣を尙は縮むれば、各自心を靖かにして相交はると云ふ事にあらうと思ふ。（富士見町敎會婦人會に於ける講話の大要）

榮華の名殘

並河良孝

巴里チユレリイス花園を逍遙するものは、一年二回一月と六月に黑の喪服を身に纏ひ、杖によりて樹陰をさびしく歩む白髮の老婦人を見るであらう。いふべからざる悲哀の色は、面にあらはれて居るが、然し五十年前、全歐洲を震動し、幾萬の佳人をして、その美を羨望せしめた絕世の美が今に尙其面影を殘して居る。時めきたる花の盛りはいはずもがな、此の老境に入りても。尙道ゆく人の注意をひくのである。此の婦人は誰であらう。マリヤユーゼニーとて、佛の前帝ナポレオン三世の未亡人その人である。曾ては、榮耀榮華の夢に、金殿玉樓に起き伏して、數多の月卿雲客才子佳人に冊づかれた身の上である。

彼女は人知れず一年二度、佛國リビーラ河の邊に避寒して、二三週間、巴里に滯在するのである。その旅館は、コンテイネンタル、ホテルとて二階の窓から巴里大公園が見える。これは、曾て彼女の一私園であつたものである。從者とては、ビートリ執事、女の友たるデ、アロンバイユ、二人の侍女と一人の下婢ばかりである。變はれば變る浮世かな。

巴里滯在中、彼女は極めて質素なる生活をして居る。朝は早く起きて運動し。好天氣の日には、チユレリース公園を歩みて顏色もいと冴ゆれど、雨風强き日には、外出せず、天氣麗かなるときは、自働車を驅り、博物館に入り、博覽會を見て趣味を養ひ、また昔馴染の心あつき友より、訪問をうけて、靜にくらして居るのである。

英國に於ける彼女の邸宅は、時には饗應を催して、昔なつかしき面影を、偲ばしむることがないでもないが、曾て后たりし佛國巴里にあつては、一度もかゝる

ことはない、その昔し食物の美味といひ、四圍の壯麗といひ、花を欺く佳人といひ、當代の皇室にしてこれに及ぶものなかりし、大帝國の皇室として、時めきし佛の宮殿、無量の感想湧いてつきざる皇城を前にして一旅館の二階に在つて、人を饗應するの勇氣が、如何で出でやう。あゝ涙の種である。

今日彼女の、最も時間を嚴守せる事は、さながら時計の樣である。一分時も遲れた事はない。又寸時も食事の用意の遲るゝを許さない。そして長く英國に住つて居たせゐか、蘇國の血統をうけた爲めか朝の飮み物はお茶である。

ユーゼニーは、たゞ佛國に入籍したまでの事で、その外は全然佛國婦人ではない。父方デ、チバ伯は、十四世紀、以太利人の血統をうけ來て、更に西班牙の貴族より出でたもので、母はその先、名門より出て、西班牙に移住したる一蘇國人の女である。祖父はマラガに移つて、酒商をやつたものであるが、商法が繁昌して、後には、合衆國領事にあげられた。かの文豪アービングがその著作中に、彼女が尙あどけなき稚子として、祖父の膝の上に遊んで居た事をかいて居るのは、米人にとつて興味あることであらう。蘇國人の血統をうけ、眼は碧に、膚は雪を欺き、すき透らんばかりの風情にて、髮は黃金色を帶びてやゝ赤く、——今は雪白と變じたれど——實に巴里全都の佳人をして、羨望せしめたものである。痛恨と老齡との爲め、身は屈せるも、尙並み〳〵の婦人より高く見えるのである。

此老境に達したる彼女が悲しみのあまり、無口で、眞面目なのを見ては、その昔し深紅の長靴を穿ち、つや〳〵したる黃金色なす髮は、麗はしき花もて飾られ燦爛たる金銀の珊珠を、脊部にたれ、帶には薔薇の代りに匕首をさし、繊手には團扇の代りに、鞭を持ち、口には卷烟草をふくみ勇氣凛々たる西班牙少女なりしとは、夢思はれぬであらう。

彼女が馬術に長じたる事は皇帝をして愛慕の情、轉切ならしめたものである。然かも今日に於ても駿馬の颯爽たる姿を見るを、無上の快樂として居る。一千八

百八十年彼女五十四歳の時、皇太子最後の地を訪はんとて、亞弗利加に至りしとき、彼女を護衛せしエブリン、ウオッド卿が、馬上深く內地に入るの危險なるを說きて、これに從はしめたのは、却々困難であつたといふ事である。

此のいたましき巡禮に、彼女は數多の記念物を携へ歸つた。慈愛深き我が子の斃れた、丈高き亞弗利加の草花は、今フアーンバラのモーソリユムの壁上を飾つて居る。硝子の器には、皇太子が非命の死に遭ひしときの制服が入れてある。その服には今も尙血痕がついて居る。

フアーンバラにも箇人の所有にかゝる紀念品陳列場がある。皇帝ナポレオンの騎つた名馬の武具も、數多紀念物の中にある。

彼女は半ば英國にて敎育せられ、そして佛帝の覇業にその運命を委せたので、英語をあやつることは、却却流暢なものである、そして女子の高等敎育については、熱心なる賛成者で、己のが姪をソルボヌに送つて學につかしめたる位で、時の保守的な婦人どもを驚かしたのである。今の邸宅フアーンバラには英國生活に必要なるものは悉く備へつけてある。

ユーゼニーは、時めきしときは、流行の卒先者であつたといはるゝけれども、それは地位が然らしめたもので、實際は甚だ質素な方であつた。そして佛國民の國母として立つたときは、華美をつくした樣に見えたけれども、それは只時俗に從つたまでゞある。彼女が帝室費の巨額を服裝に費やしたといふのも、誇大の言に過ぎないのである。美しい化粧品を數多持つて居たのは皇后として必要なものを具へたまでゞある。彼女は常に定まつた色を好み綠色と藍は嫌ひであつた。榮華の日には、彼女の聲は和かにして、花の顏によくうつらひ、式日には、白色と銀色の服裝を纏ふたのであつた。

昔に變はる今の境過！たゞ黒の喪服を身に纏ふて居るのみである。無論今とて衣裳にこる位の餘裕はあれど、それは顧みぬ。前には一季節中に、幾十種の

新裝束を注文したものであつたが、今は一着位に過ぎない。

彼女の財產は、精確な所は知れぬけれども、大したものだといふことである。彼女がナポレオン三世の未亡人として、佛國共和政府に對して、起したる訴訟事件は、彼女の勝利に歸した、前帝の私有物として、數多の寶物のルーブル博物館に、コムピーヌに、フォンテイチブローに在るものは皆彼女の所有に歸した。此の總額は一百萬フランク以上である。絕代の寶石として、世界の稱贊を博したるものは。皆賣られて今は無一物である。今後彼女の大身代が、誰の手に落つるかといふ事は、人々の噂して居るところであるが、その一部は、その敎女たる西班牙の若き女皇ヴイクトーリヤ、ユーゼニーに與へらるゝであらうといつて居る。

彼女は主として旅行に月日を過し目先きの變るのを何よりの樂みとしてゐる、曾て住みし跡、殊に亡き子息の最後の地などは、無限の感慨を以て訪ふのである前帝を喪ひてより、埃及へ再び旅をした。これを彼のスエズ運河開通の際、橙紅色の絹の天蓋の下に、ボスフオラス海峽を橫ぎりし、榮耀の絕頂なりし往時に比して、其差果して如何。

後年、以太利を漫遊して、ベスビアス山に登つて皇帝フランシス、ヂヨーセフに謁見し、昨年五月には。八十五歲の壽を祝し、八月にはヨツト船に搭じてスカンデイナビヤ海を航行して獨のウヰルヘルム二世皇帝の歡迎をうけた、獨の此の皇帝は、先年ナポレオン皇帝を皇位より下したものゝ皇孫である、感果して如何であつたらう。

彼女は、緣談の取持に骨を折る事が好で、若き英國王女バツテンベルグを西班牙皇帝に配偶せた事がある。

今日の彼女は、悲しき一介の女で、胸にきざまるゝ記憶を滿足せしめん爲め人目にかゝらずに旅行せられることは、最も嫌惡せる敵といへども、尙これを見て嘆稱せざるを得ないのである。



虚榮の浮雲

懺悔女

妾はいと〳〵罪深き女にて候ふよ。あはれ深き御心もて。暫し假名を許させ給へかし、我身ながら我名の恐ろしきに、且は、深き慈愛の露より外に、葉末の雫ばかりの咎だに在しまさぬ兩親の名さへ重ねて汚し參らせんことの、餘りに空恐ろしく候へば。

幾度か淨瑠璃に聞き候ひけるよ。鈴ヶ森に目も眩む笹槍の銹となりにし、白木屋の駒女が。世に恐しき罪は、今は妾の罪となりて身を責め申し候。駒女は言ふに言はれぬ譯ありてと最後の際に、世は同情に泣き候ふとかや、妾は、ア、妾は足ぬ身の不心得より、行末かけし良人を社會より殺しまゐらせ候、妾は實に過去に例なき魔女にて候ふぞかし、虚榮は身を斬る斧とは古の聖人の訓へと物の本にても見、師の君にも聞きつるに、今こそ犇々と思ひ當りて候かな。然れどア、千尋の蒼海は干潟ともなれ、桑園ともなりなん。妾の罪は償はるべき期とては候はず。せめてもの懺悔をかくこそ殘し參らせ候。

二年の後は斯くぞとは知らず、妾十九の春、花は今ぞと兩親も勇み給へば、妾も浮き立ちて、何某會社の役員に嫁ぎて候、初めて結びし丸髷に、赤き手柄の、顔紅めたる花嫁振りも暫時、舅姑すらなき若き夫婦の蜜より甘き樂しき日のうつり行くまゝに、妾の心に物足らぬ氣の催ふしたる、此れぞ恐しき罪を犯すべきそも〳〵にて候ひけるよ。

否とよ。恁る男をこそと、選みたる我れこそ罪惡の萠芽にて候ひし、此の期になりて何包み申すべき、妾とても其頃は、よき緣談の一つならず三ッ四ッは候ひしを、特更に會社員を選びしは、良人の人柄は素よりなれど、心の奥底には人知れず淺間しき考への潛みた

るにて候ふ、そは會社員とし云へばよろづ華々しく、派手なるものと、人にも聞き自らも爾か思ひ入りて居り候ふほどに、嫁しての後の、華やかなる生活を夢みたるに候ひき。果敢なく淺間しき夢や。この惡夢こそ虛榮の魔術の杖より流れて、良人を殺し身を殺す毒汁にて在し候ひしぞかし。思へば恐ろしく、覺悟せし身にも肌寒ふこそ。

良人の收入は思ひの外に多からず候らひき、素より三人四人の普通の生活にはさして不足あるべき筈なき額ながら、妾の虛榮心を滿足せしむべき程にはなく、四季折々の流行衣さては簪、指環などの飾りに淺間しき榮華の夢を見んよしなくて、飽ぬ心の兆して候ひけるに或日のこと、用事ありて町へ出でしに、途中に出逢たるは、學校の同窓にて、今は陸軍士官に嫁たまへる芳子さまなり、何某婦人會とやらの歸途とかにて甚けば〳〵しき黒縮緬の紋附、裾の模様は夫れと知るべき樣なくて、絹天の膝掛目醒る計りなるに包まれて、麗はしき車に召したるが、白襟氣高う、箱迫の鎖りも時計のも、はた綴錦の帶を小氣味よく〆たる帶締の金具も、いづれ眩しき黃金。良人なる士官方の勳章とも見え候ひしに、指環の寶玉は何と云ふものにや、リボンのピンと共に日影に冴て華々しう、實に當世貴婦人とこそ見參らせたるが、いと鷹揚なる狀にて妾にも入會を勸め給ひ、交際社會の派手なる樂みを、目のあたり見るやうに語り給ひぬ、妾は何故かこの時ほどうら恥かしく感じたることはなし、そは何故ぞ？　とは知らず、自ら路傍の乞食にも零落れたるやうに覺え、我身裝の如何にも見すぼらしう思はれ候ひき、さりとて當時の妾は、決して見苦しき迄に粗末なる裝ひにてはあらず、いな、むしろ妾の身分としては、贅澤過ぎたる程の絹衣づくめにて候ひき、あはれ、魔杖より流れ出る毒汁は早や妾の骨に入り候ふぞかし。

芳子さまに分れてよりも。同じ婦人會の戾りと見參らする華やかなる氣高き婦人に出逢ひ候ひしこと二人三人ならず、其都度羞かしき心地にて、用事もそこそこに歸り候。歸りて後の妾のよしなき淺間しき煩悶は

申す迄も候はず、襟を喰ひ裂き、簪を投げ捨て、只だ狂ひに狂ひしことの、然りとては淺墓なりし心根や。
其夜良人の歸宅給ひしより、妾はさま〴〵に歎き聞え候に、良人は優しうもその不心得を説き諭し給ひけるも、何でう毒汁骨に入りたる妾の耳に入るべく、拗つ、かこちつ、果は生甲斐なしとまで申してけるに、もと〳〵身に染みて妾を愛し給へる良人は。さてもと叱り得たまはず、望みの程を叶へさせ給ひぬ。あゝ悲ばかり深き良人の情を妾は仇にて返し參らせつるよ。身に世にかへて愛し給へる良人を殺しまつりぬる妾はあゝ鬼？　例しなき罪ふかき女にて候かな。
それより妾は天晴の貴婦人となり澄し候、婦人會、慈善會、看護婦會、音樂會凡ての婦人會に入りて候ほどに黑縮緬の紋附も、看護服も、さては流行の衣裳小道具に贅をつくし、箱迫の金鎖、時計の金鎖、寶石の帶留、指環、俥の膝掛も夏冬の二つ、傘よ下駄よ、何一つ不足なく買ひとゝのへつゝ今日は婦人會、明日は慈善會と、日毎に出で歩き候ほどに、交際費も少からぬ額となりて候。その金の出所も知らず、只だ虚榮心の滿足に浮かれ浮かれて、衣裳道具の殖ゆる毎に、良人の顏色の著るしう變れるすら何の氣も付かで過し候。あな、妾が浮れ歩く間に、良人は如何に苦み給ひけん、如何に煩ひ給ひけん。妾が日々に美しうなり行くとて自から誇り顏なる間に、良人は日々に窶れ給ひぬ、痩せ給ひぬ。あはれ、妾はかくても尚ほ知らで過してけるよ。我ながらおろかの女よ淺間しき女よ。
雨多き春の日、花落て泥土に塗るゝ夕間暮なりけり常になき良人は酒氣を帶びて歸り給ひ、書齋に入りて書類など始末し給ふ樣なりしが、軈て妾を呼びて何事をか言はんとし給ふ樣なりしも、怪しう口籠りて止み給ひつ、其のまゝ那處ともなく出で行き給ひぬ。怪しとも思はれしが、さしも心付ざりし不覺さよ。その夜は終に歸宅たまはず。扨ては隱くし女にてもと、あらぬ嫉妬に恨みの數々、下女を相手に並べ居たる翌の朝、驚かれぬるかな、嚴めしき警官二人會社の重役同道にて良人を捕へんとて來りぬ。

良人には罪なし、妾こそ費消の本人にて候らへ、妾の罪、そを良人は身に負ふて日蔭者となり給ひぬる、妾は最愛の良人を殺し了んぬ。社會に生命なき優しき良人は、あゝゝ今那處の果てに、落花の風に恨みを寄せ給ふやらん。あゝゝ妾は良人を殺し了んぬ。甚く罪ふかし、救はるゝ時のあるべきや。鈴ヶ森の笹穂の錆槍は、今妾の胸を劈ざき候ぞかし。涙も出で候はずたゞ最後の一念を虚榮にあこがれたまふ婦人に參らせて、この罪の軀を捨て申候、かくしてせめてもの妾の罪を救はせ給へ。あなかしこ

好物はよく消化す

▲齒に馴れぬ食物は惡し　近頃我が刀圭界が其治療の基礎を西洋の術に置くは一應道理なれど、それが爲め却て病氣の經過を惡しくする事あり、元來日本人の食物は祖先よりの先天的習慣により歐洲人等と自ら異なるものにて、現に十數年他國の食事に馴れたる者すら會々故國の食膳に就けば心中の喜悅自から笑顏に現はれ如何に大食するも身體を損ふ事なきより見れば、習慣が消化機能に大なる關係を有する事明かにて、從てこれと反對に齒に馴れぬ食物は消化良しからず。

▲好物が一番消化早し　消化の一番早きものは好物にて、好まざる物の消化極めて遲きことは、彼の蕎麥好きが山程積み上げて片端より平げ舌甜めずりして終り氣なきにても知るべし、それを若し蕎麥嫌ひが僅か一杯を食して、胃の一部をも充たすに足らざるに、早くも胸塞がり他の食を望むの勇氣なく、はては時經て實物の儘吐瀉することあるにあらずや、之れも精神と神經の作用にて好むものなれば、只話を聞きし丈けにても已に唾液を生じて胃の腑より消化液出迎へ居るなり、又好まざるものにありては、俗に嘔唾が走ると云ひ消化の調和を失ひ不快なる唾液の出で來る許りか、僅か一片の胃に入りても消化の運動極めて鈍く、爲めに空虛はあれど何物も容れ得ざる始末となるなり。

▲如何にして胃腸病を治すか　斯る次第なれば世の醫者の胃腸病者に油氣強きものを喰はせざるなど已に間違にて、油氣物を用ゐて養生せし者數多し、現に或る女の多年胃を患みて不治と諦めたるを診察したるに、如何にも胃の調和惡しきより、前の醫者は如何なる養生法を取りたるやと問ひたるに、玉子、粥、鹽氣少き魚類の外食すべからずと告げられ自分は粥は口にするも嫌なれど餘儀なく用ゐ居れりと答へし故、然らば何が好物なるかと尋れ、其好物なる鰻を少量與へしに、翌朝になりて今迄每朝吐氣を催ほしたるも其朝に限り其惱みなく、且つ非常に心地よしとの事にて、其後彼れは每日鰻を食して二ヶ月目に全快したりとの例もあり、只注意すべき事は好物の中には隨分害ある物もあるべければ醫者に問ひ糺して用ゆるが宜しく、又好物なりとて決して多量に用ゆることなく、今少し欲しと思ふ程度に止め置くべし。

才媛藝術觀

繪畫に於ける女の畑

河崎蘭香

私は子供の頃には繪とか其他手藝に屬する事は全く不得手で御座いまして、寧ろ讀書とか文を作るとかと云ふ事に趣味を有ち、又其の方が上手であつたので御座います。其頃一年ばかり繪を習ひましたが、それはほんの初歩で勿論繪と云ふ程のものではありませんでした。それから親達が私に何か手藝を覺えさせて置かうと考へられて、恰度父が大變繪が好きでしたから、つい私に其れを學ばせる事になり、十六の年かに京都へ出まして、菊池芳文先生に就て花鳥や山水を三年ばかり習ひました。

恁んな次第で、私は繪に就ては何等の天才も無く、又左程深い趣味を有つたでも無くして習ひ始めたものですから、今でも十分なものは書けませんが、たゞ、修養を重ねて見ると、自然面白くもなりまして、つい深入りを致したので御座います。

今から顧みると、以前は隨分氣樂な考で居りまして、まだ繪の事は深くは存じませんし、無論人様のお書きなすつたものを拜見しても、那邊が良いのか見分ける程の腦も御座いませんでしたから、大家には何時でも成られるものゝやうに思ふて居りましたが、扨て習つて見れば見る程底の知れない深いものなので御座います。

其樣から致して居ります間に、女が花鳥山水で貫すと云ふ事は如何かしらと考へました。花鳥は兎に角、山水を書きますには、勢ひ汽車で彼方此方飛び歩いて名勝古跡を探ぐる事が必要でせうが、女には其れは却却能きにくい事で御座います。其れ故、女は人物を書くに限る、之れならば、縱令一室に引籠つて居ても、想像でゞも何うか斯うか書けやうと思ひまして、數年前當地へ出まして、寺崎廣業先生に就て學ぶ事に致し

ました。が、來て見ますと、東京の方は皆な人物を畫くのが器用で居らつしやるのに、私は少しも畫けませんので、初めは大變苦しみました。

人物畫も色々ありませうが、女には矢張り美人畫が適して居るやうで御座いますから、私もどうか此の方をみつしり遣つて見たいと存じて居ります。男と女とは互に眞似る事の能きない特色があるやうでして、婦人で手荒いものを畫かれたのもありますけれ共、多くは失敗のやうで御座います。弘安の役とか何とか云ふ風のものを畫いて見ましても、どうも男の方が畫かれたやうに上手にはゆきません。と申すのは、つまり女は優美とか愛情とかゞ生命で、其れが總べての思想を支配して居るものですから、何うしても着眼點が男とは違ふので御座いませう。アの京都の上村松園さんは、私もちよい〳〵お目にかゝつた事のある方で、ずッと以前から美人畫ばかりを畫いて居られるのですが、實に良い處へお目を着けなさつたものと、常々敬服致して居ります。

美人畫には、構想や畫題が、雄大とか崇高とかと云ふ風のやかましいものでは、迚ても成効はしないやうで御座います。女は那邊〳〵迄も閑雅で、無邪氣くて、愛情に富んで居ると云ふ事が長所ですから、美人を畫いても、此點を發揮させねば、ほんとうのものは出來ません。そして之れは女の日常の極く細かい動作の上に現はれるもので御座いますから、其處を捉へて畫くと良いのですが、私のは兎角其のやかましい側になりまして、何時も失敗を致します。此點から申しますと、榊原さんが、よく子供や猫をお畫きなさるのは、大變良い御思付かと思ひます。

繪の構想は私は大抵靜かに一室に居る時とか、或は野外を逍遙したり、木の下陰を行つたりする氣持の良い時に得るので御座います。讀書の間に思ひ附く事もありますが、其れを繪にすると云ふ事は一寸難かしい事で、兎角書物にある事實に拘束される氣味があります。言ひ換へれば、畫いたものが恰度新聞の挿繪のやうなものになります。何時ぞやも、塚原澁柿園の「淀

君」を讀みまして、大層面白いと思ふた事を一ッ書いて見やうと思つて試みましたが、そんなわけから何うも思ふやうに行きませんでした。それに書物を讀んで居る中は大變面白いと感じた事柄でも、一體繪には時間的の經過の間に出てくる妙味を現はす事が能きませんから、之を繪にして見ると意外に詰らないものになると云ふ事もあります。波が岸を洗ふてゐる光景を畫かうと思ひましても遠く波が消えていつて、更に波のうねりが寄せて來る有様などは、何うしても現はす事が能きません。恁んな事を致して居りますと、一寸外を歩きましても色々のものが目につきますが、その注意の集中點は一の調和で御座います。一人の女を畫きましても、衣服の配色が調和を得て居らぬときは、いやらしく目立つもので御座いますから、總て物は何んな風であれば最もよく調和を得るかと云ふ事に就て常々注意を致して居ります。其の外にも色々目を惹く事がありませうが、其等は繪を書く上には極めて



瑣末な事であらうかと思ひます。

兎に角繪を書くに就てはいろ〳〵苦心が御座います。特に私は生れつきの才も無くてたゞ努めて遣つて行かうとしますから、非常に頭を痛めますが、それにつけても、之れ丈けの力を家事向の勉强に注いだならば、女として何んなに樂しく何んなに大きな仕事が出來るか知れぬと思つて、繪を學ばうと申される方に常常それを申上げるので御座います。

我が嗜好としての繪畫

榊原蕉園

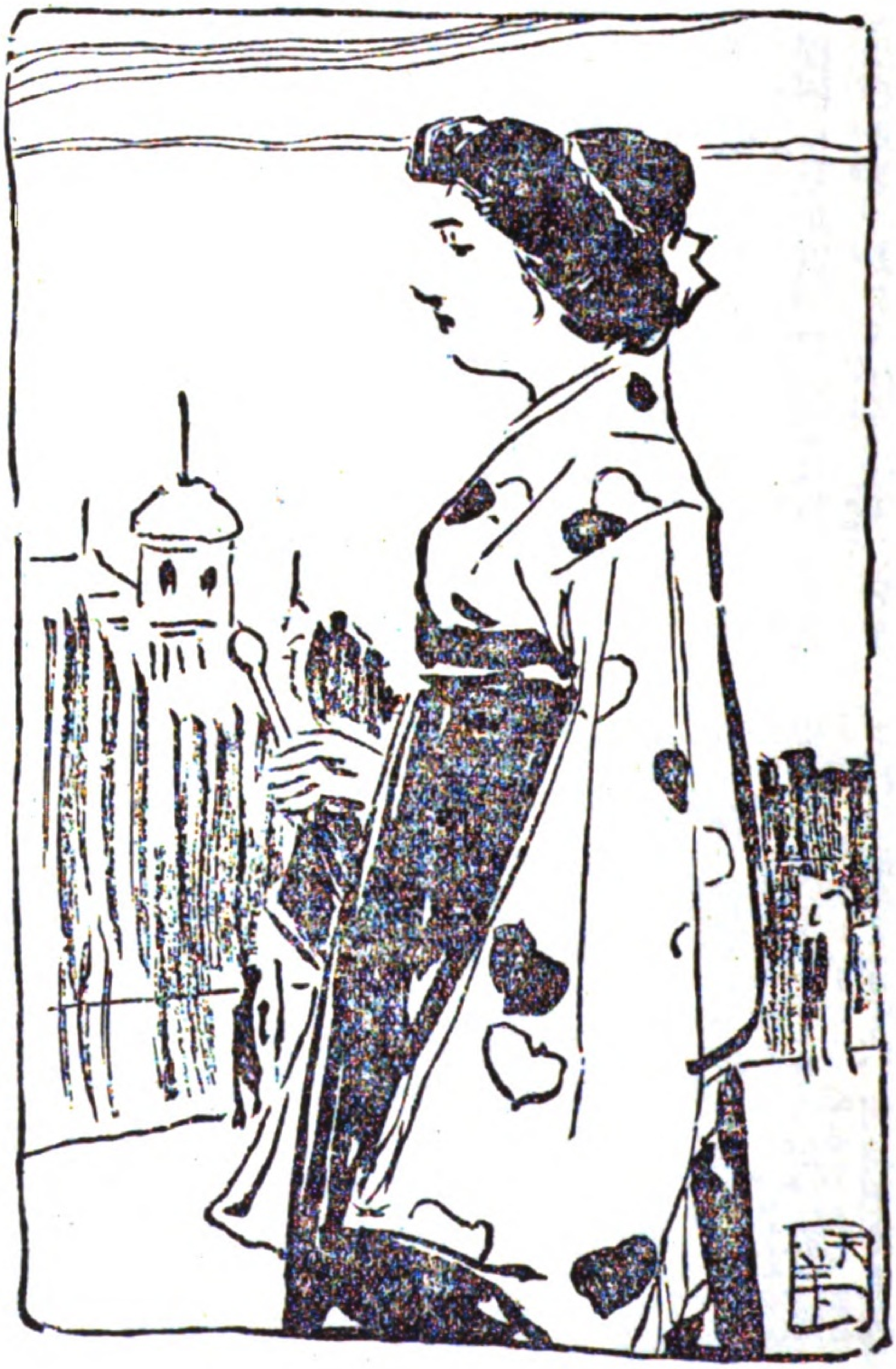
繪はまだほんの初歩ですから、苦心も致さねば上手なものも出來ません、たゞもう好きで書いてゐる丈で御座います。母の話に依れば、繪は三四歲頃から書いて居たとかで、今神田で醫者をして居られる親しい方が其頃よくおいでなすつて、サア百合ちやん繪を書いて御覽、と言はれると、何時も喜んで書いて見せたさうで御座います。何しろ子供のうちは、お客様があつたりする時に、むつかりでもすると、紙と鉛筆をあてがへば直き柔順しくなつたと申しますから、ほんとに好きだつたんで御座いませうね。

小學校へ參る樣になりましても、暇さへあれば石盤に人形ばかり書きました。其後女子學院へ三年ばかりも通ひましたが、其頃の手控は今でも有つて居りますが、見ると二三枚毎に必ず何か繪が書いてあります。此處は御承知の通り外國人の居る學校ですから、其れが非常にやかましう御座いましたが、それでも其樣な事を致しました。

恁んな風に、たゞ好きで〳〵、最初は石盤に書き、次に紙に書き習ひ、そして宅にある草双紙の繪などを見ては、面白いから寫して見、眞似て見、其れに色彩を使ひなどして段々書くやうになりますと、兩親が其樣なに好きなら少し習つて見たら良からうと言はれ、十六歲から水野年方先生に就く事になりました。

父も大層繪が好きですし、母も若い頃には西洋畫を少しばかり學んだ事があり、それに私の妹が八歳が下で三人居ますが、皆んな好きで、私が寫生をしてやると申しますと、常時おやんちやんなのが急に柔順しくなりますが、恁んな處を見ると、繪を好くのは皆んな傳いてゐるのかも知れません。

好きでなければ迚も恁んな事は遣られませんね。今宅に居る鶴ちやん（お弟子）と私とが恁うして書いて居ますと、人が來られて、よくまあ其様な面倒な事を遣つて居られるね、と言つて笑はれますが、それはほんと骨が折れるんで御座いますよ。



六ケ敷いのは顏で御座いませうね。一番人が注意する所で、之れがおかしくなつて居ては繪は全く見られません。目鼻を書くのは最も後で着物の模様も色もすッかり着けてからにして居ります。……

サア何故で御座いませうかね。私は只だ先生が其様せよと仰有つたから其通りにして居りますが、又恁うしますのは樂しみでも御座いますね。パッと目を明けて

與れるでせう。其れが嬉しいから、體も何もすつかり書いてお仕舞になる迄、大事にとつて置くんで御座います。

私の書く顏は何時も同じだとよく人から笑はれますが、實際其樣で御座いますか。自分では、先きには眉の上つたのを書いたから、今度は少しく下げて見やう、目は今度は圓くして見やう、細くして見やう、などゝ色々變つたのを書く積りで、其樣なに同じだとは思ひませんが……。

此の屏風は三年程前に書いたのですが、其の元祿婦人は如何ですか。矢ッ張り此頃書く顏と似て居ますか。さう！。異つて居ますか。では恰度昨日書いたものが御座いますから、一寸御覽に掛けませう。之れですが……。オヤ、矢ッ張り似て居りますか。

其の女の後に在る櫻樹は私が書いたのでは無くて人樣に手傳つて貰つたので御座います。私は勉强しやう〳〵と思ひ乍ら、花鳥や山水はまだ何うも恐くて手を着けられません。また荒手の人物も能きませんから歴史的のものなども書いた事がありません。

女姿の外に書くものは只だ犬と猫とで御座います。

私は子供の時分から犬や猫が好きで、或時も他所から猫を一時に三四匹も貰つて來たので、お前は其樣なに貰つて來て何うする、一匹居れば澤山ぢやないかと言つて兩親から叱られた事があります。其れ程好きな上に、宅には常に飼つてあつて、何時も見て居ますから、之れ丈けは書けるので御座います。

モデルですか？。私は皆な家内のもので間に合はせまして、是迄まだ商賣人を使つた事がありません。誰れにでも着物を着せてたゞ皺を見る位なもので、やゝもすると、女中などを使ふ事があります。

風景畫を書く人は申す迄も無く、私共のやうに人物ばかり書く者でも、折々は外へ出て色々のものを見て研究する事が大切でせうが、私は宅で許しませんから、それは能きません、何時ぞやも先生が修學の爲に弟子達をつれてつい近い處迄行かれましたが、恁んな時には一緒に行つて色々見たり聞いたりすると大變自分の

爲にならうと思つて、行きたくて〳〵て堪りませんでしたが、とう〳〵行つて呉れませんでした。ですから私の書くのは、みな家に居て恁んなものを書いたら面白からうと想像丈で書くので御座います。

さうですね、別段注意すると云ふ事もしない積りですが、それでも綺麗なりで歩いてゐる人があると、つい其處へ氣を取られてゐるので、母なぞによく笑はれますよ。矢ッ張り不知不識注意してゐるので御座いませうね。そして美しい着物を見ますと、何うかあゝ云ふのを着せたものを書いて見たいと思ふて、それから取り掛かる事がよくありますので、宅の人達に、お前のは着物が出來てからでないと繪は出來ないのだと言つていつも笑はれて居ります。

　體の格好などは西洋畫を習つてかゝる方が何うやら調つて來るやうで御座います。ハイ其樣云ふ人は澤山ありますよ。畫と繪で御座いますか。畫が旨くても繪も旨いとは限らんでせうが……。けれ共、宅に日下部鳴鶴先生の御書きになつた梅の幅がありますが、それは大變お上手に出來てゐるから、また其樣かも知れませんね。

　イエ此頃はほんとにお耻かしいんで御座いますよ。以前は、母の有つてゐる双紙が澤山あるから、其れを讀むのが非常に好きで、時には夜遲く迄も讀み續けて目を痛めた事もありましたが、此頃は其樣な事は滅多にありません。小說も一時は隨分讀みましたが、近頃のものはついぞ讀む機會がありません。其樣云ふものでも幾らか繪を書く爲になりませうね。

　繪を書く事は大變好きで、いざ書き出すと、全く其れに夢中になつて、他の事は一切忘れて仕舞ふ位ですが、恁うして終日家に籠つて居ても、月に一枚も書かぬ事もあつたり、また二三枚も書く事もあると云ふ風で書くのは極く僅で御座います。父の知人の方で書いて呉れと仰在ると書いて上げる位のもの…。知らぬ方のは書いた事がありません。

　婦人が畫で身を立てやうと仰有るのですか?。私はまだ其樣云ふ經驗は御座いませんが、若し其樣なにせよと言はれたら、非常に心乏しいやうに思ひますね。

　二十歲位からお初になつても出來るで御座いませうよ。好きな人はそれ迄に大抵寫して見たり何かして居

らつしやらうから。其様な事もしないで居て、たゞ思ひ付いて新規に遣つて見やうと云はれるのは……さう難かしいもので御座いますね。矢ッ張り好きでないといけないでせう。





小さき理想の家庭

幽閑女史

　私どもが結婚しましたのは、今から恰度十三年前、主人が東京の専門學校を卒業まして漸つと某會社の末班に、ありついた許りの頃でございました。何分薄給のことでございましたから、一軒の家を借りるさへむつかしいので、下宿生活をして居たのでございます。ですから心の中には、いろんな計畫を立てゝゐましても思ふ通りには參りませず、其翌年長女が生れて生活は愈々苦しくなりましたけれども、早く思ふ通りの家庭をつくりたいものだといふ一念で、切りつめた中から、極く僅かづゝでも殘して參ります中、主人の俸給も追々多くなつて參りましたので、相次いで長男が生れましたにも關らず、さほど困る事もなく遂々昨年の夏、稍理想に近いものを實現する事が出來ました。勿論立派な生活をしてお在での家庭や、廣い邸にお住ひの方から御覽になれば或は兒戲にも等しいものと思召すでせうが、しかし隨分多分の年俸をおとりの方、地位の高い中にも閨門の亂れたのは少くない樣で御座います。只、私共の誇は平和な家庭で、皆が絶えず修養しつゝ愉快に暮すことが出來るといふ其れのみで御座います。

　私共の家屋は、市街を離れた高燥所にありますので、土塵の憂もなければ騷々しくもなく、空氣が淸らかで極く閑靜なものでございます。屋後は勾配の鈍い岡迚きで、雜木林、松林。右と前が通行路になつて居て、石段を二十ばかり昇ると冠木門になり、左は庭をへだてゝ他家に隣つて居ます。日光當りがよく見晴しがよ

く、門に立つて遠く市街の方を見渡しますと甍がきらきらと輝つてゝ工場の煙突、會堂の塔、寺の屋根などが手にとるやう。往來の前は粗間に風流な借家が建つて居て、其處を見越すと靑いのが田畑、白いのが大川。雨の夕は靄に消えて行く川舟、快晴の朝は鳶が舞ふのも眼の先きで、秋は黄金浪、なつは靑海、螢、ほとゝぎすのと飽く事を知らぬ景色と趣を具へて居るので御座います。其樣な處ですから隨つて水が良うございますし、高塲ですから排水にも都合がいゝのです。屋敷は四百坪餘で其中の七分の五ばかりが菜果園と庭園になつて居ります。家の建物は殆んど屋敷の北部近い中央で右側の通行路の方には、梅や李、まるめろ、其れから林檎、よね桃と申した樣な果樹が繁つて居ますので、往來から見上げますと奥深いやうで殊に花の頃、靑葉の候は眼醒める計りでございます。門を這入りまして曲りくねつた路の兩側には、四季さまぐ\の草花で垣になつて居て、右をみると垣越しに、草花壇や、芝草に被れた庭が見え、左は菜果園で、梨、蜜柑、西洋いちご、葉ぼたん、菠薐草、芋、豆類などを植ゑて居ます。これが粗と百坪。其して往來に添ふた所は、いづれもギンレウ薔薇の生垣にして居ります。所で例の曲道は、やがて分れて、一は玄關に通ずべきものと一は勝手口の方へ行くのとになつて居まして、後者は、蔓草で被つた音樂室を右に見る樣になつて居ります。

屋後は、十二坪ばかりが養鷄塲で、他は柿が二三本あるほかは、三葉だの、蕗だのといつたやうなものが自然生に繁つて居ます丈け。これらの草は鷄の餌、又家庭の料理に用ふるのでございます。

西北隅の小池は、植物を培養まするのに用ひます水溜でございます。所で、まづ屋敷は斯樣なものでありまして、花を四季絶やしませんので、眺めは誠によろしいのでございますが、只一つ私共が遺憾に思つて居りますのは、運動塲としての廣塲が無いことでございます。けれども幸ひ私共一同は園藝について、多少の趣味を解する事が出來ますので、植物の培養によつて食後の運動は充分することが出來ますし又、右がはの

芝生は幼子を寝させることも出來、兄の方や姉の爲めには、鞦韆も御座いまして運動に不自由を感じますやうな事は、まづ御座いません。

私どもは、成るべく土地を經濟的に使ふために、有らゆる土と名の附く所には植物を植るました。花があれば蔦もあり乾燥なところには乾を好くもの、水盤の周圍や窓壁などには蔓草を這はせました。假令ば便所



の所へサンシチを咲かせ、門にはふぢをからませると申した樣に、人工的の拙いのや、見苦しいものを天然物によつて、美化し得るやうに勉めるのが私共の趣意でありましたから。

其れで、ひねくれた松だのこびた庭石のかはりに、延々とした林檎や桃などの可憐さ、美味さ、美しさを以て致しました事で御座います。屋敷に就てはこの位で擱きまして、

此度は、家の事を申しますと、主人の書齋が六疊、應接間が四疊半、音樂室食堂が各六疊、寢室兼主婦の居間が八疊、其他玄關、臺所物置、湯殿、便所等が十坪。二階は八疊と六疊で客室と家具入れ。後者は非常の場合には不便でございますが、好い室がありませんので當分はこの儘に致して置く積りでございます。所で主人の書齋、應接間は椅子によるやうになつて居まして、他は普通の疊敷なのでございます。

次に生活の狀態を申しますと、果物や野菜や、卵等は事を缺きませんばかりか、私共の小人數では、有りあまる位ですから近處の家、または親交の方へ贈るやうに致し、まだ餘分があれば亂費せぬやう、金にかへて、貯へ置き、其れを以て將來は、屋敷を擴め養畜でも、どつさりして……などゝ始終話して居ります。

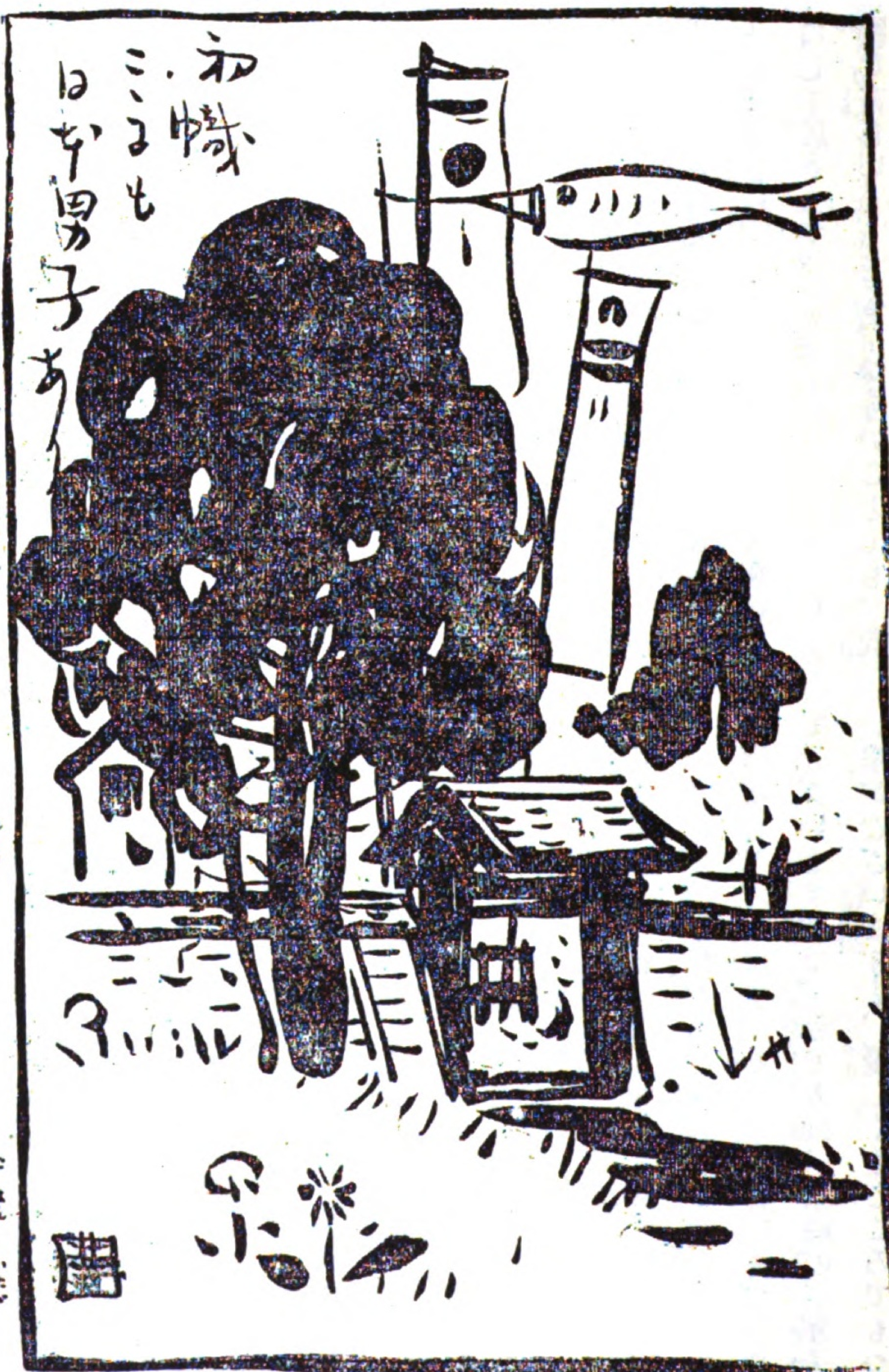
肉類や米、其他の日用品などは市中から求めますが菓子などはなるべく、手前で製へまして小供たちにも遣はし來客にも侑めて居ります。また夏などにはお客でもありますと直に、いちご畑へお連れいたし小供も大供も一緒に摘みつこ位をやつて、いちごミルクに料理したり、桃でジャムをこさへたりしますので自然親しくなりまして、如何樣にはじめての方でも大層喜んでお遊び下さいます。

私共は、決して食物に奢りは致しませんが、衣食住のうちでは、食に重きを置いて居ますから、玄關が美美しいわりに、粗食をして居らつしやるお家とは比較になりません。

來客の節は、どんな方でも食卓を共に致しますので花瓶には花園の花を折つて來ます。卓に上るものも大方は家庭で出來上つたもので、新鮮なのばかり。趣味のある話題と見聞とを交換しつゝ愉快に食事をすましますと、音樂室で主人が彈いて客が唱つたりテーブルの被布を除けてピンポンをしたり、また芝生で遊んだり、やしき内を散歩したりして、歡を盡して別れるのでございます。

また私共では、家庭の紀念日といふものを定めて居

ります。公祭節は申すに及ばず、主人夫婦の結婚紀念日、子供たちの誕生日など、他にいろ／＼と極くつまらないことでも紀念日といふとたしかに一つの歴史的興味を有し詩趣も含んで居るとおもひますので私どもは大いに歓迎して會を催すのでございます。所で主人は日曜の他は大抵午後まで外出するのですから、待ちうけに私共が姉娘を手傳はせて、夕飯の用意を致しますと、弟の方は鶏を鳥屋に入れますのが常で、夕飯は家庭に於て最も樂しい團欒として居ます。其れは數時間皆が顔を合す機會がなかつた事と、子供たちが揃へたお料理でうちくつろいだ御飯が頂けるといふいゝ



時なのですから。

夕飯後は、ゾロ〳〵と主人も子供も、私迄が、乳飲子抱いて園中をめぐりながら、樂しく話したり、或は買物に市街まで出掛けたり、または、近處のお宮だの、川だのへ散歩をいたすやうにして居ります。夜はともに、明るいランプの下で日記つけ、來書の綴ぢ込み、新刊雜誌の合評。子供達は明日の下調べなど、また音樂をもてあそんだりして其日の勞れを忘れ、月の好い夜などは芝生で思ふ樣子供達と戯れたりして夜の更けるのも知らない事がございます。

日曜は來客をうけたり、他を訪問したり、または遠足に、圖書館に、身と心とを練り、雨の降る日は、讀書、著作に暮らし、暇々には園內の手入れを家內總がかりでするといふ工合に、ごく少しの時間でも無益に用はない樣にして居ります。

凡そ如何樣な苦しいことでも、つらいことでも、我家である、共々に助け合つてするのであるといふ一つの慰めをもつてするのですから、皆は喜んで何事をも致し、老婢までが働くことを眞心から面白いやうに思つてしてくれるのでございます。

收入は定まりきつたものですが、負債が御座いませんのと、節約をいたして居りますので、僅かづゝ不事の用にあてることの出來る貯金さへ致して居ります。

私どもは、お互に愛の一字をかたく守つて居りますので、世間にあるやうな不愉快な利害上の問題や嫉妬の上に起る葛藤などに、なやまされるやうな事は決してなく、暖い春の日の光がみちみちてゐるやうに思はれまして、私ども位、幸福なものはないと、皆で滿足いたして居ります。

主人は多く勞れきつて歸つて參りますので、私は申すに及ばず、子供たち、老婢までが幼子を抱いて飛んで出まして、手にすがるやら、笑ひますやら、大騷動でございます。で、私どもは、家庭の一分子によくない事がございますと、優しくまごころでもつて諫め、共に善い道を踏んで行かうと、申し、又行ふやうにして居りますから、私どもの家庭には、秘密もなければ

心配もないと、申す次第で、運動も充分致します故か一同至つて壮健で風邪一つひいた者もございませぬのは何より嬉しいことゝ存じて居ります。

それからも一つは、凡ての物を儉約に心がけて、衣服などは、禮を失はぬ限り、品位を保つ限りといふに定めては居りますが、經濟の點、また、自分たちが度外視して居りますので、先づ身分に比して粗末な方でございませう。けれども其の苦痛は、食を一度忘れたよりも輕いものでございますから、地位だの財産だの着物だのは、失はれ、破れる塲合と時がございますけれど、無形の和樂と、有形の田園とは、まづ、私どもが家庭に於て、永遠だと信じて居るのでございます。

▲●●●●●●●●●日本五大石鹸の賣出　日本五大石鹸とはオリエント、敷島、大和、朝日匂、山櫻の五種にして、大阪市南區西新瓦屋町稲葉石鹸製造所が今度始めて賣出したるものなり、價は舶來品よりも廉く質も亦絶好の品なり、同製造所主稲葉潤吉氏は近年石鹸の粗製濫造に流るゝを嘆じ、且つ舶來品の市塲に跋扈するを憤り、苦心惨憺して、右の五石鹸を發明し賣價を一定し粗製品と區別する爲め、全國官煙販賣所と申合せて賣出しをなすに至れるものなるが、尙實用三石鹸も同時に發賣せり。

働らき盛りに最も多き婦人病

家庭醫者

◎原因のいろ〳〵

ヒステリーはむかし、血の道とか、癪とかいつて、兎角生殖器の不健康から來るものゝ樣に誤まられて居たのであるが、決してさういふものではないで、その原因は頗る多い、其重なるものは遺傳である、殊に母のヒステリーは娘に遺傳し娘のヒステリーは孫　娘にまでも遺傳するものである、それから又誤れる教育法即ち幼時いろ〳〵の窮屈な道德觀念を吹き込む事や精神上の感動や、取越苦勞なども又ヒステリーの原因となるものである。

斯樣な素地のある時は、ほんの僅かな動機からでも、つい本病になる事が多い、其外、貧血、衰弱、營養の不良等は皆ヒステリーの原因である又甚だしく喜んだり、怒つたり又非常に悲んだり、過度に恐怖しい目に遭つたりして精神の興奮する時は遂にヒステリーを起すものである、殊に長い月日の間精神上の苦悩に惱んだ人、たとへは家庭上の不和やら紛紜やら、又生活上、人生觀上の問題について頭を惱まして、而かも、解決が出來ずに、憂鬱に沈んで、其の爲めすべて不決斷に陥り、沈默ばかりをつゞけて居るなどは最もこの病になる原因である。

それから又他の原因としては夫婦の關係も大いに與つて力あるもので、彼の過度に情慾を滿足させたり、不自然なる情慾を遂げたりする時

に起る事が多い。

であるから處女がヒステーリに罹る者は割合に稀であるが、結婚後生活狀態が變化し、又は數回分娩した後、始めて病の發生するものもある、[illegible]、酒精中毒からなる事もあり、時としては身體の負傷、災難からして起る事もあるのである。

要するにヒステリーは多くは身體の纖弱な女性に發するもので。（稀には男子に發することもある）そして、概して劇しい、精神興奮に因て起るもので女子の子宮病、月經不順、卵巢の疾患、流產、產後又恐愕、憤怒、苦心、過慮落膽等も又疾患を惹き起すの原因となるものである、一體婦人は小心、則ち神經過敏、で物事を案じ過ごすところから神經性の病氣を惹起し易いものである兎に角婦人の最も働らき盛りなる二十歲から三十歲の間にこの病が起つて、可惜盛時を憂鬱に沈んで、不愉快に日を暮らし人生の樂みを無にするのは啻に本人の不幸のみならず家庭全體の不利益不幸と言はればならぬ。

◎病狀のさま〴〵

この病狀は非常に多樣で、一括して說明する事は出來ぬ、つまり神經器能を各機關に喚び起すのであるから、諸々方々にいろ〳〵な故障を來すやうに覺え、そして其れが又非常に氣になるのである。

で、一般にヒステリー病者は憂鬱に傾いて、決斷力が鈍り、隨つて精神上の仕事をする力が乏しくなる事である、さうかといつて、決して其人の才能や、智識が滅するといふのではないが、物事を兎角大袈裟に解釋認識する癖になるのは著るしいものである、そこでまづ此の病氣に就てはどんな徵候を來すかといふのに時としては急に何者にか脅かされるやうな有樣になつて、絕へず不安の念に驅られ、氣がなど〳〵して苦しみ悶へることがある。

時としては隨分酷い知覺の錯迷、たとへば見るものが皆人の顏に見へたり、鳥の囀りを聞いて人の囁きと誤つたりするやうに五官の働らきが狂ふことなどもある。

時としては腹の筋が强直つて俗にいふ癪を起して反り返ることがある。

時としては身體に震ひの出ることがある。

時としては麻痺の起ることもある。

時としては呼吸が急速になり、口が利けなくなる事がある。

又月經時に疼痛があつて情慾が亢進したり、又全く情慾が無くなつたりする。

又內臟に障害が來て、消化作用を失ひ、食慾が減じ、又食事の念がなくなる事もある。

又尿が頻繁になつたり、腹痛がしたり、脈が早くなつたり、嘔吐を催ふしたり、欠伸をしたり、半身無感覺になつたり、步行するに直立が出來なくなつたり、又一局部に刺られるやうな痛みを覺へたりする。

斯樣にいろ〳〵の發作があつて、その發作の頂上に上つた時は知覺が亂れ意識はぼんやりとして仕舞ふ、しかし癲癇病みなどのやうに全く正氣を失ふといふことはないのである。

まだ發作の長いのはいろ〳〵であるが、まづ十五分から三十分間位で鎭まり生命に障る樣な事はないのである。

◎療法のあらまし

然らばこの病はどんなにして治療するかといふのに矢張り根本療法をしなくてはいけない、元來ヒステーリの繼續期は槪して長いものであるから別に著るしい徴候が見へぬからとて病勢には何の變りもないのであるから、其病源、即ち精神上の異常を除かれば眞に病氣が治療されたのでなく、折りを得て再發するものである。

まづヒステーリに罹つた時は第一に其原因を究めて、それ〴〵處置をしり若し身體上に弱いところがあれば、速かに必要な治療を施こし、食物は別段特別な營養をするには及ばぬが、なるべく簡單でそして滋養のある食物を採り、酒を禁じ又常に心身の保養に注意し、氣随氣儘にさせて置かればならぬけれどこゝに必要な手當は患者に對する精神上の感化力である、これは醫者がするのでなく、朝夕病者に直接する者がせればならぬ事である、即ち親切に勞はり、患者の言ふ處ろを聽いてよくそれを慰めたり、力をつけたり、穩やかに諭して、規則正しく醫藥を服用させればならぬ、一と口にいへば萬事親切で、痒いところへ手届くやうに介抱して、病人の心を慰め、病氣を鎭めて行かねばならぬ、要するにヒステリーは神經の狂ひから生ずるものであるから、その狂つた神經を整へるといふのが根本の療法である。

でこの病に限つて呪ひが大いに効能あるものである、畢竟患者の心持から生じたものであるから、患者自身で効能あると確信したならば、病の爲めには大いに利益がある。

そこでなるべく喧騒な市塵を避けて、山紫水明の境、白砂青松の濱を撰んで轉地するのがよい。

興奮劑としては純粹な生葡萄酒を用ひ、鷄卵、牛乳ソップ消化し易い食物を用ひ、又電氣療法、冷水摩法、鑛泉浴冷水浴などは大に効能がある。それから適度の睡眠と適度の運動はこの病に藥力以上の効顯がある。尤も睡眠といつても只うと〳〵するのでなく、安靜に熟睡するのである。熟睡すれば精神が安穩になり、過敏な神經が鎭靜するからである。

それから癇癪を起こせる樣な事は一切嚴禁せねばならぬ、癇を起すと精神はよく〳〵興奮し、病勢は募るばかりで、これがヒステリーの大毒であると心得ねばならぬさてその運動といつても何も規則立つた事をやるに及ばぬ、中流社會の婦人ならば下女代りに臺所へ出て立働らきをするのがよろしい。彼の長火鉢の側に一日坐つて居て口先で下女ばかり使ふ習慣をつゞけて居ては、物事氣に入らぬ事ばかりで、却つて癇癪の種になり益々病勢を高めるばかりである、であるから何でも適度の働らきと、適度の睡眠を取り、溫泉や海水浴に行かぬとも、働いた後は湯にでも入つて氣持をよくし、諸々の湧いて來る雜念を他へ拂つて仕舞ふ樣にするのが、この病の根本療法である。

風情雨意

◎雨

雨は風情多きものなり、霜雪の寒さ、いつとなく忘られ、傍らを離たざりし火桶もさのみ戀しからずなり、心しづかに書よむ窓ののき端よりほと／＼とおつる玉水の音のどやかに、柳の枝しづくしたゝり、梅の梢に露をむすび若草の緑をうるほし、春もおひ／＼日數たつにつれて、櫻花はこの雨に催ふされて今や咲き出づらんとおもひやり、咲きての後は散りやせんとこゝろを傷むるなど樣々限りなき感あるべし。

◎雲雀

ひばりは花見に出でたる空にきくゆゑにや、いとのどかなる聲とおぼゆ。あけ渡れる空のかすみに立ちまじり、姿は見えず聲さやかにさえづりつゝ人をして足もそゞろに心もそらにならしむ、つぼすみれ、花さきまじる芝生の上、穗もいまや出なんとする麥生の内などに落ち來るさまもおもしろきものなり。

◎早蕨

野邊山邊の茨のかげ、枯艸の中などよりさゝやかなる拳の形ちして生出でたるは愛らしくも又好ましきものなり、紫金の錦めくものをかつぎたれば紫塵の嫩蕨などいへば唐歌めきておかし。

◎すみれ

すみれもまた甚だなつかしき艸なり、野邊のあそびに出でたつ道、日影うら／＼と照り、若艸の色こゝろよげなる土堤の際、または畑の畔などに濃紫にも薄むらさきにも咲きまじりたるは見棄てゝ行かれずいたづらごとゝは知るもしらぬも摘みとりぬべし。

◎柳

春の景物にはこれなくて叶はざるべし、春まだあさき頃より、この枝次第に色づきて、青みを加へやがて、青柳とも詠まるべきなり、池の汀、川のほとりなどに立つゞきたる柳の嫩芽、細かなる雨の日にほのぼのと打ちけぶりて見渡されたるなどは花にも勝るほどにおもはるゝものなり、柳は風にもよろしけれど又雨に風情あるものなり。

◎春月

春の月はおぼろなるが、その特色なり、はつきりと照るにもあらず、またひたすらに曇りはてたるにてもなく、おぼろ〳〵と薄あかるき月影は、春の月の風情なり、里中の垣根につたひ行きかへば、さま〴〵の花の香の、馥郁として鼻をうつなど、心なき身にもあはれは知らるべし。

◎落花

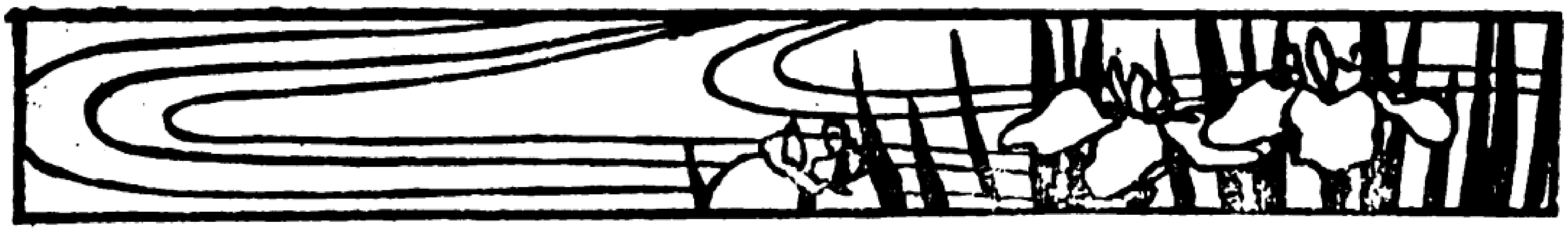
花はさかりをのみ見るものかは、散る時もまたおもむき多きものなり、花びらの水面に浮びたるは更にも言はず、庭の青苔の上につもりたる、又は小松の葉にかゝりたるなど、何とも言はれぬ趣きあり。

◎卯花

うづきの花といふはこれなるべし、山邊にいと多く生ひて、青葉の繁り合ひたる陰に白々と見えたるは目さむるこゝちすべし叢生して垣にするによろしければ田家にては多くこれを植てめぐらせり。

◎藤

この花のしなひ細くかよわげにて艶なるいろに匂ひたるは類ぶべきものもなし、池などにのぞみて、枝さしいだしたる木に咲きかゝりたるは更にも言はず、松の梢などに這ひまつはりさながら、また蔓の立ちそ



ひえたるがごとくなるも見處あり。

◎かきつばた

水盤などにうゑて咲かせたるすがたなかなかに興ある花なり、ましてや年經たる池のみぎわに咲きそろひたるはなつかしさ大方ならず、小川の岸邊などに咲けるまたよき風情なり。

◎菖蒲

むかしは五月五日といへば、かならず菖蒲をのきにふき、藥玉にそへ身にもつけなどせしかば、今もところによりてはその名殘をつたへて湯にたきて浴みなどもするなり、根の長きものあり香の高きものあり、とり〴〵に愛すべし、又花あやめといふが今は世にいたく愛ではやさる。

◎苗代

早苗を生ひ立たしめん料に、田の中の一部の泥を細かく柔かにして種を蒔き、周圍には竹をうへて、注連を曳きはえ、幣をきりかけなどして、祝ひきよむるは秋のとりいれによき實入をえんことを神に乞ひまつるこゝろなるべし古人淳樸のこゝろ見へてゆかし。

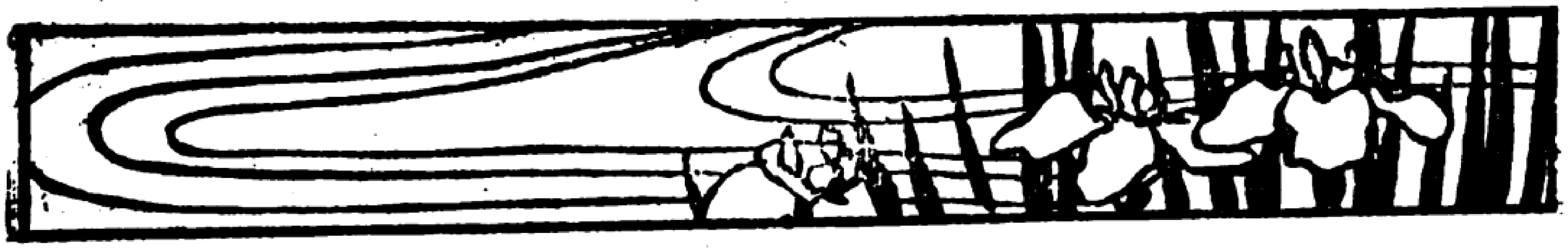
◎山吹

葉の青々したる中より花の黄なるがあざやかに、咲出でたる優にあでやかなるところは櫻にもをさ〳〵劣るまじきものなり、露になびき風にゆらるゝさまの、艶になまめかしさは秋の萩、女郎花にもゆづるべくはあらず、荒れたる垣根に咲きつゞくもあはれに細谷川にそひてなびくもめでたきものなり。

◎新樹

若葉のつや〳〵と青み渡れるは花の目うつしに珍らしきのみならずよくおもへば、花の色よりも優りたるやうなり、もしこれ





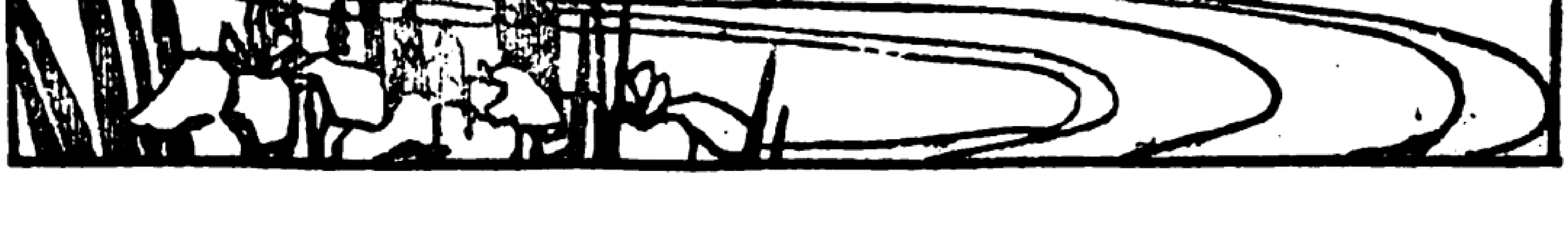
をして一時のものならしめば人の賞翫も又、花に劣らず切なるべけれど永く保つがゆゑに人はさもおもはぬなるべし。若葉は第一を楓とす、淺みどりの色いかにもつやつやしく滴るごとき風情あり、これに次ぐを梅櫻とす、もみ、檜などの常磐木、さへも又なつかしく、見るに心もさわやかなるものなり。

◎夏艸

春過ぎて夏來り、卯の花、時鳥、さみだれなど、景物の推しうつる間に、野にも山にも庭の面にも草の生ひ茂ること驚くばかりなり、荒れし都の古宅の庭、むかし戰のありし野原などに道もうづもれ垣もかくるるまでに生ひ茂りたるは哀れいと深きものなり、又茅か檐端に、葎のみ快よげに伸びまつはりたるなどことに感深きものなり。

◎水鷄

夕月のかげ、凉しくさし來る茅屋の端居におはれ友がなとおもはるゝ折しも此の鳥のこゑほのかに聞こえたるは言ひしらず面白し、又田中の家を訪ひたるに門田のおもは昨日までに皆植ゑ果てたりと覺しく澄みたる水に、暗夜のほしの影きらめき渡り大川水を堰きいれん爲に設けたる、細流の汀の眞菰艸、そよ／＼風にそよぐのみにて寂寞たる四邊の光景、主客こゝろ定まりて話床しくすゝめる頃、そこともしらず鳴出でたるは身にしむばかり覺ゆべし、始めはゆるやかにひう／＼といひ、後には急にかつかつといふ、形大きからねど聲頗る高し、むかしより閨の戶たゝき人を呼び起すさまに詠みたるものなり。



姑には秘密

花嫁

▲近隣の交際

私の嫁時代は都合あつて暫らく舅姑と別居して居りましたが、知達の細君方の中に相應の教育もあり常識にも富んだ婦人が御座いましたので、私は暇を見ては其方々の家を訪問いたし、經驗談を聞いて舅姑に離れた未經驗の自分を鑑みたり、饗せられた料理の鹽梅に氣を付けて見たり、何でも彼でも其方々の長所を尋れて頭腦を養ふ事を勉めて居りました。勿論此細君方は虚飾のない人達でありましたが、夫相應な體裁を保つて居られるので、衣服なぞの懸隔を氣にしては交際が仕惡いのでありますが、私は是れから萬難と戰つて大に發展しやうと云ふ希望に充ちて居ましたから何時も愉快な心を以て交際して居りました。

で生活の苦しい時代に近隣との交際に就て餘程注意いたしました。一體生活程度の略同じ位な者と交際するのは氣樂なものですから、夫相應な場所に住んで居れば生活し宜いのですが、向後發展の望ある家人の精神修養上又子供の感化上如何しても程度の低い近隣に接したくないと存じまして、分に安ずると云ふのは大切な事ながら、正しい道を踏んで物質的の進歩を計るのは世に處する必要な務ですから、自分より低い近隣に接して殿樣氣取に安んずるより、地位高き近隣に接して向上心を養ふた方が宜いと考へました。併し出來ぬ中で無理算段な服裝を爲て交際致しては野卑に流れますし、第一家産破滅の基ですから、これは大いに禁じなければならぬ事とおもひます。

▲無口の效能

流暢に談話を操つて多くの人に愛嬌を振蒔くのは交際上手に相違ありませんが、修養もなく熱愛もなく唯表面の交際にのみ走るものは、永遠に交際を維持されぬばかりでなく、動もすれば些細な行違ひから怨を買ふ事がありませう。實質と流暢とを兼れ具ふると云ふのは凡人に出來ぬ事ですから、私は何處までも無口で押通して居ります。尤も接する人と場合に依つては胸襟を開き思ひ切つた談話も致しますけれども、一通の交際には輕々しく口を開きません。

▲金のかゝらぬ交際

友達の話相手になる爲や、子供の智識を開くためには必社會を見聞したいと云ふ考で在りましたが、主婦の出步

きが實業になると舅姑の小言は勿論の事、家事が疎かになつて不都合を生じますので、種々工夫して金のかゝらぬ出歩るきを致しました。平常家事を一心不亂に働いて成る可く餘裕を作つて置き、折々子供を連れて公園とか、博物館展覽會なぞへ出掛ました。而して天然物や美術品に就て研究いたしました。時としては、路上の說教に耳を傾けて心靈の垢を清める事もあり、然らず何物かを收得して歸つたのです。私は是に依て餘程常識を養ひ、處世の道を辨へ得られましたので、全く天然物や人作物と親密に交際した結果であらうと感じて居ります。

▲結婚後の五六年間

是からの婦人は成る可く外界の事物に觸れ、多くの人と交際して進步しなければならぬと云ふ事は勿論ですが、婦人の外出は兎角障りの有勝なもので、主人が出し嫌ひであつたり、舅姑が不贊成であつたりすると却々理想通りには參らぬものです。學校出の御嫁さん方が折角受けた教育を應用する機會もなく可惜秀才を竈元に埋めて了ふのが如何にも殘念に堪えないからつひ不平な顏も出る、舅姑は生意氣な嫁と擯斥すると云ふ新舊思想の衝突から風波が立初める例は少くありますまい。私も只今は舅姑のある身分元より御嫁さんに同情は致ますが深く考えますと御嫁さんが理想を實行するのに餘り性急過ぎて仕損じるのであらうと存ます。例令如何ほど學校教育を受けた婦人でも一度人の妻となつた以上は、舅姑の有無に係はらず、一家の基礎を固める爲に全身を犧牲に供して、五六年間は家事經濟を一心に勤めなければなりません。收入に應じて夫々適當の生活を定め、舅姑の感情を害せぬ範圍内に於ては出來る限り節約し、收入を手一ぱいに使はず、追々財政に餘裕を造るやうになれば、舅姑からもあれだけ忠實に働らく嫁の爲る事にソツのあらう筈はないと信用されるのです。此信用を得てから自分の理想を實行するとも決して遲くはありますまい晩婚の人は格別、普通結婚年齡から五六年乃至七八年位經た時代は丁度婦人の全盛期で、思想も確實になり趣味も豐富になつて子女の教育にも頗ぶる興味を持ち得られ、樂しい舞臺に上るのですが、若し夫迄の時期を浮華〳〵と過し格別の辛酸も嘗めず、虛飾にはやつて此の地盤を堅める事を忘れて居ましたなら、樂しかるべき時期に至つてから却つて悲しい境遇に陷るやうになります。地盤を堅める勤儉力行時代は實に理想の潛伏期で、尺蠖の體を縮めて居る時とでも申しませうか。併し此潛伏期中に於ても心の用ゐ方次第で自分の進步を計る事が出來ると存じます。

▲出歩きは社交にあらず

一寸新聞を披いても唯三面記事のみに目を留めず、余紙面に意を注いで研究的に讀みますと、社會の大勢も分り自然常識が養はれますし、尋常一様の近所交際にも個人の長所を觀察すれば裨益する所があるもので、如何なる物 如何なる人に接しても修養が出來るのであります。臨機應變油斷なく頭腦を働かせ、充分鍛錬した上で社交場裏に踏み出せば、本當に自他を益するヿがあると存じます。未だ足元がふら付いて居る者が世の流行に卷かれて社交に狂奔したとて交際費が掛るばかりで何の得る所もなく、衣服の競爭等に心を腐らすやうな弊害が起るのでせう。

▲社交は氣晴にあらず

婦人を偏狹の牢より救ひ出すのは社交の力です。婦人を惰眠の床より呼び醒すのも社交の力でせう、しかし社交を女の氣晴じ仕事位に輕々しく考へたり、又は家の都合も構はず、舅姑の不賛成を犯して猥りに飛廻はるやうな事は吳々も愼しみ、(勿論 姑が頑然としてあれば社交なんかは無暗にさせますまいが) 益々と社交の舞臺に上りたいものと存じます。

△戀人は太陽のごとくよく時間を守るものなり。

△窈窕たる風姿は人爲の裝飾を加ふるの要なし、何となれば、其の飾られざるは却て大いに飾れるに勝るものあればなり。

△戀は眼を以て見るものにあらずして心を以て見たものなり。

△愛は骨折を輕くし、且つ悲みを、和ぐものなり。

△敵多きものは譽も亦多し。

△名言も貧人の口より出れば價なし。

△人に向つて正しき模範を與ふる人は悲愁を與ふる人に勝る。

△教訓は耳より入らずして目より入るものなり。

△目的を屢々變化するものは屢々困難せざるべからず。

△精を出すは最上の家產なり。

△暴風に遭はざれば船頭の鍛錬を知ること能はず。

△刀の傷は癒ゆることあるも、舌の傷は遂に癒ゆる期なし。

△決して太陽をして汝が臥床を窺はしむるなかれ。

△事を企つるは易からずといへども、事を守るは更に難きものなり。



一生を誤りし我身の懺悔

水野純子

その一

妾は窪野と云ふ所の生れですが、家は大した財産もありませんけれど、村の舊家ではあり、田畑や山なぞも少しばかり持て居りますので、人からは旦那と云はれ、妾もお孃樣と呼ばれて、何不自由なく、可成贅澤に暮らして居つたのでございます。兩親は極くやさしい人で、それに、同胞とてたゞ一人の、妾より九つも年上の兄があるばかりなものですから、妾の云ふことは大抵聞いて與れまして、隨分甘く育てられましたのですが、親は二人とも舊弊な方で、妾が十五の時に村の小學校を卒へて、高田(越後)の高等女學校へ入ります時には、平常にも似ず、大變に反對しまして、女には學問は要らぬ、小學を卒業すればそれで澤山だと云つて、なか〱入學することを許しては與れません。尤も其頃は今と違つて、敎育は盛んでございませんでしたから、女の身で、殊に田舍の女が小學以上の學校へ入るといふのは、容易ならぬことであつたのでございます。妾は小い時から字が好きで、それで、虛榮心とでも云ひましやうか、そんな氣も大分強かつたものでございましたから、入學を許されないのが殘念で、いろいろだゝを捏ねたり、拗ねたりして、とう〱兩親を承知させ、其年の四月に、高田へ行くことになりました今から考へて見ますと、此時に兩親のお言葉に從つて居ましたなら、間違がなかつたんでしやう。

村のとは違ひ、さすがに高田の學校は大きく、綺麗な建物が澤山にあつて、運動場なぞもなか〱廣く、

ヴァイオリンだとか、ピアノだとか、其外まだ見たとも、聞いたこともない、いろ／＼な道具が揃へてあり、それに、町や家中のお孃さん達の、容姿のお美しいこと田舎者の妾は、何だか急に花の都へでも行つたやうな氣になりまして、嬉しくて堪りませんでした。學校は水清らかな鮫夕江の濠に臨んで居りまして、朝夕の眺めも、村のより別段に面白く、放課後はお友達と手を取り合つて、濠の端を散歩して、時々水に顔を寫して笑つたり、花を摘むだり、草を折つたり、小川のちよろ／＼と流れる音を聽きながら、花の上を吹いて來る柔かい風に頰を撫でられながら、その日に敎はつた唱歌を歌つたり、學校の庭の、芝生の上に寢そべつて、雜誌に出て居る貴婦人や何かの寫眞を見ては、自分も將來には屹度豪い者になつて見せるなど、云ふ氣を起して、とりとめのない空想を畫いて見たり、こんなことをして三年を夢のやうに過ごしました。此三年は妾には一生(?)の中で一番幸福な、樂しく、美しかつた時で、愁も知らず、戀も知らず、丁度、花の野の、蝶のやうであつたのでございます。

十八の春になつて、誰れも一度は見るべき、美しい夢を、妾は見るやうになりました。これ迄は學校でも勉强家といはれ、大抵はクラスの首席を占めて來ましたのですが、それからと云ふものは、學校での授業だけは本氣になつて受けましたけれど、家へ――妾は學校の近くにある親戚の家から通つて居りましたので――歸つて机に向ひましても、勉强する氣になれず、たゞ恍然として幻のやうな淡い影にあこがれて樂しむで居りました。これが果して戀であらうとは、初めの中は自分にも分りませんでしたが、だん／＼日を經るに從つて、朧ろながら意識するやうになり、終ひには明かに自覺して來ました。これは惡いことになつたと、時には氣がついて、或る恐怖を感ずるともないてはございませんでしたけれど、もう自分の力では如何することも出來なかつたのです。

お耻かしいことでございますが、それからは男の人の前へ出ましても、今までのやうに、平氣で居ることが出

來なくなりました。

その二

五月の初旬の或る晩でした。妾は晩く御飯を喰べまして、裏庭を散歩して居ましたが、あまり月が好いものですから、つひうか〳〵と、疎らな松林の中を通り抜けて、小川の流れの音に添ひつゝ、とある小高い丘の上へ出ました。夢のやうな、暮春の淡い月影は、静かに



傍への櫻の、咲き殘りの花や、若葉の上を滑つて、その餘りが、妾の頰べたに、ちよろ〳〵と――音でも立てさうに――そして接吻でもするやうに照らして居ます。晝間の小雨の名殘の草葉の上の、秋でゞもあるなら光つて見える露の珠が、朧ろに月の光をうけて曇つた水晶のやうに、折柄の風にゆすられてはばら〳〵と、花より葉へ、葉より花へ零れ落ちる、その風情が如何にもやさしいので

妾しはたゞ餘念もなく眺め入つて居ましたが、するとその時、何處からともなく、笛の音が韻いて參ります。ふり返つて見ますと、その笛は、丘から西へ、一町ばかり隔つた人屋敷の中に聞えますので、そしてだんだん此方へ寄つて來るのです。それでなくてさへ美くしい夜の、笛の音までが朧ろに霞んで、縹緲として咽ぶやうに、月の光の中に漂うて鳴りひゞく有樣は、妾にはどんなに清らかに、どんなにゆかしく感じられたでしやう。妾は一種謂ひ知れぬ情緒に打たれて、その笛の音の方をきッと見つめました。あゝ若し妾が戀に憧がれて居るといふことを自覺せん時代でありましたなら、その清らかと云ひ、ゆかしいと云ふとも、たゞ笛の音其者をさう感ずるに止つたのでしやう。併し已にそれを自覺した妾には、笛の好い音色よりも、その影に隱れて居る笛の主をゆかしく思つたのでございます。さすがに自分の方から歩を運んで笛の傍へ行くとは仕ませんでしたけれど、其時の妾は全く其人の傍へ行つて、接吻でもして見たかつたのですよ。

笛の音はだん／＼に近くなつて、妾のこゝに居るのを、知るや知らずや、丘の上へ登つて來て、櫻の樹影を斜に、妾の前を通り過ぎやうとして、始めて氣付いたやうに、一寸振かへつてにッこり微笑を洩らしました。見れば、近所に住んで小學校の教員をして居られる、村田といつて、これまで二三度遇つたことのある人で、色の白い、少し面長の、眉が濃くて、眼がパッチりとして居つて、口許の可愛らしい、綺麗な人なんです。

妾も顏を赧くしながら、微笑を返しました。

「好い月ですねえ」と、妾が言ひますと、

「好い月ですねえ」と、男の人も同じいことを言ひながら、一寸空を仰いで、また妾を見てにッこり微笑しました。そのパッチリした眼に、溢れるやうな、美しい媚を見せて――

妾はこれまで、男へ對して自分の方から言葉をかけたことはございませんでした、況して、男からこんな眼で見つめられたとは、猶更ございません。

月は舊城の松の中へ隠れかけて、二つの影はだんだん薄くなつて來ます。

その晩から妾は本當の戀を味ひ、戀に酔ふ身になりました。時々は、男のことについてあまり面白くない噂を耳にせんでもないでしたけれど、戀に囚へられた妾には、そんなことに頓着する餘裕はありません。妾は何もかも忘れて、たゞ甘い、蜜のやうな夢を樂しむで居たのでございます。

その三

六月の末、父が病氣だといつて、村から迎に參りましたので、學期試驗を終りまで濟さずに歸つて見ますと、父は案外重症で、急性脳膜炎ださうですが、今後半月は持つまいとのことでした。妾を大變可愛がつて呉れました父ではあり、夜晝お側を離れずに看病しましたが、その甲斐もなく、綠葉の青葉になり移らうとする七月の初旬の、或る小雨の日に、父はとう／＼死くなつて了ひました。死くなりますす少し前に、父は妾のことについて、兄と何か話しをして居ましたが、妾は臺所に居たものですから、何のことか、よく分りませんたゞ父の聲で、

「あれも學校へやつたお蔭で、思つたより立派になつた、あの位なら大丈夫だらう」といふのが、微かに聞えました。

父の死亡なりました當座は、悲しみの爲めに、村田樣――男のことも忘れて居ましたが、日が經つて從つて思ひ出すやうになり、三四度も手紙をやつたりなどして、再び逢ふ日を樂しむで待つて居ました。けれど、如何したのですか、村田樣からは一度も返事がありませんので、妾は少からず胸を痛めまして、終いにはその人の心を疑ふやうになりました。

或る日の夕方、妾はお庭の中を散歩しながら、編物を仕て居ますと、母が狠だしく妾を呼びますので、何事かと思つて母家へ行つて見ますと、座敷にはまだ見たことのない、二十四五の洋服を着た人が、兄とお話しをして居らつしやいます。妾は一寸御挨拶をして、そ

して傍に居る母に何御用？…と聞きますと、兄はそれを引とつて、この方は中野——隣村の——松岡様だ。これが私の妹で……と、紹介されます。妾は改めて御辭儀を致しますと、松岡と云ふ人も、丁寧に挨拶をなさいました。髪を綺麗に分けた、角顔の、色の淺黑い、口の大きい、あまり好いお顔ではございませんでしたけれど、鼻と眼付だけはなか〳〵立派で、そして何處となく落付いたお方でした。丁度御飯時なので、お膳を拵へてお給仕をして居ますと、時々妾の顔や、擧動なぞをじつと御覽なさいます。何だか體裁が惡いので、お給仕を濟して自分の部屋へ歸つて居ましたがお客様はその後一時間程かり經つてからお歸りになりました。

夜になりますと、兄が妾を自分の部屋へ呼びまして先刻來られた松岡様は、去年高等商業を卒業して、今は東京の三井物産會社へ出て居られるが、お前を嫁に欲しいと云はれるから、どうだ、嫁く氣はないかと云ふのです。傍には母も居ました。妾はあまり唐突なので、答へることも出來ず、たゞ顔を紅くして兄の顔を見て居ましたが、妾の心は旣に他にありますので、氣心の分らない人の所へ嫁くのは厭ですといひますと、兄はいやあゝ見えてもあの人はなか〳〵やさしい方で、其邊のことは己れが保證するから決して心配せんでもよい。財産はあるし、學問はあるし、それに人間は極く確乎して居るから將來は必らず出世する人だ、と云ひます。妾はどうしても嫌なので、一時の遁辭に、せめて學校を卒業するまでは、と云ひましたけれど、この事は已にお父さんとも決めて置いたので、それに先方では非常に急いで居られる。それは松岡様は近い中に會社の用で、是非朝鮮の方へ一年ばかり行かなくてはならぬので、その間お前から留守を仕て貰ひたいといふのだ。歸つて來られゝば、直ぐ東京へ轉宅るさうだから、さうなれば猶更結構だ。學校の方は折角今まで行つて居つて退校といふのは、己れも殘念だが、學問が仕たければ、學校へ行かんでも、東京でいくらも出來る。こんな好い緣談は二度とあるものぢやないから

嫁くが好い。と云つて、妾が返事を仕ませんのを、ただ羞かしがつて居る爲だとばかり思つて、その翌日はもう先方へ返事をして了つたのです。

五日經つて後は妾は已に松岡基郎の妻となつて居たのでございます。

その四



妾がどうして村田を捨てゝ松岡へ嫁く氣になりましたか。今になつても未だ自分にはよく分りませんが、高等商業出身――三井物産――百三十圓の月收――學問――人物――將來の出世――東京への移住――などゝいふ觀念が、妾のヴアニテイを刺戟したのでしやう。それに、父の遺言と、村田の最近の態度に對する疑ひなども間接に力を添へましたのです。けれど妾は結婚の前日までは、どうしても嫌だ〳〵と主張て、實際また嫁く氣はありませんでしたので、或は寧ろ村田とは緣がないのだらうと、そ

れを斷念る爲めに、少しばかり動いた虛榮心を强ひて大きくさして、戀の方を壓伏たと云ふ方が適當であるかも知れません。その時に若し村田との約束を兄や母に打明けましたら、またどうにかなつたかも知れませんが、妾にはどうしてもそれを打明ける勇氣はありませんでしたのです。

夫は極くやさしい人で、それに兄が云うた通り學問も大變にありますやうですし、いつも裕然落着て居まして、用のある時の外は、妾にだつて、御兩親に滅多に口をきいたヿがなく、言葉などもなか〳〵丁寧で、私を光子さん〳〵と云つて、世間の人のやうに、決して呼捨にしたヿはありません。夜、床の中で、時々英吉利の詩や小說などのお話を仕てくれますが、大變にお上手なので、自分を忘れて聞惚れるヿもございました。初めの中は、隨分以前の男のヿを思ひ出して鬱ぎ込むヿもありましたけれど、半月ばかりの間に、夫のお人格を敬愛ふやうになり、その男のヿは忘れるヿもなしに、忘れて居ました。

夫は晝間は大抵書齋へ入つて書物を見たり、調物を仕たりなどして居ますが、夕方になりますと、御飯を濟ましてから、妾を連れて山の方へ散步するのが常でした。散步すると云ひましても、別にお話をするのでもなく、妾がお話を仕掛けましても、新體詩か何かを微吟して居まして、たゞ一寸一口答へて呉れるばかり何だかさッぱり張合がないやうですけれど、それでも時々はシエーキ、ハンド位はしてくれますのよ。

「朝鮮に一年も居らつしやるつて、妾寂しうござんすわ」つて云ひますと、

「御父さんやお母さんが居らつしやる。お初（女中の名）も居る。亭主が業務の爲めに、一年ばかり留守にして居たからつて、それで寂しがるやうでは、僕の妻になつて行けませんぞ」と、笑ひ乍ら言つて、また手を握つてくれます。

妾は良い夫を持つたと思つて、眞實嬉しうございました。

その五

夫は八月の末に出發ました。

後は急に寂しくなつて、妾は毎日々々たゞ夫のことばかり思つて居ましたが、其中に以前の男のことなども思ひ出すやうになりました、今頃は如何して居らつしやるだらう。若し妾の結婚したことをお聞になつたら、嘸憤りなさるだらう。あれ程堅い約束をして置いたんだもの……それとも妾を捨てゝ了つたのか知ら、さうだと大變によいけれど……何れにしても一度遇て見たい。逢つてよくお話をして見たい。いや妾は已に夫のある身だ。そんなことをするのはあまりはしたない擧動ではなからう乎？

三月ほど經て、妾は用事がありましたので、高田へ行きました時、關町裏といふ所で、向ふから洋服を着た男が、うつむきながら歩いて來ましたが、その風がどうも以前の男に似て居ますので、よく注意して見ますと、果してその人で、先方でもそれと知つたらしく妾を見て寂しい微笑を浮べました。

「光子さんですね、どちらへ？」と言ひ乍ら、一寸あたりを見廻して、

「あなた、少しお話仕たいことがありますが、あの森まで行つてくれませんか。こゝでは人通りがあつてお話し仕惡いから」と云つて、自分が先に立て歩き出しましたので、妾は夫のある身です。お話があるならどうぞこゝでと、思はぬでもございませんでしたけれど、さすがにそれも言ひ兼ねて、そのまゝ後に從いて行きますと、薄暗い森影の、とある木の根に腰懸けながらその男は、

「光子さん結婚したさうですねえ」

「はあ……！」

「まあ僕の言ふことを聞いて下さい。僕はあなたに捨てられたのを、少しも怨みませんが、僕はあなたに一つ懺悔しなきあならんことがあると、それから自分に約婚の女のあつたことや、その女は何の教育がないばかりでなく、至つて我儘な女で、それに自分の從妹だから衞

生の方から見ても、結婚は反對だけれど、或る情實のある爲めに、それを拒むことが出來なく、妾と約束してからは、どうかして破らうと思つて、妾の村へ歸つて居た時に、とう／＼それを言ひ出して、爲めにいろいろな紛紜が起り、妾の手紙に返事を出さなかつたのは、自分の留守に來たので叔父や從姉がそれを隠して居つて先頃まで少しも知らなかつたことなどを細々と語つて、

「今はもうその女とは全然關係がなくなりました。あなたは已に結婚をして了つた。僕は誰をも怨むことを仕ません。これが所謂運命なんでしやうから。併し僕は永久にあなたを愛します。愛するからと云つても、已に人の妻であるあなたに向つて何うするといふのではない。僕はこのまゝで寂しく一生を送りましやう」と涙をぼろ／＼流し乍ら言ひました。夕日の光がきらきらと、木々の隙から洩れて、男の頰を照して居ます青いと思はれるまでに眞白な顔は、森の寂しい影と、この光とに包まれて、何とも云へぬ哀れな、美くしい容に見え、それに言葉が沈痛なので、妾は英語のチャーミング、パワアとか云ふものに囚へられたやうな氣がしまして、可愛さうで、いぢらしくて、何ですか自分にも分らない變な心になりました。

其の男は其後間もなく、轉任を命せられて、大島といふ、妾の村近くの學校へ來られる樣になりました。

その六

夫のある身でありながら、而かもあの樣な良い夫を持つて居る身でありながら、あゝ、何といふ淺ましいことでございましやう。何といふ情ないことでございましやう。

學校で修身倫理の講義を聞いたのは何の爲めだらう乎。曾て作文の課題に貞操は婦人の生命なりと説いたのは、どういふ積りで書いたのだらう乎。今から思ひますと、如何してあんな氣になつたかと、本當に自分で自分の身が恨めしくて／＼。……

妾は人目を忍んで再び舊の戀を續けて居ます中にも

絶えず或る恐怖に打たれて居つたのでございます。固より人間の皮を被つて居るんですもの、これ位のことは當然です。而かも良心が本當に頭を擡げ出して、自分の罪惡を責めるやうになつた時は、已に晩うございました。こんな大きな罪惡を犯して居ながら、どうしてそれが何日までも露れずに居ましやう。御兩親は已に知つて居ました。京城に居る夫も家からの手紙によつて知つて居ました。



――言ひ忘れましたが、妾はこの時、已に姙娠になつて居たのでございます。――

或る晩、妾がお舅さんのお部屋へお茶を煎れて持て行きますと、そこにはお姑母さんと、ひそ〳〵お話しを仕て居らつしやいます。

「基郎から如何なことを云て來ましたか」

「基郎からはたゞ困つたことをして與れた。いよ〳〵事實なら無論この儘にはして置かれんが、併し悔ひて居る樣子はない

かと云つて來たゞけだ。あまり表立てゝ騷いでは家の辱にもなることだから、基郎はそれを心配して居るのだらう。併しこれは尋常一樣の事とは違ふ。悔ひるも、悔ひないもない。早速窪野へ返して了はねばならぬがたゞ困つたことには、あゝいふ身になつて居る」

「ですがお腹の兒が果して……」

「馬鹿をいひなさるな、たとひ內實が如何であらうとも、矢張あれの兒として置かねばならぬ。……兎に角產んでからのことにしやう」

妾は身體がぶる〳〵と震へて、その塲へ倒れやうとしましたが、漸く自分の部室まで支へて來て、入ると同時に聲を擧げて泣き崩れました。

あゝ濟みません、濟みません。こんな大罪を犯して居ながら、どうして阿容々々と此家に居られやう。どうして再び夫に面が合はされやう。いや〳〵どう生きて居られやう。妾はもう人間ぢやないんだもの、死なう、死なう。死んでお詫をしやう。……併し死ぬにしても……お腹の兒の顏が見たい。……女だらうか、男だらうか。そして誰れに似て居るか知ら?!　夫にか?　妾にか?　それとも、若しや……若しや……あゝ如何しやう?!

幾たびか死を決しやうとしては思惱み、幾たびか死なうと試みては最後の塲合に心鈍り、煩悶の中に、雪が消えて、鶯が啼いて、花が咲いて、花が散つて、若綠の匂ひの、惱める身にはしめやかに覺える皐月の中旬といふに、妾の身はとう〳〵二になりました。併し妾は產氣催いだ時は、少しばかり埒がありましたけれど、その後——一月ばかりも——のことは何も覺えがありませんでした。

氣が付いた時は、妾の身は實家の自分の部屋に橫はつて居ました。

はッと驚いて起きやうとしましたが、急に胸が痞へて、ばたりと倒れる。

「水を、水を、早く〳〵」と呼びますと、母の聲で、

「おゝ、氣がお付きかえ」と云つて、コップを妾の口へ宛がつてくれます。暫らく經つて、ヤッと氣が鎭ま

つて居ります。

りましたので、傍を見ますと、母は眼を泣き腫して坐つて居ます。

「お母さん、恕して下さい」妾は掻巻の袖を噛みしめて泣きました。母もつゞいて、

「お母さん、妾どうしましやう……………」

そして赤坊はどうして？、誰に似て？、え、お母さん！」

母の言ふ所によりますと、始めから用意がしてあつたらしく、赤坊が産れると直ぐに乳母が参りましたさうで、男の兒ですが、口許丈けは妾に似て居まして、眼付や鼻付は夫に酷似だとのことでした。

「お母さん、それ本當？」、え、」妾はこれを聞いて、どんなに嬉しかつたでしやう。思はず大きな聲で叫びました。

それにしても、どうか早く逢つて見たい。口許が妾に似て、眼付や鼻が夫に似て居ると云へば、屹度可愛い兒だらう。あゝ逢つて見たい！　抱いて見たい!!

「お母さん、どうぞ逢はして下さい。一寸一目でようございますから。ねえ、お母さん、後生ですから」

その七

妾は兒の可愛さと、つゞいて起る夫のゆかしさとで如何とかして今一度松岡へ歸りたいと思ひまして、氣狂ひのやうになつて、母や、兄や、親戚の者にまで、先方へお詫して元の通りにさして貰ふやうに頼みました。兄や母は松岡へ顔を出される義理がないと云つて初めの程は取合つて呉れませんでしたけれど、妾の切な心を可愛さうと思つて、とう〳〵行つてくれました妾も京城に居る夫へ、長い手紙を書いてお詫をしました。いくら待つても、夫からは何の返事も來ず。松岡でも許してくれません。――兄が行きました時に、松岡のお母さんは泣いて居られたさうです――。許さぬのが常然です。普通の過失ではないのですもの。誰が許してくれるものですか。けれど、妾はどうしても斷念めることが出來ませんでした。

あゝ、寧そ子供のまだお腹に居る中に、今更に死な

なかつたのが恨めしい！

せめて子供の顔でも見さしてくれるやうに頼みましたけれど、それも駄目でした。妾は堪らなくつて、家人の隙に、家を飛び出して、途中で見付かつて止められましたとが何度あつたでしやう。

七月の末、夫はもう歸つて來て居る筈なんです。月の晩、妾は今度こそはと、母が臺所へ行つた隙に、床からそッと脱け出て、跣足で家を飛出しました。小一里の間、息をも吐かずに走つて、松岡の家の手前、三四十間ばかりの所まで行きますと、横の路から、卷莨を吸ひ乍ら、ひよッと出た人があります。妾は吃驚して思はずその人の顔を見ますと、それが戀しい夫なんです。妾はあまり嬉しいので、氣狂のやうになつて、いきなり、

「あなたッ！」つて、塵除の袖に飛び付きますと、夫は別に驚いた樣子もなく、

「ウム、光子さんか」

「恕して下さい、惡うござんした。恕して下さい。どうぞ、あなた……」身體がぶる〳〵震へて、涙は瀧のやうに流れます。

「ウム、飛んだとを仕てくれましたねえ」

「はい、濟みません、濟みません。嘸お憎いでござんしやう。あなたには合はす面がないのですけれど、ただ子供が可愛ばつかりに……。あなた、もし恕されませんなら、どうぞ妾を思ふさま打つなり蹴るなりしてこ、殺して下さい。殺して……。妾は生きて居られません」

夫は倒れさうになつて居る妾の身體を自分の胸に抱いて呉れました。髪は亂れ、肉は落ち、傷々しい迄に窶れた妾を見て、勿體ない、夫の眼は涙で潤んで居ます。

するとその時、松岡の家の方から、子供の泣く聲が聞えます。子供の泣く聲が……。妾は夢中になつて驅け出しましたが、急にまた痞が起きて、門際でばたりと倒れました。

あくる日の夕方、松岡から使者が來まして、兄は出て行きました。それと同時に夫からも妾の所へ手紙が



參りまして、「お心はよく分りました。決して御心配には及びませんから、早く身體を癒してお歸りなさい。東京へ移轉する事は、あなたが健康になつた時にしましやう」と書いてありました。

あゝ、嬉しい。嬉しい。妾はその晩手紙を抱いて泣き明しました。併しそれと同時に新しい悔恨の念が、泉の如く胸に湧くを覺えたのでございます。

あゝ、人の妻として、此上ない大きな罪惡を犯しながら、如何に夫が恕してくれたからとて、それに甘へて再び松岡家へ歸ると云ふ事は、夫へ對し、世間へ對して、果して恥づべき事ではないであらう乎?!

四日ほど經て、大變氣分が快くなりましたので、妾は夫へ宛てゝ、まだ一度も顔を見ない子供の養育をくれ〴〵も頼む旨の遺書を認め、其夜家人の寢靜まつた隙に、こツそり家を出ました。松岡の家の前へ來ますと、奥の座敷の方で、子供の泣聲が微かに聞えます。妾は燃えるやうな涙に咽びつゝ、幾たびか後を振返りました。

（完）

夏に向ひての衛生

寒い季に於ける人體の疲勞は容易く恢復するものなれども、暑氣に於ける夫れは容易に恢復せざるものなれば是からは可成たけ、腦を使はぬやうにするが肝腎なり、況して夏季は冬季より逆上し易きもの故神經衰弱の人などは別けて此邊に注意せざる可からず。

▲晝寢の効用＝此點に於て晝寢は太だ有益のものにて、一旦疲勞せし體も晝寢によりて舊に復へるものなれば、人によりては晝飯を喫べて少し休んだ後、一時間位の晝寢はした方か良からん。

▲汗の出るのは藥＝晝寢した後誰でも大變に汗をかくが、是は別に氣にかける程のとでなし、強ち汗が出るとて特別に心配すでもなし、殊に夏季などは汗が出ればこそ體を保ち居るなれ即ち汗が澤山に出れば出るほど、體熱の減らぐものにて、汗が出なんだら迚も夏中過ぐされるものにあらず、併し汗は出る都度に能く拭き取る可し、若し其まゝに放置ば汗疹となるは誰しも知れる所なり、肥滿た人や小供などは殊に注意を要す可く、若し不幸汗疹に罹らば麥粉の如き無害粉末を其局部に塗附す可し。

▲盜汗は不健康の徴＝併し盜汗の出る人は格別に注意を要す可く、每晩引き續きて盜汗の出る人は必度體に異狀があるの故、直ちに醫師の診察を受く可し。

▲梅雨時の心得＝梅雨時は腹部を冷さぬやうにするが肝要なり、而して萬事清潔に心がけ第一厨房を清掃して且其空氣を可成乾燥せしめて、黴菌の集らぬやうにし、第二、靴など奇麗に磨くべし、空氣の乾燥した所に置かば決して黴るものでなし、少しにても肺臟に異狀のある人は此の季節に最も注意を要す可く、溫度の激變甚だしき折柄ゆゑ風でも引込みなば病は愈よ重くなるなり。

▲室內換氣と病人＝併し蒸し暑いからとて病人の居る居室でも構はず戶障子を明放して外界の空氣を入れるとあり、室內換氣法は甚は良けれど、夜は惡るし、夜中の外氣は水蒸氣を多く含み且つ溫度の變化激しきもの故達者な人にも宜しからず、病人には無論なり。

▲植物を室內に置く心得＝植木鉢を室內に入れ置く事は夜は良からず、總べて植物は夜は人間の害になる炭酸を吐き、晝は益になる酸素を吐くもの位のことは、中等の生徒ですら知り居るとなれど、是に注意せぬ人甚だ多し、緣日の晩など植木屋が燒ける石油瓦斯濃濁たる裡に散步と稱して病人を伴れ込むなどは以ての外の事なり。

▲日光浴の効用＝是から顏の色の惡い痩せたヒヨロヒヨロした人は歐米に盛んに行はれて居る光線浴(或は日光浴)を採る可し無論砂地の立たぬ空氣の清澄な所で、每日時間を極めて日なたぼッこをするので、西洋では四邊壁ばかり屋根のない家を作り(尤も硝子の屋根を作るもあり)て其中に這入り、此處に日光線に觸れて、日に浴びるなり、體の弱き人には必度利き目ある可し。(後藤腦病院談片)



姉の嫁入り

蒲公英

私がまだ幼さい時分、凩の吹き荒む寒い晩なんかに父の書齋に遊びに行つてはよく寒山四鳥の別れと云ふ話を聞かされたものでした、凍つたやうな冷めたい手を父が火鉢に翳して暖めたり、さすつたりしながら何日でもお定りの其話で、屹度終局には兄弟は仲好くしなければ不可ないと云ふのだけれど、雛鳥が巣立ちをして東西南北に別れ〳〵に飛んで行つたあとに、親鳥が巣の中に茫然と淋しさうに殘されると云ふ處まで來ると、何んだか急に悲しくなつて來て、いまにお前達が成人くなつて散々ばら〳〵になつて仕舞ふと、お家に殘るのはお父さんばつかりと父が云ひ出すと姉は屹度眼をこすり始める、私も泣き度くなる其くせ此話が大好きでした、雛鳥はまた歸つて來れば好いのにねえと姉が言ふ、親鳥は泣くでせうねえお父さん、と私が云ふと、父は笑ひながらさアなアと首を傾しげる、其間に直ぐの妹は惡戯もしつくして仕舞つて父の膝に倚り掛つて何時の間にか眠つて仕舞ふ。

姉が關西の某家に嫁いだのは丁度廿歳の時で、最う他家へ行つて仕舞ふのだから家の人ぢやア無いと云はれた時には悲しさを通りこして口惜しかつた、だつて私の姉様ですものと幾程力んで見た處で最う仕方が無い、其代り兄様が一人増えるよと云はれても他の兄様なんか増えて呉れなくつても澤山よつて云ひ返したかつた位。

姉は島田が好きでよく平打をさして居ました、いつでも振の長い着物で、一體が華美好きだから燻んだ物よりもぱつとした物ばかり身に付けて居た、姉様がお嫁さんになると私が聞いた頃にはもう家の中は隨分ごた〳〵して居た、呉服屋が來る、仕立屋が來る、毎日

のやうに母と姉とは方々へ出掛ける、私の不平なのに引き換へて、姉は夫れほど厭がりもしないで、僅かな暇を惜んでは華美な長襦袢なんか縫ひながら、時々私の顔を凝と見たり、お庭を見詰めたり、縫ふ手を止めて茫然と考へ込んだり微笑んだりして居る、餘り不思議だから。

「姉樣は嬉しいの」つて聞くと。

「何が？些少も嬉しい事なんか有りやしないわ」

「然う」とは云つたもの丶私が恁麼に悲しいのにつて云はうとしたけれども、又叱られると詰まらないから無言つて見て居ると。

「變な人ねえ」とくすくす笑ふ。

「何が？」

「よつぽど妙よ」と又姉は笑ふ、私も笑はれたのでつと癪に觸つたから思ひ切つて。

「姉樣お嫁に行らつしやるのが嬉しくつて？」

「あら、そんな事、どうだか知らないわ」

「だつて、だつて」

「だつて奈うしたの、私が彼麼に云つたぢや有りませんか、一層もう皆に別れるのが厭だから行くまいかしらつて、でなきやア喧嘩でもして行くわ」と姉は低首いて仕舞ふ。

一番景氣がよくつて面白かつたのはお祝物で紅白の反物なんかよりは鶴の巣籠りだの、小田卷だの丶方が奇麗で好い、毎日々々數が增えて行くのが何よりも嬉しかつた、床の間違ひ棚と段々置ききれなくなつて、次の間まで侵入して來る、然うなると嬉しさも込み上げて來るやうだ、高砂のお婆さんの顏が誰さんに似て居るの、向のお婆さんは惡らしい顏をして居るから高砂の鬼婆だのつて愚にも付かぬ事ばかり云つて居る、其中で兄樣は僕が大學でも卒業して居やうもんなら、夫れこそ指環だの、時計だのつて素晴らしい物ばかり澤山祝つて遣るせと云ふ、姉が殘念だわ卒業してゐらつしやりやア好いのにと笑ふ、お祝物なんかゞ來ると一々私が第一に飛び出して見屆けて來る、兄さん又あれよ等と報告するので殆んど忙殺されて居ました、今

思つても全く私はおつちよこちよいでしたよ。

で彌姉が新橋を立つといふ日兄弟がづらりと並んで父がさア智惠子盃を與らうと姉に渡して夫れを飲み廻した時には胸が一杯になつて、お酒が一滴も咽喉を通らなかつた、私は泣いて泣いて幾度も御機嫌よう、左様ならを繰り返したが分らない、車夫が梶棒を擧げるとすかし母衣の間から、風をひかないや



うにねと姉の聲、私は最う堪らなくなつて姉様と云ふと、え？と振り返る、姉様屹度お手紙を頂戴よ、えゝ、屹度よ、えゝ毎日ねと姉は半帕で顔を押へて泣じやくりを堪らえながら頷づく、結ひたての島田がぐら／＼ゆれる、襟足がほのかに白く見える。

　私は生れて始めて別れの悲しさを覺えました。

同じ姉妹で同じ家庭に育ちながら性質は裏はぐて、姉

は何をするのでも華派だつたし、私は質素だから全然異つて居るけれども扨別れるとなると日頃仲好しの夫れよりも反つて一層辛い樣に思ふのかも知れません。

私は一人で縁に立つて氣が拔けたやうに茫として的もなく眺めて居ると、家に殘つた親類の人達や、見送りに來てくれた者達が私を慰めて呉れる積りでゝも有らうに、貴女なんかは御兄弟が多いんだから那麼にお淋しくも有りますまい、の、是れからは貴女が大將で大威張が出來ますよとか何とか云ふのが五月蠅くつて堪らない、出來るならば人も何も居ない處へ行つて思うぞんぶん泣いて種んな姉樣の事を考へてみたいと思つた、何も兄弟が大勢有るから別れたつて何んとも無からうと思ふのは他で見る人の云ふ事、淋しくなからうと大威張りしやうと全く餘計なお世話と惡まれ口でも利いてやり度かつた、お氣の毒だの同情してよなんて口先でぺら〳〵云つて呉れたつて何が有り難いものか無言つて居ても察しる人は察して呉れるもの、と反つて癪に觸はる、大切の〳〵私の姉樣は逐々連れて行かれて仕舞つたかと思ふと悲しい中にも腹が立つ。

姉が出立つた晩餘り淋しくつて仕方がないから一室に固つて兄と私と妹とお茶を飲みながら種々な話に更した。

「今頃はどの邊にいつてるだらう?」と兄は丸ボヤを凝と見詰めながら云ふ。

「斯うやつて殘つてる者はまだ好いけれど、別れて行く者は一人だからね、夫りや實に何とも云へない氣持がするよ、智惠さんだつて乾度途中で歸り度くなるよ」といふ、夫れから兄は考へ込んでばかり居るから、兄樣奈うなすつたのつて私が聞くと、月日の經つのは全く早いもんだねと染々云ふ、大層地味な事仰在るのねと私が云ふと、夫れから段々私達の幼さい時分の話が出て、私は小兒の時分から泣蟲で夫りやア眞個に憎しかつたせ、厭な子だつたよとさも〳〵厭な子らしく云はれたので、自分の事ながら私は可笑しくつて堪りません、私ばかりは妻戀稻荷の蟲封のお守が三つも有つたなんて云はれる、おまけに頭はくり〳〵坊主さ、な

んて冷かされる、まア兄さんも隨分な方ねえと私が云ふ、夫れに引き換へて姉は少さい頃から可愛いがつたよと兄は笑ひながら云ふ、丁度ね春の好いお天氣の日だつけ、今でも目に殘つて、忘れられない、土筆を摘みに右京の原に行つたんだよ、お辨當に餡麺包を二つづゝ毛糸の袋に入れて持つてね、僕と智惠さんと二人で草



原に寢ころんでゐるとね、前に少さな水溜りが有るんだらう、青空が映つて、微かな風で水の面に小波を寄せるのさ、すると智惠さんが大きな聲で「風と波とに送くられて」つて唄つて居たつけ、と兄は其頃の有樣を今目の邊り見るやうな氣がするのだらう、姉は鶴千代が大好きで芝居で見たとか云ふので何時でも髮を撫でつけ

て後へ下げて居たと覺えて居る、成程其間に家では私が坊主頭を振り立てゝピイピイ泣てりやア全く可愛くないのは當然だと思ひました。

里がへり

姉が里歸りに來たのは其年の秋の末で、其樂しみと云つたら迚もお話にもならなかつた、手紙は大抵三日に一度は必ず來る、其度毎に秋には行くから其時には云々と乾度書いてある、私は姉から手紙が來る度に嬉しくつて涙が溢れる、姉だつて乾度然うだつたらうと思ひます、で彌々歸ると云ふ電報を受け取つて、私が新橋迄迎ひに行く事になつたがプラットホームで姉に久し振りで逢つた時、見違へる樣に瘦せて仕舞つたのと、丸髷に赤い手柄を見て胸が一杯になつて仕舞ひました、何處となく改つて全然奥樣らしくなつたのを見て知らず〳〵涙がこぼれました。

私は一言も物を云ひませんでした、云はなかつたのでは無く云へなかつたのです、散々待つて待つて漸つとの事で姉が來た、嬉しい譯けだのに私は何んだか物足りなかつた、もう一度以前の姉に返つて貰ひ度かつた、何んとか云つてすねて見度くつて堪らない、でも些少とも姉は取り合つて呉れさうもないから夫れも不滿らないし、只だもう一人でじり〳〵しながらでも我慢がしきれなくなつて、姉樣は隨分お變りなすつたわねえ」とやつとの事で云ふと、「オヤ然う？どう變りました」と輕い氣にも掛けないやうな調子で聞き返されぐつと返事に詰まつて仕舞ふ、仕方がないから、「でもやつぱり姉樣は姉樣よ」と直ぐに負けて仕舞ふ。

毎日〳〵方々へ出掛けるので染々話をする間もない内にもう歸らなければならないとなる、でも姉は最う一日最う一日と延しては家に居たい、歸りたくないと云ふ其時だけは私も心から嬉しいから一生懸命になつて兄樣に賴んで少しでも永く姉樣がゐられるやうにと夫ればかり思つて居ました、夫れを何日迄も那麼事を云つてちやア困ると云ふので無理に兄樣が連れて歸つてお仕舞ひなさる、私は口惜しかつた、夫れと同時に

何んとも云ひやうのない寂しさを感じた。
斯ういふ風にして段々終局には全く皆別れ別れになつて、次第々々に兄弟の情等といふ事も薄らいで行くのでは有るまいか、奈う考へても姉は遂々兄様にとられて仕舞つたやうに思はれて最う私ばかりの姉様ぢやア無いやうで、何よりも夫れが殘念でした。
其次に歸京した時には姉樣はもう母樣になつて、私は叔母と云はれるやうになりました、一雄を抱いて姉樣は束髮に結つて一雄のくり〱と肥つて居るのに引き換へてもう一層姉樣は瘦せてお仕舞ひでした。
で姉の話は大抵家事向きの事や小供の事で、お料理の話等は澤山聞きました、夫れから私には成る丈裁縫を家に居る間にしつかりして置かないと困る、と云ふので羽織の襟の付け方を教へて呉れました、夫れから何と云つても實家が一番好いが一度外へ出てみなければ實家の有難さは分らないものだから何んだけれども決して不平等を云つては不可ない、と云ふ事や凡べてが變つて仕舞つた、今までは何有に裁縫なんかは裁つて積り物さへ出來れば仕立屋があるんだもの、家にばかり引き込んで居て裁縫なんかして居なくつたつて好いわ、とか姉は一體交際社會に出るのが好きだから溫順しく家庭の人と云ふやうな事は好かなかつたのかも知れないが、兎に角がらりと違つたのには驚いた、で袖付やきは目〱には止めるのに切れを當ると好いとか云ふやうな事に氣の付くやうになりました。
一年二年と別れて居た間に、益々姉と私とは、性質を異にして仕舞ひました、私の云ふ事はまア〱と姉は吃驚して聞くし、又姉の云ふ語は私が驚いて仕舞ふといふ樣な按排でも歸る時には泣いて別れました。夫れから去年の春花の頃に上京した時は、一雄は最う歩くし、少しは物を云へるやうになつた、私は餘り小供は好きな方ぢやア無いけれども一雄だけは最う別物で可愛いくつて可愛いくつて堪らない、庭で遊んでゐながら緋桃の花が散つたと云つて、私に抱き付いた時は眞個に食べてやりたい程可愛うございました、少しばかり上方言葉が交じるのが面白くつて、動物園から

歸つて來た時に乳母やが叔母樣にお話遊ばせと云ふと象や虎が澤山居つてな、眞個に豪らいこつちや等と云ふので可笑しかつた、一週間ばかりして、此度は姉が家では母樣が待つてらつしやるから最う歸らうと云ひ出す、私は妙な氣持がした、何時でも兄が歸らうと云つても生返事ばかりして延して居た姉が自分から歸ると云ひ出すので不思議に思つたから母上に云ふと、段段向ふの人になつて仕舞ふのだもの、いつまでも以前のやうで居ちやア仕方がない、歸ると云ふやうでなければ駄目だよと言はれて、私は心細くなりました。

又直きに來ますよと云つて、姉は歸つて仕舞ひました、此調子なら又來年遇ふて別れる時、私はまアどんな氣がするのだらうと思ひました。

韓國の婦人

▲婦人の天性　指尖の巧妙なるは實に驚くべく、彼等は習はずして巧みに種々の手藝を爲す、故に學校に於て美的趣味の養成に努めなば造花、編物、刺繡等は益々發達すべき見込なり。

▲韓人の沒趣味　韓國には由來音樂なし、且つ文學美術等も見るべきものなく、概して藝術の趣味なし、尤も高麗朝時代には或は建築術とか其他工藝等進歩したる跡あれども、李朝に至つては殆んど之を見る能はず、只妓生の謠ふ俗謠のみを音樂とも名づく可きか、而かも單調殆んど何等の風趣なし、要するに一般の國民斯の如くなれば、名家の內を訪問しても其床上に掛けたる軸物等殆んど見るに足るものなし。

▲婦人と勞働　勞働は目覺しきものあり、其の第一は衣服の洗濯なり、彼等は殆んど衣服洗濯の爲め其の半生を費せるものと云ふも過言にあらず、嚴冬身を切るが如き寒威に肌を露出し、氷を破つて洗滌に勤める處寧ろ可憐の情に堪へざるものあり、彼等の洗濯多き原因は多々あるべしと雖ども、其の第一は衣服の白色なるにあり。衣を洗ひし後之を干せる處を見れば白妙の衣、風に飜りて得も謂はざる風情あり、彼の衣ほすてふ天の香具山の御歌をさへ思ひ出さる、それにつけても李朝の韓國は我が王朝時代の風俗と相隔らざる樣にも覺へて可笑し。

▲婦人の頭髮　は之を下げ、多量の油を使用す、故に衣服の襟元等は汚穢殊に甚し、近來官妓等は我が元祿風に結ぶものあり、漸次日本化するなる可し、又概して韓國婦人の軀格は強健なり、卽ち體格の立派なると手先の器用なるとは將來韓婦人をして特殊の發展をなさしむ可し。



婦人美の三期節

藤波女史

▲婦人の生涯には明らかに區別された三ツの美期と云ふ者があります、其第一期は生れてより春機發動迄を言ひます、其時期には顔も體軀も、恰度花が咲くべき春の準備をしてをる如く、人の目につかぬところに發達しつゝある時であります。

第二期は充分成熟した時から先づ四十歳頃までを言ひます。此時期には、頸は太くなり、聲變りがして、眼には光澤を帶び、人を引付ける美を以て生長つゝあるのであります。

第三期は四十歳より六十歳迄を言ひます。顔にも身體にも肉が充實して、人によつては皺もよらず即ち大いに若歸りをする時代であります。世人は是を安心肥滿と云ひますが、これは肉が不活潑な爲め、皮膚の下の細胞組織の中に吸込まれ、堆積して、皺も消えるのであります。上流社會にては彼の鍋島侯爵夫人下田歌子女史などが、此時代でありませう。或婦人などは、全く妙齡の時の樣に見える方もあります。

此時代を過せば美は既う無い者と觀念しなければなりませぬ。

▲西洋の婦人雜誌の記事に、婦人の美は五十歳過ぐるまで續く、卅五歳若くは四十歳以下にては、美の頂上に達したとは云はれぬと書いてありますが是れは日本人の目には少し可笑しい樣に聞えますが、實際人に由つては普通より遙かに永く其美を保つ人があります。次の實例を擧げて、遲日の睡氣を醒して見ませう。

美の神と謡はれたトロイのヘレン孃は四十歳にして始めて舞臺に現はれました。

三十六歳の時ペリクルと結婚した艶麗の化神と唱

へられたアスプシア孃は、其後卅年間、燦爛として社交界に光輝を放ち續けました。

絶世の美人クレオパツラは三十歳の時にアントニーに逢ひました。

卅六歳の時ヘンリー二世の愛を占領したヂエン妃は、其時王はまだ彼女の年齢の半分即ち十八歳であつたにも拘はらず、其愛は生涯變らなかつたと言はれてあります。

澳地利のアン孃は、卅八歳の時に歐羅巴第一の美人として知られました。

露西亞のケヤザリンは皇后は、卅三歳の時に帝位を掠め、卅三年間美の力を以て位を占有しました。

マー孃は四十五歳の時に、ルカメーは卅五歳から四十五歳の間に、何れも歐洲第一等の美人の稱を博して居りました。

▲皮膚は身體の最も大切な機關であります。其證據には人がよしや一週間食物なくしても居られますが、氣孔が止まつては數時間で死んで了ひます。今其證據を擧げて見ますと、

レオ十世が法皇の位に即いた時でありました。祝賀の爲、フローレンスに旺んな行列がありました。其中に一人の小兒が、所謂黄金時代を表示すべく、身體に金箔を一面に塗て居りました。すると其兒は數時間を經ぬ中に、非常な痙攣を起して死んだと云ふ事であります。

▲皮膚は恰度人の心の磁石の樣なものである心に因て人の顏に着る衣服が違ひます。ウイルキンソンと云ふ人が、茲に面白い事を言て居ります。

愛の着る衣服は妙へなる天上に咲ける薔薇の如し憎惡の着る衣服は刺のある茨のごとし嫉妬はおのが簞笥より常に綠の胸當を摘み、失望は灰色の衣物をまとひ憤怒は黒衣を纏ひ、其外悔恨悲歎にも皆それ〳〵相應の粗服あり獨り僞善に至ては、以上のものを交る〳〵掠奪して着服すとあり而して是英き智慧、麗はしき感想は永遠の光燦々として玉の如しと。

▲血色を美くするには、飲料として茶よりも咖琲より

も白湯が一番可いのです。食物を早く消化させて、容色に深い關係の有る肝臓を清らかにいたします。

牛乳は固より皮膚を和らげ、且つ白くするものであります。

果實は自然劑とさへ云はれた食物で、大食さへしなければ何でも可いのです。

▲野菜類は澤山に採らねばなりません。併し馬鈴薯は餘り多く喰べては可けません。

血色を美くするに最も功のあるのは赤根菜です。多量な鐵を含むでゐるので、爲に肝臓病を癒すに効がありますから、自然血色が美くなる道理です。血色を美くするには貝類は大禁物です。



化粧法から申しますと、顏を洗ふには天水が一番優

のです。併し天水は何時でも無いですから、水に硼砂を一匙入れるか、最初から水壺の中に幾分かを入れて置きますと、自然硬い水も和らかに成て、皮膚を滑らかに致します。返す〴〵も皮膚を洗ふには硬水を用ひてはなりません日に射つて顏がほかつた時に水で洗ふのは可けません。葛を溶いて擦り付けるが宜う厶います。

日燒を脫るのに顏を洗ふ時牛乳を擦り入れるのは可いです。牛乳浴などは、日本では迚も行はれませんから、簡易な法は牛乳をさすのです。

血色を美にする法の手輕いのは摩擦でせう『レモン』と『グリスリン』を混せて附けるのも可いやうです。『グリスリン』は皮膚を和げる妙藥『レモン』は色を白くする特効劑です、そして双方とも無害で心配が無いからよい。

血色を美にするには、小說家や文章家の樣に、夜間遲く迄起きてゐるのは大禁物です。切角塗つたり、摩擦したりしても、長起をすれば、其翌朝はきつと顏が青瓢簞の樣な色に成つてしまひます。

▲顏の皺は彼のロングフエローが『歲月は鳥の如く彼の女の眼の光澤を吸去つて、足跡のみを眼瞼に殘す』と申した如く、歲月に因て出來て來るのが普通でありますが、併し西洋人に卅歲頃に出來る皺は其爲計りではありますまい大方は心配、世の苦勞、悲歎、身體の不健康から來ますので殊に又空氣の流通の惡い、瓦斯暖爐の火などで暖め過ぎた、燥いた室にゐるのが、非常にその皺を早める結果となると云て居ります。つまり心配苦勞を棄去つて空氣さへ能く流通すれば宜いのです。もし婦人の顏にちりめん皺が出來たならば冷たい乳酪を塗るのが一番手輕くつて無害な良法でせう。湯で能く顏を洗つて、手拭でふいて、まだ溫い中に冷たい『クリーム』を十五分間程手で擦り付けるのです。佛蘭西の女は是の方法で以て美人が多いと云て居ります。

▲お序に頭髮は美を助ける大切な飾でありますから、出來る丈け脫落を防ぐ注意をしなければなりませぬ。

脱落は頭垢など汚ない者が根に溜るから、根本が營養不良の爲枯れるのですから、度々洗はねばならぬは勿論ですが、又一方には充分に伸びて、根が其重みに堪へなくなるから脱けるのです。那麼時には髪を短かく截るのが可いのです。妾しの知てゐる西洋人は燒いてゐたのですよ。

▲是れは少し美の話談から離れますが、不思議に世に豪い人は皆鼻が大きいです。是から少し人相の方を覗つて見ませう。

鼻の穴の大きい者は聰明であると既に世の定評があります。これに反して小さい者は、氣が臆病で大きい事が出來ぬと申します。



歪僻のない眞直な鼻は、性質の純粋を表はし、美術を喜び手藝を愛し、事を直接にするより間接にする事を好む傾向があります。

尖鼻は怒り易い天性を有して居ります、御知り合の中を吟味して御覧なさい、きつとさうです扁鼻と云ひましても、はなぐたではありませんが、厚く低い鼻は邪悪に偏向し易い性質を持つて居ると申しますがこれは先天性にあらずして或は後天性かもしれません、又鈍角にして實質があり、堅牢にして、獅子の樣な鼻は大膽

にして、不敵の相があります。鷲鼻俗に云ふ覗鼻は、心濶大にして、王者の相が見えます。

一方に傾いてゐる鼻は偏屈な相です。

折々鸚鵡鼻と云ふのがありまして、此鼻の所有者は非常な饒舌家なることは申上げる迄もない。

序ですが『ナポレオン』は、頭腦を要する職務には、長い鼻の者を使つたと云ふ話であります。長い鼻と長い頭腦は相伴ふさうです。

▲今度は眼の相を申上げます。

黒い眼は健康で勇氣あり、眞實にして名譽あり、心の確固とした相であります。

青い眼は薄弱にして、何方かと云へば從順な方。力量、思想、勇氣に於て黒褐色には劣ると云ひます。

灰色を帶びた眼は鋭敏にして精力あり、最初は冷淡な樣に見えますが、段々すると其同情に依頼して充分に信用があります。

近眼は事を計畫するに長じてゐる、且又手藝に長じ時としては往々詭計を懐くのがあるやうです。

星の樣な細い沈んだ眼は、行動が大膽で、失望せず惡計に長けて、如何なる苦境にも堪へるやうです。

大きな丸い眼は吝嗇、貪慾を表はしてゐます。特に彼等が高位置にある時に最も貪汚です。

赤い眼は勇氣と力量のある相。烱々と輝つて餘り動かぬ眼は、自信のある人として畏敬される。

▲最後に口唇に就て申上ませう。

口唇の格好に依て人の性質を知ると或人は申しましたが、全く口唇の格好に依て能く知れるのであります。

堅くむすんだ口唇は堅固な性質を表はします。和かくして能く動く口唇は、和かく動き易い性質をあらはしてゐます。

大きく精確と上下が能く平均した口唇は、決して卑劣な人の相ではありません。

口唇の長くして細く只一の字を引いたやうに見える人がありますが、其の口唇を持た人は、頭腦が冷靜で勉强家で、秩序あり、物に精密で、もし女ならば家政

に巧者な人です。

左右の兩端が上方に上つてゐる口唇は、虛榮心に富んだ相です。其結果害心などを起さぬとも限りませぬ。

非常に肉の太つた口唇俗に厚い唇は怠惰でそして放恣ですそして又大の美食家です。

拘攣つたりなどせず、角々しき所もなく、氣取つた樣な樣もなくて、上下穩かに合つた口唇は、思慮あり心が豪邁にして且つ謹愼な相です。

上口唇の上方に突出てゐるのは善心を表はします。

下口唇の眞中の凹んでゐるのは、空想に耽る相。と先づ是丈け申上ぐればあとは其れ〲實際に就て研究してごらんなさい、そしてこれは最も交際上に必要な心得としておすゝめ致します。

時勢の要求――女子商業學校

おくれて中途から這入つたのでよくは云ふことが出來ぬがこゝの卒業式は成程校長和田垣氏から云はれた樣に何處迄もBusiness-Likeた。愚圖々々して居ると柱にぶつかり相、即はち式塲の懸額「怒るな働け」の文字が先づ校風を表示し、次に天井からぶら下つて居る造花の藤、生徒の瞳の動き方、來賓の演說振り、其事務的なこと夥だしい、プログラムは何處もおなじ五號活字であるから別にするさず。校長は此日日本人の三長所と三欠點を然く事務的に語つて告別の辭とせられた。

長所の方は

一、Kindly なること。二、Crean であること。三、一般に美的思想に富む。

欠點の方は

一、Business-Like に欠けてゐる。二、Vanity の強きこと。三、Phylosophical-thoughtに乏しい。

以上の六ケ條で結ばれた。

來賓の森村氏丈けは記憶するがあとはあまり見ぬ顏であつた。（あきさめ）

交際社會の片影

數千圓の寶玉は、貴夫人中でも、最も高貴な方々、又は最も富裕な人々の頭に輝き、腕に閃めき、指先に光るので、これは全く別ものと見ればならぬが、普通の指環と言へば、ダイヤが五六十圓から三四百圓位、エナメルド(碧玉)が二十圓から五六十圓位、眞珠と紅玉とが十圓から二三十圓位で、金は重に十八金、極めて細い鎖輪のやうなのが流行です。その金も白金となれば、無論三四割方は高くなる。又夫人向の時計も上等になると際限もないが、普通は、兩蓋十八金の十三形が流行るので、瑞西製になると三十圓から五六十圓、米國製のは七十圓から百二三十圓である。その鎖は一時寶石入の長い首掛のが流行つて居ましたが、餘りケバ〳〵して面白くないので、近ごろは島渡ポケットか帶の間に挿むといふ短くて奥床しいのが持囃されます。この外、ブローチ娘川の簪なども廉いのは十圓位から、高いのは五六百圓乃至千圓位のものもありますが、これ等の品になると、何方が上等か下等か、素人目には容易に見定めがつきません。

要するに、東京の貴夫人達は、その交際が世界的であるだけ、服裝の流行も亦世界的になつて居る。日本服の流行は、僅に日本のみで、而も三都自から趣を異にしてゐるが、洋服に至つては、一國一地方といふ樣な狹い譯には行かぬ。常に巴里や紐育の流行界を狙つて、その生粹な所を呑み込まればならぬのです。で目下の狀態を聞くと、一時全盛を極めた佛蘭西形は、漸く衰へて、今は亞米利加形が大に勢を得てゐるとの事で、米國態度は何から何まで凄じい有樣であります。

既に夫人達が其れほど華奢な服裝を施されるとすれば、嫁入前の令孃方は、奈何にも華々しく裝ふて、定めて巨萬の金をかけられるであらうと思はれるが、それは全く反對です。といふのは矢張り西洋風なので御座いませう。西洋では一旦夫人となつた上は全力を盡して裝ひ飾りますが、御主婦の資格を得ぬ令孃は、至つて質素なもので、盛裝した貴夫人が妙齡の令孃を伴れて、スーッと交際場裡に押し出した時などを見ると、事情を知らぬ日本人は、その令孃を侍女か小間使かと誤る程どです。元來英國の貴族などは令孃が滿十八歳となつて皇后陛下へ謁見を仰せつけられるまでは、晴立つた場所へは出ぬといふ習慣になつて居るので、縱し又交際界に現れるとしても、自分は御貴夫人の資格はないといふ點から故と華美の盛裝を避ける風があります。(東京朝日新聞所載の一節)

日用便覧

織物の種類

△縮緬＝ちりめんは優美なる婦人の姿態に適合せる織物なり、左右兩種の撚り強き糸を緯としたる縮み織にて、白ちりめんあり染色したるあり、お召ちりめんあり、緯に綿糸を用ひたるを觀光ちりめんといひ、透し織にしたるを絽ちりめんといふ、江州長濱、丹波、京都を重なる産地とす。

△平絹＝ひらきぬは生糸を以て平織にしたるをいふ、生絹あり、練絹あり、染色を行ひたるものは花色絹、紅絹、或は絞り、板絞り等あり、武州八王子越中富山等をその重なる産地とす。

△太織＝ふとおりは平織の絹なり、緯口糸なれば節あり、其縞あるものを銘仙といふ、上州伊勢崎の産を第一とす。

△紬＝つむぎは眞綿を紡ぎて製したる糸を用ひて、平織にしたるものなり、縞の有

家政百事便

普請についての一と通りの智識

◎地所の撰び方

家屋を建築せんと欲せば、まづ其の地勢の健康に害なきや否やを考へ、土地の卑濕なる所ろを避け、方角は東南に開けて風通しのよき所を撰むべし、次には水の良否を調べ、交通の便不便、水火の難を避くるの便否をも考へ、猶立入りては近隣の風俗、地代地租の如何等をも考へて着手すべきなり。

家屋建築に就ては都會と田舍によりて考へ方に相違あり、田舍にありては大概自分に地所までも購求して建つれば、それに越したる事はなけれど地所まで購はずとも借地にて濟ますもよし、殊に都會にありては地面までも手に入れてかゝるは却々の計畫なれば、まづは借地と心得て其の見積をなさざるべからず、是れ經濟上に至大の關係あることなれば地代其他の計算を確かめたる上にて經營すべきなり。

今假りに二百坪の地面を借りて建築せんと欲せば、（少しく邊鄙にはあ

るを縞つむぎといふ下野結城の產古來最も名高し。

△海氣＝かいき一名甲斐絹ともいふ甲州の名產なり撚糸を以て製したる平織なり、古くは多く洋傘に用ゐしが今專ら裏地とす、玉蟲海氣、縞かいき、又綾かいき等あり。

△糸織＝いとおりは緯は二本撚なるがよこたてとも練糸を以て縞おりにしたる平織なり、武州八王子、羽前米澤等產地として名あり。

△斜子＝なゝこは七本合せの生絲をよこたてとして製したる平織の絹なり。

△仙臺平＝これは練糸を以て縞を織り出したるもの、袴地に用ふ、仙臺にて製し始め、後これにならひて諸方に製す。

△琥珀織＝こはくおりは徑に細き練糸を緯にやゝ大き撚糸を用ひて平織にしたるもの、光澤に富み、多く帶地とす。

△博多織＝はかたおりはこはくに似て甚だ厚く縞あり、紋織ありり、筑前博多の產な

れど、庭を廣くとり、樹木を植ゑ又時には草花などをつくりて心身の保養に資せんとならば、この位の地面を要す、）普通の場所にて坪三錢づゝとするも、一ヶ月六圓となるべし、それへ假りに三十坪の家を建つるとすれば、一坪造作一切見込みて五十圓ならば千五百圓を要すべし、或は少しく張り込みて木口造作等を物好にせば二千圓となるべし、これならばまづ中等社會一家族の住居として立派なるものなるべし、二千圓の現金には八分の利息としても月に十四五圓はかゝる勘定なれば、前の地代を合せて二十一圓となるその上家屋税其他の出し金を計算する時は、少くも二十五六圓に登るべし、されば他人の地面を借りて三十坪の家を建て體裁よく住はんと欲せば月々二十五圓づゝの屋賃を拂ふて借家すると粗々同じ經濟となる勘定なり、（尤も交通の便ある市内繁華の場所に於ける二十五圓の住居は右の如く廣くは住へざるべけれど、そこは邊鄙ながらも衛生上に益あれば、双方人々の考へ樣によるべし）されば新たに家を建つるは一定の金を普通の定期として預け置く人や又は公債證書を所有して僅かの利息（年五六分位）を算する人々の爲めには大なる利益なれど、高き利息の金を借りて新築するは左程の利益とも見へざるなり。

古來の說に、宅地は平坦なるを最上とし、後ろ高く前の低きはよし、西高くして東の低きも又よし、前高くして後ろ低きは惡しく、四面高くして

り。

△上布＝じやうふは苧麻の糸を原料として製したるものなり、薩摩上布、越後上布、等の名あり。

△透綾＝すきやは絹物にして地薄ければ專ら夏季の衣類に用ふ。

△天鵞絨＝びろうどは緯に銅線を加へて織り、又これを抜き經の輪狀をなせるところを切斷したるものなり。

△繻珍＝しゆちんは數種の色糸を以て製したる紋織なり、新しゆちんと稱するは綿糸を交へて織りたるものなり帶地に多く用ふ京都西陣を本場とす。

△金襴＝きんらんは金紙糸を以て紋織となしたるものなりは其地色は赤、紺、茶等あり、絹糸の代りに綿糸を用ひたるは綿金襴といふ、多く京都の產なり。

△錦＝にしきは糸は數種の色にそめて紋樣を織り出したるものなり地厚く、帶地袱紗其他裝飾用として用ひらる。

中央の低きは甚だよろしからずといへり、されどこの理に叶ひたる土地は容易に得べからず、唯高燥にして濕氣なきところなれば宜しとせざるべからず、さればとて丘の頂上も萬づの便利よろしからぬものなり、畢竟は衛生と便利、經濟の三點を考へて撰むが地所撰定の原則なり。

◎家屋の建方と座敷の間取

凡そ家屋は陽に向ひ陰にそむきて建つべし、夏は涼しく、冬は暖かにして、よく身體を養ふに適へり、又家は一家の人數の多寡、其人の地位境遇によりて廣狹、體裁、さまぐ\なるべしといへども、まづ現在の必要よりも三五年後の便利と家計とを考へて規模をつくるべし、されはとて廣きに過ぐるは萬事經濟の爲めによろしからず、さりとて又狹きは後に至りて便利あしくこゝを今少し廣くして置けばなどの悔を遺すことあれば、よくその邊の都合を考へて設計をなすべきなり。

次に座敷の間取りは人數によりて廣狹あれど、大抵は玄關、應接間、表座敷、奥座敷、茶の間、納戶、寢間、小座敷、臺所、物置、浴室、下女部屋等なり、人數少き家にては玄關、座敷、納戶、茶の間、臺所、物置場等にて事足るべし、又家屋の建築はすべて坪數にて其の費用を計算するを法とす、今一坪の建築費は疊、建具を除きて大抵三四十圓より上等の建前にて

磁器漆器の品類

陶磁器即ちせともののやきものは、石灰、長石、或は陶土、粘土、又は石英、砂等を原料として、適度に合はせてこれを細かに碎き、水にふるひて、其乾燥せるものを舂きこれ、もつて好むところの形をつくり石膏ソーダ、酸化鉛、酸化錫等を以て製したる釉ぐすりを施し、窯を用ひてこれを燒きその上にていろ／＼の裝飾を施したるものなり。釉ぐすりを施したる上に模樣を現はすは燒付といひ釉ぐすりの中或は下に現はすを染つけといふ。燒付るも數法あり、又釉ぐすりを施さずして燒くこともあり。

磁器と陶器との區別を言はんに磁器は地質堅くして緻密、半透明にして音清きものをいひ、陶器は堅さも音もやゝ劣りて不透明なるをいふ、その地質堅くして重く、多少粒狀を呈し、音やゝ澄むものは砂器と稱することあり、而して土器と稱するは質砂に富みて疎、且つ軟にして、音も濁れるもの

六十圓なれば申分なし。

東京の家屋は大概大工に受負はして作るを例とす、地均らし、土盛りの費用は主人持にて、土臺石の据つけ地締めより材木の運搬其外、屋根瓦、壁塗り、天井、床板、戸までは皆大工の受持にて、中の造作即ち疊、建具並びに雨樋の備へつけは主人持と知るべし、尤も始めの契約によりて、疊、建具、雨樋、其他一式大工に請負はす方法もあるべし。

建築に用ふる材木は檜、杉、松、柏、欅の類なり、其内、松杉は最も其用多く、柱は專ら、杉を用ひ、梁は松を主とし、土臺は柏をよしとす、其他の諸材は木質極めて美なるも價貴くして平常の普請に用ひがたし。

地形　さてこれを建つるには何より始めに地形を固くすべし、地形は建築上最も緊要の業にして、まづ建築すべき土地を掘り返へし、よくならすべし、斯くして土臺を置くところ、及び柱を建つる所ろに小石又は砂利を入れてよく突きかたむるなり、地盤を十分堅固になし置けば年を經て土臺の傾く憂なきのみならず、地震の時に被害少し、土臺は花崗石を最上とす、立岩の靑きものこれに次ぐ。

木は欅、檜、柏を最上とす、栗材もまた久しきを保ちてよろし、すべて家のまはり風通しのよからぬ所は殊に注意して堅牢の材木を用ふべし。

なり。

陶磁器の產地は清國にては江西省の產を有名とす、所謂南京燒なり、本邦にては尾張の瀨戸、岐阜、肥前の有田、京都、加賀の九谷等最も有名なり一ヶ年の產額約七八百萬圓に上る。

△九谷燒＝これは加賀金澤を本場とす、有田燒より地白けれども音はやゝ異なり、專ら美術的の品にて御闌手多し。

△常滑燒＝これは尾張のとこなべ村にて製す、無釉の磁器なり、土管、甕類多し。

△相馬燒＝これは磐城の相馬にて製す、釉ぐすり鼠色にして走馬を描くを以て知らる。

△薩摩燒＝これは美麗なる艶を有し、粟田燒と混じ易けれども、作劣り粗造にして模樣もの多し。

△淸水燒＝これは京都にて製する磁器にして實用品少く、色澤くして鮮明に膚に泡なし。

△粟田燒＝これは京都の產なり、一般に

柱は角柱と丸ばしらとあり、角柱はたもちよろし、いづれにも太きをよしとす、其材料は檜、欅、杉などよろし、就中檜は最上なれど價甚だ高くして普通の建築に用ひがたし、床柱は鐵刀樹、桑、檳榔樹、又は赤松、皮むきの杉其他珍奇の材いろ〳〵あるべし。

敷居と鴨居は柱と同じ材料を用ふ、鴨居の上に欄間をあけて障子をたつれば家の內あかるし、暑時の開閉にも又便利なり、長押は座敷の向きによるべし、床の間、違ひ棚ありて書院障子のつきたる座敷には是非長押あるべし。

梁、棟、桁などの木材は目にたゝぬ所は節などありても妨げなし、唯堅牢を專一とすべし。

これに反し、緣、ぬきなど人目につくところは注意して、良材を用ふべし。

牀は高くはるべし、低きは地氣をうけて健康に害あり、牀板は削らずともよし、唯間隙なき樣に張るべし、透間ある時は冬寒きのならず、地の濕氣をうけて疊を損じ、健康にもわるし、上等の建築には二重牀を張ることあり。

天井は格子天井、かゞみ天井、網代天井いろ〳〵あり、木材は杉、檜、竹、桐、好みによりていづれも見苦しからぬものを撰ぶべし、板目は糸柾

釉を有し高雅にして品位ある陶器なり。

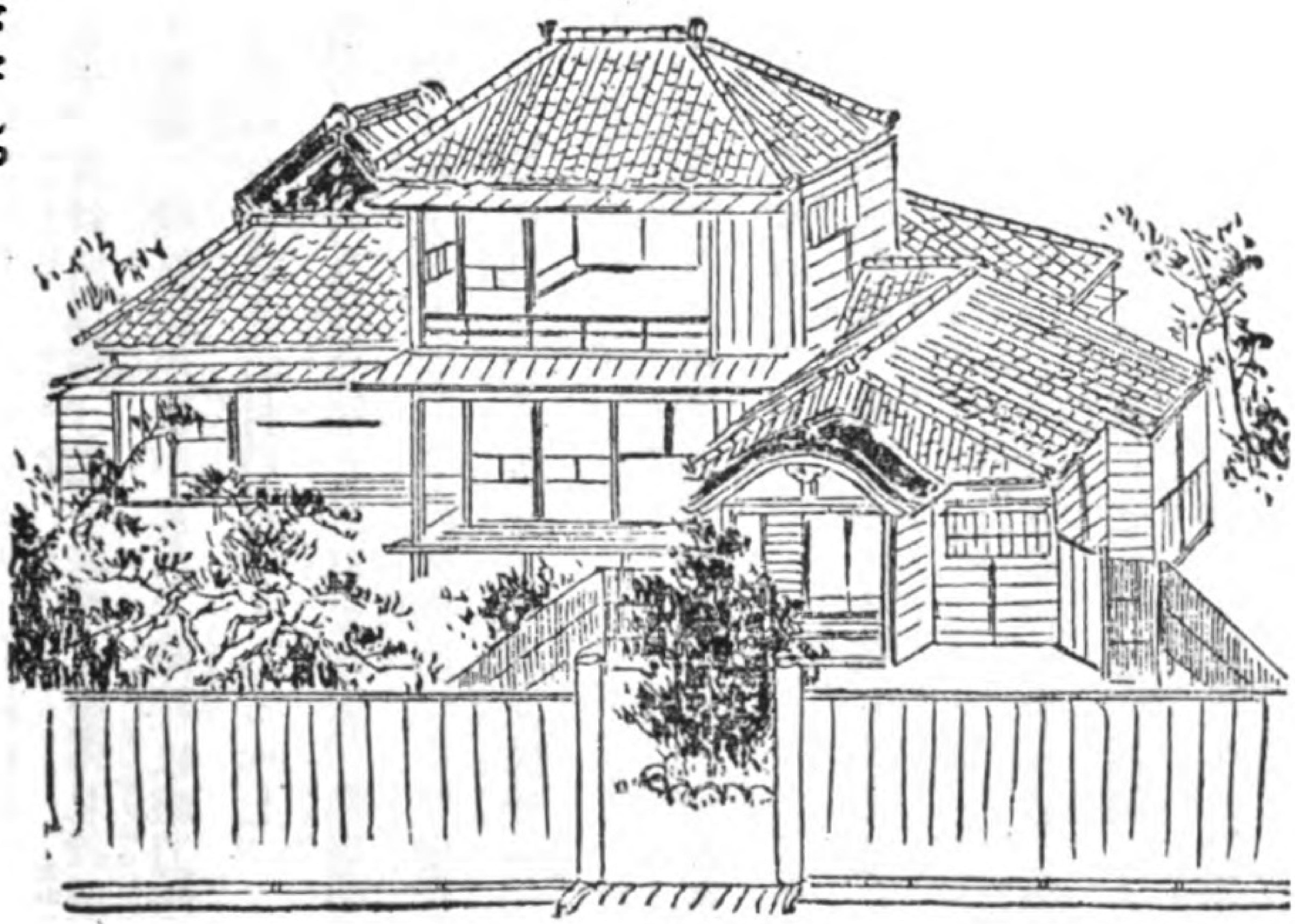
△有田焼＝これは肥前有田の産なり、音清くして九谷焼に異り、白磁、青磁、焼付等、種々の製品あり。

△出雲焼＝これは一名ふじな焼といふ質密なれども脆く、釉ぐすりは淡黄を帶び、ヒゞ少し。

△備前焼＝これは無釉の砂器にして人物動物等の像多く堅牢にして破損すること少し。

漆器即ちぬりものは欅、栗、檜、其他種々の木材を以て箱物、刳物、曲物等を製し、この木地に漆汁を塗りて製す、又紙、ブリキを以て木地とすることあり、其塗方には平塗のごとき、一種の漆汁にて塗るもの、地紋を現はしたる地紋塗彩漆を以てぬりたる、うろし繪、其他蒔繪、彫繪等あり、平うろしの中にも木地の見ゆるものあり、彩料を交じへたる黒塗、青ぬり、朱ぬり、金屬の粉末を混じて塗りたる梨子地等いろ〳〵あり、又朱ぬりの中にも色やゝ薄き洗朱、や

を最上とし、木目は却々に得難きものなり、唯節などの多きは下品なり、あじろ天井といふは藤又は竹にて網代に組みたるものなり、多く茶座敷などに用ふ。縁は竪はりあり、横はりあり、矢の羽あり、きりめ縁あり、いづれも良材を選ぶべし、田舎の建築には竹縁、ぬき縁などあり。



窓は下地まど、平まど、櫺子まど、竹格子、出格子窓、又は圓窓、臂掛まど、いろ〳〵あり、要するに明とり、十分に風通しよく、又見つきよろしき爲めに設くるものなれば、便利にしたがひて人目に立つところは格好を選ぶべし。

や黑くして、光澤少き根來塗あり。

木地を拵らへし後、下ぬり、中ぬり、上ぬりを施すこと七八回より二十四回に及ぶあり古代の塗物にして數百年を經て剝げざるものは皆漆ぬりの回數に手をこめたるものなることを知るべし。

△蒔繪＝まきゑは金銀其他の粉末を交へたる漆汁を以ていろ／＼の模樣を施したる漆器なり、仕上後に施したるは、平蒔繪あり、高蒔繪あり、仕上前に施して仕上ぬりをなし、磨き出して模樣をあらはしたるものを研ぎ出しといふ。

△堆朱＝ついしゆは朱漆にて厚く上塗をなし種々の模樣を彫刻したるものなり、黑漆を用ひたるを堆黑といひ共に彫繪の一種なり。

△春慶塗＝しゆんけいぬりは檜樅等を用ひ、木地を見る樣なるをいふ、色は黃色又褐色なり、飛騨春慶、能代しゆんけい有名なり。

△輪島ぬり＝能登輪島にて產す、通常

床は疊床、板床、ひきこみ床、織部床等、その座敷の結構によりて便宜をはかりて設くべし、疊床は本式なり、ひきこみ、織部は略式なり、棚にはいろ／＼あり、烏棚、落棚、違ひ棚、吉野棚等は常のこしらへなり。戸棚押入は便宜によりて設くべし、殊に臺所の戸棚は如何にも簡便にしつらふべし。

◎家根についての考案

家根は熱帶地方の降雨少き地にあつては勾配を緩ふして差支なしといへども日本のごとき多雨多雪の土地にては急傾斜を必要とす、これ雨雪の流下を速かならしむるが爲めなり、屋根は其形ちによりて種々の唱へあり、方形といふは中央に棟を設け、四方に斜下せしめたるものにて、尤も普通に用ひらる切褄といふは家の幅と同じ長さに棟を設け、これより左右に葺卸ろし、恰も屏風のごとくつくるをいふ廐及び小さき長屋などに用ひらる、總じて品格なく費用も亦廉なり、又葺おろし屋根と稱するは物置、さしかけ等に用ひられ切褄の褄の棟より半切せられたる如き形なり、この三種は普通に用ひらるゝものなるが少し廣き建家にてはこの三種を連結混合して造れるもの多しこれを寄せ棟といふ屋根の材料は瓦、板、草、又はトタン等あれども普通は瓦葺なり、瓦は多少濕氣を含み、衞生上好ましからねど火

塗器、洗金彫等あり、堅牢なれば、飲食器に用ふること廣し。

▲駿河塗＝これは欅、栗等を用ひ、木地の見へる様に塗りたる木地蠟ぬり、數種の木を寄せ合せて木地を製したる寄木ぬり あり卓子、文庫、書架、其他輸出品あり。

木材用器の知識

△松＝まつは本邦唯一の建築材料にして又其種類多し、黑松は樹皮黑く、材は白色にして脂多く、專ら家屋、橋梁、船艦を造るに用ゐらる、又赤松は外皮赤く、材は白色微黃にして木理堅密にして彈力あり、建築用の外燃料にも用ゐらる、其脂は工藝用となり、其根幹は器具に造らる。

△杉＝すぎは松に次で用途多し專ら家屋橋梁の建築より樞、樽、其他日用の器具に用ふ、香氣あるものは木香と稱へて、酒に香氣を與ふるに用ひ、緻密にして紋理あるものは裝飾材となり、葉は線香に枝と根は薪材となり、皮は屋根の葺料となり、實は

に堪へ、保存しよきを以て一般に用ひらる、殊に葺きたる上を漆喰にて塗りたるは長く保ものなり。

板葺は、杉檜等の木材を薄く剝ぎて、用ふれど火に堪ふる力全くなく、且つ腐朽すること早く屢々葺換の爲め危險にして不經濟なり、又草葺は萱藁等を主とし、この材料の豐かなる田舍にて多く行はる寒暑にも堪へ、且つ風雨にも割合につよく一時温氣を吸收すれど通氣よろしく、又震災の虞ある土地にては殊に安全なり、たゞ火に耐ふること弱き爲め都會にては制限を設けられ濫りに用ひがたし、トタン板は重に差かけ、渡り廊下、湯殿、臺所等の如き人の常に居間とせざる場所に用ひらる、すべて金屬製の屋根は夏は暑く、雨降には喧ましく、且つ早く銹を生じ酸化し易し。

◎壁と戸障子

壁の塗り方はまづ荒うちを爲し、砂摺をなし、ぬきのところは割れ目を生せざる爲めに麻布又は紙などを塗りこみ、さて中塗をなし、上塗をかけるなり、上ぬりの色はさまぐあり、壁の色は座敷の向に關係あるものなればよろしく工夫すべし、白なれば最も明るし、眼の養生には靑みたるがよし、又新築の家の壁、再修の家の壁などすべてよく、乾きて後住ふべし、然らざれば痛く健康に害あり、竈に近き壁は三年毎に塗直すべし。

調して食用に供し、又豚の飼料となる等用途極めて廣し。

△檜＝ひのきは材は光澤ありて芳香あり、心は杉の如く赤味を帶び、邊は黄白色なり、重からず、堅からず、日光、水濕を受くるも變化せざるを以てして專ら、建築用となり又曲物としていろ〳〵の器を造る。

△槇＝まきは材は白色微黄にして脂氣、多く、木理正しく水に堪ゆるを以て水桶、棺等に造り、肉皮は檜と同じく槇肌として用ふ。

△椹＝さはら、材は槇に似て白黄色、建築材の外日用の桶樽等に造る。

△栗＝くりは、材質堅硬にしてよく水土に堪へ、枕木、井桁、樽等に用ひ、漆器の木地となし、又薪炭材とし樹皮はなめし皮用となし、實は食用となり葉は天蚕の食料となること人の知る處ろなり。

△欅＝けやきは樫に次いで最も堅く、且つ水に浸されざるの良木なれば、船舶、建築器具等に供し、其の玉の如き鱗のごとき

壁新らしければ燈を點じて明るく、壁に煤あらばをり〳〵掃ふべし、火をあやまつことあるものなり。

戸は雨戸、杉戸、かけ戸のごとき地方によりて樣々の風あり、材料は杉、檜、松なり、通常の雨戸は杉なり、すべて堅固にして盜賊および風雨の害を防ぐを旨とすべし、杉戸、大戸など人の目にたつものは、よろしく木材を撰ぶべし。

障子は腰障子、あかり障子、雨障子等あり、木材は檜、杉をよしとす、九尺四枚、九尺二枚などあれど、六尺二枚を常とするなり、棧の組方にも種々あれど、組方のこまかなるは却て闇し、大かた通常なるがよろし、紙は美濃紙よし、障子を張るは經師の業なれども格別難き仕事にもあらねば自ら張るを便利なりとす、現今障子の價は並一圓より上等三圓位まであり、上等にて杉の柾目を用ひたるものは幾年經るもゆがみ狂ふことなし。

硝子障子はなかば美濃紙をもて貼りたるがよし、座敷など見え透かぬをもておくゆかし、すり硝子を用ゆれば更に妙なり、されど硝子のみにて貼りたるは室内、空氣の流通を妨げ、健康によろしからず、又透明なる硝子は寒氣を防がざるものなり。

◎室内の飾りつけ

木目を有するものは裝飾材として貴重せらる。

△楠＝くすのきは本邦西南の暖地に產す質堅く、一種の芳香あり色は淡黃中に赤黑色あり、耐水性極めてつよく、欅と同じく木目あるものは裝飾用の建築材として貴重せらる、又其幹枝より樟腦を製し防蟲劑工藝用となす臺灣の深山最も多く產す。

△椰子＝やしはしゆろの類にして、熱帶地の產なり、幹は建築材料となり、皮毛は繩につくり、葉は屋根をふき、又糸となり、果實は食用となり、果殼は食器となり、花梗の液汁は酒を釀し、根は醫藥となる等其用法甚だ廣し。

△桐＝きりは白色微黃の材にして質は極めて柔軟且つ美麗なり、桐は材輕くして濕氣を受けざるものなれば簞笥、箱類、琴瑟、木履等に作るによし又燒きて火藥用の炭を製す。

△黑檀＝こくたんは熱帶地方の產にして、白黑色にして質極めて堅實、上等の

家屋はいづれの室内も身分に相應なる裝飾を施すを要す、蓋し裝飾は建築上の美點を發揮するの術にして其の良所をいよ〳〵審かならしむると同時に又其の短所欠點をなるべく人目に觸れしめざる樣施すをよしとす、又座敷にありては來客の目を樂しましむるを主とし書齋、食室、寢室等それぞれ其の人々の趣味好尙に應じて裝飾すべきものなり。

さて裝飾はいづれの座敷も床の間を目貫の場所として飾り床には掛物を懸け、置物を据え、花を挿し活くるを普通とす、花は置物と共に掛物を助けて其室の光彩を添ふるものなれば、花と掛物との關係はよく考ふべきことなり。

まづ花を以て掛物の面を覆はざる樣にし、且つ掛物書ならば何の花にても差支なしといへども、もし繪ならば、取合せを考へ計ふべし、たとへば如何に美はしく描きたる牡丹の花も、其の前に實物の牡丹を挿けなば掛物は終に生命を失ふべきがごとし、こは極端の比喩なれども、掛物と挿花とにこの類の死活は隨分多きものなれば注意すべきなり。

又花瓶の模樣と挿ける花との配合も大いに考ふべき事なり、平凡なれども月の繪にすゝき、雪景に、梅などよかるべく、又うるはしき花鳥繪には黑ずみたる動物の置物など配合よかるべし。

次には床の壁との色合も又調和よきを選び、なるべく花の色の負けぬ樣

座敷には床柱として用ひ又專ら裝飾的器物に作らる。

△紫檀＝＝したんはこれ又熱帶地方の產にして心材紫赤色を呈し、肌理美密にして堅く、古來唐木として高等の建築材料即ち床柱床框に用ひ又文具類、彫刻、唐木細工等裝飾用に珍重せらる。

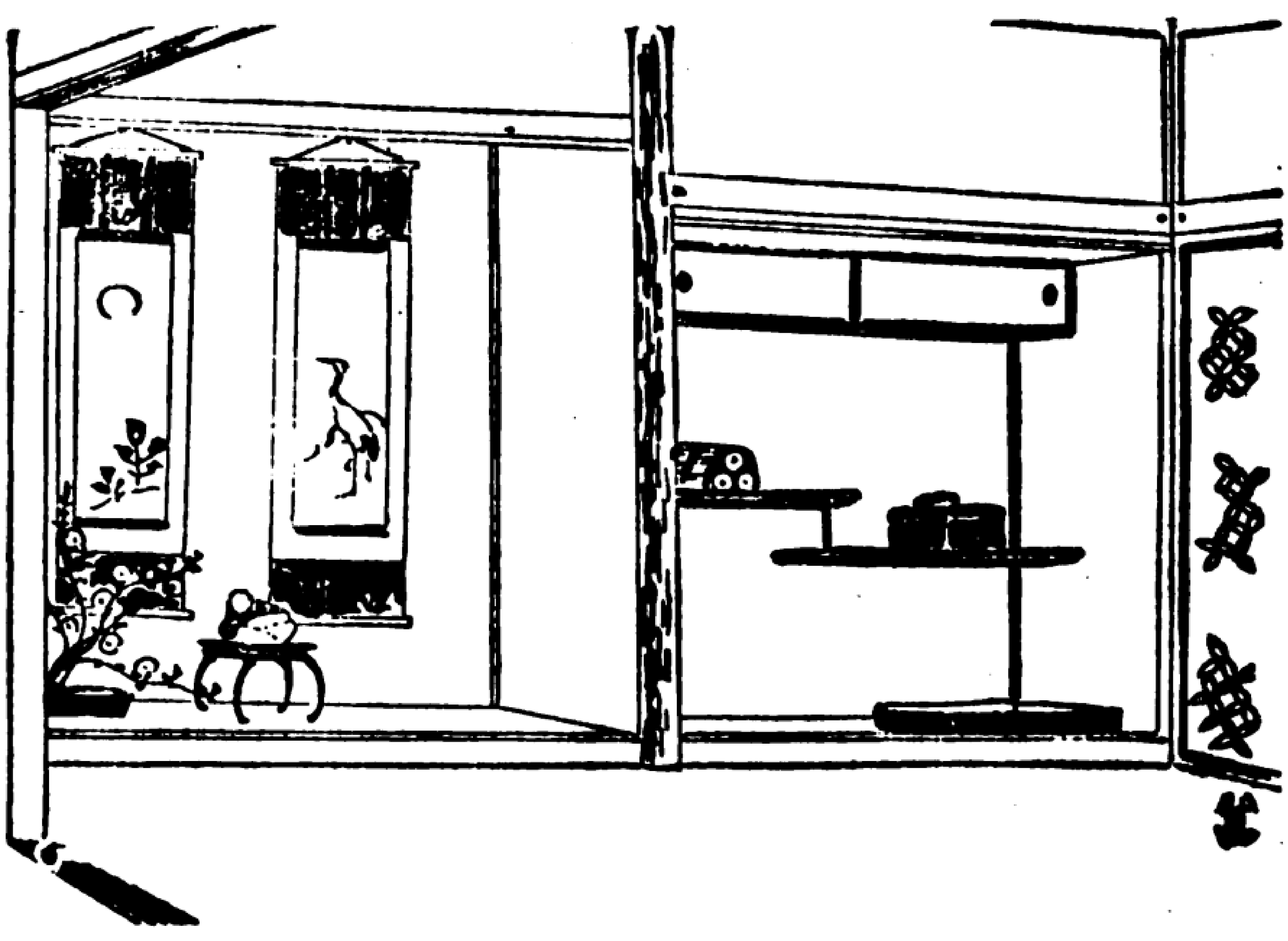
△鐵刀樹＝＝たがやさんは材は紫黑にして堅實美麗なれば、床框、床柱等を始めとして裝飾用の器具を製するに用ふ。

魚介類の品名

△鮪＝＝まぐろは種類多し而して關東の近海に產するものを房州まぐろと稱す肉は刺身、照り燒、となし、又煮乾してまぐろぶしとなし鹽藏し、油漬罐詰にも製す、骨よりは油を搾り、粕は肥料となし、その尾鰭は細裂して下等なる箒の柄となす、一年の產額大凡百四十萬圓に上る、この魚は鯖の種類に屬す。

△鰤＝＝ぶりは產地は西南の海に多し、肉

にすべし、花瓶は銅器、陶器などを正とし、竹又は籠などを略とす、床側の違ひ棚には料紙、硯、繪卷物、書畫法帖、香爐、文臺、植木鉢など時にあひたるを置くべし、若し袋戸棚のみにて違ひ棚なくば、置棚三角棚に飾るもよし。柱には適當なる處ろに短冊かけ、扇面、柱かゝみなど掛くべし、壁多き室ならばこゝにも小さき掛物をかけ、西洋風の額に仕立たる寫眞、油繪など置くも可なり、鴨居の上欄間等には、時の風尚に從



ひて横額を掛くるもよし、すべて壁の色、襖などの模樣と相犯さゞる樣工

は照り燒、煮つけ、刺身に用ふ、又多くは塩漬とし乾鰤として用ゆ、又頭部の骨よりは工業用の油を搾り、腸は肥料に供す、一ヶ年の漁獲高凡二百五十萬圓、鰺の種類に屬す。

△鯖＝さばは南方海に多く產す、概して鹽漬となし、又鑵づめともす一ヶ年の產額凡二百萬圓。

△鰹＝かつをは最も多く南海東海に產す、肉は刺身、照燒、となし、又煮乾して鰹節を製し、或は鹽漬となし腸は鹽辛を造り、骨より油を搾り骨粕を得べし一ヶ年の產額凡そ五百八十萬圓に上る。

△鮭＝さけは關西地方には產せざれども、東北地方より北海道は其の主產地なり、專ら、乾製、鹽藏、燻製、鑵づめとなし、歐米人も又嗜食す、腹子は鹽漬となし、又腸は鹽辛に製す、一ヶ年の產額凡三百萬圓。

△鱒＝ますは千島エトロフを第一の產地とす、製法并に食用法は鮭に同じ。

△鯛＝たひは種類多し味最も高貴、色

風すること肝要なり表裝又は額緣中の繪模樣などよく調和すとも壁の色に負けて品下れる例もあれば此の邊大いに心すべきなり。

次に屛風も又室內裝飾の具として用ひらるものなるが、狹き座敷には隅に竪長き二枚折の用ひらるもあり、又六枚折の二枚に疊みて据へらるゝもあるべし、廣き座敷には適宜なり、幾枚も飾る時は色紙短冊など、貼りまぜたるは上座に、又墨繪も上座に用ひ、彩色の濃きものほど下座に立つ習ひなり、又壁の色、襖の模樣等差合なき樣選ぶべし。

衝立も又屛風と同じ。

次に座敷の中央に紫檀、黑檀の如き唐木、又は蒔繪の大なる幅廣き机を据へ、これに卷煙艸の具など載せその前後に主客の座布團を敷きてこゝに客を請ずるもあり。

◎書齋の設備

書を讀み書畫を寫すに便利なる樣其場所はなるべく家の中にて靜かなる所を撰び、勝手臺所は勿論、小兒の遊び塲などに接近せざる樣にすべし、狹き家にありては時として小座敷の代用をもなし、主人の朋友などをもこゝへ通し、隨つて客間兼帶にすべき室なれば、床の間を設け欄棚、本箱をも据ふる樣構造すべし。

最も艶美にして魚族中第一に位し、吉凶には必ず用ふ、料理には刺身、鹽燒、潮汁等いろ〳〵あり、製法には鹽づけ、鹽乾、又鯛でんぶ、鯛煎餅いろ〳〵あり、又興津鯛と稱するは方頭魚を一夜鹽つけとなし、水に浸して乾製したるものなり一ヶ年の產額凡四百五十萬圓。

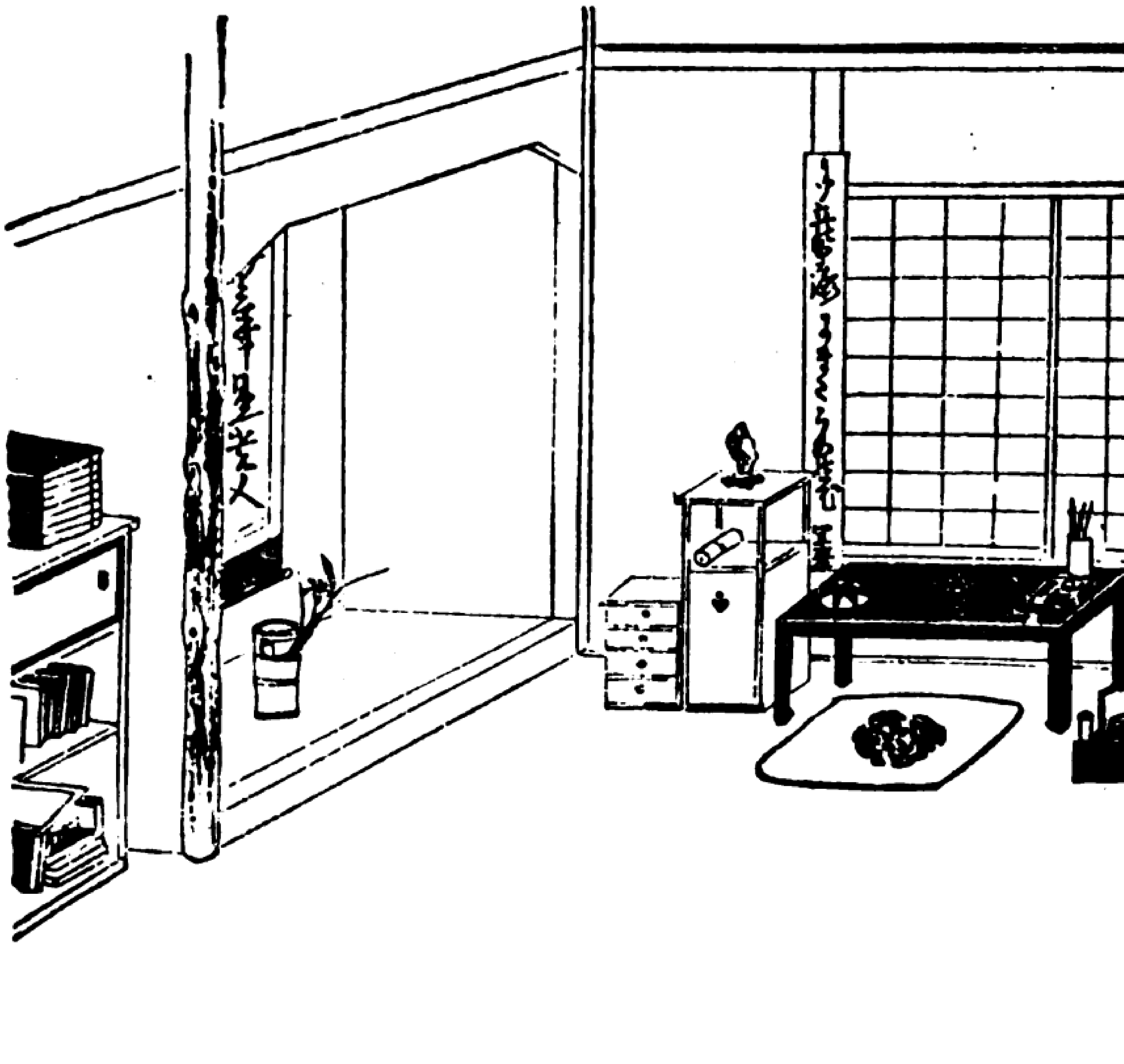
△鰯＝いわしは、本邦海岸至る處ろに漁す、多く煮乾、鹽漬となし、又油漬罐づめとなす、又搾粕干鰯は肥料用とす一ヶ年の產額凡百八十萬圓に登る。

△牡蠣＝かきは多く廣島、岡山地方に產す、專ら鮮食し、又煮乾となす、罐づめ牡蠣醤油となす、一ヶ年の產額凡そ二十五萬圓。

△鮑＝あわびは多く北海道に產す、專ら乾製となして清國へ輸出し又粕づけ、鹽づけとなし熨斗を製し腸は鹽辛となし、殻は手工品を造る、一ヶ年の產額凡五六十萬圓。

△章魚＝たこは八脚類の動物なり、本

机は光線の左りより來るやう据えなるべく窓或は緣側等のごとき明取りの方へ正面に向はざる樣にすべし、且つ陰濕なるはよろしからざれど、又あまり日當りよきは好ましからず、よきほどに明るくば却つて日光の直射せざる方書見等には便利なり且つ眼の爲にも烈しき日光は害あるべし



床には勉學の勞を慰むべき軸物をかけ、花など挿けおくをよしとす、近來

邦海岸至る處ろに產す、多くは煮食し、又乾製す。

△鰹節＝かつをぶしは專ら食物の調理に用ひ、又久しく貯藏し得る食品なり、製法は種々あれども大骨に沿ひ、肉を切取り、二片づゝとし、背腹の大小をくみ合せ湯煮して小骨を拔き、其皮を去ること多きものは背節、少きものは腹節といふ、伊豆製を最も優等とし、土佐、薩摩其他各地に產す。

△雲丹＝うには越前に產するを第一とすかい類の卵に鹽を和して製する食品なり。火を用ゐて煉りたるを煉うにと稱し、其外生うに、水うに等製法いろ／＼あり。

△海苔＝のりは岩のり、又は柴のりを摘みとりて洗ひ、細刻して簀の上に抄き乾かしたるものなり、海苔は海邊のみならず又山間の河川にも產するものにて日光大谷川のり、山城鴨川のり等これなり。

消費物

は書齋の他室と離れて靜かなるを望むを以て洋風の構造にするもの多し、普通の日本室にて高机をすえ、椅子に凭らんとするには多くは軒低く光線の射入適度ならずして不便なれば牀は便利の爲め疊敷とするも窓及び入口等は洋風とするをよしとす。

殊に冬時煖爐を置くにも日本風の家にては室內の溫度割合に上らずして不經濟となること多しされば先づ窓の下に机を据え、本棚等を其邊に置き室の中央には談話用の卓を設け、二三の安樂椅子、長椅子など休息の用に供ふべし。

室の周圍には研究に資すべき書籍、圖畫其の他の參考品を入れ置くべき戶棚を設け窓には窓掛を設備すべし。

◎床と掛もの

掛物を撰ぶには時候、日柄、賓客の身分に應ずべし時候には四季折りをりに相當なる品柄あり、日柄とは祝日、祭日等の類、又當日招請の客の身分とは文武老若、男女等をいふ。

この外世の變遷に應じ、適當なるものを選び、其心を樂ましむるを主とすべし、たとへば春風嫋々として百花其芳を競はんとする時節に霜枯の山水を掛け、又雜閙せる地に於て都の風俗、濃艶なる浮世美人畫など掛け

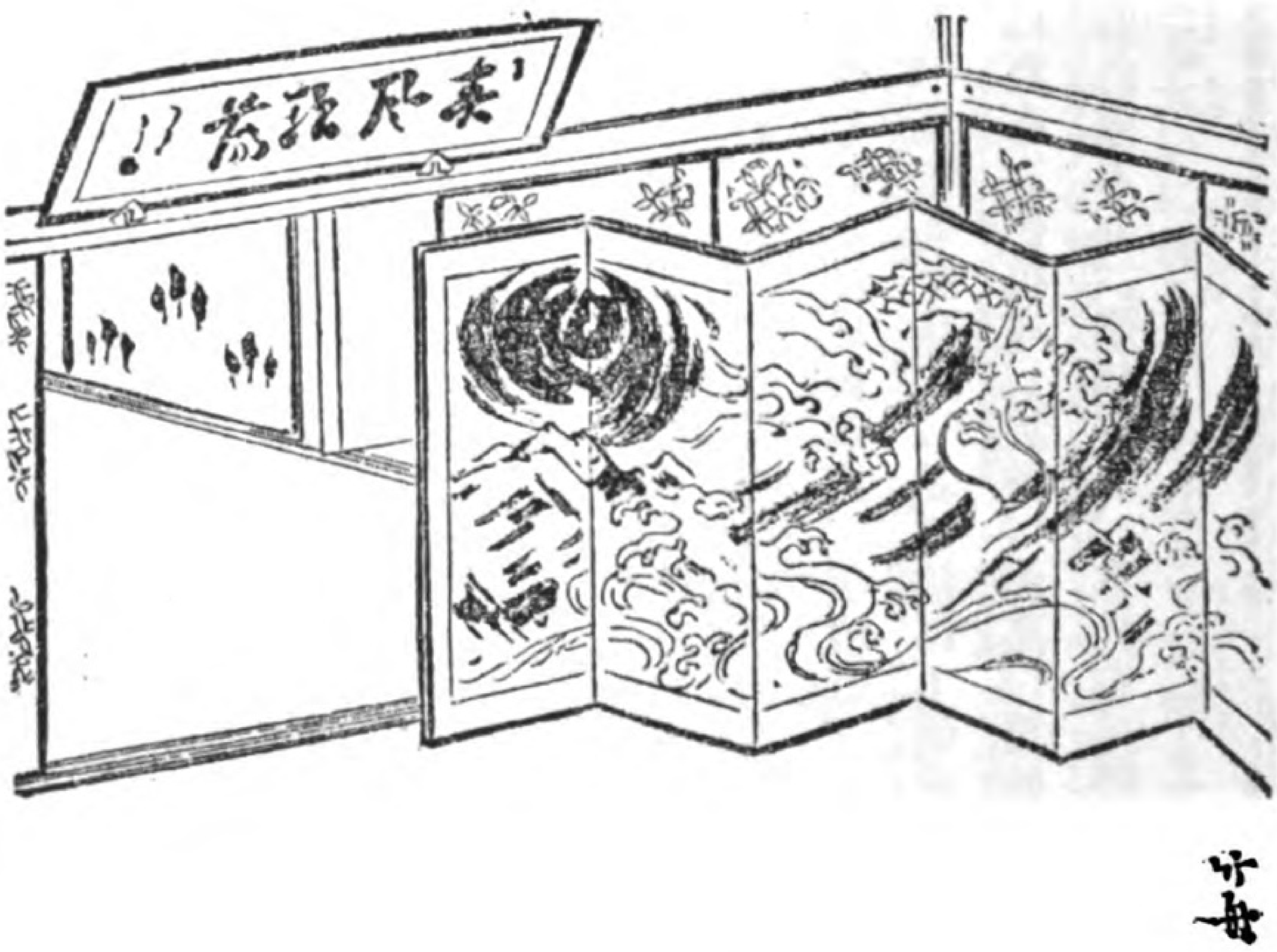
△紙＝は日本紙西洋紙の別あれども苟くも纖維に富める植物は皆悉く製紙の材料に供すべし、和紙は楮皮、雁皮、三椏等を主とし、洋紙は理、化學的の方法を以て材質粗にして輕柔なる植物、即ち樅、樺等より木粉を製し、或は藁より纖維を分離する等の方法を以て抄紙するなり、されば質の強靭なるは和紙を以て第一とす。

又襤褸を以て紙を製するは、まづこれを切斷して苛性曹達を以て煮、纖維以外のものを去り、破碎洗滌し、樹脂と石鹼と、アラビヤゴム等の混液を以て纖維を密着せしむる作用を起さしめ、以て紙となす。

和紙は一種の原料、或は二三種を以て製す、米粉の如き澱粉を加ふれば糊入質の紙を得べく、着色せる紙を製せんには、原料に色を加ふるなり、紙の種類によりて方法は多少異なれども、原料の纖維を清水に入れて攪拌し適當の漉器を用ひて漉くなり

和紙の中にて西の内と稱するは楮皮の厚紙にて傘、合羽雨障子等に供せられて強靭

たるは、如何にも不釣合なり、されども盛夏に雪景色の掛物は却つて涼し



く感せられ、市塵喧囂の場に山村閑寂の風物はよく其心を落つかしめ、太平の春には戰亂の畫も與あるべく、又文字の掛物は何れの時節にもよく適するものなり。

掛物に一幅物、二幅物多きは五幅、七幅もありいづれも床の大小廣狹によりて相應に使用すべし二幅物以上に至つては掛ならべたる工合、双方の繪の相呼應するやうなるを可とす、又墨繪と彩色繪との差別なく比較して繪の勝ちたる方を左に置くなり、又三幅對なる時は繪の勝ちたるを中央次

なり、又典具帖と稱するは質薄けれども柔かくして貴重品を包み、又障子の內貼に用ひらる。

△石鹼＝せつけんはオリーブ油、椰子油、綿實あぶら、魚油・牛脂の如き動植物の油又は脂肪にアルカリを混じて製す、化粧石鹼は原料を撰びたる上に香料を加へ、芳香をいたしめたるものなり。

△鞣革＝なめし皮は獸皮の毛を去りてこれを熟皮としたるものなり、製法は單寧散を主として用ひ、下漬、本漬、鑵行つけ等二三段に別ちて液中に革を浸し、而して適度に壓力を加ふるなり。

△墨＝松の煙、又は菜種あぶらより得る油煙のごとき炭素末を膠にて固めて製したるものなり。

△茶＝茶は山茶科植物の葉を採りて製したるものにして其培養法製法によりて種類あり、煎茶は綠茶の芽を摘み、精撰したる葉を蒸し、焙爐の上にて揉むこと數回、これを乾燥せしむ、日常飮用のものこなり其

なるを主位、又其次なるを客位にかく、三幅物は中央を中尊といひ床柱の方を主位、他の一方を客位といふ、故に掛物の右作と左作とによりて主位客位は相反するものなり、掛方は中尊を第一とし、次に客位、次に主位を掛くるを順序とするなり。

すべて掛物の表具は床壁の色と調和すべきやう注意して造らしめ又掛物を外づすには床の前に跪きて半分巻きあげ、これを竹筈にてはづすなり。

◎襖と屛風

襖は障子を兩面より貼りて縁を打ちたるものにて上張りに唐紙を以てする故唐紙といふ、其の骨格は障子のごとくにして棧太く、普通は杉材を用ふ、これを貼るには西の內、美濃紙、半紙等を以つて下張り、蓑張り、大鼓張り、袋張りをなし、さて後に上張を爲す、上張は布帛又は紙を用ふ、普通は葛布、芭蕉布、更紗、大高、書仙紙等にて形紙あり、無地あり、畫にも彩色畫あり、墨繪あり、その室の體裁によりて調和すべき樣考へて用ふべし。

襖の引手は其の形ち大小數種あり、裝飾にも金銀鍍金、銅、七寶象牙、角等より下つて安質母尼などあり、又中央に紐を下げたるあり襖縁は通常

の原葉を用ひて上製したるものを玉露といふ、紅茶は生葉を日光に晒らして萎ましめ後ち塊状ならしめて醗酵を起し、之を乾燥したるものなり印度、支那にて製す、烏龍茶はこの一種なり。又磚茶は下等なる茶を蒸し型に入れて壓したるものなり。

△珈琲＝コーヒーは茜科の灌木にして、熱帶地方の特産なり、其實は大豆位あり、色黄褐等あり炒りて、粉末とし、飲料に用ふること茶のごとし、ブラジル産最も多し。

装飾品類

△瑇瑁＝たいまいは海龜の種類なり、多く南洋、熱帶地方に産す、其甲をべつこうといふ、十三枚の小甲より成り、黄色透明にして斑點あり、これを薄片にはぎ更に合せて婦人頭髪用の装飾品を製す、近年、馬蹄、牛角、象牙等を以て擬造することあり。

△珊瑚＝さんごは多く南洋地方に産す、珊瑚蟲の分泌物の堆積せるものにして、皮

墨繪緣、溜塗緣、木地緣等あり、黒繪緣は上品なり。

又襖の種類には中抜襖とて中央を中障子にし、これに紗、緞子等張りたるなど大いに趣あるものなり又戸襖とて表面は襖にて裏面は戸となりたるもの、納戸の境又は臺所の出口等に用ひらる、屏風の作り方は襖と同じくして、六枚折又は四枚折、二枚折等を普通とす、多くは二個づゝ對につくり、これを一雙と稱す、普通高さは六尺なれども枕屏風は二尺、若しくは三尺位とし、長さも又短きものなり、いづれも張り方骨組は襖と同じく緣は黒塗を多く用ふれども溜塗又は白木を用ふるものあり、蝶番は金具もあれど多くは紙にて貼りて造る、稀には革を鋲どめして用ひたるものあり。

普通屏風の繪は四季の山水、花鳥、人物など多けれど、又名家の筆蹟、色紙短冊等の張交せも行はる、其他は金銀砂子、金銀泥など多し、金銀屏風は専ら座敷の装飾用にして、金又は銀箔の上に極彩色の繪などを描きたるもの多し、屏風は天武天皇の世に新羅より献じたるものなりと傳へ、隨つて古來由緒ある珍らしき古物の保存せらるゝものあり、奈良東大寺の鴨の毛の屏風は、千有餘年前の作なれど今に猶存じ珍らしきものなりといふ光琳、宗達、抱一等所謂光琳派の筆もて金光燦たる屏風に四季の艸花を描きたるなど却々に艶麗なるものなり。

次に疊表は備前と琉球とあり、琉球表といふは琉球藺をもて織りたる

を去り中軸を琢磨して、種々の粧飾品を製す、本邦にては土佐の海に產す、紅色なるを上品とし、白色を下品とす、地中海に產するもの紅色にして世界第一の稱あり。

△瑪瑙＝めなうは石英の一種なり、釦鈕、帶玉、其他裝飾的のものを製す、產地は越中、越後等にして碧玉これに類似す、而して瑪瑙の一成分たる佛頂石即ち玉髓は所所に產し、寶石の一たり。

△翡翠＝輝石の一種なる軟玉にして、亞細亞東南部地方に產し、支那にては青玉と稱し、耳環頭飾等の裝飾品とす。

△柘榴石＝晶形の寶石にして色一樣ならず硬度は七、其粉末は金剛砂と稱し諸種の玉石を琢磨するに用ふ。

△琥珀＝蜜黃色をなし、透明なり、樹脂の地中に入りて化石せしもの、昆蟲等を含有するものあり、虫入とて稱美せらる。

△水晶＝石英の一種にして六方晶形に屬し硬度は七、甲斐、美濃に多し無色の外紫黃、黑等あり、他の鑛物を含有するものは

もの備前表は上品なれば、すべて座敷向に用ふ、通常は縁をつけるなれど小座敷などはつけざるもよし、茶の間納戸などは琉球にて足れり、これは品あしきも永く保つものなり、すべて疊を新しく作らしむるには上等の品は價貴けれどよく久しきを保ちて却つて利あり、下等品は僅かに數年ならずして損ずるものなり、上等の新床は二圓位を現今の相場とす。

◎机と額面

机は紫檀又は黑檀にて作れるは上等にて室內裝飾の用に供さる、それより下りて日常の使ひ用には欅、桑、栗等をも用ふ、桐材にて作りたるは柔かなれども輕くして運搬に便利なるのみならず彈力性あるを以て抽斗よく閉り、濕氣を忌むべき紙筆など納め置くに便利なり、常用の物は多く抽斗をつけ、且つ錠前の備はれるもあり、尊貴の家に文臺として用ひらるゝものには漆にて塗れるあり、又蒔繪を施したるありて座敷道具裝飾用の一つとす、又一閑張は張拔と稱して輕き木にて下地を作り上に紙を張り、漆を塗りて作れるもの輕くして持運びに便なり。

文臺、即ち俗に文机は机の小形なるものにて書籍、短冊などを載する用とす。

次に額について言はんにすべて額は掛物、壁の色、窓掛、及び挿花など

草入と稱して珍重す。

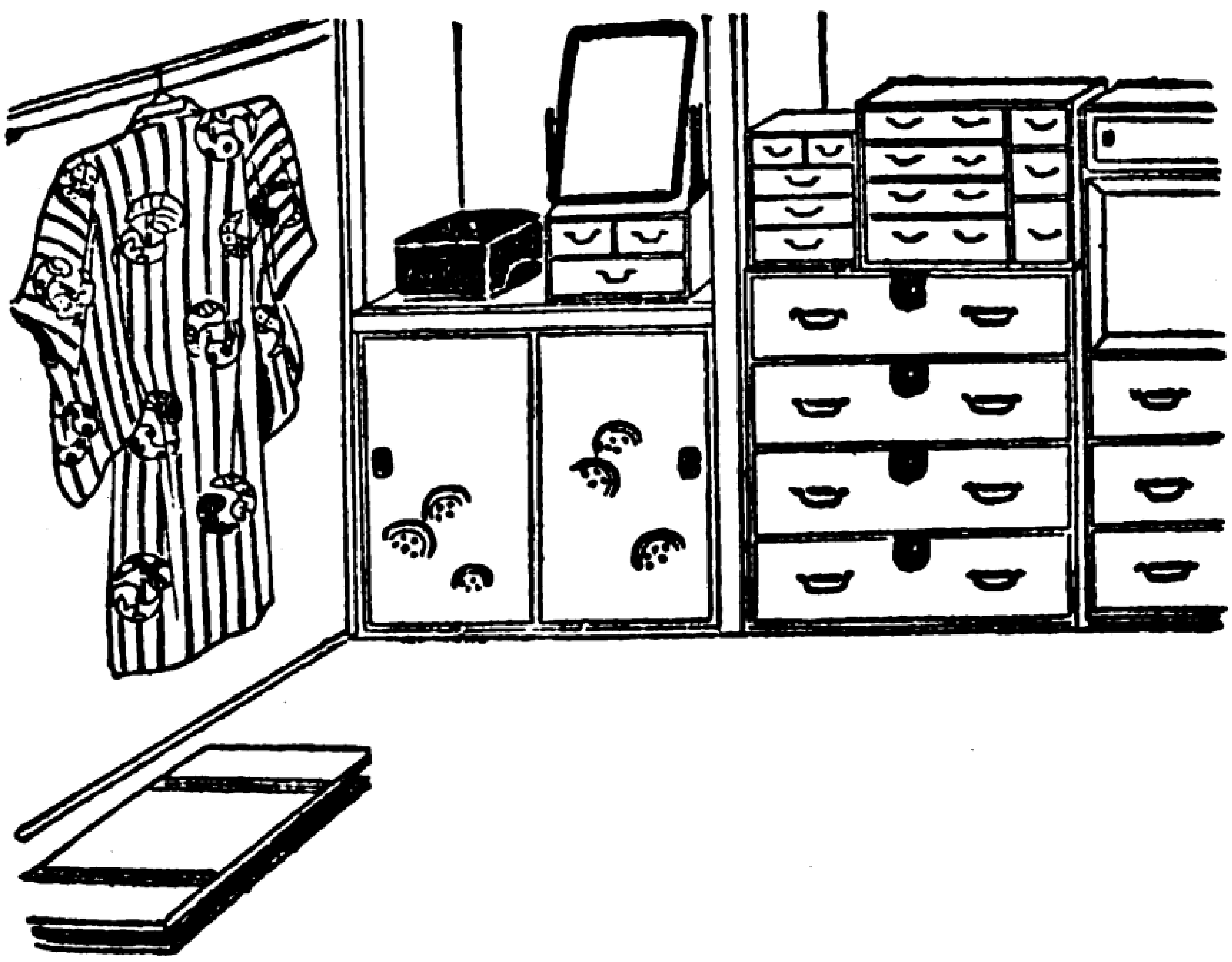
野獸家畜類

△膃肭獸＝おっとせいは、あじか類の海獸なり、牡は五六尺、牝は三四尺、千島、以北の海に産す、色は褐色にして青色の斑點あり、毛は短かけれども染して帽子、敷物、衣服の裝飾に用ふ肉は鹽漬として食す。

△海豹＝あざらしも同じく北海に産す大さ五六尺、毛は灰白色、短くして密生し美なる黑褐色の斑點あり、よく水濕を防ぐがゆゑに敷皮、帽子皮函等に造り、支那人は衣服の袖口等に用ふ。

△鯨＝くぢらは種類極めて多く又大小、形狀一ならず最も多く獲するを抹香くぢらといふ、專ら脂油を搾取る爲めに獲す、赤肉は食用となるも日本にては未だ廣く行はれず、頭部の脂肪、即ち鯨腦油は緻密の細工に用ひ、又燈油として用ゆ、又齒及び骨は種々の工藝用となる。

と調和するものを撰びて掲ぐるが肝要とす、又貴人の筆蹟、又は貴顯の肖像等は成可く上の方に掛けさほどまでならぬものは下の方に置くこと勿論なるべし、又庭園の景と同樣なる畫はなるべく避くるをよしとす。



◎器物の配合

座敷は客を請じて歡待すべき所なれば此に備へ置くべきもの、或は持出すべき器物は、すべて多少裝飾の意を含み、なるべく我家の內にて最も美麗なるものを用ふべきこそ客に對する禮儀なるべし、座敷道具と一口にいへどもこの內に裝飾品と、接待品との區別あり、裝飾品は掛物、額

△豚＝ぶたは生長極めて速かなる家畜にして、塵物を以て養ふを得、英國にて改良せるヘーダシヤイアと稱するは一歳中にして八十貫目の肉を有す、豚は肉及び脂肪を與へ、毛は種々の刷毛に用ひ糞尿は肥料となる。

△家兎＝うさぎは穀類乾草を以て飼ふ、アンゴラと稱する種はその毛絹糸狀なるを以て織物の原料とし、フランス家兎は肉用とし共に賞せらる、皮は毛絲等に供す。

△水牛＝すいぎうは本邦にては臺灣に產す、專ら力役に使ふ、力馬に倍し、乳は酪となり、皮は靴底となる。

△羊＝ひつじ、根菜類、油糟等を以て飼養するを得、專ら毛を採る爲めに養ふあり、又肉用として養ふあり、其飼養の目的によりて食糧異り、剪毛は六月頃行ひ羅紗に製し皮は氈褥とし、或は鞣して手袋書籍の表紙に用ひ、乳は滋養分に富める飲料となる。

△山羊＝やぎは又乳用毛用兩樣の目的あ

花瓶、置物屏風等の類にして接待品は火鉢、煙草盆、卷煙草、茶器、座布團、敷物等のごとし、いづれもその家に應じた品を淸潔にして出し殊に破損したる器具を客にすゝむるは失禮なり。

　座布團はその色模樣等と壁、襖などの調和を考へ、或はこれに似たるをも採るべし、調和は時として全く反對なるにも得られ、殆んど似たる中にも求むるを得べし、例令ば整然と極りたる模樣のある襖の立てる座敷に秋草の亂れたる又花紅葉の散りたるがごとき一定の形なき模樣の友禪の座布團も似つかはしく、又襖の繪に似たる繻珍織、又は更紗染などの調和するもあり、すべて座敷道具はその主とするものを定め、これに押されぬ樣他物を撰むを肝要とす、必竟物は配合にあり、滿目澁きものゝ中に一個金光燦たるものあれば、如何にも目につきてこれはとおもはせるところが身上なり。

　又座敷は賓客を接待するところなれば注意して見苦しからざるやう造るべし、廣さは隨意なれど、まづ大抵總建坪の半、或は三分の一の割合にて間取をなさばよろしかるべし。

◎納戸と臺所

納戸は家の內にて衣物、調度など入れ置く所なり、もと納殿の轉化せしも

り、アンゴラ種は毛實絹糸のごとく、美麗にして、印度のカシユミヤ種はこれに次ぐ革は羊と同じく手袋用となる。

色の智識

色には種類多くして際限なけれども、むかしより赤、黄、青、白、黑を五色と稱し、これを原色として無數の色を生ぜり。

例へば、白と黑とを混ぜば、鼠色となり赤と青とを混ぜば紫となり、黄と青とを合せば、綠を生じ、赤と白とを合せば桃色となるがごとし。

物理學の試驗によれば日光は三稜玻璃を通過して七色に分解す、即ち紫、紺、青、綠、黄、橙、赤にして虹の色と同色なり。されど繪の具の調合には、青、黄、赤の三色より他の色を生ずるを以て、此の三色を原色と稱し、他の色を間色と稱す。又白色は七色の混合したるものにて黑色は色の皆無なるものなれば、いづれも原色とは稱すべからず。

のならんといふ、普通の家にては、長持簞笥及び、日常に用ひざる膳椀の類、骨董品類など納むる所とす、室はあまり日當の烈しからぬところをよしとす、日當り度に過ぎては、却つて器具を損ず、陰濕なるは、衣服、諸道具の爲めによろしきにはあらざれど、蟲干をなし、時々日光に當て置かば、常に暗くとも大なる差支はあらじ、この室は、他の諸室との交通便ならざるを可とす、主婦の居室などより出入する口一つあらば足るべし、窓を高き處ろに設け、諸器の搜索に便あらしむるほどの光線は射入する樣構造すべし、專ら盜難火災の用心をなし、又急に器具衣服など出す時、直ちに出し得る樣、常に整頓なし置く爲め、周圍に棚、戸棚を設け各々位置を定めて整列し置くべし、下は普通の部屋のごとく、疊敷にするもよろしけれど、板敷も便利なり、家の構造上爲し得べくば成可く奥まりたる所に設け、また臺所、湯殿等に接近せしむべからず、狹き家にては、納戸に寢床など設くる事もあれど、その目的全く異なりたる室なれば、兼用することは難し、若しさのみ日當りなど惡からざる室を以て納戸とせば、小兒の晝寢などせしむるに用ふるは敢て不可なかるべし。

兎に角納戸は堅牢なるを旨とし、戸障子などは粗製のものにてもよろし只戸締りのよきを肝要とす。

又臺所は狹くとも便利なるを旨とすべし、飲食の器具、調理すべき食料

●七色の配合

日光の七色は、各その幅を異にするものなるが、今一つの厚紙にて圓形をつくり、其上に其幅の割合に七色に塗りて、これを速かに廻轉する時は白色を顯はす、これ一つの色の眼に止まりて未だ消へざる内に他の六色は順次に入り來り六色混同して映ずるを以てなり、又互ひに隔たりたる色を配合すれば互ひに見ばえして爽快の感を起さしむるものなり、たとへば、綠と赤とを調和すれば最も強き趣きありて花やかなれば玩具、錦繪等の彩色は最も多く應用されたり、又赤に金光を發すれば殊に花やかなり赤地の錦は即ちこの調和法を得たるものなり、斯くの如く研究の區域は實に廣きものなれば女子の繪を學ぶは單に自然を寫すのみならず、色の調和を研究するに就て大に益あるがごとし。

●色の名稱

▲赤色を基としたるもの

などは一切戸棚に納め遺すことなかるべし。

◎庭園のつくり方

家屋の周圍、殊に客室、若しくは書齋等の正面に人工にて築山泉水などつくり、草木花卉を植ゑ、專ら人目を樂ましめ、散歩逍遙に適せしむるは庭園の目的なり、本邦は自然の山水風景に富めるが故に人造築庭の技も拙からず甚だ風致雅趣に富める多く、生活に困難なるもの丶外は必らず其住家に庭園を設け膝を容るゝに足らざるほどの家にてもなほ方數尺に滿たざる空地に植木鉢をならべ箱庭を作るがごときも珍らしからず。

庭園の作り方には數種あり、第一は平庭又はき庭ともいふ一面の平地にて僅かに花壇を設け又は芝を植ゑる外山水植込等の構造なきものなり、四季の眺望はやゝ乏しけれども運動場たるに適し、小兒多き家等にありては最も實用向なり山庭は築山又は泉水等の設けあり鬱林小徑の曲折ありて時としては樹陰に涼風をも待つべく、すべて趣味ある山家の自然の狀を模したるものにて大なる庭園に適す、此種の庭は主として其面積廣きがごとく構造するをよしとすれば境界に大なる樹木を植ゑ竹林などを生育せしめて垣塀等のあらはならざる樣造るをよしとす。

又茶庭といふは、自然の寂びたる狀態をあらはす樣、審目立てる小さき

△紅　純粋の赤色にしてその濃きものを和紅といふ少しく藍がゝりたるものなり。
△緋　紅よりも黄味を帯びて少しく淡きものなり。
△朱　緋の一種にして緋よりも淡きものなり。
△茜色　紅に少しく藍を入れたるもの。
△桃色　紅の淡きものなり。
△紅梅　紅梅の花のごとき色なり。
△肉色　桃色よりも淡くして殆んど白に近くほゞ西洋婦人の肌の色に似たるもの。

▲青と赤との混合色

△紫　紅に藍を入れたるもの。
△江戸紫　紫の一層の冴へたる色にして朝顔の花のごときをいふ。
△小豆色　小豆のごとき色にして紫に鼠を混じたるもの。
△藤色　紫の一層青勝ちなるものにして淡き色なり。
△梅鼠　小豆色に鼠を加へたるもの。

▲青色を基としたるもの

庭に殊更ならず落葉などの散れる様を雅致ありとなし樹木も小柴垣に續ける枝折戸の上より痩せたる赤松などのさし出でたるを風流とす。

次に中庭は凹字形になれる家屋の中間又は全く四方を室々にて圍める中にある小庭をいふ、此所に接近せる室の明取りのため、高き樹木、枝葉多き花物などを忌み、南天、つゝじのごとき灌木をよしとす。

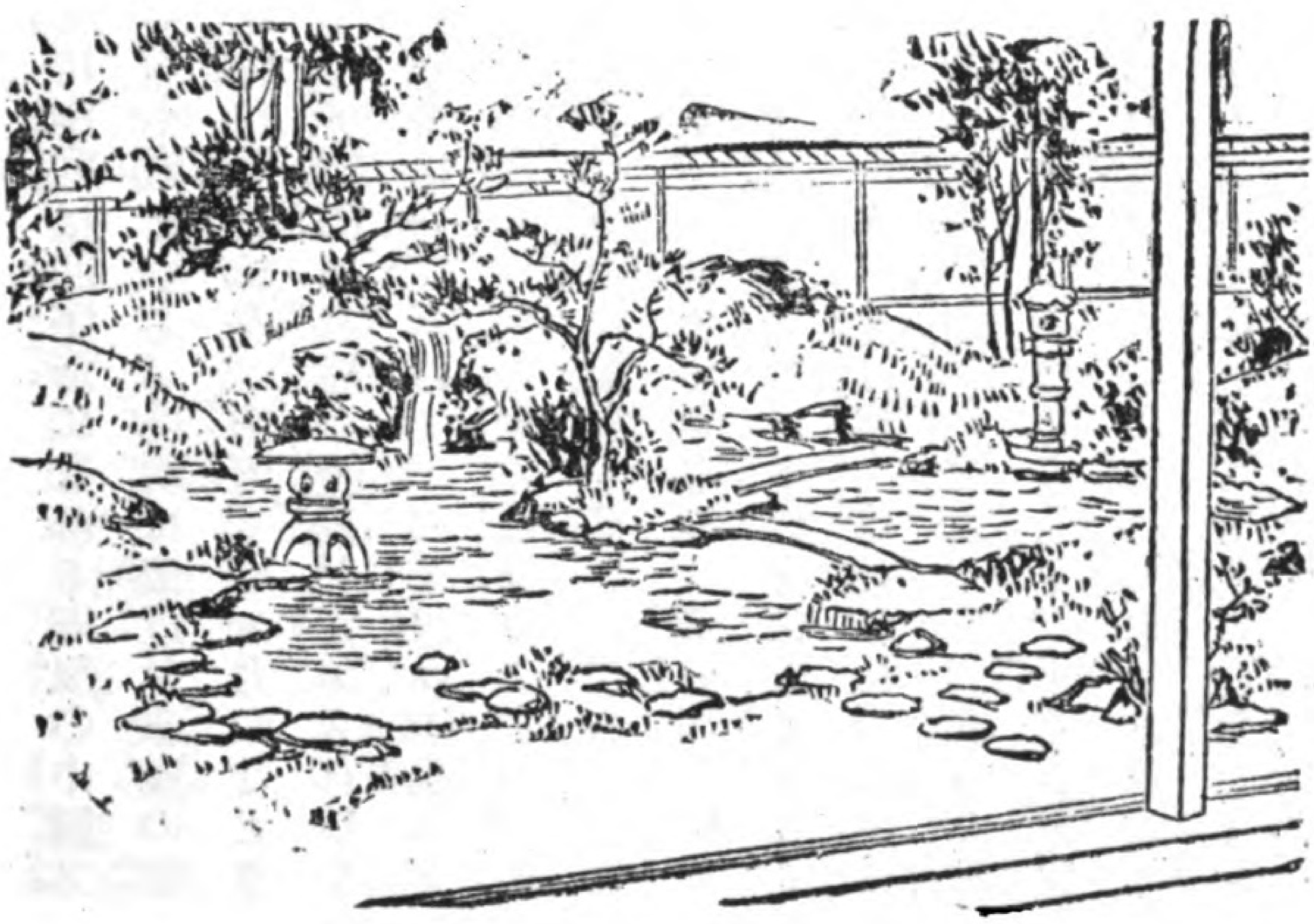
すべて庭園は家屋の體裁を完からしむるものなれば、特別なる珍石奇木を集むるは尙ばざれど、四季折々の眺めを考へ、夏は枝葉繁りて炎熱を遮り、冬は落葉して光線の透過をよくし、植込、石燈籠の調和もわざとならず、飛石、花壇の配置も又おもしろく朝夕の散歩に繁劇なる職務の勞苦を忘れ得るやう造るべきなり、庭園の外園には四時落葉せざる常磐木を可とし、家の裏庭などには果樹を植ゑ菜園などつくるをよしとす、手入は春先に花壇の手入、又は植換等をなし、初秋に樹木の刈込み又は霜除等をなすべき爲め專門の園丁を雇ふべく、大なる庭園ある家にては四時常に植木屋の手を離るゝこと稀ならんも、小さき庭狭き園などにては年一回初秋に園丁を賴む外は家人の手入にて事足るべしすべて長く手入せず荒れ果てたるは見苦しければ素人にても常に注意して雜草を除き落葉枯枝を取去り、掃除を怠らず、冬は落葉を敷き、夏は打水して常に見て心地よき樣なし置くべし。

△藍　青の代表色にして青色の濃きものなり。
△瑠璃色　色に少しく赤味を帶びたるものなり。
△唐藍色　藍の冴へたる色にして洋藍ともいふ。
△空色　空の如き色合にして藍の淡きものなり。
△縹色　藍に少しく赤味を帶びたるもの熨斗目色、花色ともいふ。
△すみれ色　薄紫に少しく赤味を混じたるもの。
△木賊色　綠の極めて薄きもの。
△淺黃色　藍の淡きいろなり。

▲黃を基としたるもの

△鬱金色　黃色の代表色なり。
△卵色　黃に白味を帶びたる色なり。
△橙色　橙の實のごとき色にて黃に赤味を帶びたるもの。
△鶸色　黃の淡き色にして卵色よりもやゝ濃きものなり。

又家の周圍につくる塀は板塀、練塀、煉瓦塀いろ〱あり、板塀は杉ま



たは松の板もてつくり、澁にて塗るべし、木材美ならず、又節などありて見惡くければ黑く塗りて澁をひくべし、すべて澁は腐蝕を防ぐ効あり、杭は栗、松、檜、杉を燒きて打こみひかへ杭をなすべし、練塀は泥土をもて瓦をつみあげ、外面を石灰にて塗るなり、たもちよく體裁も美にして且つ火災を防ぐによろしけれど價高きをもて普通には用ひざるなり。

◎住居の淸掃

住居の內外を淸潔に掃き淸むるは啻に衞生上に利あるのみならず、心氣

△萌黄　黄に青味を帯びたるものにて草木の芽出のごとき色をいふ。
△橄欖色　緑に鼠をまして少しく茶味を帯びて濃き色。

▲三色の混合錯雑せる色

△海老茶　紫色と橙色との混合にして赤二分、青、黄各一分づゝの配色より出来たるものにて海老の如く赤ちやけたるものなり。
△革色　紫色と緑色との混合にして、青二分、赤、黄各一分づゝの配色より出来たるものにて革の如く黒ずみたる色なり。
△鳩羽色　鳩の羽のごとく藍鼠に底に赤味を帯びたるものをいふ。
△代赭　茶色に青を混じたるもの。
△栗色　栗の實の如く黒味ある茶色なり。
△茶　赤に黄と鼠とを混じたるものにして代赭色の濃きものなり。
△白茶　茶色の極めて淡くして少しく白勝なるもの。
△金茶　茶色に黄と赤とを加へたるものにして金色を帯びたる茶色なり。

を爽快ならしむること又頗る大なり、塵埃は腐敗して屢々傳染病の原となり、寄生蟲の繁殖を助け、又臭氣を放つものなれば常に注意して取除かん事を要す、其取除くべき物は各種の塵埃、不用の瓦石、雑草及び汚水等にして、可燃物はなるべく焼き棄て、或は畑地の肥料に供すべく、瓦石類は地中に埋め、汚水は排水をよくして流去せしめ、地中に浸滲しむべからず、便所は常に清潔を保ち、臭氣止としてはアルボース液か又は石灰等を用ひ且つ掃除人をしてなるべく屢々汲取らしめ、天井及び床板下は少くとも毎年二回大掃除をなし、床下は空氣の流通をよくし、石灰を撒布し雨水などの流れ込まぬ様にしてよく濕氣を防ぐべし、床下の卑濕なるは衛生上大害あるは勿論、家屋、家具、衣服等を損傷すること頗る大なることを知らざるべからず、尤も床下の土を取り去ることは、家の柱を弱くする虞れあれば、これを戒むべし、又押入、及び壁の如きは、鼠の通路を塞ぎ隅までもよく掃ひて、蜘蛛の巣などをつけ置くべからず、すべて毎日室内掃除の際は十分に戸障子を明け放ちて掃ひ、その終りし後もなほ五六分間其まゝになし置かずば無数の塵埃は再び室内の諸物に落ち留まるべし、かくして後は雑巾がけをなすべし、又臺所は常に最も清潔になさゞれば臭氣などを催ふし易し、室外は毎朝必らず洒掃し、庭園のごときは丁寧に手入れして紙屑、布片などの樹石の間に落ち散りたらば注意して取除くべしされどいろ

△焦茶　茶色の黒味勝なるもの。
△木枯茶　茶の冴へたるものをいふ。
△利休茶　白茶にして緑色を帶びたるもの。
△柿色　柿の實の如く代赭色に鼠を加へたるものをいふ。
△生壁　鼠色に少しく青味を帶びたるもの。
△御納戸　藍色に鼠を加へたるもの。
△藤鼠　藤色に鼠を加へたるもの。
△小豆鼠　小豆色に鼠をさしたるもの。
△小町鼠　鴇羽色に紅のかゝりたるもの。
△錆鼠　藍色に白茶をさしたるもの。

又或色の其隣の色によりて本色を失ふごとく感ぜらるゝことあり、又失ふが故に却つて美觀に見ゆることあり是等は配色を司どるものゝ注意すべきところなり、たとへば赤と青とを隣接せしむる時は赤は黄を帶びて緋色に見ゆるものなり又赤と黄とを隣接せしむる時は赤は青味を帶びて紫色に見ゆることあり、赤と緑とを隣接せしむる時は赤色最も鮮明にして眞紅なり、赤と黒とを

付きたる木の葉の美くしく掃ひたる庭の面に散り布けるは反りて趣あるものなり。

◎理想的の便所

便所の位置はなるべく人の目につき易からざるやう、家の隅に設くべし、通常の家にては、緣側の一端にて床、押入などの裏手に設くるをよしとす、且つ日光の射入劇しき時は汚物の臭氣發散する事強かるべければ、樹木等を植ゑて日光を遮ぎり、又寒風を防ぐべし、來客用の便所は、客間に續かしむべく、居間、寢間等それ〴〵便利なる所に設くるを要す、下婢用のものは別に設くべし、普通の家にては客用、家族用、下婢用の三個所を設くべし、なほ小な家にては下婢用家族用にて事足るべし。

便所の構造は臭氣の室內に洩れざる樣、壁を二重につくり、戶は堅牢にして內外格別の栓を設けて內に入りて栓したる時は外より開くこと能はざる樣にすべし、窓を上下二ヶ所に造り置くときは、換氣するによろしく、且つ塵埃を掃除するに便なり、而して其戶はすり硝子をよしとす。

糞尿壺は本燒の瓶を用ひ、或は漆喰にて完全に塗るをよしとす素燒瓶等にては汚物滲出して地中に浸入し、自然に飲料水にも混入すべければなり尤もたとへ本燒の瓶又は漆喰、セメントづくり等の構造とするも現今の如

隣接せしむる時は赤は暗黒色に見ゆ、赤と黒を隣接せしむる時は赤色鮮明にして美麗なり。

すべて是等の關係を熟知し置かば、繪畫を彩色し或は衣裳の配合を爲す時大いに益することあるべし。

●色彩と感情

色の人心に感ずるは各々固有の表現あるがごとし。

△赤色は華美の表章にして喜悅を表はす小兒若くは野蠻人は一般に赤を喜ぶ物なり。

△黑色は沈重の表章にして嚴格の意を表はしたるものなり西洋にては黑色を悲哀の表章とせり。

△青色は幽寂の表章にして寂しく冷やかなる感情を代表する色なり。

△白色は淸淨又は神聖の表章にして高雅の感情を表はすものなり。

△紫は浮華を表はすものなり。

く掃除に不完全なる時は汲出すに糞便の散亂を免かれず、且つ屢々汚物の堆積して瓶の外をも汚すがごとき事あるに至りては衞生上の害毒甚だしといふべし、されば十分に淸潔を保たんとせば、便所全體の敷地をセメントづくりにし、糞壺を地下に埋めずしてタヽキの上に据え、この上に床を高くして便所をつくり掃除口を廣くし時々瓶を引出して汚物を掃除するやう仕組むべし、それには瓶の下に少き車のつきたる板を敷き置かば甚だ便利ならん。

便所は常に他室よりもよく拭き掃除をし、片腦油、アルボース等の防臭劑を撒布して惡臭なき樣にし、糞壺は周圍を淸潔に洗ひ石灰又は綠礬を撒すべし、又掃除口は往々盜賊の侵入口となる事あれば其構造は最も注意し、戶の如きは夜間、内より開くことを得ざる樣になし置くべし。

●服色の適合

△青色の人には赤味を帶びたる色。

△色白の人には藍がゝりたる色。

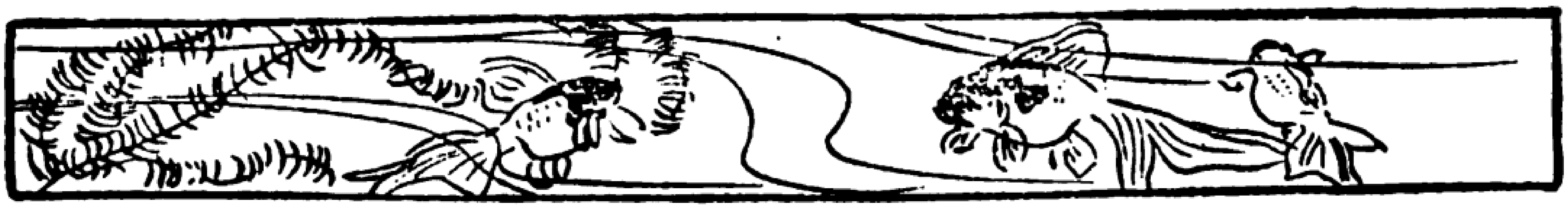
△色黑き人には鼠色。

△黃色の人には茶がゝりたる色。

●四季の服色

春は緋色の華美なるを好み、夏は空色の瀟洒なるを喜び、秋は鼠又は白茶、草色のさびれたるもの似合ひ、冬は赤き濃厚なるもの嗜好に適す。

又世間の景氣よくして人々陽氣なる時は牡丹色、葡萄色、お納戶等赤紫を土臺としたる華やかなる色流行し不景氣にして世間寂びしき時は黑、青を土臺としたる紫紺、楊鼠、小豆色の等淋き色となるがごとし。



要愼柱

夏の衞生いろ〳〵

◎入梅前後の注意

まづ霖雨の爲めに生ずる害は何であるかといふに、濕氣と光線の不足である、雨中は衣服器具や、家屋の壁などに水分が多くなるから、すべての溫度を奪ひ、又光線に伴ふ溫度をも遮つてしまふ、そこで自然に寒くなるのみならず濕氣の爲めに人體が直接に受ける害は人體から起る新陳代謝の働らきが薄くなる事である、まづ衣服が濕つてゐるので體氣の蒸發を妨げ、炭酸氣が出て新らしい酸素が這入るといふ交換の力が鈍つて來る、隨つて身體が弱るのと今一つは時ならぬ寒冷及び光線不足の事が大に人體に影響して感冒、レウマチス、胃腸カタル、氣管支病及びペスト等の病氣の基となるのである。

衣服殊に下着、襦袢、シャツなどは常に乾いたものを用ひ、寢衣のごときは時々日光に曝らし又火にあて、乾かす事を怠つてはならぬ、小兒の衣類などは特別に其注意が必要である、猶其外日用の諸道具も持ち出せるものは、なるべく戸外に持ち出して日光にあて、すべてよく乾かして用ゐればならぬ。

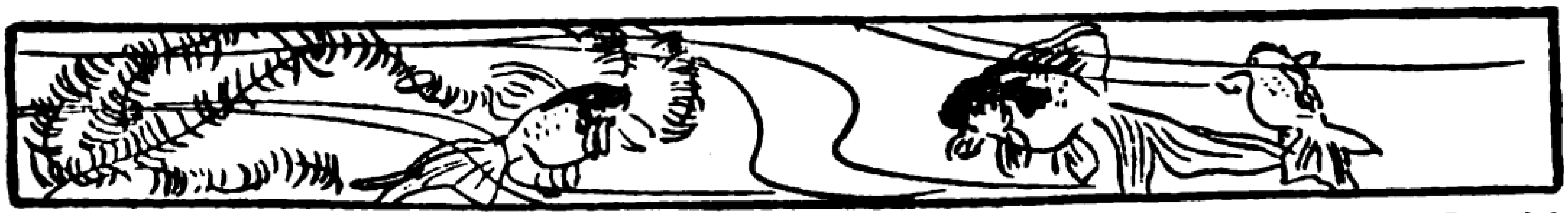
◎夏季と冷水浴

毎朝冷水で身體を摩擦する事は衞生上至極よい事であるが、これを行り始めるには殊に此の頃の時節がよい、倘極壯健な人は冷水浴をすれば一段の効がある、餘り冷へ過ぎぬ程度まで構はず水を浴びる、冷水浴といふと一寸行り難いやうに思ふけれど顏を洗ふのを今少し奮發して全身を洗ふとおもへばよろしいのである、但し入梅の頃はじめ〳〵した季候であるから、冷水浴をしたらばよく乾いた巾で全身を摩擦せればならぬ。

◎日光射入と戸障子の開閉

日光の入らぬ家へは醫者が入ると諺にもある通り、平素光線の入らぬのは身體によろしくない、況して梅雨期のやうに光線不足の時は濕氣も多くなるので壁や疊に水分を含む、これを防ぐには少しでも雨が歇んで日光を洩す時があつたら、室を直ぐに開いて新鮮な空氣と日光とを入れて乾かす樣にするのが肝要である、併し調子はづれの寒冷にも拘はらず、無暗に戸障子を開けて寒冒などを起してはならぬから、そういふ時には、火鉢なり、ストーブなりに火を





熾して室内を乾かす方法をとらればなりませぬ、むかしは斯ういふ時に線香などを焚いたものであるが、矢張り室内乾燥の良法である、序ながら雷鳴の時線香を焚くのは迷信には相違ないけれども、是れも室内が乾けば電氣の傳導が減ずる理由で矢張り學理に合つて居るのである。

◎黴菌繁殖の理由

陰鬱な梅雨期にはどうして健康を維持して行くかといふに、それは只光線の利用をうまくして濕氣を去る事を專一とするのである、光線は一切の病毒の芽生へたる黴菌を殺す力を有つて居るものである、雨期に於ける病毒の豫防法は只光線利用を第一としそれから衣服の乾燥、食物の注意に及ぶのである、

光線といふものは我々の糊口以外に大切なものである、動植物は專ら光線のお蔭で營養を保つて行く、其上日光の力は種々の傳染病のバチルスを殺す事が出來る、病毒に汚れた衣服でも石炭酸などで不完全の消毒をするよりは一日日光に晒らした方が餘程効力がある、是ほど有益な光線が梅雨中は滅多に當らぬから黴菌なども此期節には大に繁殖するのである。

◎熱と空氣の乾濕

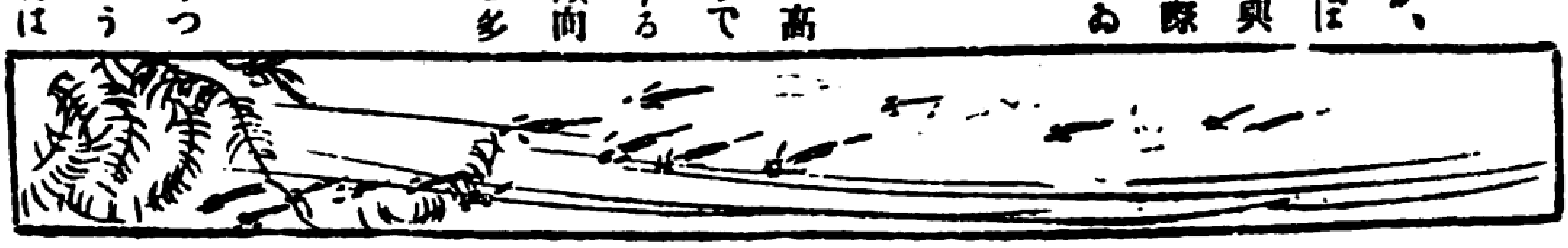
夏の衛生といへばつまり、暑さの害を防ぐことであるが、同じ暑さでも空氣中に含む水分の多少によつて人身に及ぼす利害が異なるのである、そして最も不愉快で人に害を與ふるのは水分の多い時の高熱で、日射病などは多く斯る際に起るのである、暑熱はいくら高くても空氣の乾燥してゐる時はさして害を及ぼさないのである。

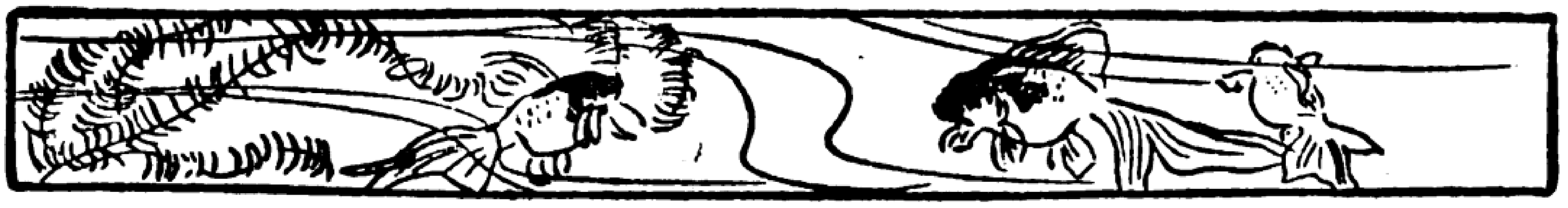
◎空氣の乾燥と腸胃の關係

暑中に起る病氣は頗る多いが、これは要するに空氣が高熱の爲め食物中に黴菌が發生して食物を變性させるからである、たとへ變性とまで行かなくつても一方に渇を覺ゆる爲めに多量の水分を採り、且つ水分の多い食物を好む傾向があるから腸胃を害すること多いのである、暑中疾病の多くは此飲食物から起るのである。

◎暑中と子供

親は子供が腦膜炎にでも罹ると大に驚いて醫師に駆けつけるが、胃腸の病には格別心配もしないで打捨て置くやうである、これは大な誤りで殊に一年未滿の小兒の腸胃病は





假令大人と同じ樣な症候であつても子供に取つては非常に危險なものであるから夏季食物等には大いに要心しなくてはならぬ、且つこの病氣は始め輕視して打棄て置き、それが恢復のつかぬ重患に陷つて死に瀕したものを始めて病院などへ連れて來るものがあるが、これは全く腸胃の病を輕視した誤りである。

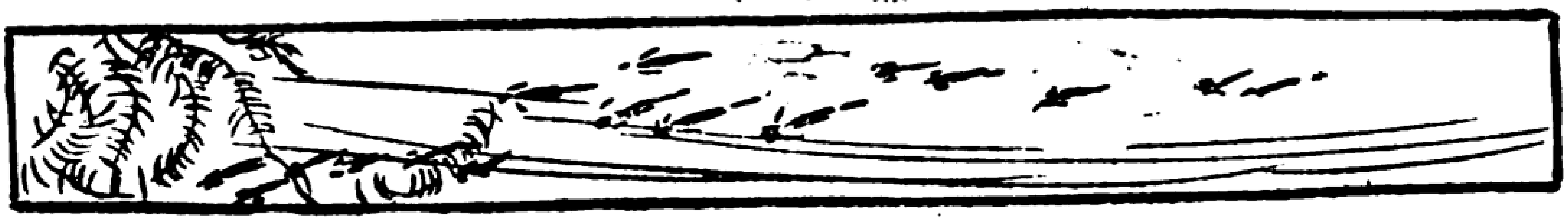
◎夏季と牛乳

子供を持つ家庭では殊に夏季の牛乳に就て大に注意しなくてはならぬ、夏季は牛自身の身體が最も健康の損はれ易い季節であるから、隨つて牛乳の性質も季節の好い時のやうには行かない、且つ黴菌の竄入する比例も多いから牛乳の變敗も非常に速かである、若しも誤つて是等變敗せる牛乳を飮むと直ぐに腸胃を害し、それを打捨て置くと小兒などはその爲めに往々死亡するものさへある、一體牛乳の善惡を檢るのは第一牛が健康であるか否や、而かも其健康は唯病氣がなくて生きて居るだけであるか、又は營養が善良で果して屈強の牛であるか、是等を見た上でなくては牛乳の善惡は分らぬ、縱令脂肪が何程あつても決して善良な乳とはいへないのである、且つ牛乳の小舍の構造はいふまでもなく、食物も充分に營養に富めるものでなくてはならぬ。

斯の如く凡ての點に於て完全な條件を得た上は牛乳はなるべく煮すに用ふるのが一番よいのであるが、空氣中の黴菌や牛舍の黴菌の竄入する危險ある爲め止むを得ず、煮るに過ぎない、併し煮るといふ事は全部の黴菌を撲滅するのではなくて其中の少くとも疾病の原因となるものゝみを殺すだけで、牛乳の性質を惡くする黴菌は未だ撲滅されないのである。

されば煮た牛乳は其後室內に放置しても差支ないかといふに未だ撲滅されない黴菌が發生する恐があるから一度煮た牛乳は充分に冷やして貯へ置く必要がある、或はサルチル酸を入れるとか硼酸を入れるとかすれば永く腐敗を防ぐといふけれどもこれは取るに足らぬ說である。





新案子供の夏服（口繪參照）

横濱中野屋洋服店東京出張所員の談に曰く、近來、子供は男女に關らず洋裝する事が大分流行して參りまして、私の所でも、其の需用に應ずる爲に、二三年前から種々準備を致て、今度東京と韓國とに新に出張所を設けた樣な有樣ですが併し、今日一般に着用せらるゝお子供衆の洋裝を見ますと、男兒のは普通の學校服の外には水兵形と陸軍形とに限られ、又女兒のはと言へば必ずカシミヤの生地に大きな胸飾に巾廣のレースのひだ餘りの澤山ある——惡く申せば、恰度玉乘女の用ゐる樣なものばかりで、たゞ平常横濱で居留外人の婦人や子供の洋裝を作つて居る丈の私共が見ましてさへ何だか耻かしい氣持が致しますから、若し外人の眼から見たなら嘸可笑しからうと思ひます。

一體子供服を大人服の裁縫師に御注文なさるのが間違つて居ります。歐米では婦人服裝部の一部として小兒專門の裁縫師があるので、私共の組織も其の樣になつて居りますが、裁縫にも得手不得手が御座いまして、子供服でも矢張りそれ〴〵專門の店で造らせなければ格好などは思ふ樣に出來ませぬ。のみならず直段も高くなつて、實用に適ひません。

小兒服と申しましても、それは却々六ケ敷いもので、殊に女兒の服となると餘程の經驗と美術的の技能が無ければなりません。例を擧ぐれば

一、服形に依て身長を高くも見せ、或は低くも見せます、

一、色合に依て顔色を白くも見せ或は黒くも見せます、

一、年齢に依て服形、服の丈け、切地の色を異にしなければなりません、

一、切地の如何に依て服形に釣合ふ事と釣らざる事とあります、

一、服形に依て切地の配色を異にする必要があります、

一、容貌及び肌色の如何に依て不向の色があります、

一、附屬粧飾の配合、——これは特に注意を要する所で、若し此の配色が惡しければ、何んな良い格好の服でも、又何んなに切地が上等でも、全然其の美點を失ひます。

斯う云ふ事情がありますから、初めて御子樣方に洋裝をさせられる婦人方は、十分經驗ある專門の小兒洋服店に御相談なさるのが利益です、

寫眞にあるのは孰れも夏季服です。

一、十四歳の女兒——服は朱鷺色瓦斯織に美麗なる飾釦を附け、上胴衣は鷺色に白の斑點ある英モスリンで作つてありますが、之れに上等糊なしキヤラコの下着一組を添へて代價が八圓五拾錢位です。又帽子は上胴着と同じ物の麥稈の臺に美麗なる紅染タフタのリボンに花飾りが附いて四圓です。

一、九歳の男兒——服はポンジー、にて作り、上等白貝釦、イトンカラ格子タフタの襟飾を附け、又キヤラコのチヨキが付いて居ります。此れに下着一組添へて八圓四十錢位、帽子は九十錢です。

一、七歳の女兒——服は舶來更紗に、裏に朱鷺色キヤラコを配し、アンダースカーツ付きになつて居ります、帶は朱鷺色の琥珀絹で

作つてあり、服の前胸、襟、袖先き、裾、には上等 インサーションレースが使用してあります。之れに下着一組添へて十一圓二十五錢。帽子は何度でも、洗濯が出來る樣に白リンチルにて作りあり、又洗濯に便利の爲め夫頂(その)と緣と釦で取りはずしの出來る樣になつて居ります、代價は二圓です。

一、四歲の女兒――此の服は縞子入モスリンで、朱鷺色キヤラコの重衣を配し、前胸及スソに上等白インサーションレース、袖先には上等白レースを付け、前胸の廻はり及び袖の絞りには朱鷺色のベビーリボンを白のピンヴンゲレースの間より通して花飾が造つてあります。之れに白キヤラコの下着一組添へて 八圓卅五錢。帽子は七歲の女兒と同樣。

一、三歲の男兒――服は青格子セル、襟及襟飾 は茶色 の琥珀絹でカラーは一面に細かき美しきタックが取つてあります。胸は白セルに碇の刺繡を施してチョッキを象れ、ズボンは釣る樣になつて居ります。之れに白キヤラコの下着を添へて九圓六十錢。帽子は一圓。

一、嬰歲の嬰兒――是の寫眞は不出來 でしたが、服の形は却々好い形です。生地は四歲の女兒と同樣。前胸は蜂巢の飾り、袖先、襟先に白の上等レースを付け頸廻り及び袖の絞りには 朱鷺色のベビーリボンで飾りが附いて居ります、是れに白キヤラコ下着、肌着、白伊太利子ル、細襟複ひ、白タオル、新案襁褓一組(三枚)白伊太利子ル腹卷安全留針半打附いて五圓九十五錢ですが、上衣を並等に致しますと之れに白粉、同刷毛、及び刺繡涎掛けを附けて五圓で出來ます。

每月一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内 定刊數……十二冊
　 增刊四回…一、五、九、十一月價格同一

郵税 一冊 二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十三圓	四十五圓
一等	……	十九圓五十錢	三十八圓
二等	五十五錢	十六圓五十錢	三十二圓
三等	四十七錢	十三圓五十錢	二十六圓

▲等級の位置〃切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十一年五月十五日發行 第八卷第七號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番　千十八番
本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

巖谷小波君序
岡野知十君
伊藤松宇君編

新編 蕪村几董附合集

▲兩翁眞蹟寫眞版數葉挿入▼

今や俳諧の研究は初期の礫發句時代を去りて第二期の連句全盛時代とはなれり此連句研究に最も好適なる蕪村几董の附合集は編者が多年の渉獵と非常の苦心とを以て拾集したる一大模範的參考書にして苟も斯道に遊ぶの士は必ず座右に一本を供へ高雅なる連俳の妙趣を味ふべきなり

全一冊洋裝四六判
紙數百八十六頁
正價金參拾錢
郵稅六錢

東京高等師範學校長
孔子祭典會委員長
文學士 嘉納治五郎君序

學習院教授兼東京
高等師範學校講師
文學士 有馬祐政君編

孔子言行錄

全一冊

近日發行

洋裝袖珍

製本高雅優美

口繪 孔子尊像・子思・顏子、曾子像

時運の推移と社會の情勢とは篤學謹厚なる有馬學士の手を假りて本書を編錄せしめ、恰も第二回孔子祭典會の擧行に際して刊行せらるゝに至れり。文辭簡潔にして意味深長、眞に大聖の音容に接するの想あり、且つ附するに諸弟子及子思の言行錄を以てし、一々詳密なる注解を施して立ろに領悟せしむ、精神の修養に最上の資料たると共に、文字の習熟に最初の指南たるものとす。苟くも此二方面に志ある人は必ず座右に供すべき無比の寶典なり。

東京 博文館 本町

少女世界增刊

第三卷第六號

既成發行



正價

金拾錢

郵稅(本號限)四錢

洋裝菊判紙數百六十頁口繪石版寫眞版趣味甚多

少女諸子の最も愛好せらるゝ美文韻文をあつめ、これを『少女と文藝』と名づけて、四月十五日に發行しました。これは、天下の少女諸子が、全力をつくして筆にせられた文章、和歌、新體詩、俳句、繪畫等の中で、その粹を拔き美を選び、更に美麗なる石版刷りの口繪や寫眞版を飾り、また、左の通りの趣味ある記事を揭げたものですから、少女作文作歌の寶典として、必ず座右に備へなければなりません。

少女芝居 **花御前** 巖谷小波作 武內桂舟畫

(主なる記事)

△少女の文體 △文章の種類
△美文の作り方 △書簡の作り方
△和歌の作り方 △新體詩作法
△俳句の作り方 △寫生文作法
△英詩の註釋 △文藝の趣味

販賣用電話本局二六二〇

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館

振替貯金口座第二百四十番

最近●帝國百科全書●發行

法學士 大原彌一郎君著

百七十八編

法制經濟概論

夫れ法律經濟の學域や頗る廣し、到底小册子の能く盡すべきにあらず。然りと雖も由來法律經濟の學は獨り專門家の修むべきものとして、一般國民の念頭に置く甚だ輕かりき。是れ治法國民の謬想にして世運の進步と共に愈愈法律關係の繁きを加ふる今日に處し、一大缺點たるを以て曩きに文部省は中學校に斯の兩科を加へ、以て國民普通敎育の一助と爲せり。本書亦此趣旨に從ひ、勉めて簡單通俗を旨とし、以て我國に於ける法律制度及經濟思想の大體を說明せり。素より紙數限りあり到底深奧の學理を敍述し難しと雖も若し夫れ是れに由り國民普通敎育の一助となり、堂に昇るの階梯ともならば足れりとする云爾

全一册

上製正價金五十五錢　郵稅拾錢
並製正價金四十錢　郵稅八錢

理學士 藤田外次郎君著

百七十九編

近世幾何學

本書は、斯學に造詣深き藤田理學士の著述に係り、中心射影法より說き起して、幾何學原形及相對の定理に論及し、二次曲線論に遷り、其曲線の性質を詳論したるものにして、且つ各章附するに適當の例を以てしたれば、一讀直ちに幾何學の定理を知るを得ると共に、また其運用に熟するを得べく、斯道近來の好著、之に遊ぶ者の一讀を缺くべからざるものなり。乃ち之を江湖に薦む

全一册

上製正價金五十五錢　郵稅十錢
並製正價金四十錢　郵稅八錢

文學士 田中湖月君著

百八十編

文藝論

東瀛に美術國あり。文藝の花咲初めてより既三千。今や聖世の恩澤に浴して將に千朶の花を開き千紫萬紅、競芳爭姸、燦爛として人目を眩燿せんとす。されど恨むらくは未だ創作家を敎ふる指南車なく批評家を導く羅針盤なく僻說を守るあり曲論を唱ふるあり文藝の發達を阻害する事蓋少しとせず。之聖代の一恨事に非ずや。弊館茲に見るあり敢て本書を世に薦む本書は本より完璧を以て自負する物には非ずと雖も泰西諸大家の新說を斟酌し心理學及哲學を基礎として文藝の理想を披かんとする本邦唯一の書なり。希くは創作家諸君！諸君若し創作の規矩を得んと欲せば此の書を讀め批評の標準を知らんと欲せば此の書を繙け或は正否を斷ずる破邪の劔を得ん賞翫者諸君！諸君若し賞翫の法則を窺ひ又自が趣味の正邪を知らんと欲せば此の書を見よ或眞僞を分つ試金の玉を得ん

全一册

上製正價金五十五錢　郵稅十錢
並製正價金四十錢　郵稅八錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　振替貯金口座第二百四十番　博文館

女(後付の三)

豫ての警告に違はず本誌五月號は發兌元**賣切**となれり最寄賣捌店より御購讀を乞

●毎月一回一日發行●四六二倍大判紙數七十二頁上等紙

實業少年



第一卷第五號　五月一日發行

正價一册金十錢
郵税一册金壹錢

各商店會社銀行及び諸製造工場内の少年諸君!!

奮闘世界

▲尋常卒業の少年日本一の機械通となる　大隈伯爵　波多野承五郎
▲工業發達法　大谷嘉兵衛
▲四字の格言
▲貯金成功法　米國人フランシス
▲職工幻燈

修養世界

▲小僧立身美談小説　新泉
▲五萬圓をためるに五たび死す　潜水實驗
▲學校に出ようか小僧奉公しようか

娯樂世界

▲内外反對の角力▲考物▲投書交詢▼

口絵（最珍）

▲日本第一の機械通小林作太郎氏と氏の發明したる發電機▲最新工藝貝細工成品と原料▲どろんどん第一繁華の町

獨習世界

▲外國の取引所利用　富澤學士
▲一等強い杜は何か　秋保校長
▲最もよき種まき法　菊池教授
▲手習の手本
▲英語の會話

智識世界

▲實業界の最新事實
▲よく〱祟つた商品奇談
▲伊太利貝細工の本邦試驗（吉岡技師）
▲開港場の外人せり賣場實況

懸賞世界

▲誰にもできる▲電報文▲考物▲俳川柳

立身出世を望まば實益多趣味本誌の如き友とせよ

郵便振替貯金口座四貳〇番　東京　**博文館**　本町　全國各地賣捌書店にあり

英語世界

第一號以下數版を重ぬ　▲每月一回五日發行

年刊十二册菊判紙數六十四頁
每號寫眞版及密畫數頁挿入

第三號要目

●雷新聞探訪員と語る……深澤教諭●筆蹟……高島高商教授●英譯血判取……武信早大講師●短篇小說……今井國民英學講師●シラピケーション……岸本早大講師●最近科學奇聞……長井氏晟●英詩吟誦の研究……酒井勝軍●珍らしい英習字法●解釋練習……增田早大講師●受驗參考英語の公式……佐川正則講師●對話人をお先に使ふ……長井氏晟●廣島高師入學試驗答解……深澤教諭●教場用會話●比較を表す句……武信早大講師●英和語法叢話……喜安璡太郎●言葉の遣ひ分け……SK●山縣五十雄氏を訪ふ●外語受驗所感●僕の會話熟達の經驗談……一中學教師●英語新遊戲法●時文研究●英學大家吹込蓄音機●讀者研究壇●懸賞文披露●同新題●萬國通信俱樂部を紹介す●編輯餘錄●近刊紹介●英語俱樂部

第四號要目

●教室雜観（マクスオルレ）……深澤兵庫縣姫路中學校教諭●英譯血判取……武信早稲田大學講師●短編小說（コナンドイル）……今井國民英學會講師●筆蹟……神田學習院教授●Syllabication に就て……岸本早稲田大學講師●最近科學奇聞……長井氏晟●英吉利風俗質物の話……平田學習院教授●解釋練習……增田早稲田大學講師●英詩吟誦の研究……酒井勝軍●英語教育上記憶すべき札幌農學校●入學試驗と國文英譯……今井國民英學會講師●指を使はぬ英習字の新法……●英語新遊戲法……●英語の形式……伊藤神奈川縣中學校教諭●飛入勝手英語輪講會……長井氏晟●入學試驗答解（名古屋高工入學英語試驗）……深澤教諭●英作文の心得（關係を表す句）武信早稲田大學講師●英語慣用句の解剖……喜安璡太郎●英作文練習の經驗談……一中學教師●日常會話……T.Y、●受驗談（高校受驗所感）……一合格生●英學大家吹込蓄音器……●時文研究……記者擔當●讀者研究壇……記者擔當●懸賞新課題……●懸賞文披露……●雜錄（編輯餘錄、新刊紹介、英文通信紹介、英語俱樂部）

第五號要目（五月五日發行）

●ジャパン、タイムス主筆高橋一知氏筆蹟●コナンドイル短編小說講義……今井信之●マクス、オレル譯註……深澤由次郎●句讀法……茨木清次郎●西洋お伽噺譯註……長井氏晟●山口高商入學試驗詳解……深澤由次郎●會話相撲……TY生●和文英譯親友……清水泰次郎●解釋練習……增田藤之助●英譯血判取……武信由太郎●言葉の使ひ分……S、K、生●英語の形式……伊藤彌門●科學奇聞……長井氏晟●山口高商受驗成績談……カーントレット●英作文心得……武信由太郎●如是鴛ペン……青郊●英文通信●時文研究●研究壇●英文和譯の經驗談●懸賞披露●其他

第一號以下取揃應高需　▲正價金拾錢　郵稅壹錢　前金｛十二册金壹圓拾錢 六册金五拾六錢外要郵稅

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

女（後付の五）

ふは何故か◎巴里はどんな市街か◎佛蘭西は何國と同盟して居るか◎何うして英吉利と仲善くなつたか◎日佛協約とは何か●瑞西＝◎瑞西を世界の樂園と云ふは何故か◎工業が盛になるは何うしてか◎どうして一つの國となつたか◎政治の方法は何う異つて居るか◎軍備はどんなか◎教育の有樣は何うか◎外國人の見物にどんな便利が講じてあるか◎瑞西の國が立つて行くのは何うしてか

金子紫草君共編

毎卷紙數百四拾頁

第六卷 中央亞米利加各國

●墨西哥＝◎墨西哥は何處に在るか◎何うして獨立したか◎其後どんな事があつたか◎國內の樣子はどんなか◎何が出來るか◎外國との商の樣子はどうか◎墨西哥人とはどんな人種か◎政治はどんな風か◎軍備はどれ位あるか◎墨西哥で何處が最も開けて居るか◎何故外國人が多く入込まぬか◎日本の勞働者は何うして受が惡いか●中央亞米利加＝グァテマラはどうして出來たか◎どうして治めて居るか◎どんな國か◎サルバドアはどんな國か◎ホンデユラスはどんな樣子か◎政治や商はどんなか◎ニカラガでは何が出來るか◎國內の樣子はどんなか◎ニカラガ運河は何故止めになつたか◎コスタリカはどんな國か◎どれ位開けて居るか◎巴奈馬はどうして獨立したか◎どんな國になつたか◎どんな條件で巴奈馬運河が開かれるか◎何うして合衆國が開くやうになつたか◎どんな運河が開けるか◎巴奈馬運河は世界へどんな影響を與へるか

口繪 墨西哥國旗○ニカラガ國旗○ホンデユラス國旗○世界に於ける墨西哥及び中米諸國○墨西哥大統領○同夫人○巴奈馬大統領

第七卷 伊太利 希臘

●伊太利＝◎伊太利はどういふ國か◎どうして統一されたか◎何處まで國が大きくなつて居るか◎軍備はどれ程あるか◎伊太利人はどんな風か◎伊太利の政治が亂れて居るとは何故か◎何程の借金を負つて居るか◎何が出來るか◎外國との商の樣子はどうか◎教育はどれ位まで進んで居るか◎どれ程の人口があるか◎伊太利にはどんな社會があるか◎何故に人は伊太利へ見物に行くか◎どんな古跡があるか◎羅馬はどんな都か◎近頃どう變つたか◎羅馬法皇とは何か◎何處に居るか●希臘＝希臘は昔どんな國であつたか◎どうして獨立したか◎國の大さや活動の樣子は何うか◎名産と云ふ物があるかどうか◎國情はどんな方か◎軍備はどれ位あるか◎希臘の特色は何か◎雅典はどんな都か◎希臘て見るべきものは何か

口繪 伊太利國旗○商船旗○海軍旗○希臘國旗○國王旗○伊太利の領地と希臘○伊太利國王皇后兩陛下○希臘國王皇后兩陛下

第八卷 露西亞

◎露西亞＝◎大さは幾干あるか◎何うして大きくなつたか◎全體どんな國柄か◎政治の有樣はどうか◎露國民を可哀さうだと云ふは何故か◎近頃國內は何う變つたか◎何うして國會を開設するやうになつたか◎國內の地理其外は何うか◎露西亞では何が出來るか◎外國との取引は何うか◎何うして金が足りないか◎軍備は何程あるか國內の交通は何うか◎露西亞人はどんな國民か◎何う區別されてあるか◎露西亞人の惡習慣は何か◎教育の程度はどうか◎露西亞の國內が別々になつて居るとは何故か◎何うして之を治めて居るか◎何んな都會があるか◎聖彼得堡はどんな都か◎露國皇帝はどんな方か◎露西亞は何國と同盟して居るか◎何うして英吉利と仲が惡かつたか◎露西亞の禁物は何か●西伯利亞はどんなところか

口繪 露國皇帝旗○國旗○商船旗○海軍旗○世界に於ける露西亞の領土○露國皇室

博文館

文學士 久保天隨先生精解

日本外史新釋

●全部拾貳册

●毎月一回發行

毎編 和裝美本 紙數約三百頁

●第一册以下非常の好評にて既に數版に及ぶ

賴氏の外史は、その一生の心血を注ぐところ、世道人心を裨益せし功固より少からず、且つ漢文講習に益あること言を俟たず、これ家藏戸誦今に至りて尚ほ廢せざる所以なり。その講義の如き、坊間頗る是ありと雖も、その完全なるものを求むれば、遂に指を屈するに及ばず。天隨氏こゝに深く慨するところあり、乃ち平生の蘊蓄を傾けて、此書を著はさる、兎を搏つに獅子の全力を盡すは、適まその婆心の極めて深切なる所以、精該詳備、まことに賴氏の忠臣羽翼たるに負かず。この書一たび出でて初學幸に津梁あり、その業をなすに際して、唯だ易きを見て難きを見ず、將門の興廢を詳かにし、國史の大半に通曉すると同時に、讀書力の涵養に資するの便あるべく、一擧兩得勞半にして功必ず倍するものあらむ。

目次

正價一册金參拾錢
郵稅一册金六錢

前金 六册金壹圓七拾錢 十二册金參圓貳拾錢

▲外要郵稅

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（後付の八）

少年世界 第十四巻第七號 定期増刊



全一册洋装菊判紙數百廿八頁
正價金拾錢　郵税(本號限り)四錢
五月十五日發行

春花秋葉、緑樹白雪、四季の變遷を獨領して、悠々樂しき境に逍遥する者は我少年諸君ならずや、少年世界は今や本年度第二次の増刊をこゝに採りて、四季と少年に關する總ての事物を網羅し、一年三百六十五日いつ開き見るも更に趣味津々たるべく、記者多大の苦心を傾注したり、乞ふ先づ左の目次に就て内容の一斑を知り給ふべし。

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　振替口座二百四十番　博文館

明治四十一年五月十五日發行
博文館臨時增刊（十六）
女學世界 運命開拓法
（第八卷第七號）

香氛紙 Perfumed Paper.

（一名匂ひ紙）



新荷佛國巴里より到着

一昨年初めて巴里の交際社會に現はれて大歡迎を博したる「ラークテン」と稱する頗る高尚なる香氣を有し紙入れ、莨入れ、簞笥、書籍の間に入れ置けば一枚の香氛紙にて一ケ月以上馥郁たる香氣を保ち煙草は一種いふ可らざる爽快の香味を加へ手紙の中に封入すれば床しき香りは文讀む友に一層の快感を與へん

十二枚入一包 正價金參拾錢 送費金貳錢

東京丸の内
日本一手販賣
報知社代理部
電話本局 壹六〇八番 參貳壹壹番
振替口座七三八番

定價金貳拾錢 本號限り郵稅六錢
VOL. VIII. No. 7.
（博文館印刷所印行）